

子兔の人形師は何を想 う

夜空人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

館に幽閉されていた少女、名をレツと叫んだ。

あるとき、兄・オモカゲが帰ってこないで、渡されたメモの場所に行くことにした。

その場所で様々な事柄を知るようになる

『緋色の幻影』の少女・レツがもし生きてたならどうなるんだろう。と思い探しても無かったので、自己生産しました。』

※タグのアンチ・ヘイトはヒソカファンに対するものです。目的をそれに設定したの
で。

とりあえず、描きたいターニングポイント五つを目標に書き溜めの中。

目次

新たな家族編

89	N o. 6 / カタキ? ハ? ヒソカ				
		ハンター試験編			
	N o. 5 / ハツ? ヲ? ツクレ	—	74		
57	N o. 4 / シュギョウ? ノ? セイカ				
35	N o. 3 / カゾク? ト? シュギョウ				
8	N o. 2 / ネン? ノ? シュギョウ				
	N o. 1 / アニ? ノ? ユクエ	—	1		

	N o. 13 / ヤミ? ノ? サンニングミ	214			
	N o. 12 / コウカイ? ナ? ショケイ	187			
	N o. 11 / ヒゲキ? デ? キゲキ	164			
	N o. 10 / オモカゲ? ニ? ナミダ	142			
	N o. 9 / アコガレ? ノ? センダツ				125
	N o. 8 / オトウト? ト? イモウト	109			
	N o. 7 / シケン? ノ? ハジマリ				

N o. 19 / シロガネ? ゾルディック	372
ンギ	
N o. 18 / ボクツコ? スエツコ? ダ	350
イ	
N o. 17 / カンスイ? ノチ? カンセ	331
ゾルディック家編	
N o. 16 / オソウジ? ト? ソウジフ	311
ン	
N o. 15 / ゲキジョウ? ノ? ドウラ	265
シユウ	
N o. 14 / モウシユウ? ノ? サイ	237

N o. 25 / キユウソク? ト? ジユウ	564
N o. 24 / ウツキ? ハ? ウソツキ	523
N o. 23 / カダイ? ト? カダイ	501
シヨウガイ	
N o. 22 / ケイカイ? ニ? ケイカイ	471
天空闘技場編	
N o. 21 / ジョウガイ? ノボリ?	453
? ヤミ	
N o. 20 / ワカレ? ト? ヤクソク	403

ソ
ク



新たな家族編

No. 1 / アニ?ノ?ユクエ

(……兄さんがいなくなつてから、50時間……)

そう思いながら少女は、『兄』の残した紙を見る。

「レッツへ」

私が三日間戻らなければ、ここに書いてる所に行くといい。」

少女の名前は、レッツといった。

(……まだ三日間たつてないけど……いいよね?)

(……それに、なんか胸騒ぎがする……)

このとき、レッツは初めて兄の言いつけを破り屋敷をでることにする。

~~~~少女、移動中~~~~

(……だよね。)

手紙の「~~~~」とは、とある廃墟だった。

そして廃墟に入ってみると、

そこには、黒髪の青年・金髪の青年・金髪の女性・ピンク髪の女性が居た。

(団長、なんか知らない少女が来たけどどうするの。)

そう金髪の青年に囁かれると、黒髪の青年は読んでいる本を閉じる。

(……ふむ、かなり歪だが【纏】ができてるな。)

「あの……ここに兄さんはいますか。」

「その質問に答える前に聞きたいことがある。」

そう言うと黒髪の青年は、人差し指を立てる。

「何が見える?」

「?………何も見えないけど?」

「そうか………パク(この少女は天然の能力者か、いや歪な【纏】からすると半覚醒の状

態か………)」

そう言うのと、金髪の女性は頷きレツに触れる。

「あなた、ここに何しに来たの。」

「えっと、兄さんが『私が帰ってこなかったら此処に来い』って。」

「そう………あなたのお兄さんの名前は?」

「えっと、兄さんの名前はへオモカゲっていうんだけど。」



そういうと四人は、目を見開き

「……………パク、そいつの言ってることは、本当か?」

「え、ええ……………本当のことよ。」

「(あいつ(あの人、妹がいたのか……………))」

「……………えっと、私たちが何をしてるか聞いてる?」

この質問の返答次第では、少女といえども対応を考慮しなければならぬ。

「兄さんからは、なにも聞いてない。あ! 「同じ劇をやる団員」とは聞かされてた。」

「ふっ…………… 「同じ劇をやる団員」、か。絶妙に嘘はついてないな。俺より誤魔化しが上手いかもしれん。」

「そうか、でオモカゲの居場所、だったな。」

「うん……………兄さんは何処?」

「ふむ、オモカゲは新たに入った4番・ヒソカに殺されたが…あいつはいつか裏切るだろうな。」

……………この少女を暇つぶしに育てて4番の団員にしてみるのも面白いかもしれない。

となる……………」

「残念だが、オモカゲは死んだ。」

レッツはこの黒髪の青年が、何を言ってるのか理解できない、いや、したくなかった。

「……………う……………だよ……………ね。」

「いや、正確には殺された、が正しいな。」

レツは、目の前が真っ暗になった。

沈黙を保つてた女性が、

「ちよつと、団長。」

「まあ、待て」

すると唐突に大規模なポルターガイストが起きた。

ポルターガイストは、半覚醒の念が憑いて起きるもの。

（ほう、なかなかの【練】とポルターガイストだな。）

そう、黒髪の男性は思った。

しばらくしてポルターガイストが収まり

レツは、

「誰、兄さんを殺したのは……………殺してやる…!!」

そう言ったあと、生命エネルギーが一旦尽きたのかレツは気絶した。

そのまま、四人は会話する。

「ほう、期待値はかなり高いな。」

「ちよつと団長、なんのつもり。」

「いや、この少女を暇つぶしに育ててみて新たな団員候補として迎えてみようと思っ  
たな。」

「アタシは賛成だよ。ヒソカ嫌いだし、この子が殺して入ってくれるなら万々歳さ。」

「私も賛成よ。旅団内の女性比率があがるのはいいわね。」

「オレは微妙かな〜。団長、教育の知識あるの?」

「…………皆で育てればいいだろう。それに適当な本を盗ってくればいい。ヒソカを抜い  
ても俺含め12人もいる。」

「それなら賛成だね。…………下手な能力を作らないようにしないと。」

「そうだな…………パク、この子の知識とかはどうだ?」

「最低限生きる為の知識はあるけど、それ以外は箱入り娘って感じね。あと、もしかした  
ら同郷かも知れないわ。」

「それは僥倖だな。精孔はパク、お前が開ける。記憶を読んだのだから、一番害意なくリ  
スクを最小限にできるだろう。そして俺達が新たな兄妹として接する。」

「わかったわ。…………この子が目覚めるときが楽しみだわ。」

「同感。」

レツが気絶から目覚めると三人男女が増えていた。

ちよんまげに着物の男、顔に傷がある大男、メガネをかけた黒髪の女性が増えていた。

「で、兄さんを殺したのは誰？」

「お前の兄、オモカゲを殺し遺品の番号を攫ったのは、ヒソカという男だ。」

「ヒソカ……」

「だが、ヒソカは強い。今のお前が殺しに行っても返り討ちに遭うだけだ。」

「そこで俺たちがお前を鍛えることにした。」

「………いいの？………」

「お前は強くなる当てがあるのか？」

レツは言葉に詰まった。

そう鍛え強くなるどころか行く所さえ無いのだ。

ゆえにレツにとつては渡りに船だった。

「………ない、です。強くなるどころか行く場所も兄さんがいなくなつて他の家族も知らないです。」

「なら、俺達がお前の家族になろう。」

黒髪の青年は爽やかな笑みを浮かべてそういった。

「…よろしくお願ひいたします。僕の名前はレッツです。」

「ノブナガハザマだ。」

「アタシはマチコマチネ。」

「オレはシャルナークリユウセイ。」

「俺はフランクリンボルドー。」

「…シズクムラサキ。」

「私はパクノダ。」

「……………そして俺がリーダーのクロロシルシルフルだ。よろしくなレッツ。」

## No. 2 / ネン？ノ？シユギヨウ

「さて、まずは【念】というものを覚えてもらおう。」

「【念】？」

「そうだ。【念】というものは誰にも流れる、生命エネルギーをコントロールする技術のことだ。」

「僕にも使えるようになる？」

「勿論。というより【念】を扱える者の事を【念能力者】といい、ヒソカも使える。」

そして一番大事な事として――

おもむろにクロロは小石を拾い壁にかかるく投げた。

その壁は投げられた小石を中心に大きくひび割れた。

このように【念】を扱える者とそうでない者では大きく攻撃力や身体能力に差がある。」

ここでシャルナークが何やら文字が書かれた紙を持ってきて、

「ゆえにこの危険な力を隠す為に方便として『燃』と【念】で使い分ける。

まあ、両方とも大事なんだけど。」

そう話す。予定通りクロロはパクノダに任せ、レッツの疑問にシャルナークとクロロの順番で答える。

「まずは目覚めさせてからだな。パクノダ任せろぞ。」

「?　ここじやダメなの?」

「あー…生命エネルギー、【オーラ】ともいうんだけど、今の全身の精孔が閉じてる状態では見ることができない。」

「そこで精孔を開けるには素肌に触れはせずともある程度、露出している必要がある。」  
「端的に言ってしまうえば『念に目覚めるために服を脱ぐことになるから移動しましょう。』ということよ。」

パクノダが根本的なことを説明する。

そこでレッツは納得した。確かに今日会ったばかりの異性に肌をみせるのは抵抗がある。

パクノダとレッツは移動した。何故かマチとシズクも付いていったが。

「ふむ…基本的な知識なども足りてないし察しも悪いな。」

「想像以上に箱入り娘だね、あの子。」

「もろもろの知識や戦闘に大事な考察力・思考力も教える必要があるな。」

「そこら辺は、俺たちが教えることになるんじゃない?」

そうクロロとシャルナークは交互に話した。

~~~~~

「これから精孔を開けるから、上着を脱いで背中をみせなさい。」

「わかった。」

レツは言われたとおり背中を向けた。

「いくわよ・・・」

パクノダは【発】をぶつけた。

「
!!?」

「今、全身の精孔は開かれたわ。もうオーラも目に見えるはずよ。」

「さっさと落ち着く体制になって、オーラを纏いな！さもないとさつきみたいになんて倒れるよー！」

「半覚醒の時にも既にやってたから出来るはずだけど。」

パクノダ・マチ・シズクがそれぞれに言う。

レツはその場で座り込み、オーラを落ち着くように制御しようとする、すると

「出来たわね、それが【纏】よ。」

「けど注意しな。目覚めたてでしかも【纏】じゃ何もできないからね。」

「わかった。」

「それじゃ服着て戻ろつか。」

~~~~~

戻ると、シャルナークが何やら紙に書き込んでいた。

クロロは何やら、ノブナガとフランクリンに話している。

「これから、子供を保護する説明書と学が着く本を盗ってこい。」

「ヒマだったからいいぜ。」

「覚えていくのを見ていたかったが、まあいいぜ。」

「あ、女性誌も必要になると思うからあたしも付いていくよ。」

「あと衣服も調達しなきゃいけないからアタシも。」

そうしてこの場からノブナガとフランクリン、シズク、マチがどこかへ行つた

「ふう…一通り書き終わったかな。」

「ほう、【纏】が出来たか。」

「じゃあ、【念】と『燃』について説明するよ。」

「はい、クロロ先生、シャルナーク先生。」

「ぶふっ…シャルはともかく団長が先生って」

呼び方に關してどうやらパクノダのツボに入ったらしい。

「……………クロロ先生はできればやめてくれ。笑われたらかなわん。」

「むー、でも団長先生って変でしょー。」

「あはは、じゃあオレ達の呼び方の『団長』でいいよ。というかいちいちシャルナーク先生だと長いから、シャルでいいよ。」

「分かりました。じゃあ『クロロ兄さん』・『シャル先生』・それに『パク姉さん』で。」

「…まあ、それでいいだろう」

気を取り直して【念】と〃燃〃の説明と教えが始まる。

交互にシャルナークとクロロが話す。

「まず、方便とされる〃燃〃はこっちの【念】を扱うための土台というか基本になるね。」

「といっても使うというか修行するのは〃点〃の精神統一なんだがな。」

「どうやるの？…あと少しクロロ兄さんの教えで分からない言葉があります。」

クロロは顔に手を当てて項垂れ、パクノダが注意する。

シャルナークは笑いながらレツに確認する。

ハア「…ここまで知識が薄いとほ。」

「いや、今のは団長が悪いわ。 どうして小難しい言葉をわざわざ選ぶの。」

ケラケラケラ「あー、久々に笑った。…レッツ? オレは大丈夫?」

「?」 うん、シャル先生の方は伝わる。」

そしてシャルナークは続きを話す。

…クロ口はふてくされてしまったが、今はそのほうが良いのかもしれない。

「まず、基本となる『燃』について説明するよ。」

そして『点』・『舌』・『練』・『発』と書かれた紙を持ってきて説明する。

「まずは、『点』、これは集中を高めるための行動。」

これがないと、オーラが荒くスカスカになつてしまう。

次に『舌』。これは考えたり言葉を話す。正しくは目的を決める。

ここで間違えたらいけないのは、本当の目的を見失わないこと。

…レッツの場合、兄の仇討ちだね。」

「うん。」

「次に『練』。これはハツタリ——嘘をつくことの始まりとも言われている。」

そしてシャルナーク【練】を行い、レッツにぶつける。

「…う、ああ…」

「ゴメンゴメン、驚かせちゃったね。」

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

「やりすぎよ、シャル。」

シャルナークは【練】を解除し、レッツに謝る。パクノダに少し怒られた。「最後が〃発〃。実際に行動する段階。」

「…僕の場合、ヒソカつてのを、殺しに行く段階」

「そうなるわね。」

シャルナークは一通り〃燃〃を説明し、レッツが質問しパクノダが答える。

「次の説明の【念】については、ゆっくり行うよ。」

今、レッツがやってるのが【纏】。オーラを体の周囲に留める技術。」

「まずは、十日は、〃点〃と【纏】を行うこと。」

「…わかった。」

「これは時間をかけて行わないと次の段階に進んでも意味が無くなるわ。」

シャルナークが説明し、パクノダが目安を言う。レッツは納得してなかったが、パクノダは補足する。

こうして初日は過ぎていった。

\*\*\*

十日後

「おつ、ちゃんとやってみただね。」

「分かるの?」

「うん。ちゃんと川の流れみたいに【纏】が安定してるからね。」

シャルナークが成果を確認し、レッツが質問し答える。

ここで、盗みに行つてた四人が帰つてきた。何故こんなにかかったのかというと

「ただいま〜」

「ふ〜ん、少しは見違えたじゃないの。」

「お前ら、今まで何してたんだ…」

「それがよオ、団長。マチとシズクが想像以上に選び、こだわり抜いてな。」

「意外とめんどかつたんだぞ。シズクの掃除機は最後に吸つたのしか出さねえからな。

盗つて出して吸つての繰り返しだ。」

シズクが挨拶し、マチも少しは褒めた。

その質問にはクロロがすること、ノブナガとフランクリンがぼやいた。

そしてシズクが【デメちゃん】を出現させ吐き出させる。

この現象にレッツは質問する。

「いくよ、【デメちゃん】吐き出せ!!」

「わっ！ …これも【念】なの？」

「そうだよ。最後の【発】にあたる。」

シャルナークが答え、次の段階の説明をする。

「さて、それを覚えたかったら、次の【絶】について説明するよ。」

「はい、先生。」

「【絶】は、自分の気配や居場所を隠す技。

精孔を完全に閉じて完全にオーラを消す。」

「あれ？ そんなことしたらまともに戦えないんじゃない？」

「うん、そのとおり。だからこれは、実戦では使わない、

いやもしかしたらあるかもしれないけれど。

そんなに機会はないと思う。」

「じゃあ、なんでするの？」

「戦うのに一番大事な、【練】の準備段階だからさ。」

でもレッツはある意味、一番苦勞するかもね。前から何となく出来た事と反対のことをするわけだから。」

レッツとシャルナークが会話するのを横目に見ながら、シズクが首を傾げる。

「あれ？ 呼び方はそうだったんだ。」

「まあ シャルは先生つばいし、実際に向いてるみたいね。」

「とうか、団長も教えようとしてなかったか?」

「それがね、団長は小難しい言葉を使おうとして伝わらないのよ。」

「…うるさいな。」

マチがそう言い、ノブナガが疑問に思い、パクノダの愚痴を聞かされる。

クロロは不機嫌になり、団員から笑われる。

こうして【絶】の教えと日々は過ぎていった。

—— 五日後 ——

ようやくレツは【絶】を習得した。

ここまで時間がかかったのは、どこぞの野生児や暗殺一家の子のような尾行や気配絶ちの経験などなかったからだ。

もはやお馴染みシャルナーク『先生』が次の説明をする。

「うん。【絶】を覚えたね。」

—— それじゃ大事な【練】についてだね。」

「はい!!お願います!!」

「おおう、気合はいつてるね。【練】は、体内に抑えたオーラを大量に生み出す技術のこと。これと【纏】を日々繰り返すこと。特にヒソカに勝つにはかなり大事だよ。」

「【練】は分かるけど、【纏】も？何で？」

このレツの質問にも律儀に答える。

「【練】はオーラを生み出すだけ。それを【纏】で留めないと、無駄にオーラを使うだけになっちゃうからね。」

「ふ〜ん。」

「む。…一番大事なことだけど、【纏】と【練】は自分よりやってなかったら貫けるし、貫かれる。」

だから、この二つをやらなかった人から順に弱くなる。」

ピシリ「…うん。分かった。」コクコクコク

実感がないレツの態度にシャルナークは大切なことを教える。

レツは石のように固まったあと。素早く頷く。

シャルナークは実践させようとする。

「じゃ、やってみな。」

「……………!!」

「ほら、それをさっさと【纏】で留めないと倒れるよ！」

「うっ……………くう…！」フシユウウ

「うん。やはり一応はできてるけどまだまだだね。」



「ハアツツ…意外と疲れるね。」

「そうだろうね。ずっと力を込めてる状態と同じだからね。」

「…先生、どのくらいで良い?」

「うくん、大きさはもう少し小さくして、まずは五分〔練〕を維持するといよいよ。」

「頑張る…!!」

\*\*\*

一方、盗ってきた女性誌を見ながら、女性団員はレツに何を教えるか相談していた。

「さて、私たちは何を教えましょうかね?」

「戦闘とかは任せれるし、知識面の教育も団長とかシャルがやるだろうね。…シズクは?」

パクノダが切り出し、マチは分担を考える。そこでシズクに話を振る。

シズクはある一点のページ、いや言葉を見ていた。

「これ…。」

「何これ?家事の『さしすせそ』?」

「いいわね。これを分担してやりましょうよ。」

マチが読み上げ、パクノダが肯定する。そこには  
裁縫（さいほう）・躰（しつけ）・炊事（すいじ）・洗濯（せんたく）・掃除（そうじ）  
と書かれていた。

まずマチが話し、順番に決めてゆく。

「【念】からいつてアタシが『裁縫』だね。」

「それでいいと思うわ。」

「あたしも。…次の『躰』は？」

「そこらへんこそ団長やシヤルがやるのではないかしら。」

「それでいいと思う。」

パクノダが肯定し、シズクも賛成する。次の疑問に対してパクノダが答え、今度はマチが賛成する。

マイペースなシズクは順番を飛ばして切り込む。

「じゃあ【念】からいうと、あたしは『掃除』だね。」

「まあ、掃除機を具現化するものね。…となると私が『炊事』というか料理だわね？」

「うん。パクはそうなると思う。…『洗濯』は、どうする？」

パクノダとマチは肯定し、マチは最後の『洗濯』について相談する。

「というか、『掃除』の一部だからあたしじゃない？」

「いや待つてよ。衣服なんだから『裁縫』のアタシじゃない?」

「二人共ずるいわ。普通だったらコインだけど、私も譲りたくないし。」

結局、『洗濯』に關してはたまたま傍にいた人——早いもの勝ちともいう——となり、団長に打診しにいつて許可が出た。

\*\*\*

—— レツが【念】に目覚めてから一ヶ月経過 ——

「どう? 【練】を五分は、維持できるようになったかい?」

「あ、先生。うんギリギリだけどクリアした。時間は六、七分」

「まあ、【練】を十分伸ばすだけでも一ヶ月かかるって言われてるからね。

それを考えるとそんなところかな。」

シャルナークがレツに成果を聞きに来て、レツもそれに答える。

そして次の段階に移ろうと説明を始める。

「それじゃ、次の段階に移ろうか。」

「ついに【発】ですか?」

「いや、基本段階は『燃』と違ってもう一つある。【練】の応用技、【凝】。

まずは、これが見えないだろう?」

シャルナークは指を立てて、オーラの球を作る。

…操作系と変化系は真逆のため、流石にそこまで複雑な形はできなかったようだ。  
「…見えないオーラを見えるようにするってこと?」

「正しくは他にも色々と応用が効くんだけだね。始めは目に集めることを意識する。

というかヒソカの【念】的にこれができないとまともに戦えない。」

「それは頑張らないとね。」

【擬】の概要を伝え早速、実践に入る。

「まずは【練】をする。」

「はい!」ブオツ!

「うん。その生み出したオーラを目に集める。」

「……………くう…!!」

「さて、何が見える?」

「……………球…………?」

「うん、まずまずだね。今は全部のオーラを集めちゃってるけど、

それ以外のことを同時に出来ないとね。」

「そうなの? なんて?」

オーラを全て集め、一応は見えたレッツ。シャルナークは追加説明をし、レッツはそれに質問する。それにも回答を出してきた。

「全てのオーラを集めているってことは、それ以外の部位は【絶】になってしまつてること。オーラの絶対量も増やさない、そこに攻撃されたら終わるからだよ。」

「そっか。…なら『点』と【纏】と【練】を繰り返さないかね。」

「その繰り返しに今日からは、【凝】も入れること。…次の目標として、【練】を倍の十五分まで伸ばして、【凝】も一秒以内に目に集めて、かつ全てのオーラは集めずとも良くなること。…これだけできるようになったら【発】の段階に移ろうか。」

「…まだまだ先は長そうだね。」

「でもこれができないと兄の仇討ちなんて夢のまた夢だよ。」

その回答に納得してレッツは繰り返しを行おうとするが、

シャルナークは追加メニューを出してきた。

すっかり目標地点があるのは、盗ってきた本に記載されていたものによる。

それから、日付はレッツが保護されてから五十日が経った。

トトトトト 「先生!!できるよになったよー!」

シャルナークとクロロが居る所にレッツが駆け込んだ。

二人は苦笑しながら、実際に見せる形で【発】の説明を行なう。立ち直ったクロロが加わり、シャルナークとクロロが交互に話す。

「そうか、達成したようだね。いよいよの【発】の説明に入るよ。」

「【発】といつてもできる事は、千差万別……じゃなくて人によつてバラバラだ。」

…相当、盗つてきた本を読み込んだのか、クロロには努力が見られる。

「それでもまずは、大雑把に当てはまる“六性図”の説明からだね。」

シャルナークが書いた紙には六角形が描かれており、時計回りの頂点に

『強化系』・『変化系』・『具現化系』・『特質系』・『操作系』・『放出系』

と書かれていた。

クロロが引き継ぐ。

「これは誰にでもあてはまる部分。正しくはそこからさらに『生まれ持ったもの』や『育つてきた環境や今までの経験』などがあるが、一番重要なのは、何に興味がありそれをどう【発】にするか。…そういった自分の中で信じて出来る『核』を見つけていこう。」

そういい、シャルナーク⇒クロロの順番で【発】を見せる。

「オレの場合、機械が好みで『携帯』を『核』に作つた。」

「俺は本が好きだから、その『本』を具現化した。」

「こういった感じに、【発】は好きなものを【念】で強化したものだと言える。」

「しかし、系統を知らないが始まらないな。」

「どうやって知るの?」

「『水見式』という方法がある。他にもあるらしいけどつとり早く知るにはこれだね。」

「それと系統の説明だな。『強化系』は“身体能力や物の機能を強くする。”

『変化系』は“オーラの性質を変える”能力。次は『具現化系』。“オーラを物質化す

る。”これは少し特殊で、それに様々な能力を付け足す。」

「だが、次の『特質系』もそうだが、あまりに人の力からかけ離れたことはできない。

…たとえば“ここからヒソカを殺す”とか。…これは『放出系』に相当するから例え

が悪いな。そうだな…“絶対に壊れない”とかだな。…ここで間違えたらいけないの

は、シャルが【凝】の訓練にやったような「形態変化」は系統によつては、変化よりも

具現化の方が効率が良いから、簡単に【発】にはしないこと。」

「なんでですか?」

「【発】には【容量】というのがあって、無限にたくさん作れるわけではない。」

「団長のような能力を考えるなら話は別だけどね。」

「…シャル…」

「…(い)めん。」

「? ……なんで喧嘩してる感じなの?」

「【発】は【念能力者】にとつて知られることは致命傷……いや、絶対に全て知られてはダメなこと、が分かりやすいか。……どんな能力も対策は基本的にありうるからな。俺の場合は能力はまだ増やせる分、良くないがマシだな。」

「…クロロ兄さんは【容量】を残してるってことだね。」

「話がズレてきてるね。『特質系』は一旦とぼして、次は『操作系』。これは〃オーラを与えた物質や生物を操る力。〃

次は、『放出系』。『オーラを飛ばす事』だけど、訓練すれば手以外でも出せるらしい。最後に『特質系』。これは今の五系統に当てはまらないこと。」

「だが、これはよほど慎重に考えないとダメでな。身体の強化率が一番劣る以上、工夫を凝らさないとな。」

そもそも滅多に見られない上、たまに『具現化系』と『操作系』がこれに変わる。「ここまで、問題点がありつつも講義を一通り二人は終える。」

…レツが好都合な勘違いをしたまま、シャルナークが軌道修正し、クロロも続ける。さらにシャルナークが説明を続ける。

「んで、『水見式』の判別方法だね。『強化系』は水が増える。『変化系』は水の味が変わる。『具現化系』は水に物が現れる。『操作系』なら葉っぱが揺れる。『放出系』は水の色



が変わる。『特質系』はどれにも当てはまらない変化。…とりあえず水を注いで葉をその上に浮かべて【練】をやってみるといいよ。」

十十

そして注いでレツが【練】を行うと水の底に結晶化した物質が現れた。

レツは少し不服そうにしており、それを見てシャルナークは補足する。

「…これは、『具現化系』だね。…本当は『操作系』がよかったな。」

「なんでだい?」

「…僕と兄さんは、人形師だからね。それにオーラを送れるのが良かったな、ってだけ。」

「…まあ、『操作系』の能力が覚えられないわけじゃないけど。」

「本当?」

「でも、『具現化系』の能力を作ってからでも遅くは無い。それぞれの属性には相性があって」

レツの場合、具現化が100%、変化が80%、操作と強化が60%。もしかしたら操作に興味がある分、少しは上がってるかもしれないけれどね。で、放出が40%で、特質は0%。」

「なんで特質は0%なの?」

「特質は特別でね、覚えようと思って覚えれるものではないからね。

【発】を本格的に作るのは少し待って。『核』が見つからないと意味がないからね。」  
ということ【発】に重要な【制約と誓約】は、先送りになった。

――百日が経とうとしたある日。――

クロロ、というか蜘蛛は『暇な奴、集合』で集まった人による、宝石や武器類の襲撃だった。

メンツは、クロロ・シャルナーク・なんだかんだでレツの面倒をみていた  
マチ・シズク・パクノダ。

武器類の仕事だとして来た、ノブナガとフェイタン（レツは初顔合わせ）だった。  
レツはそれらをジツと見つめていた。そこにシズクが話しかける。

「……………」

「…………レツ、どうしたの？」

「ん。なんか、こういうのが…………？」

「あ…………、具現化した物がこの中にある感じかな？」

「ん、どうとう決まる感じかい？」

「あ、先生。」

その現象にシャルナークも話しかける。

「わかるよ。具現化はなんかこうピンって来る感じなんだよね。」

「そういう感じ。でもこの中から、どれなんだろ?」

シズクがその感覚を補強し、レッツはお宝の中を見渡す。

そして、それを見つけた。刀身がすらやかに長いが特に変哲もない片手直剣だった。

「うゝゝゝん、…近い、けれどなんか違う。」

「ふむ、…言い忘れてたけど具現化は人に有り得る能力しか作れないけど、

それは能力の話。存在や物質は元となるのがあれば出来るよ。」

「そうそう、あたしの『デメちゃん』みたいにね。」

その情報を知り、もう一回見渡す。

「うん。…これもなんかピンって来る。…でも完全じゃないね。」

「パズルのピースは出揃ったかな?」

「うん。この刃の部分をこの宝石に変える感じ。」

「…そうか。なら、イメージ修行だね。」

「何をするの?」

「そのピンって感じが来たものを肌身離さずそのみで遊ぶ。」

「シャルナーク、イメージを固めるために画用紙と書く物もだよ。」

シャルナークが確認し、シズクが補足を入れる。

レツは次の段階に移ろうとしていた。

十十十

レツが修行による軟禁になってすぐ。シャルナークとシズクはノブナガに打診する。

「ノブナガ、具現化が終わったらレツに修行をつけてあげて。」

「ああ？ やつと決まった感じなのか？ …で？ 何で俺なんだ？」

「それはね、レツが剣を選んだからだよ。」

「…今回のお宝でウロチヨロシてたと思ったらそれを選んだのかよ。…俺が弟子、ねエ。」

ノブナガがその言葉を呟く。ここでフェイタンが話しかける。

「とうかあの子、どういう存在ね？ 今、番号に空きは無かたはずよ。…ヒソカなら死んでくれてもいいね。」

「ああ、フェイタンは初めてだったね。その通り、前の四番だったオモカゲに妹がいたらしくて、ヒソカを強く恨んでるし、知識面も純粹だから俺たちの活動にも、とうか善悪も希薄だね。名前はレツ。」

シャルナークがその質問に答え、フェイタンも賛成する。

「そか、あの子が四番候補から正式に四番になるのが楽しみね。」  
 その言葉にこの場の団員は強く賛成し、酒がすすんだという。

—— さらに一ヶ月後。 ——

「…できた!!」

レツは具現化に成功した。その物質は刀身がトパーズで作られており、柄も白いが煌びやかに裝飾されたものだった。そしてシャルナークに報告する。

「うん、とうとう出来たね。…じゃあ【制約と誓約】を説明しないとね。」

「それと、具現化に分類されることも教えるよ。」

それにシズクも追従する。

場所を移し、色々と紙を貼り出す。

「【制約と誓約】には念に追加ルールを決めて、それに見合った力を得ることが出来る。

まず始めに止めるけど、『ヒソカにしか効かない』ってのはダメ。」

「…なんで?」

「この世界には、傭兵やハンター、殺し屋といったお金さえあれば力を貸すつていうのがいるんだ。」

…そういう人をヒソカが使う場合、あつという間に負けるよ。」

「…なるほど。」

「次に考えてるのは、“命”・“時間”かな？ それもダメだよ。相手は生きてるんだから、逃げられたら終わりだよ。：ヒソカの念は、逃走にも使えるからね。」

「!?…なんでわかるの？、それと“記憶”は？」

シャルナークが色々な可能性を提示し、それを示す。：実際に幻影旅団に挑んで来た人は多くいたので、先例はたくさんあった。（実際にヒソカが逃走とかを採るかはともかく。）

レツは、それに質問をする。シャルナークは考察するがやはり先例らしきものがあつた。

「今までの経験談。 ……………あれかな？ うん。“記憶”も推めない。たしかに一見良さそうだけど、それっぽいな達は自分が何をしたかったのか燃える方の“舌”を忘れて、壊れていったよ。基礎を忘れたら意味がないよ。」

「そっか。たしかにそうだね。」

「分かってくれたかな？」

「うん。」

「よし、じゃあシズク、引き継いで。」

なんとかシャルナークのアドバイスによつて、

レツの破滅的で歪な能力制作を阻止できたことで交代する。

「わかったよ。」

「よろしくお願いします。シズク姉さん。」

その呼び方にマイペースなシズクは突っ込まず説明する。

「まず『具現化系』は大まかには、【武具現化】型、【念獣召喚】型と【強制空間】型の三つ。

【制約】と【誓約】によってバラバラになるけど、大別するとこれくらい。」

「…僕は今、どれかな?」

「今のレツは、どれでもないよ。逆に言えばどれにもなれるってことだけだ。」

初めに【武具現化】型だね。これは真っ先に考えるタイプで、ささやかな【制約】で普通に使えるのを考える。例えば、“麻痺”とか、“五感損失”とか、“回復”とか。

必ずといつていいほど、ほとんどの『具現化系』は持つてる。

次に、【念獣召喚】型だね。これは動く【念獣】を召喚したり、単純な数の利に、【制約】でさらに何かしらの効果を付与する。他にも、一般的には《呪い》と言われているタイプもこの中に含める。

最後に【強制空間】型だけど、このタイプは、条件を満たすと、独自にルールを決めた【念空間】に送り込む。基本的にはその空間への条件を満たさないように戦う。

特殊な具現化の例として『協力』系があるけど、複数人が前提だから基本的には考えな

い。」

「…うん。なら僕は【武具現化】型かな？」

「なら、その中で〔性質付与〕型か、〔妨害・迎撃〕型か、〔補助・ブースト〕型だね。」

「うん。なら〔性質付与〕かな。」

そう方向性を決め、シズクは最後のアドバイスをする。

「ゆっくり考えるといいよ。後付けで【制約】は作れるけど、根本の効果のやり直しはできないからね。だから後回しにすると良いよ。」

「…うん…。」

こうして一通りの【念】をレツは覚え、【念能力者】と呼べる段階になった。



## No. 3 / カゾク?ト?シユギヨウ

レツが保護されてから、一年が経とうとしていた。

その頃には、全団員と顔合わせが終わっており、(ヒソカは居ない。)

各々、技能をレツに教えていた。その風景をダイジェストでお送りしよう。

＋＋＋

## クロロの場合

「俺が教えるのは、言語やその意味。だいぶ知識に不安が残るからな。」

「クロロ兄さん、何するの?」

「とにかく、本を読む。…あと初めは分かりにくい『比喩』や『暗号』がある。まずは実戦でも重要な『推理系』を読め。これはとにかく経験を積むしかない。」

「何で?」

『推理系』が重要な理由として、…そうだな具現化系ならわかると思うが、具現化・操作・特質を敵にするとき、制約を満たさないように、立ち回る必要がある。それに関する情報の考察力は非常に大事になるからだ。よく読めば犯人が分かる上、様々なイメー

ジも付き『特殊付与』も考えやすくなる。一石二鳥の案だ。」

「読み進めれば僕も能力にしたいと思えるものとお出合えるかな？」

「…きつとな。」

—— ノブナガの場合 ——

レツが具現化に成功した翌日から始まった。

「えっと、呼び方は『師匠』になるのかな？」

「まあ、少なくとも特訓中はそれでいくか。まずは剣を出せ。」

「うん。」

「…まだ何も付いてないよな？」

「『特殊付与』のこと？うん、じっくり考えろってさ。」

「まずは、日頃から振り回して剣の重さに振り回されないようになる必要がある。いつとくが、そう簡単には身に付かぬエぞ？それが終わったら、本格的に剣術を仕込んでやる。…最終的には俺の〈居合い〉も扱えるように成りやがれ。」

「その〈居合い〉って？」

「あー、一応見せておくか。ちよつと移動するぞ。」

場所を移して棒状のしかし十分大きい瓦礫の前にノブナガは立つ。

「それじゃ、俺から4メートル以上離れる。」

「分かった。」

「いくぞ……………(円)!! ……!!」 スパアン!!

「……………綺麗……………」

「まあ、剣術を極めれば人よりも堅い瓦礫だつてこんなもんだ。あとはそれをヒソカに当てる隙を生み出す術もだな。」

「うん。絶対に覚えるよ……………!!」

—— フェイタンの場合 ——

「ワタシが教えるのは『薬』ね。」

「どういうもの?」

「これを使えば、念能力者でも大抵の人は倒せるヨ。同時に敵にも使う人居たらの対策でもあるね。敵に使う方を毒といい、その解毒も覚えるよ。……………まずは麻痺毒からね。」

「これは敵を動けなくすること出来るよ。それが完成したら実際に飲むね。」

「え?…飲んだらまずいんじゃない?」

「アホか。実際に食らってしまったらその状態で『解毒剤』つてのを考える必要があるね。また、日頃から慣れていくと大抵の毒は効かなくなるよ。微かな味や匂いでも判別できる

ようにもなるね。」

「…それはかなり有利になりそう。」

「実際かなり有利になるね。分かったら始めるよ。」

——マチの場合——

「アタシは『裁縫』を教えることにするよ。」

「糸を使うんだよね？ 最低限、人形は直せるようになってるけど。」

「それだけじゃ不十分だね。極めると、服を作れるようになるよ。」

「そっか、この服も直せるようになりたいな。」

「あと、『裁縫』とは違うけど物の持ち運びに便利な結び方も教えるよ。」

「よろしくお願いします。マチ姉さん。」

「…さ、始めるよ。」

——フィンクスの場合——

「お前が、新たな団員候補か。」

「君はだれ？」

「あー、俺はフィンクス。俺もなにか教えてやれって言われててなあ…。」

「僕に何を教えるか仕込んでくれるの?」

「そうか、技術を仕込むのもいいの。…なら決まりだな。俺が教えるのは、体術とフリーランニングだ。」

「体術…は、分かるけどフリーランニングって?」

「体術も馬鹿にできねエぞ? 特に具現化系なら選択が大幅に増える。」

「? どういうこと?」

「具現化系は手ぶらを装うことができるし、躲したと思つてたら武器が出るとかな。」

「なるほど。」

「脱線したが話を戻すぞ。フリーランニングってのは、道がないところで行動できるようになる体術の高等技術。」

「?」

「あく、違いがわからねえか。そうだな…」

そう言うときフィックスは壁を駆け上がる。

「え?」

シユタツ「…とまあ、こんな具合に場所しだいでは幅がさらに広がるし、今は逃げる手段が増えると考えてればいい。」

「…よろしくお願ひします!! フィン兄さん!」

「…まあ、呼び方はそれでいいか。」

——シャルナークの場合——

「オレが教えるのは、計算や調べる手段。団長の教育なら分かるかもしれないけれど、実際のところ、情報は自分で手に入れる必要がある。」

「たしかにそうだね。」

「でも、応用とかも一つの大元を覚えてれば解けるし、オレは念の続きも教えるからね。」

「まだ、続きがあるの？」

「当たり前だよ。今までののは基本。そこからさらに応用があるんだよ。」

——フランクリンの場合——

「俺が教えるのは、冷静さを保つたりパニックに陥ることを防ぐことを目的とする。：  
で、だ。レッツ、情報が多すぎて混乱したことはないか？」

「あります。フランクさん。」

「だろ。うな。そういう時は、確実にわかつてることを考える。視野狭窄に陥らねえようにな。といつても、いきなりはキツイだろうから紙に書き出すことを勧める。中央にその言葉と囲むように書いて、推測できることを周りに棒で繋ぐ。最終的には頭ん中で

だがな。」

「これもわかりやすい…けど、最後がキツそうだなあ。」

「まあ、じつくり頑張るこつたな。」

シズクの場合

「あたしは『掃除』を教えるよ。」

「掃除?」

「今更つて思うかもしれないけど、必要な物とそうじゃないもの位の分別はつかないからね。団長とか見苦しい時があるでしょ。逆にシャルナークとかはいい例だね。」

「シズク姉さん、毒舌だね。…でも否定しきれないなあ。」

「じゃあ、ああならないようにしないとね。」

「うん。」

パクノダの場合

「私は『炊事』というか料理を教えるわね。」

「…いつかは出来るようになりたかったけど。僕はそこまで綺麗に作れないし。」

「あら、最低現はできるのね。となると、マナーや作法も取り入れようかしら。」

「?」

「マナーや作法というのは食事や人に出会った時にするものよ。これも綺麗さを意識して好きなら、覚えることに興味があるはずだわ。」

「うん、綺麗なのは大好きだよ。」

「あと料理も美しいのを頑張つて覚えましょうか。まずは今、できるのを綺麗にね。」

——ボノレノフの場合——

「レッツは具現化だったな。なら俺も参考になるはずだ。」

「たしか具現化の中で、オレと同じタイプだったな。」

「そうだよ、ボノ兄さん。」

「なら、具現化は複数できることも教える。まずはオレの能力を見せてやろう。」

「いいの?」

「これが全部ではないからな。【戦闘演武曲／バト||レ・カンタービレ】、【序曲／プロローグ】!!…とまあこんな感じだ。」

「今、ボノ兄さんは鎧と槍の二つを作ってる。」

「そうだな。熟練した具現化系なら複数もってるものと思つていい。シャルナークに止められるレベルの容量の使い方をすれば一種類で莫大にもなれるが、どうしても応用が



効かなくなる。…まあその度にイメージ修行と、＜制約＞によって使いわける必要がある。」

「…うん。今までの話で大まかな【発】が決まってきたよ。」

「なら、よかった。…あと綺麗なものに興味があるといったな?」

? うん。」

「なら、俺の奏でる音楽や自然といった、形には残らないタイプの美しさも知っておいて損はない。」

「…!! うん。楽しみ!」

——ウボオーギンの場合——

「おつ、お前が今、鍛えてるってやつか!!」

「君、誰?」

「俺はウボオーギン。」

「…ウボオーギン兄さん。」

「長エな。ウボオーでいい。…それと兄さんってガラでも無エからやめてくれ。」

「…分かった。ウボオーって呼ぶよ。」

「それでいい。…俺が教えるのは鬼ごっこと素の力を鍛えろって言われててな。」

「鬼ごっこ？なんで？」

「これは【絶】の訓練だな。それで見つからないように立ち回りな。初撃は具現化なら大事だろ。」

「素の力って？」

「これは、【念能力者】にありがちな。【念】にかまけて努力を怠るやつがいるんだ。俺たちの中にはいねえが、訓練して損はねえ。これも【絶】をすることだな。さあ、まずはこの中で逃げな!!」

「……!!(いい人なのは分かるけど、捕まったら抱擁される!! それは綺麗じゃない!!)」  
「はっはア!! じゃあ行くぜ!!」

レツは毎回、本気で逃げ圧倒的な速度で【纏】と【練】の技術と【絶】の差を埋めるようになる。

——コルトピの場合——

「僕は逆の訓練を付けるよ。」

「逆って？」

「？ ウボオーギンの隠蔽と違い発見する技術。まず【凝】をして、見極められる？(神の左手・悪魔の右手／ギャラリーフェイク!!) ブオッ

「わつ。…えつと念をまとつてる方が偽物つてこと?」

「そう。これを使つて、僕は隠れるから頑張つて見つけ、捕まえてみな。…かなり大変だろうから、制限時間は1時間で。」

「えつと、【凝】と【練】を維持してだよね。」

「当然。じゃ、いくよ。」

余談だが、【神の左手・悪魔の右手／ギャラリーフェイク】で作られたコピーには【円】というか触れたら位置が伝わることを秘密にしている。これもクロロからの指示で、レッツが発見できないカラクリを見抜けるか、というものだった。…ゆえに初めてのコルトピ発見にはかなり時間がかかりそうだ。

十十十

「よし、じゃあ【念】の続きを話すよ。」

「はい、先生。ボノ兄さん。」

「うん。まずは応用技を一通り見せるよ。順序よく行こう。【纏】の応用技、【周】。物にオーラを纏わせる技術のことで、性能とかも強化する。これ自体は、強化系として容量は使わないよ。」

「次にこの槍を見てな。」スウー

「え？消えた？…【凝】かな？ あ、見えた!!」

「これが【絶】の応用技、【隠】。変化系、具現化系なら必要な技術。オーラを消すのではなく、薄く見えにくくする技術。」

「次はオレが示した15分の倍、【練】の応用技、【堅】。正確には【纏】も使ってるんだけど。【練】を最低30分は維持する。」

シャルナークとポノレノフが交互に説明し、ここでレツは小首をかしげて言う。

コテン「先生。僕かなり頑張ってる【練】を40分以上、維持できるんだけど。」

「…そうか、日頃から怠ってないんだね。」

「いや、ウボオーに見つかってからも逃げるのに必要だったからね。」

「なるほど。…じゃあそれなりの実力者の目安として二時間を目標にするといい。」

「…じゃあ続きを話すぞ。【凝】の応用技、【流】。これは攻撃しながら【凝】をする。まずはゆつくりと行うといい。」

「さて、と。ノブナガ!」

「師匠?」

「おう、居合に必要な技術だからな。」

…いくぞ。【纏】と【練】の高等応用技、【円】!!」ブオツ

ノブナガを中心にオーラが球状に広がる。

「わっ！……これはなんの用途？」

「こいつは主に自分の中心から【絶】を無効化して発見する技術だ。但し、目に見えるから注意しな。【円】と呼べるのは最低自分から1メートルだ。」

一通りの説明を終え、レツはシャルナークが提示した目標を確認する。

「えっと、【周】は皆が傍に居るとき、地面に【周】をするから、それを貫通して2メートルは掘ること。」

【隠】は、僕の武器を【凝】してない状態で隠せること。【堅】は【練】を二時間。【流】は自分の出せる攻撃速度に追いつけること。【円】はまず1メートル。」

「そうそう。頑張るといいよ。…それとウボオー!!」

「おう!! (【超破壊拳／ビッグバンインパクト】!!)」

ドゴオオオオオオン!!!

「ひゆう♪ あいからわずげーなウボオーの【超破壊拳／ビッグバンインパクト】は。」

「……な、何……? あ、あれ……?」

「まあ、あそこまでの威力じゃなくてもこれも誰でもできる応用技。これはヒントを出すから、探すといいよ。ヒントしては今までの事を全部同時にやること。」

「あ、先生、能力の概要が決まってきたよ。」

「本当かい?」

「うん。複数具現化するのをどう制約にするのかにボノ兄さんが参考になったよ。こんな感じがいいなって。」

「でも、全部を教えるのはオレたちでも基本的にはダメだよ。」

「それは大丈夫。まだ一つしか決まってるないし。」

「こらこら、そういつた情報も迂闊に喋らないこと。」

「あ…。ごめんなさい。あと先生、欲しい技術があるんですけど。」

「それは、この試練が終わったら、買ってあげるよ。」

十十十

さらに三ヶ月。

「先生、達成できたよ。」

「はやっ!! ……まあ、一通り見せて。」

そして一連の技術を見せる。

「ん。…たしかに出来てる。…でもどうやったの? 【堅】だけはそう簡単に伸びないと思うんだけど。」

「先生が言ったんじゃない。そう簡単に話してはダメだって。」

「うん。ちゃんと喋らなかったね。(……どうやったら飛躍的に伸びるんだ? 【制約】

かな?)」

「…僕を試したんだね。」

「そういう事。で?何が欲しいの?」

「えつとね。皆、【念】とは別に得意技術を持つてるじゃん。それで、本を読んで見つけたんだけど、癒しやリラクソスの技術。」

「なるほど。となるとツボ押しとかマッサージの知識の本だね?」

「そう。」

「分かった、片っ端から取り寄せるよ。」

そしてレツは癒しやリラクソスの技術を習得した。

~~~~~余談~~~~~

ある日、レツは前々から聞けなかったことを聞いてみた。

「そういえば、クロロ兄さんの『団長』呼びって、僕が覚えてる暗号か何かなの? でも他の人たちは名前前で呼んでるのに。…寂しくない?」

パタン「ふむ… いや、たまに俺も名前で呼ばれるぞ。でもそうだな、暗号か。…よしレツ、なにか俺たちの『コードネーム』を決めてみてくれ。」

「クロロ兄さん、『コードネーム』って何?」

「ああ、『コードネーム』というのは名前の暗号化だ。」

「なるほど。」

そう話していると、マチが探しに来た。

「レッツ?ここに居るかい? …なにしてんの? 団長。」

「いや、戯れに俺たちの『コードネーム』を考えてもらってる。どうやら俺の『団長』が暗号に聞こえるらしくてな。」

『『コードネーム』』。でも実際、仕事中に名前バレして、いちいち新しい番号にアドレステとホームコードをシャルが用意してアタシがメッセンジャーすんの疲れんのよね。」

「そうか。…場合によっては、連続で仕事が出来うるかもな。勿論、仕事中だけは使つて、フリーの時には今まで通りでいいだろう。」

「うん。クロロ兄さんが、『キング』で、師匠が『エース』とかかな?」

「ほう。」

「ちよつと待つて、団長。…レッツ? その発想はどこから?」

「え? …『トランプ』から。」

マチがそれについて聞き、レッツが回答を出すと、マチは苦虫を噛み潰した表情を浮かべ、クロロも否決を取る。二人は否決した理由を述べる。

「……………却下するよ。」

「なんでですか? マチ姉さん。」

『『トランプ』』はね、ヒソカが好んで『周』したりして武器に使うからだよ。」

「…そういうえばそうだったな。これではヒソカがメインっぽくなってしまふ。それは誰も認めないし、認められないだろう。」

「…うん、ごめん。僕も仇の愛用品なんて使いたくない。」

しばらく時間が経過して、ノブナガとウボオーギン、シズクとパクノダが来た。

レッズの発言に対してシズクが疑問に思う。

「…うん。師匠が《鶴》でマチ姉さんが《幕》とかかな。」

コテン「? レツ、いきなりどうしたの?」

それにマチが回答し、気に入るものも出たがシズクが気づき、

その呼びにパクノダは断り、問題点も挙げる。

「ああ、言つてなかったね。団長が暇つぶしもかねてレッズに『コードネーム』を考えさせてのさ。」

「おオ! 俺はいいな。 気に入ってたぜ。」

「おい、レツ 俺は?」

「ウボオーは《燕》…になるかな?」

「おオ!! 良さそうじゃないか!」

「あれ? レツ、『花札』から来てる?」

「…よくわかったね。シズク姉さん。」

「ちよつと、それだと私は《盃》になるじゃない。いやよ、私、そこまで酒飲まないわ。十二個しか名前ないし、それに団長は結局どうするの。」

「うん。イメージとかけ離れたね。パク姉さん、ごめんなさい。」

ということまで却下されたし、取りやめた。

次にフェイタンとフィンクスが来て、次の発案を出す。

「ん。ならフィン兄さんが《龍》でフェイ兄さんが《牛》かな？」

「いきなりなんの話だ（よ）？」

「ハア。…またかい。」

マチがぼやきながら、同じ説明をする。

「いいじゃねえーか。俺は気にいったぜ。」

「ワタシも。」

二人が賛成するが、やはり解いてしまった、シズクが空気を壊し、笑い声が響く。

「レッツ。これって『干支』？ …それってノブナガが《鼠》で、ウボオーが《犬》になるよね。」

「ブハハハハ!! いいじゃねエか、それで!!」

「クククククツ ホントね。これでいいね。」

ピキィ「…おい レツ、これはホントか？」

レツはプイっと二人から顔を逸らす。

「おし、表出ろ!! 鍛え直してやる!!」

「落ち着きな。」

二人がキれるが、表に出る前にマチの糸に抑えられる。

レツは無かったことにして、新しいのを考える。

「よし、気をとりなおして別のを考えるよ。」

まだ二人は吠えていたが、マチの糸から開放されるやいなや、笑ったことに対する八つ当たりも兼ねた戦いで、フェイタンとフィンクス対ノブナガとウボオーギンが開始されてるが見てないことにする。

「うん。シズク姉さんが《ヴァルゴ》、パク姉さんは《リブラ》とか?」

シズクは頑張って法則を導こうと考えてる。

「レツ?どういう意味?」

《ヴァルゴ》は乙女、《リブラ》は天秤、を意味する。クロロ兄さんの分として、蛇使いか、医者になると思う。」

「あゝゝゝ、『星座』だね?」

「…ふう。シズク姉さんには敵わないね。」

「でも、今は戦ってるからバレないけど、あそこの四人には受け入れられないと思うよ。」

「やつぱり?」

そうレッツとシズクが話してると、ここでパクノダが付け足す。

「間違いないく、受け入れないでしょうね。それならさつきの方がマシだわ。」

「じゃあ、否決つてことで。」

　　〳〳そして夜の帳がおちてきた。　　〳〳

「今日は満月か〳〳。ポノ兄さんに教えてもらつたけどいいものだね。」

「おう。こういう時はジャポン酒が飲みたくなるぜ。」

「アタシも。」

　　レッツの眩きにノブナガとマチは同意し、クロロも話に加わる。

「満月はなんだかんだで、一ヶ月に一回は晴れてれば見えるからな。それよりも《日食》というものが更にレアで綺麗らしい。そして月が“緋く”なるのを《月食》と呼ぶ。…盗れないから、ある意味では縁遠いがな。」

「特に、《ダイヤモンドリング》つてのがさらに綺麗らしいね。」

「なんだそれ?俺が聞いたことのないお宝か?」

　　レッツが眩き、クロロは勘違いをする。レッツが又聞きを話し、修正する。

「違うよ。さつき言つてた《日食》の一つで《皆既日食》のなかで、一瞬しか見れない瞬間のことを《ダイヤモンドリング》つて呼ぶんだつて。」

「そうか…。」

クロロは意気消沈し、レツは呟く。

「月、月か。 うん。 師匠から《睦月》って当てはめて、クロロ兄さんを満月を意味する、《望月》ってのはどう?」

「? …ああ、『コードネーム』をまだレツは考えていたのか。 だが、他にも呼び名があるな。 一月は《睦月》と《初春》などがあるな。 九月は《長月》と《菊月》があるな。 パクは女性だから、《菊月》か。 しかし、ボノが納得しないだろう。 《神無月》ボノレノフは舞闘士であり、より美しい音色を出すと、精霊が降りてくる、と信じられており、また熟練すると神と同格化される、といったギユドンド族独自の文化を持つ。 など…

いや。 たしか一部では神が集まるとして、《神在月》というんだったな。 コルも《師走》ではなく、《極月》と統一する。 そして俺が《望月》。 そうなると…欠けた状態を《月食》、いや《月蝕》か。 ……悪くない。」

「全面的に賛成だけど、最後のだけはどうかなの? 縁起でもない。」

クロロの怒涛の言葉に対して、レツは苦言を呈する。

「どっちみち、ヒソカが死んだ瞬間は《月蝕》になる。 今のアイツは《卯月》になるから…。 そうだな、レツ、お前の『コードネーム』は《子兔》だ。」

「うん。 いいね。」

こうして『コードネーム』決めの一日は過ぎていった。

No. 4 / シュギョウ?ノ?セイカ

あれから一年半が経つ頃。その頃にはレッツの「発」の試運転として《仕事》にも参加した。

「今回は宝石博物館を狙う。」

メンツは、クロロ・マチ・シャルナーク・シズク・パクノダ・ボノレノフ・コルトピである。

「これより、呼び方も『コードネーム』に変える。」

移動し襲撃が始まる。ちなみにレッツは、返り血を出さないまでの技術が不安視され、『コードネーム』らしく、《兎の仮面》を被っている。視界というのはやはり大事ということだ。さらに付け加えると、子供の念使いは大変珍しく、容易く特定され、逃げ切れるまでの実力も厳しいので、その対策も兼ねている。

「よし、《弥生》・《極月》、《子兎》のために、数を分離させる。」

「了解。《望月》。」

クロロが命令を出し、それにマチとコルトピは答える。

「ハハハハハ！ このまま易々と宝石を奪わせるかー！」

「ふん。」

「何？ 駆け出すだと？ バカめ、蜂の巣にしてくれる!!：は？」バシユ

「うん。まずまずかな。」

レッは寶石剣をもって、【凝】を足にあつめ、速度を出した。それにより駆けた。

…右手には、トパーズの宝石が付けられていた。

「《子兎》。念能力者いくよ。」

「はい。」

「舐め腐りおって…!! こんなチビに負けるかアアア!!」

そう男は銃を乱射する。

「ん？（これ【周】されてないね。）」

「なに？ 意に介さず向かってくる？くっ!!」

そして男は向かってくるレッに対して、銃を防御に使おうとして

「それは効かないよ。」

――― 剣が、銃をすり抜け男に深手を負わせる。

「くっ!!」

「うん? (【凝】もしてないっばい。)」

そのまま【隠】で隠した左手の剣が男を切り裂く。

そうやって順調に撃退してゆく。

「ふわあゝゝ 綺麗だね。」

「ああ。だが、ガラスと台座は溶接されているな。…そうだな。《子兔》。《水無月》が出した、最後の課題はクリアしたか?」

「《霜月》の技のこと? 何となくこれかなってのはある。」

「よし、やってみろ。」

そしてレツは【硬】をやってみせる。

「うん。まずは【練】をする。そこから【凝】をして、【纏】で留める。残りの部位を【絶】にして…!!」

ガツシヤアアアン!!

「ほお。【硬】をクリア出来たか。」

「うん? これ、【硬】っていうんだね。」

「ああ。基礎レベル、全ての複合応用技、【硬】。ようやく系統別修行でもいいな。」

そして戻ってきた日。

「ククロ兄さん。具現化の修行にまた宝石使いたいんだけど。」

「ふむ。…俺が愛で飽いたら使うといい。」

とにべもなく断られた。シャルナークとシズク、マチが集まる。

「レツ。こっちに來な。」

「どうしたの？ 先生と姉さん達？」

「いや〜。系統別修行を忘れ：ゲフンゲフン …始めることになってさ。」

「あれ？まだ続きあったの？ というか今、忘れたって…」

「いや？これは応用技の続きってわけじゃない。言葉通り、系統に特化した修行さ。」

「まずは、あたしだね。具現化系は、オーラの密度を高めたり薄めたりする。【隠】とか

【円】もこれに当てはまるね。極めれば極めるほど【隠】はバレにくく、強化率が劣る分、

【堅】をする感覚に似てるように、密度を濃くして全身が【凝】に近くなる。とりあえ

ずは、1センチが目標かな。」

「次はアタシの変化系。まずは0〜9の数字を一分以内に行う。最終的には形状変化が全身でできることらしいよ。」

「最後にオレの操作系。体内オーラを操作すること。それを瞬時にだす【流】の特殊版。これを鍛えると、内臓関係が頑強になったり、体内だから、普通は【凝】でバレるオーラの攻防移動がバレにくくなる。」

とここまで説明する。

「で、先生どういう順番ですか?」

「えつと、レツは操作に興味があったから、『具⇒操⇒具⇒変⇒具』のローテーションかな。これが修行時間が理想の山形。これを最低50日は行うこと。…一応、強化は石を【周】と【硬】して瓦礫を同じ石で砕く。放出は、念弾を浮かべたり、自分の体が不動の状態で50センチは浮くこと。」

＋十＋

しばらくして、レツは刀を具現化し、ノブナガに剣技を教わりにいった。

「ん? レツ、おめエ新しい武器に刀、選んだのか。」

「そうだよ、師匠。まだこの刀に付与は、してないけど。」

「ほーう、まあじっくり考えな。俺には性に合わねエ分、俺とは違う形の剣技になるかな。」

その日の手合わせが楽しみだぜ。」

「師匠、顔が怖いよ……………」

そう、ノブナガは面白そうな笑みを浮かべる。…レツは少し引いた。

十十十

また、しばらくすると。今回はフェイタンの拷問室を訪れてた。

「フェイ兄さん〜」

「何ね、レツ？　これから情報引き出す。」

フェイタンはサディステイックでもあり、趣味兼仕事を始めようとしていた。

…もし、行ってる最中に水を差したら、能力は使わないだろうが一発で叩きだされて
いただろう。

ゆえに、今の彼は少しばかり不機嫌だ。【練】に悪意のオーラを乗せ、ぶつけるほどで
はないが。

「いや、終わったら、処分する前に僕に渡してくれない？」

「何をするつもりよ？」

レツは身柄の引き渡しを打診する。フェイタンは当然、訝しむ。レツはしばらく悩ん
だが、正直に話すことにした。

「ん〜、…【発】を試したいんだけど。」

「それなら最初から言うね。」

~~~~~

「一通り、終わったよ。」

「じゃあ始めるね。」

そう言い、レツは左手にエメラルドの指輪をはめて、壊された部位に触れる。

「…オマエ、回復系の念、作たか?」

「うん。そのうち治す系のは持ちたかつたからね。」

初めは時間巻き戻しの治療を考えただけど、無理だなんて。」

「それは強化系の能力ね。始めに具現化を作らせたのは知てるが、でも容量が…」

そこまでフエイタンが喋ったところで、レツが遮る。

「容量で思ったんだけどさ。制約って後付けでも作れる、というか基本はそうだよね?」

「それはそうね。先付けによる制約ありきで能力作ると、リスクとリターンがリスク側

に天秤が傾いて釣り合わず、見劣りするね。」

「そこで思ったんだけど。制約って、容量の節約にもなるんじゃないかなって。」

「ワタシは、より特質系に近づくための方法と見てたけどね。」

「僕も、初めはそう考えてたよ。」

「今は違うと?」

「うん。そうだとするならば、オーラの強化率が半ば自動的に下がってしまったし、強化系により近い能力にするべきっていう風に思想が一边倒になってると思う。」

「…でも実際には強化系の方が良い、ということではないし、もしそうなら、具現化・操作・特質は非戦闘要員であることを強制されてしまうよ。」

「そう。でもそれは兄さん達が正面から否定してるよ。」

「確かにそうね。…という事はさらに制約を重くするか増やすとその分、新たな能力の余地ができるということか?」

「そういう事。…うくん。回復速度が遅いなあ。ちよつと改良ポイントかな。それともう一つ、フェイ兄さんに頼みたいことが…って、なんでそんな面白そうな笑みを浮かべてるの?」

「それは流すね。で?頼みたいことって何ね?」

「うん。僕は一通り癒しの知識はあるけど、試したことないなって。まさか兄さん達で実験するわけにもいかないからさ。」

「確かにそれなら、その技量向上に役立つね。…代わりにこれから拷問するときに手貸すよ。」

「? それは願ったり叶ったりだからいいよ。」

これによりレッツの癒しの技術と回復の向上に努める。

ちなみにこれより先に拷問される人は、損傷⇒回復⇒癒し⇒損傷、プラスアルファで今までやろうと考へても数が限られてる部位の甚振る方法の発見、およびより過激なる地獄コンボが修行兼用で出現したとか。

十十

ある日のこと。

レッツは疑問に思っていたのをシャルナークに話した。

「ねえ 先生。【硬】で本当に最後？」

「どういう意味だい?」

「えっと、【纏】・【絶】・【練】・【凝】・【発】を合わせたのが【硬】だよな?」

「そうだね。…結局、レッツは何が言いたいの?」

「うん。【発】の部分は、強化系って言えるんじゃないかってこと。」

「…つまり、変化、具現化、放出、操作に相当する何かがあるってことだね。」

「そう。…でも知らないみたいだね。」

「う〜〜ん。まあ、考えてみなよ。」

「いや、変化はこれなんじゃないかな？」

レツは手刀を作り、手が触れずとも切り傷ができる。

「おおつ、…容量は使つてない？」

「うくん。…でも系統別の応用のつもりだけど。」

「そうか。で？名前は考えた？」

「形状変化の延長線だからね。“形”、“長”、とか考えたけど、【鋭／えい】って呼んでる。」

「なるほど。…他には？」

「うん。具現化ならオーラが川の流れて言つてたじゃん。つまりオーラ自体は液体のような流動でもあると思う。それで思いついたのが【逸／いつ】。相手の攻撃に合わせ【流】で逸らすというか。」

「…それは、自動つていう風に容量を使わないようにするのが大変そうだね。」

「僕もそう思う。…まだ放出と操作は思いつかない。」

~~~~~しびらくして~~~~~

「先生、操作を思いついたよ。」

「ホントかい? また一つ幅が広がるなあ。操作ならオレにも有効だしね。」

「【浸／しん】て名付けた。対象に接触したときにオーラを流して、相手のオーラ次第だけど、内臓破壊の技。『邪拳』の《掌》を読んだときにあつたんじやないかなって。これなら不殺でもあるから壊すことなく、操作しやすくなると思う。ってなんで引いてるの、先生。」

「……………いや、随分とえげつないのを思いつくなあ、ってね。」

「それでもないよ。…確認だけど、【絶】ってオーラがゼロになる訳じやないよね?」

「そのはずだよ。っていうか仮にゼロだったら、オーラは生命エネルギーでもあるからね。【絶】した瞬間に死んじゃうよ。」

「うん。だから考えたんだよね。【絶】は体内に【硬】してるとも言えるんじゃないかって。」

「…なるほど。その見方からすると、【絶】してるとその【浸／しん】は防げてしまうところ?」

「多分。そうでなくとも日頃から【絶】の時間が長かったりすると、効きづらいかなあ?」

「ああ……。そういうことか、あの家ならやってそうだなあ。」

「やつぱり心当たりある?」

「うん。ゾルディック家っていう暗殺一家なんだけど。暗殺はターゲットを殺す職業だからね。あそこに住人なら効きづらそう。」

「でも放出は実践し難いね。いや、僕も【鋭／えい】しかできないけど。」

「うちだとフランクリンしかないからなあ。」

　　～　　またしばらくして～　　

「フランクさんなら、足の裏とかからでも放出して方向変換できない？」

「うん？いきなりどうしたレツ？」

　　そしてフランクリンに今までの経緯を話す。

「なるほどな。たしかに面白い。じゃ、説明してみな？」

「まずジャンプ力を強化するなら、足に【凝】をするだけで良いんだよね。」

「まア　そうだな。」

「でもその空中滞在中無防備じゃん。そこで足の裏が理想だけど、手からでもいいから、念を放出して移動ができるようにしたり、とか。」

「それができると……ほとんどの敵に一方的に念弾を浴びせられるな。よしんば空中にも対応できる【発】の能力者がいたとして、躲す事が可能になるな。」

「まだ呼び名決めてないんだよね。『飛』とか?」

「いやそこまでの飛行能力は【発】になるだろう。…そうだな、ジャンプの延長とも言える、というかそつちの表現の方が近いな。」

「なら【跳／ちよう】かな?」

「それでいいんじゃないか?」

十十十

そして二年が経とうとしていた――。

レッツは行き詰まりを感じていた。そこで念能力者としてタブーを犯す決意をする。

「…先生。」

「どうしたのレッツ?」

「…うん。僕の【発】がどうしても完成しなくて。」

「え?あの宝石剣の透過能力だけじゃなく?」

「うん。タブーなのは理解してるけれどそれでも詰まりがあつてさ。」

「……………ふうふう、やっぱり限界がある感じか。これは団長にも相談かな。」

そしてクロロに同じことを話す。

「ふむ…、やはり限界があったか。」

「うん。レツはそろそろ頭打ちになってると思う。」

「なら、レツ。今、理想の最終形と比べてどこまで出来てる？」

「大体、半分の50%くらいかな。」

「やはり様々な経験が必要か…。」

「ならば、《ハンター試験》受けさせたら？」

「そうか、もうそんな時期か。」

「《ハンター試験》？」

「そういえば、レツは知らないね。オレも持つてるけど、これがあると色々なことができようになるよ。ていうかオレと団長しか、ライセンス持つて無いのつて不便じゃない？」

クロロは顎に手を当て、少し考え込む。

「いいだろう。ただし【発】を完成させたら俺に連絡を入れろ。それとシャル。今の俺たちの情報をだせ。」

「了解。」

シャルナークが応募用紙の申し込みと応募カードの取り寄せ、それに今の蜘蛛を丁寧

に調べる。

——翌日——

クロロとシャルナークが交互に話す。ちなみにレツはこの場に居ない。

「というのも今ひとつ、〃点〃の原点回帰を別室で行っていた。具現化にありがちな埋めるべき足りない要素を探すことにしたのだ。」

「体裁としてどこまで意味があるかは分からんが一切の対策無しではいかんだろう。」

「《保護者承諾サイン》のことだね。」

「その通りだ。で、結果は?」

「レツの考えた『コードネーム』の甲斐もあって、俺たち手足はほとんどバレてない。…なぜか団長の名前だけ乗ってるけど。」

「…? どういうことだ?」

「さあ? 情報源からして、『コードネーム』の前だね。あと団長は直々に盗りにも行ってたでしょ。」

「ああ。それで俺の方が誤差の範囲で情報が多いのか。」

「普通は、手足がバレてて、ボスといえるクロロの情報に隠蔽されきってるはずだが、何故か逆の情報量になってることに對して話す。」

「もしかしたら、レッツが考えた新しい念は交渉材料になりうるか？」

「いや、無いんじゃない？」

「俺も話しててそう思った。」

「でも、これで【初級】・【中級】・【上級】と五個ずつ分別できたね。」

「ああ。大変、面白かった。俺たちは一通り鍛えきってしまったからな。団員達にもいい刺激になっただろう。」

「団長。結局『保護者承諾サイン』はオレの名前を使う感じだよな？」

「ああ、そうなる。あと場合によってはシャルが星持ちのハンターにもなれるかもしれないな。」

「そうだったら、また手続きとか必要そうだなあ。」

「少なくとも今の会長、アイザック・ネテロの内なら大丈夫だろう。曲がりなりに、ゾルディック家や流星街とつながっているのだから。」

ということでシャルナークがカードの「保護者承諾サイン」の欄にサインをした。

一応、レッツも名前などを一通り見て触れた。

~~~~~

「先生もハンターだったんだね。」

「一応ね。やっぱりあると便利だし。」

「…なら、コツとかある?」

ダメ元でレツはシャルナークに聞いてみる。するとアドバイスがあった。

「最初から自分の力でやること。…でも、会場とかも全然ちがうから、基本的に対策とかは無駄だけど、耳に【凝】をすると少しは情報収集が速くなる。同時に、いろんな情報も入ってくるから、取捨選択も必要だけど。決して楽にはならないね。」

「そっか。ありがとう!　それはそれとして、荷物はどうしよっか?」

「そうだねえ。じゃあ〜〜」

絶対に外せないものとして、画用紙などの具現化するための道具などレツは荷物を詰めていった。

そして出発の日がやってきた

## No. 5 / ハツ?・ヲ?・ツクレ

~~~~~ドレー港~~~~~

シャルナークのアドバイス通り、レツは耳に「擬」をすることで、情報を集めていた。
 (うーん、実際やってみて、ここまで辿りついたけど、情報が多すぎるなあ。)

しかし、あまりの人の多さに頭痛なども抱えてしまう弊害もあり、頭に手を付けうなだれてしまっていた。

(ふう。…とりあえずフラン兄さんの教え通り、持ってきてる紙に書き込んでいこう。)
 そうしてレツは様々な情報を整理し、書き込んでゆく。

(うーん、バスがザバン市に出てるはずだけど、一台もそこにいかない。…纏めるとこれだけになっちゃたな。 …正確な会場が分かれば、身体能力でたどり着けると思うけど

~~~~~  
 もう一回、ハンター試験会場案内書を見るが、やはり大雑把にしか書かれていない。

(仕方ないか。 …船が到着したし、何か新しい情報が、増えることに期待して…。 も  
 う一回【擬】!!)

すると新しい情報が聞こえてきた。それにレツは首を傾げ、考察する。



(…!?) …一本杉を目指す? 真逆の方向——これが罨? なるほど…それなら納得する。)

レツは方向性を考える。

(真逆の方向だけ… 一回そつちに向かつてしまったら、もう取り返しが——いや、着く。全力で足に【流】して走れば。 うん、向かつてみよう。)

…結論は、強化系的な思考の暴論だが、実際それが可能なのだから仕方ない。

—— 廃墟の路地 ——

レツは一本杉に向かって、歩いていた。

(うん? …どこからか見られてるな。 …【円】!!)

ちなみに今のレツは、努力はしたが【円】の範囲は、半径十メートルから良くて二十メートルにしかならなかった。というのも見られると感じたとき、【円】を張るくらいなら気絶させるなり殺すなりの方が早いからである。薄気味悪い、とかは特に思わなかった。若干、汚さに眉を寄せてたが。

(うん、やっぱり居る。…なんか左の方向に空洞のトンネル?があるっぽい。…さて、

何が起こる?)

人や地形の確認を済ませ、少し期待を寄せる。

「ドキドキ二択ク~~~~クイズ!!」

(!? クイズ?)

老婆やガスマスクを付けた人が出てきてクイズを行うという。

レツは当然、困惑するが老婆は話を始める。

「あんた、あの一本杉を指してんだろ? あそこには此処を抜けないと絶対にいけないよ。他からの山道は、迷路みたいになつてる上に凶暴な魔獣の縄張りだからね。」

レツは思考する。

(迷路は【円】で対策できて、行き止まりとかでも【流】による破壊で突破できるよね?)

∴凶暴な魔獣ね。兄さん達より強いのかなあ? ∴いや、それは考えにくい。先生が突破できてるし、まだスタートラインでもないならまだまだ出てくるってことになる。少なくとも先生よりはるかに弱いつてことになる。うん、問題なさそう。

またしても何故か極論にして暴論な結論をだすレツであった。

「これからクイズを一つだけです。①か②で答えること。制限時間は5秒間。 ∴あともつつかえうる位、近いし、早速やるよ。」

そして老婆はクイズを出す。

「『友達』と『家族』が命の危機にさらされてる。①、『友達』・②、『家族』。どちらを助ける?。」

その質問に対して、レツはノータイムで答えた。

「②の『家族』。」

「理由は?。」

「①は僕にはいないし、『家族』は一回、失ったからね。後悔しないように。」

老婆達はヒソヒソと話し始める。

「通りな。」

レツは通過してゆく。 ……それを見ながら老婆は考える。

(……質問が悪かったね。でもあの子、本気で言ってるみたいだが『使える』みたいだし。……このクイズの真の意図は《あらゆる残酷な空想に備えること》ともう一つ。《この質問に答えを持たないなら、安全に迂回すれば良い。答えを出すなら危険だが近い道を通り、それが成せるだけの実力を示せ。》ってというのが本題。……あの子もいつかそれに気づくかねエ。……さて、もう三人きたね。)

このクイズの真の意図はあまりに残酷な形で\*\*\*\*\*。

++++

レツは道を歩いていると、道着にしめ縄を背負った男がきた。

「よお。アンタも受験者かい。」

「うん、そうだよ。」

「そうか、しばらく一緒に歩こうぜ。(馬鹿な三人のために、罾をいっぱい仕掛けつつ、万が一魔獣がきたらコイツを罾にするか。)」

「いいけど——(つと、そんな暇はなさそう!)」

いきなり知性を持たない、凶暴な魔獣が襲ってきた。

レッツは具現化した剣で斬り払っていく。

「くっ、(一匹だけでも辛いのに、こんな沢山——!!) ギイアアアア!!」

(この人、こんな弱いのに試験に挑んだの? ……まア、クロロ兄さんや先生より遥かに下手な悪意が見え隠れしてたけど。分かりやすすぎて、逆に違うかと思っただけど。今のケースなら、僕を罾として使う感じかな? どっちにしる僕を利用しようとしたんだから、助けないけど。)

男はあつという間に食われていった。レッツは一通り魔獣を殺しきって、一息つく。

「ふう… 今ならあの人が餌になってくれるね。前々から考えていたけど速くなる能力でも本格的に考えよっかな? ……突発的に念じちやダメ。よく考えないといけないけど、ここじゃあ無理だね。後回しにして、今は走ろっかな。」

【発】の欠片を得ながら、レッツは足に【流】して、走り出した。

十十十

一方その頃。

「!! (悲鳴が聞こえてきた!!)」

クラピカは、レツを騙そうとして食われた男の悲鳴を聞き、『四分の一、正解』の答えにたどり着く。

レオリオに呼びかけるが、キレているレオリオには届かない。

老婆がそれを止める。

「(猫目のポウヤは気づいたようだね。) これ以上のおしやべりは許さないよ。」  
老婆は続ける。

「ここからは、余計な発言をしたら即失格とする!! さあ答えな ①、クイズを受ける。

②、受けない」

「①だ!!」

それに対してクラピカは即答し、レオリオは歯ぎしりする。

(気づけレオリオ!! 簡単なトリックだ!! ゴン、お前にも聞こえたはず。ならばこのクイズのからくり気づくんだ!!)

クラピカは二人に祈りながら、思考する。 : 実際はトリックらしい、というかトリックでもないのだが。

それとは別に老婆は出題する。

「それじゃ 問題だ 息子と娘が誘拐された一人しか取り戻せない。①、娘②、息子どちらを取り戻す?」

完全にキレたレオリオは近くにあった木材を押し折り、カウン트가ゼロになるまで武器として素振りする。

それを見てクラピカは、木刀で防衛できるように備える。

そして老婆のカウン트가ゼロになり――

「ぶーー 終々了々」ギイン!!

――レオリオが振り下ろし、それをクラピカが相殺する。

そして二人は喧嘩するがクラピカの発言に頭の血が引いた、レオリオは落ち着く。

「せつかくの合格を棒にふる気か?」

「!? 何?」

「ふう! 我々は正解したんだよレオリオ 沈黙!! それが正しい答えなんだ」

クラピカは『四分の一、正解』の答えを話してゆく。

レオリオは反対意見を述べるが、それも説明する。

「しかし、さっきの野郎は…」

「正解とは言っていない 通れといったただだ。 さっき彼の悲鳴が聞こえた。おそらく

魔獣におそわれたんだろう。つまりこの道は『正しい』道じゃないのさ。」

「……」

「その通り 『安全な』道はこつちだよ。一本道だ、二時間も歩けば頂上に着く。」

レオリオが謝罪するが、老婆は笑って激励を送る。ここでゴンが話し始める。

「…クラピカ。さつき、俺と同じくらいの子がその道を通ったんだけど…。」

「……そうか。おそらく叫ぶヒマもなく魔獣の犠牲になったんだろう。」

「あゝゝゝ、他にもオメエみてーな子供が来てたのかよ。…だが、これがハンター試験なんだらうな。」

ゴンが自前の視力で見えたものを話し、クラピカは考えを話す。レオリオは頭をガリガリと搔きながら前提を話す。ゴンは話題を変えることによつて暗い雰囲気になつたのを吹き飛ばす。

「ずっと、考えてただけどき。どうしても答えがでないんだ。」

それに二人は笑うが、ゴンは話す。

「でも、もし本当に大切な二人の内、どちらかしか選べない場面になつたらどうする?。」

ゴンの話二人は沈黙した。　　ゝゝ三人は『半分、正解』にたどり着いた。　　ゝゝ

正しく廃墟の町から二時間後。

レツは、人語を理解する、狼型の魔獣と出会った。

「ホオ。あの魔獣の群れを抜けてきたか。」

「君、喋れるの?」

「まあな。いつもならこんなところ居ないんだが、ナビゲーターつてやつでな。試験会場までの案内を任されてる。」

「なら、僕は?」

「よつぽど邪悪な奴なら、『裏試験』の本題に反するんだが、お前さん使えるだろ?」

「? 何が?」

「おっと、口を滑らしちまったな。まあここの課題に答えを出し、実力を示した。何か足りなかったら、俺が軽く戦う予定なんだが、その必要もなさそうだ。」

すると男は四本の手足を地面に付け、形態を変化させる。

「ほら乗りな。」

「わかったよ。」

どんどん裏道から山を下ってゆく。

「そういえば、僕より後の人は放つといて良いの?」

「ついさつきまで、もう何人が居たが、今から後じゃ突破しても、もう間に合わねエから



な。」

十十十

くくザバン市くく

狼型の魔獣は人型に戻り、町を歩く。

「ツバシ町の2ー5ー10はだなア… ここだな。」

「? ただの飯屋さん?」

「ああ。」

その答えにレツは首を傾げしばらく考える。

「うくくくん? ……暗号か!!」

「そうだ。ついでにいうならまさかここが応募者が数百万かつ、死亡率五割を超えとも言われる、ハンター試験の会場とは思わねエだろ?」

それを聞き、レツはなるほどと頷く。二人はその店に入っていく。

「いらつしえーい!! ご注文は\_\_\_\_\_?」

「ステーキ定食」

ピク「焼き方は?」

「弱火でじっくり」

「ちよつとそんな焼き方したら、肉が固くなるだけで… あ。これが暗号なのか。」

一連のやりとりに、レッツは苦言を呈しようとして気づいた。

「そういう事だ。あと、人差し指を立てるのもだな。」

「あいよ——」

「お客さん 奥の部屋どうぞ」

そして案内された部屋で、レッツは「円」を張ってみる。

「なるほど、地下に何かあるね。それに暗号を盗み聞きしただけじゃ通れないようにもしてる。」

「そこまで、理解するとはな。一万人に一人がここまでたどり着く倍率のカラクリはそこにあるんだよな。坊ちゃん、気に入ってたぜ。もう少し情報をくれてやる。お前さん新人だろ？ 三年に一人の確率でしか新人は合格できねえ。俺がいた場所からさらに上にいくと凶狸狐っていう魔獣が一本杉の根元に住んでる。落ちてもまた来年、案内してくれるはずだぜ。」

「ありがとう。」

レッツがハンター試験本会場に着くと港とは一味違う雰囲気を持つ者達があった。

「ようこそ、ハンター試験へ。はい、これがあなたの番号札になります。無くさないよう

に」

「…一応、聞くけど無くしたらどうなるの?」

「ハンター試験の受験資格が無くなるよ。」

緑色の顔をした豆みたいな小柄な男から、番号が書かれた丸いプレートを受け取ったレツは、質問してみるが、それに答えたのは茶髪で鼻がデカイ小柄の中年男だった。男は続ける。

「よお、新顔だね。君で、302番目だね。」

「?…君は?」

「ああ、俺はトンパ。よろしく。」

レツは一応、男を観察するが、胡散臭すぎである意味どう対応すればいいのかわからず、話を聞いてみる。

「俺、ハンター試験のベテランなんだ。」

「…となると君はハンター試験の情報屋とか裏試験官だったりする?」

レツはトンパに対して盛大な勘違い——いや、彼が行ってるのはそれと大差ないが——をする。

「ハンター試験の情報屋、か。間違っではないね。君たちのような新人に情報を話す訳だし。あと、裏試験官、なんてのは基本的にいないよ。」

「じゃあ、注目どころとか、危険人物とかは？」

「いいぞ。つとその前に、手持ちぶきたもなんだから、これでも飲みながら聞きなよ。」  
カシユ（うん。案の定、なんか薬はいってる。…僕には効かない、と思いたいけど分らないから放置。）

「どうした？飲まないのか？」

「いや、嗅いでみたけど、これ腐ってるでしょ。」

「そ、それはすまない。」

トンパは下剤ジユースをどうするかは分からないが、受け取った。そのままトンパは話し、レッツは質問をしまくり少しでも情報を多く集める。

「まず、注目どころとしては、103番、蛇使いバーボン。」

「あれって毒蛇？」

「その通りだ。あいつは執念深いから敵にまわすとやっかいだな。76番、武闘家チエリー。体術においては右に出るものはいなかったが、君と同じく初参加の294番、ハンゾー。忍つていう奴らしいがぶつちやけお喋りつてことしか分からねえ。」

「武器とか、薬も？」

「推測はそりやでできるが、確定してねーからな。次は、255番 レスラートードー。パワーはダントツで意外と頭もキレル。」

「他は?」

「そう急かすな。197〜199番、アモリ三兄弟。常に抜群のコンビネーションで好成績をあげてる。」

「各個撃破に弱い?」

「普通はそうだが、ソロでも十分強くてな。穴は198番のイモリか。あの中で一番小さいのな。性格がビビリだから、近接戦に持ち込めばいい。——と、今はこんなところ的实力はあるが、合格を逃した連中だな。」

レツは、かなりの情報量を握ってるを理解し、さらに質問する。

「毒、薬使いは?」

「ああ、53番 ポツクルと246番 ポンズとかだな。他にも〜〜」

そうトンパが話してるのを聞いてると、どこからか視線を感じる。「凝」を使ってあたりを見回すと、顔中に針を刺し、パンクロックとでもいうような男と、奇術師風の男が念能力者だということを理解できた。一通り説明が終わった、トンパに続けて質問する。トンパは顔を「ウゲツ」という風にしながらも答えてくれた。

「…301番は?」

ヒクツ「…アイツは、新人で同じく何も分からない。何だ?知り合いか? (もし、知り合いだったらヤベーな。俺の危機察知、回避能力も鈍ったか?)」

「ううん。知らない。…ただ強そうだなって。」

「そうか。(ホッ。そうだよな、知り合いじゃないよな。良かった鈍ってなかった!)」

「あと一人。44番は?」

「…アイツは奇術師、『ヒソカ』。去年〜〜」

トンパがヒソカの去年、行った悪行を話し続ける。レツはそれを聞き流してすらいないが。

——なぜなら

「……………もう一個。…あの人の使う武器って?」

「ああ。アイツは珍しくてな。まったくもってどうやったのか分からないが、『トランプ』を武器にするんだ。」

兄の仇なのだから

## ハンター試験編

## No. 6 / カタキ?ハ?ヒソカ

「…トンパさん、ありがとう。その情報、僕にとって値千金だよ。で、ここから離れて。」

「え、お、おう。」

（おや?これは…今年のハンター試験は始まってすらいないけど、いきなり楽しめそうだね♥）ニヤリ

トンパはさっさと離れてゆき睨まれていることを理解したヒソカは笑い、レッツは両手の人差し指に、トパーズの指輪を、中指にルビーの指輪をはめる。

——そして両者の徐々に高まるプレッシャーに他の受験生は離れてゆく。——

先に仕掛けにいったのはレッツ。一気に駆け出し、能力を発動させる。

（【色に染まる僕は人形／カラーチェンジマイドル】!! —— 【紅くなる灼熱／フレイムバースト】!!）

レツはルビーに付与された能力を行使することに決める。すると姿が赤い髪にサイドテール、周りの受験生からすればレツが女であることを知る。

レツは刀に手を添え、一気にヒソカの首を狙う。――だが、その剣速はまだまだ遅かった。ヒソカは抜刀されて、伸びた腕を蹴り上げ、がら空きになった腹に拳を叩き込む。

「ぐっ!」

(くくっ ◆ まだまだ実りたての果実つてところかな ♣)

(初撃ではやはり殺せない。なら――【透過する黄色の宝石剣／サンライトヴィジョン】!!)

今度は、金髪の髪に、両手には煌びやかな宝石剣が出現する。左手の剣で斬り払いを行うが、ヒソカは首をひねるだけでヒヨイと躲す。

「おっと ◆」

「くっ!!」

何度も斬りかかるがヒソカは遊びでヒヨイヒヨイと躲し続ける。一応具現化であることは見抜けるので、ヒソカは付与能力の分析を行っていた。

しかし、そもそもレツはヒソカを斬るためにも、透過する能力を使っていない。

ゆえに見つかるとは思えないのだが、確かめるためにも、躲した回数が増えようとい



う時、トランプに【周】と【凝】を行い剣にわざと罅迫り合いをする。

キンツ!! ギギギギギ

「何故、いきなりボクに斬りかかるんだい?」

「黙れ!!」

二人はそれぞれ手に持ったトランプと宝石剣で斬り合いを繰り広げる。勿論これが成立しているのは、ヒソカがレベルをかなり下げて合わせにいつてるからなのだが、レツは気づかない。ヒソカは更に挑発をする。

「ボクはキミから恨みを買うような真似をした覚えはないんだけどなあ……」  
 などとほざきレツはさらに激昂する。

「……兄さんを殺しておいて、覚えてないって? しかも兄さんの遺品を攫っておいて、どの口で……!」

この時点で、ヒソカは動機を理解することを諦めかけるが、『遺品』に違和感を感じ、もう一度考える。

(アア、ならボクは覚えてないね。殺した人なんて明日には忘れてるから——ん? ボクが物を攫う?)

レツは剣戟を繰り広げながら、もう一度「紅くなる灼熱／フレイムバースト」に戻して、トランプを燃やすことを試みる。

(やっぱりトランプは燃える!! ならこのままで!)

(こつちの能力は炎か◆ なら◆)

ヒソカは、3メートルほど距離を取ると一気にトランプをマシンガンのように投げつける。

「くっ! (手数が多くてこつちじや捌ききれない!)

レッは咄嗟に「透過する黄色の宝石剣/サンライトヴィジョン」に切り替えたが、その時には眼前に迫るトランプを、全身宝石化で受ける。

(能力の切り替え速度にタイムラグがあるね◆ 型通りに綺麗なことから実戦経験も少なそう◆)

レッの宝石化が解け、右に跳ぶ。ヒソカはそちらの方向に合わせて投げながら考える。レッは腕の宝石と剣で弾いていく。

(宝石の変化は、5秒が限界みたいだね◆ : 『遺品』かあ◆ ボクが蜘蛛だったことはほとんど知らないはず◆ さらにいうならボクはほとんどの呼び出しをすつぽかしてからの余計にね◆ しかし、この年にしてここまでの完成度——『蜘蛛』? ボクは殺していないけど、そう偽装して攫ったものはあるね♥)

ワンセットのトランプを投擲し終わったヒソカは真っ直ぐ向かってくるレッに能力の行使を決める。

〔伸縮自在の愛／バンジーガム〕！〕

（何か飛んできた!!）

その飛んでくるオーラを左に躲したレッツはその場からヒソカが消え、見逃す。

ヒソカは躲されたが、壁に張り付いた〔伸縮自在の愛／バンジーガム〕を発動させ、  
 【絶】で潜伏し、人ごみに紛れて、裏から回る。レッツはあたりを【凝】で見回す。

（うくん、ちゃんと【凝】はしてるね♥ これじゃ【隠】は意味がない♦ ひとまずは及第点つてところかな♥ 50〜60点といった『玩具』としても不十分だけど♣ そこは先に期待かな♦ さてと…）

ヒソカは素の身体能力も高く、それに合わせ一気に迫る。

（速い!!）

レッツは殴りかかるヒソカの右拳に剣をクロスガードするが、しつかり〔伸縮自在の愛／バンジーガム〕を剣に貼り付け、レッツの顎を左拳で打ち抜く。レッツは剣を振り抜くが、

〔伸縮自在の愛／バンジーガム〕♥ 発動！〕

!!? くっ！

ヒソカによって明後日の方向に剣先が向かう。そこから軌道修正しようとレッツは引つ張る。それが隙となり左手の〔伸縮自在の愛／バンジーガム〕でレッツは喉を掴まれる。ヒソカは実力の分析をし、レッツは能力を解除して足掻く。

ガシツ「カツ、ア……!!」

「ン~~~~(やつぱり経験が足りなそう♠ あと感情任せにボクの首ばかり優先的にも狙ってたね♣ 他にも念の技術にも課題が残る♣)」ギリギリ

ヒソカは推測した答え合わせをする。

「もしかしてだけど君の兄さんの名前はオモカゲかい？」

「…ツツ!!」

「当たり前だね♥ (なら相性の良い能力なのも納得いくね♦ おそらく他の蜘蛛が彼女を鍛えた♥ ホントは彼はもつと楽しめそうだから殺してないんだけどそれを知らないみたい♣) たしかにボクは君の兄さんの遺品を奪った♥ 今も大切に持ってるよ♦」

「…返せ!! 兄さんの遺品を!!」

ヒソカは変化系ゆえの虚実織り交ぜて、答える。

「それは無理かな♥ だって――」

さらにヒソカは、レッのみぞおちに右拳を叩き込みながら、より憎んでもらおうと画策する。

ドスツ「あつ…が…」

「キミは弱い♠」

「ぐっ…」

「コラコラ、弱いのにそんな目をする資格はないよ♣」ゴツ

「がっ…はっ…」

「くくっ♥ もつともつとボクを恨んで、憎んで強くなりなよ◆」

「…ツツ!!」

「せめてこれくらいは出来るようになってもらわないと♥」スツ

「え… ガツ!?!」

ヒソカはレッツから左手を離し、そのまま左肘鉄をレッツの首裏に入れ、床に叩きつけ頭を踏みつける。

「ホラホラ◆ それでも力を入れてるのかい？」

「くっ…うああああ!!」

なおこの時、ヒソカは「伸縮自在の愛／バンジーガム」を貼っていない。真実、筋力と念で抑えてるだけである。

「弱いねエ♠ キミ♣」

「ツツ…」

「そろそろ挑戦代をもらおうよ◆」ガシツ

ヒソカはレッツの首裏を掴み、再び持ち上げ、離す。そのままレッツのアバラを折りに、全力の【流】の蹴りを入れる。

ス： ベキイ「ゴフツ!!」メキバキベキゴキ ヒユン ズシャアアア

レッツはアバラが折れる音を聞きながら、エレベーターの左横まで吹き飛ばされる。その壁には僅かにヒビが入った。

ドガアン「ア：」ガクン

レッツは屈辱的なまでの煽りを受けたが、せめて【絶】を最後の気力で行い、気絶した。

＋十＋

ヒソカは自分を強く恨む彼女（レッツという名を知らない）を見つけた時点で自分の目的は叶ったようなもので、機嫌よく歩き分析する。

（んんん、今の感じは手応えバッチリだね ♣ 攻撃の【流】はともかく、防御の【流】がお粗末だね ♣）

そこに顔面や頭部に釘に近い太さの針を刺したモヒカンの男「先ほどレッツが【凝】で看破した301番の男」が酔狂にもヒソカに話しかける。

「ヒソカ、何やってんの？」

「イルミか♥ キミも受験かい？」

「そうだけど、ここには家出した弟も居たから、変装してるんだけど。呼ぶなら、ギタラクルで登録してるからそれで呼んで。で？ここから先も『使える』同士で戦ってもら

うのも困るんだけど?」

イルミ、この場ではギタラクルは淡々と自分の要求だけを棒読みで伝える。

ヒソカからすれば知ったことではないのだが、流石にもう一回ハンター試験にリトライするのはハッキリいつてめんどくさい。

「弟? …ああ、余波で目覚めるのを阻止したいんだね♥ でもボクは美味しくなるのが半ば確定してる未熟な果実にかぶりつく気はないから、彼女のほうに言つてよ◆」

「それが気絶したから話すことが出来ないんだけど? それはそうと彼女、あの歳でそこそこ使えるっばいけど何?」

「ボクの推測でいいなら♥」

「この際、それでいいから。」

「ボクが蜘蛛に入る際に殺した男の妹っばいね◆ 多分、彼女を鍛えたのも蜘蛛のメンバー♥」

「…蜘蛛? それはちよつと困るな… ヒソカが仲介とかは、」

「できると思ふのかい?」

「うん、無理だね。というか、個人的に同じ世界の人間と兄弟持ちとして、その子の兄にも興味あるから、接触するためにも第一印象は大事だね。」

そういう情報交換をし、二人は離れた。

十十十

384番の獵師の男が来た頃に、レッツは目覺めた。

「う……僕は……」

しばらく記憶を整理しようとしたが、咳き込み、血反吐を吐く。

「ガツ……ハツ……（アバラ、肋骨がそれなりに折れてる。……確実に見逃された。急所に近い一番から七番の真肋は無事。仮肋の八番から十番までが折れてる。）」「ピチャバチャ

レッツは癒しの技術の過程でそれなりに体の部位の知識は身につけてた。治し方と壊し方はある意味、表裏一体であるがゆえ、比較的知識を得るのは用意だった。

「ぐっ……（まったく歯が立たなかった……!!）」

今の過程では、勝負にすらなっていない。ヒソカは結局無傷であるので、それだけ『遊ばれた』ということでもある。

「とりあえず、今は【絶】の回復よりも時間がない。なら……」

レッツははめていた、ルビー・トパーズの指輪を外し、エメラルドの指輪をはめる。

〔癒しの碧玉／ホーリーヒーリング〕

そうレッツが念じると、ストレートロングの黄緑の髪になる。そのまま折れた肋骨を治癒してゆく。



「ふう… とりあえずは治ったかな。」

事を終えたレツは、指輪を外し腕を組み思考の海に潜る。

ヒソカの能力、「伸縮自在の愛／バンジーガム」を冷静に分析する。

(う〜ん。あのヒソカの能力は体験したところ、焼き切れるとはいえ、伸び縮みして張り付きもする。変化系であることは間違いない。あれは…バネ?紐?ゴム?石灰?糊?…あの時は、殴られた時も付けられる。ならガード不可プラス回避する方向も横かジャンプの上に縛られる。引いても飛ばされて終わる。…その横回避も得策とは言えないね。少なくとも何本かは同時に出せると見るべき。その投擲物か脚力と蹴りで追撃を食らいうる。ジャンプは放出系の「跳」がないと自滅になる。う〜ん)

楽観視はせず、いろいろ有り得る範囲を考えるが本質の『ゴム』は可能性として、『ガム』は想像できなかつた。次に対策を考える。

(能力対策は…何がある? まず、すでに実証された炎や斬撃、他にも水圧や風圧とか電気とかでも切れそうだけど、今は考えない。とりあえず、能力の切り替え速度が遅く感じた以上、それを特訓で上げるしかない。…他にはウボォー並みの筋力で大前提に引つ

張られないようにするとか？ 肝心のトランプはウボオーなら刺さらないか。…これも生まれ持った系統が強化系で成立する考えだろうから実現不可。

他には、作ろうと思ってた速くなる能力で貼り付けるヒマが無いようにする。）

次に「伸縮自在の愛／バンジーガム」対策を考えましたが三つほど出てきた。

今度はヒソカそのものに勝つ方法を考える。

（やっぱり、先生みたいな操作系の能力がいいかな？ クロロ兄さんかコル兄さんとかの能力複製とか？ 奪うこととか戦闘中に出来るように緩くして、一通り具現化は作ったから、補うような方法や能力も考えたいね。フラン兄さんとかでも有効だろうけど流石に真逆の放出系を全面に押し出しは不可。）

そういろいろ【発】として有効なのを考え続ける。

ちなみにレッツの「色に染まる僕は人形／カラーチェンジマイドール」には容量の限界の種類を調べるために作り出した指輪、サファイア・ダイヤモンド・アメジストがある。これら三つの指輪には何も作ってない、所謂、空っぽなので装着しても意味が無いのだ。

（うん。いろいろ考えたけど、ヒソカならまだ能力あるんだろうね。…とりあえずまとめよう。）

レッツがまとめたのは、以下の画用紙への書き出しに落ち着く。

張り付いて伸び縮みする能力。

※他にも持つてると思われるが、これだけでも応用性が高すぎる。  
対策

燃やす、切る、などの【発】

速度系の【発】

単純に筋力で綱引きに勝つ。

大元として接近戦と絡め手を行える。

拘束系は意味がなさそう。

操作する。

物量で押しつぶす。

(…致命的な弱点はなし。ホントに厄介で良く出来てるのが分かる。 …じっくり時間にかけて作るか。)

ここまで書き込み終えたところで、レツは画用紙をしまい人ごみに紛れる。  
プレートは400番台を配り始めていた。

ゴン達は、エレベーターが開き会場に降りる。

そこには船や港に居た人たちとは一味空気が違うもの達にレオリオは唾を飲み、クラピカは冷や汗を垂らす。三人が話して、ゴンが人数を気にしているとやはりトンパが『新人潰し』を行うため割り込む。

一連の会話の中、58番の男の悲鳴が響く。

「ぎゃあああ!!」

「アール不思議♥ 腕が消えちゃった◆ 種も仕掛けもございませぬ◆」

その現象にレオリオが慄いてると、トンパが情報を教える。

「な、なんだよ。あいつ……」

「アイツはこの中の受験生でダントツにアブないやつだ。44番 奇術師 ヒソカ 去年、合格確実と言われながら、気に入らない試験官を半殺しにして失格した奴だ。ゆえに恨みも相当買ってる。302番の兄を殺して、その受験生とドンパチになったが、まったく勝負にならなかった。」

「……………!! そんな〜」

レオリオがヒソカが受験できることについてトンパが当然とばかりに答える。

クラピカはその人物に共感を覚えた。

(…私と同じか、著しく近い目的で受けてる人物もいるのか。)

そこで凶狸狐の一件での動体視力を信頼し、ゴンに頼む。

「ゴン、出来たらでいいから、その302番を探し見つけてもらえないか?」

「?、ううよ。」

一連のトンパの話が終わり、下剤ジュースの流れになる。もちろんゴンが気づき、吐き出す。そしてクラピカとレオリオはそれを床に捨てる。トンパは謝ったあとそそくさと離れた。

そしてゴンは302番の受験生を見つける。

「クラピカ、いたけど…あの子、俺たちより先にクイズの道を歩いてたはずなんだ。」

「…それは、考え難いがな。」

++++

レツは腕を組み、「点」を行っていた。そこに話しかける少年が——「いわずもがなゴンである。」

ゴン、クラピカ、レオリオとレツは話す。

「ねエ、」

「ん?、何?」

「いや、この少年が、君もあのクイズに居たと言ってたな。」

「……ああ!! うん。僕もそこを通ったよ。」

「…君は、クイズに対して5秒間、沈黙したのか?」

「え?僕はノータイムで答えたけど? 『家族』が大事って。」

「となると魔獣が沢山出てくる道をくぐり抜けたのか?」

「それプラス、僕を囮にしようとした男が後から来たから、逆に囮になってもらって、僕のところに来た魔獣は撃退したよ。」

その説明に納得しかけるが、レオリオとクラピカが質問する。

「おい、マジか。それでここに来れるとはな。…これってどういうことだ?」

「あの道は正しい道ではなかったのではないのか?」

「そんなの僕に聞かれてもわかんないよ。」

「魔獣がいたはずの道を私たちの前であの道を通った男は逃げることさえかなわず死んだ。彼も決して弱くはなかったはずだ。それを君は通ったと…?」

「そういう事。」

「なら聞きたいんだが、ひよつとして俺たちでもあの道を通れたと思うか?」

「…じゃあ逆に質問するけど。あのヒソカに切られた受験生の腕はどこにいったか分か

る?」

「いや、わからねエな。」

「なら上を見上げてごらん。」

言われて三人は天井を見る。そこには両腕が奇妙なことに張り付いていた。

ゴンとレオリオは驚き口がふさがらなくなる。クラピカは一息ついて質問する。

「あの奇術の種を見抜ける位なら、通れたと?」

「そういう事。これは経験を積むしかないね。」

「そうか… 君も復讐の為にハンター試験を受けたのか?」

「君もか。…僕は正確には違う。家族から出された条件の一つにハンター試験の合格

があつて、たまたま復讐相手に遭遇したつだけ。」

ここでクラピカはさらに切り込む。クラピカは一族が滅亡したので、その相違点、真

の意味で傷を分かち合えるのか聞きたかった。

「失礼を承知で聞くが、兄がヒソカに殺されたといったが、まだ家族がいるのか?」

「今はね。…僕とは血が繋がってないけど。」

「そうか…君も一人になった事があるんだな。(…どこかホツとして居る自分が居る。自

分と同じ境遇の人物を見つけたからといって、安心していい理由にはならんだろうが

!!」

この答えにクラピカは、心の中で自分を叱責する。

レオリオは、暗くなった雰囲気吹き飛ばすため偽悪者らしく、家族について聞く。

「へー、……ねーちゃんとか居るのか？」

「居るよ。」

「美人なのか？」

「三人ともすごい美人だけど……」

「なんだ？ 何か問題でもあるのか？」

……やはり下心もあるのだろう。レッツの歯切れの悪さに、レオリオは不安になって尋ねるが、レッツは仕事に対しての気遣いの教育は皆無なので、その点ではなく。

「いや、兄さん達も皆、血が繋がってないから、単純に……君の名前は？」

「あ、そういや自己紹介してねえな。俺はレオリオ。」

「私はクラピカ。」

「俺はゴン！」

「僕はレッツ。それで続きだけど、兄さん達も顔はいいし、腕も強いからレオリオの勝率があるのかな？ っただけ。」

「ぐふう!!」

ということだった。これにレオリオは精神的ダメージを受ける。それでも可能性を求め、レッツに聞く。

「そ、それでも、もしかしたらってあるか？」



「いや、僕は姉さんじゃないから分からないよ。…でも兄さんの内、何人かはこのハンター試験に受かつてるから、これに合格できないくらい弱い人には靡かないと思うよ。」  
「おおおくくしゃア!! 絶対、受かつてやらア!!」

ここにレオリオの新たな合格目標が出来た瞬間であった。

…盗賊と医者（志望）はある意味、絶望的に合わないが、レオリオは医者の夢を言っていないし、レツも悪いことと自覚がないので、誰も訂正は入らなかった。

泡沫の夢を抱かされたレオリオ。いとあはれ。

ここで腕を組んで悩んでいたゴンは話す。

「結局、あのクイズって答えを出すとより早く会場にたどり着けるってだけなのかな？」

これにクラピカが答える。

「あの時、あの人は『安全』な道といった。つまり『危険だが近い道』か、『安全な回り道』か、ということなのだろう。」

「それでもあのクイズがどう影響するのか、わからんな。」

レオリオはそう言い、四人はあのクイズの真の意図と道の長さが結局、わからず首をひねる。

——ジリリリリリリリリ!

そこにベルの音が鳴り響く。

「只今をもって、受付時間を終了いたします。」

——では、これよりハンター試験を開始いたします——

## No. 7 / シケン?ノ?ハジマリ

——では、これよりハンター試験を開始いたします——

そう紳士風の人は、浮き上がり話す。

「こちらへどうぞ。」

これにレツは「凝」を行いながら考察を行っていた。

(いよいよ、ハンター試験が始まる。…もし落ちたら大目玉を兄さん達から喰らう。…あの試験官、念能力者だね。あの浮く瞬間からすると、「練」で威圧することも無く、「跳」を使つてた。少なくとも、今の僕より強いのは確定。)

紳士風の男の試験官は、ハンター試験に参加するにあたっての注意事項や受験者同士の争いなども止めない事を伝える。

「承知しました。第一次試験、”386”名 全員参加ですね。」

この試験官の言葉に、レオリオは疑問に思い、話しだす。

「ん?ゴンのプレートが405番目だよな? でも帰った奴なんて居ねーのに。どういうことだ?」

「おそらく、先ほど戦った人物が居たと、トンパという者が話していただろう。」

「あくく、僕とヒソカの戦いに腰を抜かして逃げ帰ったってことだね。」

この疑問にクラピカが答え、レツもそれを認める。

レオリオは先のヒソカの奇術などでレツに対して怯えの目で見ると、

「レツ、ホントにヒソカと戦ってたのかよ…。」

「うん。でもまったく敵わなかったよ。」

「…怪我とかはしてねエのか？」

「今は特にないよ。」

「それならいいけどよ…。」

このレツの回答に怯えを解き、二人は会話していると、クラピカが割り込む。

「…二人共、何かおかしいぞ。」

「? そういや、何か周りの人が、というか皆だな。急いでねエーか?」

このレオリオの疑問にクラピカとゴンが答え、四人も走る。

試験官は自己紹介を行う。名をサトツと言った。

この発言にレツは、クロロから膨大な量の書籍を読まされた中に、彼の名前の論文も

有ったので、三人に教える。

「…あのサトツって試験官。知ってると思う。」

「それは有難いな。彼はどのような人物なのだ?」

「地域別アツセンブリッジ分類を提唱する論文を発表した学者タイプハンターのはず。……こんな体力勝負の試験は本来、彼にとつて向かないと思う。」

「何イ!? 冗談はよせよ。あの試験官にとつて不得意分野だとオ!!?」

クラピカが相槌を一回入れ、レツからもたらされた情報に、レオリオは大声で驚愕する。

当然、この大声は前方を走る受験生の耳にも届き、彼らも驚愕し思うことは一つ。

——このペースで『歩く』のが、不得意分野で成せる技か!!? ——

サトツは先導しながら、耳に入るそれに嬉しく思いながら、一次試験の説明をする。

「くく。二次試験会場まで私に着いてくること。これが一次試験でございます。……」  
 の中に私の事を知ってる者がいたようなので、改めて自己紹介します。私はサトツ。専門分野は、遺跡ハンターでもありますが、論文発表など学者ハンターでもあります。そういう意味では、確かに私の不得意分野でございます。

脱線しましたが……」

受験生の『同名の別人であつてくれ!!』という願望を何故か押し折りながら、続く説明をする。

「この説明に四人は会話する。

「なるほどな……………」

「変なテストだね。」

「さしずめ持久力試験ってどこか。」

「その試しプラス、ゴールが分からないっていう、精神負荷をかけてるんだと思う。」

「やはりレッツもそう思うか。」

「あ、クラピカも?」

「ここまで話していると、新たな少年がスケボーに乗りながら、四人を抜かす。レオリオが喚いたりとしているが、レッツは全く別の事を考えていた。

(…:そうか、あの手の物を具現化しても良いのか。確かに速くなるものの一つだね。あのスケボーは足で床を蹴ることにより成り立ってる。……………ん? ちょっと待てよ。自ら漕ぐのは論外だからもつと別の物になるだろうけど、いずれにしても放出系による真逆の系統が必要になるかな?なるよね?…:ダメだ。)

と、そこまで考えてるとスケボー少年が話しかけてきた。

「ねエ 君達。年いくつ?」

「もうすぐ12歳!」

「僕も同じ!」

(同い年…ね。)

「?。」

「やっぱ、俺も走ろつと。」

そう言ううとスケボーを脇に抱え、一緒に走り出す。

「オレ キルア」

「俺はゴン！」

「僕はレッツ。」

「オッサンの名前は？」

「オッサ… これでもお前らと同じ10代なんだぞ!! 俺はよ!!」

「うそお!」

「あー!! ホントにお前らはヒデエーな!! 少しはタメのレッツを見習わんかい!」

三人は驚きなどもあつたが、レッツは驚くことなく、走っている。少しばかり止まってしまった三人は、急いで追いつく。

「レッツはあのガキンチョどもと違っていい子だな。姉さんの教育がさぞ素晴らしいんだらうよ。」

「?。」

レオリオは感激しながら姉さんのみを褒める。実際のところは、クロロやシャルナー

クなど、兄さんが『躰』たもの（パクノダのマナー教育は、今回のケースにおいて異なる。）なので、レツ本人には何を言いたいのか伝わらない。そこにキルアが話しかける。「ウツツ、マジで？ このオツサンが本気で未成年に見えるつてのかわよ？」

「まだ言うか、コイツ!!」

その質問に対して、レツは答える。

「僕の兄さんや姉さんは、成人してるのにそうとは見えないからね。なら逆タイプの人物が居ることも想像が付くから驚かないだけ。」

ナチュラルにレオリオがオツサンに見えることは否定せず、その内訳を話す。

実際、クロロ・シヤルナーク・マチあたりはともそうとは見えない。

その事実キルアがツツコミを入れる。

「いや、それ否定してねーじゃん。」

「マジかよ！ レツは味方だと思ってたのに…」

レオリオはかなりガチ目に凹んだ。

〳〳二時間半後〳〳

レオリオは脱落しかけていた。少しだけダウンするのが早まっているのは、先精神ダメージによるもの。



気を持ちようで、体力やテンションは変わるものということだ。

心根が良いゴンが呼びかける。

「レオリオ!!」

「ほつとけよ。遊びじゃないんだぜ。」

「そう思う。今なら命の危険が無いから、言葉通り、引き返せるし。」

キルアは冷たく突き放し、レツは山道の実体験もあつて優しく突き放す。

それらの言葉に反発したのか、ゴンはある意味、残酷な発破をかける。

「レオリオ!! こんなところで諦めるとレツの姉さんは靡かないって言つてたの忘れたの〜!」

その言葉にレオリオの耳はピクリと動く。

「上等よ……。絶対にハンターになって、男としても格を上げるんじゃない〜!!!」

そう言い、レオリオはウオオオオオと叫びながら走り出し、クラピカをも抜かす。

：レオリオはどこまで踊らせられるのだろうか？

いつかはその想いを裏切られる真実を知っていたら涙を禁じ得ない。レツとゴンは知らず知らずの内に、こんな残酷で間抜けなレオリオ人形劇なんて演じてることになる。

レオリオのカバンはそこに置いていかれたが、ゴンが釣り竿を振り、拾って背負う。その技にキルアが話す。

「おー かつこいいー 後で俺にもやらせてよ。」

「スケボー貸してくれたらね。そういえばレツはこういうのなの？」

「レツはあるだろ。見てたぜ、ヒソカに斬りかかった時に、ウチのクソ兄貴とは全く違う形で変身してたの。」

「ああ、これのこと？」

そう言うのと、レツはトパーズの指輪をはめて能力を発動させる。

この現象に、ゴンはまた驚く。

「わっ！ ……女の子だったんだね。」

「まあ、一人で受験するにあたって、男装しといたほうが良いと思って。それに僕にも技術はあるよ。付いてこれる？」

そう言うのと、レツは能力を解除して、一旦立ち止まり、その場で二〜三回ジャンプすると、駆け出す。

そのまま、レツは平然と壁を走り始める。フィックスに仕込まれた、旅団員なら誰でもできるフリーランニングの一つ、《壁走り》である。

「うわーすごいね!!」

「そんなこともできるのかよ。ほら、ゴン！ 急ぐぞ！」

ゴンは驚くがキルアはそうでもない。まあ、キルアもやろうと思えば出来るからだ。二人は少年らしく、負けまいと駆け出した。

~~~~~ 80 ~~~~ キロメートル地点、通過。脱落者 未だゼロ名。~~~~~

その頃には、《壁走り》を続ける意味もないので、レツは地面に足を付け、一緒に走っていた。

さらに走っていると様々な言葉が聞こえてくる。

「!! 見ろよ」

「おいおい」

「マジかこりゃ」

そこにはとてつもなく長い階段があった。レツは階段の長さについて推測する。

(少なくとも、地下100階までエレベーターで降りた分は、登るっていうことか。：特に問題なさそう。)

そこにサトツは絶望的な宣言と自分を知っている者が居たのは、やはり嬉しく少しばかりリップサービスもする。

「さて、ちよつとペースを上げますよ。それと、この階段までが命の危機がない、最終的な引き返し地点でもございます。改めて、それでも良いという者のみ付いてきてくださいね。」

この話も二段飛ばしで歩いたままなのだが、そのサービスに体力切れが近いと冷静に判断した者たちが、階段の前で足を止める。登る者達は、改めて『不得意分野とか、ウソだ!!』と強く思う。

しばらく走り続け、段々と脱落者が増えていく。

くくく中間地点、脱落者は88名にも上ぼり、残りの受験生の数は300を切ったくくく

三人は走り続けていると、サトツの側まで来ていた。ここでゴンは話し出す。

「いつの間にか、前に来ちゃったね。」

「うん、だってペース遅いもん。：不得意分野って言うんだから仕方ないんだろうけどさー。」

「いや、サトツさんは本気だしてないよ?」

「それは分かるけどさー。」

キルアが愚痴を言い、レツはサトツの実力を見誤っているのかと思ひ、発言する。キルアは当然、気付いており発言を続ける。

「というか、レッツだって汗一つかいてねエーじゃん。ちよつと意外。」

「そう? でも、これだと逆に疲れちゃうよねー。」

「そうなんだよなー。」

ゴンでさえ薄らと汗をかいているのに、キルアとレッツは汗をかいていないのだ。その現象をゴンは驚愕と尊敬の眼差しで見る。

続けてキルアは発言し、レッツが流石に注意する。

「結構、ハンター試験も楽勝かもなー。つまんねエーの。」

「ちよつとキルア、後ろの人たち見てそれ言えるの?」

「アレは論外。シヨボすぎんだろ、あいつら。」

「まあ、そうなんだけどさ。」

続けて言われたキルアの発言に、レッツは同意してしまうあたり、注意した意味とは……?
?

ずっと沈黙していたゴンは受験動機を聞く。

「キルアは何で、ハンターになりたいの?」

「オレ? 別にハンターなんてなりたくないよ。ただものすごく難関って言われてるから、面白そうだなーってだけ。二人は?」

「あ、そっか。あの時、キルアはいなかったね。僕は家族から出された条件を達成できる

かな、って勧められたのがハンター試験ってだけ。」

「オレは、親父がハンターをやってるんだ。親父みたいなハンターになるのが夢だよ。」

「そういえば、条件を出した兄さんもハンターだったけど、なろうとは思わないかな。」

「二人共、家族関係か。いいな。二人の家族ってどんなハンター？」

「分からない！」

キルアとレツの二人はその発言に笑う。ゴンの独白が続く。

「……思ったんだ。オレも親父みたいなハンターになりたいって。」

「!!」

「見ろ 出口だ!!」

後続の受験生が次々とくる間にゴンはレツに聞く。

「オレは話し終わったよ。レツの兄さんは？」

「正直、先生には悪いけど、便利屋と中間職っていう板挟みになってる印象だからね。ラ

イセンスが便利なだけで、アレがハンターの基本ではないと思うんだけどね。」

「ライセンスの特権って、いろいろあるらしいしな。」

レツの答えにキルアが発言する。

「ここまで話し終わったところで、シャッターが下り始める。」

サトツはこの湿原について説明を始める。

「くくくゆえんです。騙されることのないよう注意深くしつかりと私のあとをついて来て下さいね。」

これを聞いてる間、レツは思う。

(…僕達の家族には嘘つきのプロがいるからなく。それを上回るのかな?)

シャルナークのさらつと冷や汗一つかかない嘘も見事だが、クロロの爽やか青年モードなんて一周回ってムカつくレベルの見事などを、なんだかんだで味わってきたレツからすれば、これも難易度を疑問視するものだった。

そこに大声が響く。

「ウソだ!! そいつはウソをついている!!」

その男の出現と主張に、レオリオを含めた数人の受験生が疑い始める。それを理解したクラピカは冷静に三人、というよりは試験官・サトツの事を知ってたレツに向かう。

「偽者!! どういうことだ!!」

「レオリオ、来い!」

「何だよ!」

そうして一旦、五人は合流し、クラピカが話し出す。

「レツ、あのサトツとかいう試験官は、本物か?」

「うん。写真通りの姿だよ。だから、あっちが本物。(一応、【凝】して、【纏】してるの

がサトツさんの方だと、理解できたしね。」

この発言にレオリオは安堵し、クラピカは一厘ほどの可能性を疑う。

「そうか。ならそつちが本物だな。」

「…たまたま写真通りの姿の可能性があるが、そこはどうなのだ？」

この疑問にキルアが答える。

「いや、あつちの方が遥かに弱いから考えにくいぜ。」

ここで男の一方的な話は終わった。

「~~~~にする気だぞ!!」

そこにトランプが飛んでくる。

男の方は顔に刺さり、サトツの方は受け止める。

「くつく ♣ なるほどなるほど ♣」

死んだふりをした猿も逃げ出そうとしたが、トドメを刺される。

「……………」

「おやおや、そんなに睨まなくてもいいじゃないか♥」

トドメのトランプを投げたのはレッツだった。先ほど、ついだとばかりにヒソカから投げつけられたトランプを使ったのだ。

レッツはついさつき、徹底的に打ちのめされたので、【練】のような無駄にオーラは出し

ていないが、それでも空気が冷える。一連の出来事を知ってる受験生からすれば、また戦うのかと警戒する。…何人かは武器も構え始め、レツが攻撃を仕掛けたら、一斉に向かうつもりのようなだ。やはりヒソカは排除しておくに越したことはないからである。ここでサトツが注意喚起をする。

「44番。次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆行為とみなして、即失格とします。よろしいですね。」

「はいはい◆」

そこに鳥などが来て、再びサトツが説明する。レオリオは引きながらも発言する。

「……自然の掟とはいえ、えぐいもんだぜ。…そういや、レツ大丈夫なのか?」

「ああ、あのトランプね。うん、平気。」

「…あの猿にトランプを刺せるのは君もできるのか。」

レツは返事をし、クラピカが事実確認をする。その技にゴンとキルアは興味を持つ。

「あれ、どうやったの!!?」

「ホントにな。…まだまだ隠し持ってんだろーな。」

「? 別にこれは鍛えれば誰でもできるでしょ。」

「マジかよ。俺ん家も結構スパルタだけど、あんな真似はできねーぞ。」

その疑問にレツは答え、キルアはふてくされる。たしかに【周】は誰でもできるが、こ

の場においては原理不明の攻撃なのだ。

「くくありませんか？ それではまいりましょうか、二次試験会場へ。」

—— 一次試験、後半戦。ヌメーレ湿原へ突入。残り受験生、295名。——

No. 8 / オトウト?ト?イモウト

ヌメーレ湿原に入る受験者たち。その地面はぬかるみが酷く、体力をさらに奪ってゆく。

しばらく走っていると、濃霧が立ち込めてきた。五人で集まってはいたが、やはり体力差で別れる。

レッツとゴンとキルアは走っていると、レッツが眉間に皺を寄せる。それをゴンは気にし、話しかける。

「レッツ?どうしたの? …そんなに霧とかぬかるみが嫌い?」

「それもあるけど、二人共、もつと前に行こう。」

「? … まあ、試験官を見失うといけないもんね。」

そう話しているとキルアが正確に察知していて話に加わる。

「レッツが本当に気にしてるのは違うだろ。——ヒソカから離れたほうがいいってことだろ?」

ハア「…やっぱり分かつちやうか。」

「ああ、あいつ、殺しをしたくてウズウズしてるよな。」

「しかも絶好の濃霧っていう環境だもんね。」

「ああ。殺りたい放題できる。」

二人がそんな会話を交わしていると、ゴンは呆気にとられた眼差しを向けていた。

「なんでそんなこと分かるのっていう表情してるね。なぜならオレも同類だから。臭いでわかるのさ。」

「同類……？ あいつと？ そんな風には見えないよ。」

「僕も分からないな。」

そういう会話をしていると、レツの発言にキルアは目を軽く見開く。

「……いや、レツは分かるだろ。現に気づいているし。」

「僕がゴンに同意してるのは『同類』ってところ。キルアは戦闘狂ではないでしょ。」

「そういう意味か。それはそうなんだが。」

「『同類』。この言葉にキルアは闇社会の人間として、レツは快樂を得るための戦闘狂として、の認識の齟齬があった。」

そしてその後、後方のレオリオたちに向けたゴンの暢気な対応に毒気を抜かれつつも、湿原の霧はどんどん濃くなっていく。湿原の動植物たちの餌食になってどんどん減っていく受験者たちの存在を知りながらも、サトツについてゆく。

更に数分後、後方集団が別の所へ誘導されて逸れてしまった事が判明し、ゴンが心配

そうに振り返るのを、キルアが諫める。

「つてえ——!」

「レオリオ!!」

「ゴン!」

二人が呼び止めるが、ゴンはあつという間に霧の向こうに走って行ってしまった。

レッツはゴンの方向に部分的に伸ばした【円】を張る。その方向を確認し、キルアに話しかける。

「……ヒソカが居るっぽい方向に行つたから、見逃されれば戻って来れると思う。」

「いや、ヒソカの方向にか!!? それって逆にヤベーだろ。」

「でも一番、というか戻ってこれる可能性ってそれぐらいだと思う。」

「なんでそんな事わかんだよ。」

「ヒソカが受験生とか動物に殺られるか、試験に脱落する可能性ってあると思うの?」

「うん、流石にそれはねエな。」

「でしょ?」

ゴンが戻ってこれる可能性があることに、気休め程度には安心する。

しばらく走っていて、ずっと気になってた事をトーンを下げてレッツは聞く。

「…キルアは、さ。」

「……なんだよ？」

「“クソ兄貴”って言ってたけど、『家族』のことをどう思っているの？」

「……なんでもいいだろ。」

その質問に対して、キルアは目を逸らす。レツは改めて聞く。

「正直に答えて。僕はキルアの兄さんじゃないから本当の事はわからない。本当に嫌いで憎んでるなら仕方ないと思う。でも僕と同じ轍を踏んで欲しくないから、聞いてる。」

「……そうか。レツの兄貴はヒソカに……。」

「うん。殺されて遺品も攫ったって認めた。だからもつと話しておけば良かったって後悔している。」

「……レツは兄貴のことが本当に好きだったんだな。」

「……今でこそ、そうと言えるけど。生きてる時には分からなかったよ。分かった時にはもう遅かった。」

「……………」

キルアは沈黙し、『家族』の事をどう思っているかを考える。

長兄の事は家族で一番苦手だったし、次兄を刺してまで家出した。

自分を大切にしてくれていることはわかっている。確かに笑いあつた思い出もあつたから。

ハンターになつたら『家族』を「いい金になるから」などと考えて、とつ捕まえようかなとぼんやり考えていた。

本当にあの“集合写真”を破くのは『金』などと引換になるのか? 場所次第では、数億を簡単に稼げる所を知つていて、アレと本当に等価か?

それはすなわち『家族』と敵対する上、今までの思い出は『金』以下である、と認めうるということでもある。

そうなつた時、自分は戦えるかどうかが全く分からなかつた。

そこでキルアは同じ闇社会に生きていると、何となく感じ、だがほぼ確定だろうと思つているレッツに聞く。

「……レッツはさ。ハンターになつて今の家族と敵対しうる未来があることについてどう思つてるんだ?」

あの場には居なかつたレッツはクイズの『半分、正解』の答えを理解する。

「(…:そうか、あのクイズの意図は、そういう意味だったのか…) …:先延ばしにするよ。……:試験会場に来る前にさ。老婆が出てきて言つたんだ。『友達』と『家族』どちらをとるのかつて。僕は『友達』がいなかつたし、よくわからないから即答して『危険だが短い道』を通つてきた。……:沈黙すると、『安全だが回り道をする』つてのもあつてさ。そういう事なんだなつて。」

「…何だよ？ そのクイズ、とんでもなく意地悪くねエーか？」
「僕もそう思う。…でも大事なことだと思う。」

ちやうど話を切り上げた所で湿原を抜けることに成功する。

「みなさん、お疲れ様です。無事湿原を抜けました。ここピスカ森林公園が二次試験会場となります。では、私はこれで、健闘を祈ります。」

そういい、サトツは離れてゆく。

しばらく悩んでいたキルアはレツの答えに同調し、その答えを伝えることにした。

「うん…。やっぱり兄貴達の事は、嫌いとか、憎んではと言えない。でもレツほどはつきり好きとは言えない。正確な答えは出せない。だからオレも先延ばしにするよ。」

「それでいいと思うよ。好きや嫌いが100%に傾くのもおかしい話だからね。」

「…………おう。」

そこまで話した所で、キルアはゴンを待つことにし、レツは気絶してるレオリオの治療に向かった。

「……………」

この一連の会話をギタラクルは耳に【凝】を行って聴いていた。一時はレツがキルアに接触するのでどう引き離すか考えていたのだが、せめて悪意の【練】をいきなりぶつ

けるのはやめることを心に決めた。

十十十

ほんの少しして、ゴンとクラピカは合流した。

「レオリオ!!」

「うむ、腕の傷以外は無事のようなな。」

「てめ…」

「ここまで話した所で左手にエメラルドの指輪をはめたレッツがくる。

「レオリオ、少しだけ治療するよ。」

「レッツ!」

「…顔と腕の傷だけ? 骨とかは大丈夫?」

「お、おう。とりあえずは、それだけだぜ。」

「よし、始めるよ。」

そして「癒しの碧玉／ホーリーヒーリング」を行使して、頬と腕を治してゆく。

それを体験しているレオリオは勿論、ゴンとクラピカも驚く。

「ふう、一通り終わったよ。…ゴンとクラピカは? どこも怪我ない?」

「うん。俺はない。」

「私もだ。 ……そうか、試験開始前にどちらも無傷だったのは、」

「うん。僕は、肋骨折られたけどそれを治した。」

レツの懸念にゴンは答え、クラピカは試験前に戦ったという割には不思議な結果に納得する。

実際に味わったレオリオはその場で頼み込む。

「頼む!! その癒しの力を俺に教えてくれ!!」

ビクツ「…いきなりどうしたの?」

レオリオの唐突な反応にレツは疑問を持つ。

これにレオリオの夢と願いを伝えられ、クラピカは先ほどの实例を話す。

「…俺の夢は、「金なんかいらねえ」って言うる医者になることだな。——今、俺に使ってくれたその力を俺が手に入れる事が出来たら、俺は多くの人を救う事が出来ると思っただ。外傷が原因で死ぬ人間は事欠かない。大きな怪我を負って病院に運ばれても、出血が多すぎて輸血が間に合わず傷を縫合する前に死んでしまうなんて幾らでもある事例だからな。」

「…実際、ヒソカに切られた人の中には致命傷を負っても生きていた者はいたな。」

それにレツは【念】のことを秘密にした上で、様々な事情を答える。

「僕の力は病気や呪いには効果がないよ?」

「それでも良い!!」

「…確かにこれは、いざという時には止血して、命を伸ばす事も出来るけど、この力はこの指輪に備わった力だね。家族からのお守りでもあるんだ。…それにこれは10時間分しか持たない。今の残量は9時間弱しか使えないよ。」

「……そうか。使いきりのタイプか。…やっぱりそうウまい話はねエーか。」

暗くなった雰囲気を吹き飛ばすためにゴンが話を変えると、その質問にはキルアが答える。

「ところで、なんでみんな、建物の外にいるのかな。」

「中に入れないんだよ。」

「キルア!」

「よ」

この場に来れた事に、キルアとレツは聞く。

「どんなマジック使ったんだ? 絶対もう戻ってこれないと思っただぜ。」

「そういえば、ヒソカとバラバラに来たってことは、あいつに案内されたわけじゃないんだね。」

その疑問にゴンは『香水の匂いを辿った』ことを伝える。

それを聞いて、レツは試す。

(…鼻に「凝」すればいけるかな? …ぐ、ダメだ、汗臭すぎる!!! その上で香水の匂いを嗅ぎ分けるってどんな技……………)

「で、なんで中に入れないの?」

そこで扉の前の字を読むと、

—— 本日 正午 二次試験スタート ——

と、書いてあった。

キルアは続ける。

「変なうなり声はするけど、全然出てくる気配はないし、まあ待つしかないんだろうな。」

＋＋＋

しばらくして、11時55分になった。

「もうすぐだね。」

「うん。」

「そうだね。(「円」! …人が二人居るね。大丈夫そう。)」

ゴンの言葉にキルアは答え、レツも返事し、しっかりと「円」で危険性を調べる。

そして正午になり、門は開く。そこには椅子に座る女と、大柄な体格の男が後ろにいた。

…うなり声は男の腹から出てきた音のようだ。

「ようこそ。一次試験を通過した受験者の諸君。アタシが二次試験“後半”の試験官、メンチよ。」

「同じく“前半”を担当する、ブハラ。」

「どお? お腹は大分すいてきた?」

「聞いている通り もーペコペコだよ。」

「そんなわけで二次試験は『料理』よ!! 美食ハンターのあたし達、2人を満足させる食事を用意して頂戴。」

二人は試験概要を説明していき、その内に受験生から失笑がこぼれる。

それを横目にクラピカは一応、試験官の情報を集めるためにレッツに聞く。

「あの、メンチとブハラという者は、どんな人物なのだ?」

「二人共、美食ハンターっていう分野だから、得意分野だね。…ただ…」

レッツは答えるが言い淀む。それにレオリオも聞く。

「なんだ? なんか難しい点でもあるのか?」

「うーん、ブハラさんの方はともかく、メンチさんの方が不安。」

「なんだよ? そんなスゲーねーちゃんなのか?」

「うん、21歳の若さにして、食文化への貢献が認められて一ツ星の称号持ち。若さも加

味すると、上から数えたほうが確実に速いくらいには、優秀な人物。」

「俺と二つしか違わねーのにか…。」

「…つまり前半はともかく、後半が凄まじい難易度の可能性があるということか。」

レツの情報にレオリオは感嘆の言葉を吐き、クラピカも唾を飲む。レツは続ける。

「でも、一次試験の事を考えると、前半も決して楽ではないと思う。…50人残ればいい方かなあ？」

「そうだな、料理なんて作った事ねえーぜ。」

「こんな試験もあるとはな。」

…ここまで話したところで、説明も終わり、ブハラは課題を出す。

「オレのメニューは、『豚の丸焼き』!! オレの大好物」

その発言にレツは脱力するが、気を引き締める。

(そんな簡単な試験でいいの? …いや、美食なんだから、適切な解体方法とか? …それは考えにくいな。 …となると…『種類は自由』つてのが、難しいんだろうな。)

「それじゃ、二次試験・前半スタート!!」

十十十

五人は会話をしながら豚を探す。

「いやー正直、ほっとしたぜ!! 簡単な料理だよ。」

「豚、捕まえて焼くだけでもんね。」

「しかし、早くつかまえねばな。」

「〃兄貴〃みたいなデブとはいえ、限界あるだろーしな。」

「…限界があるってことはさ」

レッツが話してる最中に五人は、『グレイトスタンプ』を見つけた。

「その限界まで豚を始末できないってことだよな。」

「おい……骨、食ってんぞ?」

「まさか……肉食!?!」

五人はグレイトスタンプに見つかり、鼻息をブオオオオ!!と荒らしながら突撃してくる。

ドドドドド 「うわぁー!!!」

その突撃の轟音に気づいた他の受験生も集まる。

だが逃げ遅れたものは弾き飛ばされてゆく。

戦える受験生は、大岩をぶついたり得物をぶつけるが、硬く頑丈な鼻にぶつかり意味を成さない。

レッツは木の実をもぎ取り、【周】してぶつけるが、それでも数秒止まるくらいにしか

らない。

(豚なのに!!【周】しても耐えて、再び突撃するなんて!)

レツは内心、愚痴りながら足に【凝】してジャンプする。

その高度からあたりを見回すと、ゴンのところに向かった豚が木に衝突し、木の実が額にあたり弱つてるようだった。

そこに向かうと、ちょうどゴンが釣り竿で額を強打して豚を仕留めた。

「なるほどー!」

「こいつら、どうやら額が弱点のようだぜ。」

「巨大で硬い鼻は、脆い額をガードするための進化という訳だ。」

「そういうことだね。」

そして各々、得意な方法で額を強打し、仕留めてゆく。

(ついさつき、ジャンプした時、向こうにも大量の豚がいたな…【周】が効かなかったか
らもしかしたら程度にはヒソカに効くかな? 系統の強化率の違いなんだろうけど。

…足に【流】をしてつと。

~~~~~

(おや? まだ向かってくるのかい ◆ まだまだ実力の差を \_\_\_\_\_ …通り過ぎていった

な ◆ …この音は……?)



レツが再び自分に向かつてきたかと思えば、何事もなく、通り過ぎていったので、訝しげな表情をするヒソカ。その後大量のグレイトスタンプが向かつてきていた。

(あの程度の豚から逃げて居たのかい? だとすれば期待違い)

自分の点数査定よりもレツの実力が下か、と思ひ失望し、トランプに【周】をして投擲する。流石に練度と変化系の分の強化率の違いで、十数秒止める事に成功する。

一匹ならそれでいいが、レツが連れてきたのは群れを成して突撃する。

(なるほど ♣ 一匹自体はそんな強くないけど、数が厄介だな ◆ : 地道に一匹ずつ始

末していくしかないな : ♠ : あのコは、ボクの周りを距離をとりながら伺つてる ◆

なるほど ♥ この数をぶつけて、あわよくばボクが倒される事に期待しつつ、ダメでも

更にボクの能力の情報を得ようって考えだね ♥ : 【周】を弾くから確かに部分的には

厄介かな ♣)

勿論、豚ごときにヒソカが殺られるはずもなく、始末してゆき、最後の二匹を倒す頃には、

( ♣ もうこの場からは居ないね ◆ )

レツは居なかった。

ドドドドドドド「!？」

その大量な人と豚の数にブハラは驚く。

「うひゃあ〜〜」

「あらま、大量なこと。受験生舐めてたわ」

そしてブハラは物凄いペースで豚を消化してゆく。

そして全く勢い劣ることなく食べ続け、なんと用意された豚の丸焼き70頭を全て食べ切った。

「あゝ、食った食った。もうお腹いっぱい」

メンチがいつの間にか横に置いていた銅鑼をおもいつき叩く。

「しゅくりよ〜!」

ここでメンチはブハラに少し試験にならないことを怒る。

その摩訶不思議な現象を三人は話す。

「やっぱりハンターってすごい人達ばかりなんだね。」

「ああはなりたくないけどな。」

「本当に美食ハンターなのかな? (胃袋の体積を比較すると、絶対に入らないよね? …操作系か放出系の【発】かな?)」

クラピカはその現象に真剣に悩み、レオリオは突っ込む。

「二次試験前半、〃豚の丸焼き料理〃審査! 70名が通過!!」

そして凄まじい難易度であることを予測した二次試験後半に挑む――

## No. 9 / アコガレ?ノ?センダツ

二次試験”後半”、メンチの試験。

(メンチさんの試験…!! どんな内容なんだろう…!?)

レツはどこか高揚感に包まれていた。というのも、レツは綺麗な物が好きで、様々な技量や【念】の『核』の一つでもある程度には、好きなのだ。勿論それは、料理にも当てはまる。そんな中で、一流の”美食”一ツ星ハンターの試験なのだ。

メンチの事を歳や実績といった情報に、それなりに詳しくあったのはそのためである。そんな彼女に料理で審査されるのは、またとない機会であろう。

メンチの試験内容が告げられる。

「アタシは、ブハラと違って、カラ党よ!! 審査もキビシクいくわよー。 二次試験”後半”、アタシのメニューは『スシ』よ!!」

(《スシ…!!? スシとは…!!?》)

その言葉を聞いた、他の受験生たちは、”スシ”という語感そのものが初耳であるらしく、見当もつかないというような顔をしている。はつきりいって、名称では形状も材料も調理法も想像できないものを出题されてしまったのは、それを作り試験突破など、不

可能に近いからだ。

メンチは、説明を続ける。

「ふふん、大分困ってるわね。ま、知らないのもムリないわ。小さな島国の民族料理だからね。ヒントをあげるわ!! 中を見てごらんなさいーい!! ここで料理を作るのよ!!」

受験生は、許可されたコンテナ庫のような建物内に入る。

その建物内にあつたものは、ずらりと並ぶ調理台。ただし、シンクと包丁やまな板が置かれた作業台のみで、コンロはない。

「最低限必要な道具と材料はそろえてあるし、スシに必要なゴハンは、こちらで用意してあげたわ。

そして最大のヒント!! スシはスシでもニギリズシしか認めないわよ!!」

ここまで説明したところで、「スタートよ!!」の呼び声がかかる。

十十十

レッツは困惑していた。というのも、

(スシ……は分かるんだけど、“ニギリ”ズシ、っていう風に種類があるのか……)

そう、スシの中で細かく分別や区分けがあるとは知らなかったのだ。

(とりあえず、唯一知ってるものを作ってみるしかないよね……。それはそれとして、持てる技術と知識を全て使つて、メンチさんから方便じやない本気の「美味しい」を貰いたいな。)

レツは考察に入る。

(えつと、まず魚が必要だけど、この森の中だと、間違いなく淡水魚しかいないだろうね。確か、ほとんどのスシは海水魚だったはず。……淡水魚つてことは、味付けなしだと、繊細で淡い食材同士を組み合わせる事になる。臭み取りにも何か必要だね。うくん、ガツンとインパクトのある品も欲しいな……。そういえば、)

ここでレツは、少しだけゴハンを掬い、食べる。

(うん。このゴハンは酢が混ざつてない。ここがダメだったら、更に難易度が上がるからね。

なら、決まりだね。)

思考が纏まったレツは、外に駆け出した。……テンションが上がりすぎて、他の四人もろとも受験生を置き去りにしてしまったが。

十十十

「うん。やっぱりヒソカは、きちんと額に一撃で仕留めてるね。これなら腐つて切り捨

てるのは首までで良さそう。」

レツが赴いた場所は、先ほどヒソカに嫌がらせをしたところだった。新しく獲りに行くとしても、先の試験でほとんどの生きてるグレイトスタンプは逃げており、現実的ではない。

「さて、木の実の中であると良いけど…。」

レツは木を見上げる。そこには先ほど使った果実、林檎やスダチ・カボスなどもあり、柑橘系の宝庫だった。

「あつたあつた。」

そしてレツはオレンジを選んで枝ごと押し折り、豚も抱え戻ることにした。

＋＋＋

十分後。

レツは一通りの材料を抱えて戻ってきた。

そこにキルアが話しかける。

「レツ!? 何処行つてたのかと思えば、もう材料集めたのかよ、早! ……つていうか知つてんのかよ!! “スシ”!?”」

「これだけじゃ、まだ足りないから、また外に集めにでるよ。」

「は？ その豚もまた使うのか？ それに…なんだ？ その木の实？」

「いや、これは僕の個人的に欲しいもの。もっと必要なのは――」

受験生の目がレッツに集まっていたが、

「魚ア!! お前、ここは森ん中だぜ!!」

そこにレオリオの大声が響き、受験生は一斉に飛び出す。

――つてことだよ。」

レッツが説明するまでも無かったようだ。

キルアが毒づくが、ゴンが続ける。

「…あの、オッサン…。」

「まあまあ、俺たちも行こうよ。レッツも魚をこれから獲るんでしょ？」

「そうだよ。だから早く行こ。」

素晴らしい、三人も魚を獲りにいった。

十十十

一方、それを見ていた試験官サイド。

「あのコ、グレイトスタンプを獲つて来て、何するつもりなんだろ？」

「魚も獲りに行ってるわね。…アタシの事を情熱が宿る目で見てきたわ。」



「うん?それって、オレ達”美食”ハンター志望ってこと?」

「おそらくね。302番。相当、期待できるわね♪」

メンチはペロリと唇を舐めるのを見ながら、ブハラは思う。

(……大丈夫かなあ? いくら美食ハンター志望でも、メンチを本当に満足させられる料理人なんて、世界中に数える程度しかないのに。メンチは妥協しないことが多いからな)

十十

体力と釣竿の有無で、いち早く戻ってきた三人。

「さっそく作ろつか。君たちは料理、どれくらいなら出来る?」

「まずは自力でやってみるよ。ダメって言われたら、どこが悪かったか教えて。」

「ふーん……。じゃあオレも頑張ろつと。」

そのレッツの発言にゴンは、笑って断る。キルアも変に對抗心を出し、それに同意する。

「あはは、それじゃ最低限、使うものは渡すよ。」

そう言い、レッツはグレイトスタンプに向かう。

包丁を持ち、腹を捌いていく。そして包丁に「周」をして、肋骨を切断し水に晒す。

レッツは魚をまな板の上に置き、肋骨を取り出し頭に突き刺す。

「フウー————！」プツツ ジワア

レツは息を吐くと、居合の要領で、魚を素早く三枚に下す。

その魚の切り身を渡す。

「ほら、これを使うんだよ。」

「うわーすごいね!!」

「そんな技術もあんのかよ。…聞きたいんだけどさ、何でそんなに手間暇かけるつもりなんだ?」

「僕はメンチさんのファンでもあるからだね。」

その言葉に納得した二人は渡された切り身を睨みながら、「スシ」についての考察を再開した。

くくく

それをしつかり聞いてる試験官。

「へえー、アタシのファンって言えるだけの實力はあるようね。…でもまだまだ甘いわー。」

(捌くスピードならアタシの方が速いわ。血が滲むのは、捌いてから同時ではなく、後からじゃないとね。)

「いや、何、受験生と張り合ってるの? (あーあ、これじゃもう、あのコ位しか合格でき

ないだろうし、肝心なあのコも今のメンチから合格をもぎ取るのは至難を極めるだろうねー。):ちよつと、雉撃ちにいつてくるよ。」

そんなメンチの発言にブハラはツツコミを入れる。

:ブハラは席を立つが、すっかり注目してるメンチはもう気づかない。

くくく

レッツは豚を見ながら考え、ルビーの指輪を左手にはめる。

「さて、どこの部位を使うかな? (ヒソカの攻撃上、《ネック》までが使えない。それ以前に、豚肉だから炙る必要があるね。インパクトが欲しいとなると、《肩ロース》・《バラ》・《トンソク》:ぐらいかな? まず、《トンソク》は煮込みの工程が主な用途だから、今回は除外。《肩ロース》は、焼く・煮る・揚げる・炒めることも出来るから、万能と言えるんだけど、《バラ》のほうが、ポリユーム感とか脂の量では上だから...) :よし、決まり。」

そしてレッツは先ほど捌いたので、汚れてるであろう腹より上の皮が付いてる部位を切り取る。

そして豚バラ肉をスライスしていき、同じ要領で、魚も再び捌く。

先ほど、押し折った枝からオレンジを取り、残った枝に「紅くなる灼熱/フレイムバー

スト」を左手の指先で着火する。使わないであろうと判断した長包丁を四点の地面に突き刺し、その上に水で満たしたボウルを置く。これで即席だが火で湯通しすることが可能になり、毒抜きと臭み取りの為に湯に浸す。

くく

(…包丁をあんな使い方されるのは業腹だけど、コンロを置いたら調理の幅が広がります。受験生が迷走すると思つて置かなかつたからね。一応、丸焼き用のソレはあるけど、デカすぎるものね。)

レッツの行動を見ながら、そんなことをメンチが思つてるとレオリオが来る。

「出来たぜー!! オレが完成第一号だ!! 名付けてレオリオスペシャル!! さあ食つてくれ!!」

そこにはゴハンの塊に、まだ生きている魚を何匹も突っ込んだおぞましき物体Xがあった。

「食えるかあつ! もう! あんな料理ともいえない物体を持ってきて邪魔しないで!! 今、アタシはあの子を見てるの!!」

そうメンチが言うことによつて、レオリオはそちらの方向を見る。そこにはレッツが大量のオレンジをいくつもの容器に分けて絞つていた。レオリオと同じく方向を見たク

ラピカの二人は向かうことにした。

次にゴンが来る。

「よし、次は俺だ!!」

ゴンが差し出した物は、ゴハンに先ほどレツに渡された切り身を使って巻いた、ケーキ寿司と呼ばれる薄く切った野菜で包む部分が異なっている、手鞠寿司モドキだった。

「近いけど、違うわ!!」

そういい、メンチはゴンも追い返す。

メンチは続けて話す。

「いいい!! カタチは大事よ!! ニギリズシのカタチを成していないものは味見の対象にもならないわ!!」

その大声をちようど戻ってきた、ブハラは聞き思う。

(あああ、あのコの合格する可能性がまた下がっちゃったよ。…やっぱり、正解だったかも。)

くくく

まだまだ大量になる作業を行いながら、レオリオとクラピカに彼らが持つて来た魚を捌いた切り身を渡す。

その頃には、キルアもレッツからもらった切り身に様々な調味料をかけて、普通に美味そうなカルパッチョ風に仕上げた独自の皿を出したが、勿論カタチが違うので追い返される。

流石にこのまま合格できないのは話にならないので、アドバイスを求める。

「レッツ、何かヒントない？」

「ん。僕も次の工程に移るつもりだったから、いいよ。」

そして二つに分けたゴハンに、絞ったオレンジジュースを混ぜる。

「ハア!? …もとからゴハンに混ぜるのかよ…それは気付けても試せねエーな。」

「ホントは、酢とか酸味のある液体ならなんでもいいから、この場で事足りるよ。さて、

僕はまた燃やせる物を採ってくるよ。」

そういう、レッツはこの場から離れる。

…そのすれ違いが致命傷になった。

レッツは枝を折り集めながら、さらに考えていた。

(うゝゝゝん……意味ないかもしれないけど、リングも持っていくかな。魚の味と時間  
しいでは、もう少し試せるかもだし。)

++++

一方、試験会場。

様々な形をした料理を出すのが、ことごとく断られる。クラピカは先ほどのゴンが提出し、メンチの『近いけど、違うわ!!』という言葉にどんな物を出したか聞き出し、またレツから渡されていた切り身も見ていた。

そして様々な情報を整理した結果、できたものを持つていく。

メンチはそれを見て初の実食に入る。

「…へえーえ。魚の切り身がちよつとでかいけど、一応“ニギリズシ”のカタチにはなってるわね…。」

(よし! 一応カタチは正解したぞ!)

「…ダメね!! 一定の美味しさに届いてない!」

「ぐっ…! (だが、一応は通ったぞ!)」

クラピカはそうして離れていく。真打ち登場とばかりに次に出したのは、ハンゾーだった。

「そろそろオレの出番だな。どうだ!! これがスシだろ!!」

「さっきの404番よりさらに近い物が出てきたじゃない。…:ダメね! おいしくな  
いわ!」

そういい、メンチは再び実食する。しかし、却下する。

…この試験の本題は、ヒントを見逃さない注意力と、観察力をみるものであり、そう

いう意味では、レツの助けがあったとはいえ、クラピカは合格のはずである。ハンゾーの方は、スシをゼロから考察した者と知っている者とは、遥かに完成度が違うため、味による判定不可でも良いといえるが。先にズルを行ったのはどちらか、いわゆるへ卵が先か、鶏が先か」というレベルの話である。

「な、なんだとー!?」　メシを一口サイズの長方形に握って、その上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが!!　こんなもん、誰が作ったって味に大差ねーべ!!

はっ、しまったー!!」

そして不合格判定をもらい、納得しなかったハンゾーは大声かつ盛大に、スシの作り方と形状を暴露した。

その暴露を聞いた瞬間、メンチの顔は般若になりハンゾーの胸倉を掴んで怒鳴る。

説教はが終わった後のハンゾーの顔にはでかかど「敗北」の文字が浮かび上がっていた。

メンチは続きを言いながら祈る。

「あゝゝもオ、怒鳴ったらますますハラ減ったわ。さあ次の挑戦者いらつしやい!!

(…あのコ、ついさつき出ていったけど、試験官の面目もあるからこの出来損ないも食べなきゃダメなのよ。…早く戻ってこないと、手遅れになるわよ……!!)」



その後、本格的にメンチは味のみの審査を行い続けた。

十十

レツは一通り枝を折り、戻る。

そこで見たのは、受験生が行列を作っていた。しかし片っ端から追い返されている。それを不思議に思いながら、手を再び洗い、ボウルに醤油・酒・みりん・砂糖を混ぜ、豚肉を浸し置いておく。

次に包丁で枝を削っていく。それもきちんと水で洗い、魚を突き刺し、豪快に炙っていく。まな板も再び洗ってからその上に先ほど調味料に浸した豚肉を置き、人差し指に「紅くなる灼熱／フレイムバースト」でバーナーとして扱い、炙っていく。

いよいよ握りの過程となり、一通り握る。

少しすると、ここで非情にも

ゴクゴク「ふーっ ワリ!! おなかいっぱいになっちゃった。」

メンチが《試験終了》の宣言を告げる。

レツは合格できなくても良いので、作った品を食べてもらいたく、メンチに差し出す。「悪いんだけど、メンチさん、もう少しだけ食べてください。」

「あら? やつと来たわね。随分時間かかったじゃない。楽しみにしてたんだから

「  
」  
そしてメンチが蓋を開けると

炙られた照り焼きソースのグレイトスタンプの焼き肉寿司を挟むように、箸休めとして赤身と白身の魚も握られた

ゴンの作った物よりさらに一回り小さな『手鞠寿司』だった。

そう、ハンゾーの暴露話に、レツは枝拾いに行つてしまい居なかつたのだ。

その品にメンチは顔を歪め、叫ぶ。

「お惜つ………し——い！ ニアピン！ 超ニアピン！ あと半歩！」

「やっぱり、違うんだね……。でも、不合格でいいから、アドバイスください。」

「惜しいつ………！ ホント惜しいわ！ ……けど、分かつたわ。」

そしてメンチは真ん中の焼き肉寿司から、食べてゆく。

次に、隣の魚寿司を食べる。

…無言でモクモクと食べ続けながら、メンチは思う。

（まだまだ些細な作業は甘いけれど旨い……!! この肉寿司は照り焼きね。次に魚が

オレンジで作ったのもあって、脂のギトギトを和らげる…

ゴハンが両方ともオレンジだけど仄かに違うのは、肉の方は甘みを強調する為に旬が近い物を。魚は早熟のオレンジをメインに…！ これにより肉の方がまた欲しくなる…！)

「ここまで食べ続けながら思っているとブハラが話しかける。

「メンチく、そろそろ判定を…」

「ダメよ!! こんな強烈なコンボで無限ループを止められるわけがないのよくく!!」

「ハア…でも、カタチはニギリズシじゃないから合格は出せないよ。」

「うん、分かってたからそれはいいよ。」

「ここまでブハラが言うと、完食したメンチが叫ぶ。

「ちよつとブハラ!! 勝手なこと言うんじゃないわよ!!」

「でもメンチ、ニギリズシの形をしてないのは試食しないって自分で」

「ぐつ…!!! でもでもこのコだけは、」

「いや惜しいけどさ、ニギリズシじゃないってもう言っちゃったし実際そうだし、このコもそれで納得してるし」

そんな喧嘩とも言えるそれを見ながら、レツは画用紙を二、三枚置きそこに『感想とアドバイスください』とメモし、戻った。画用紙を使って火種にしなかったのは、燃や

せるものが現地で軽く手に入るからこそその悲劇でもある。様々な事情が絶妙に不幸な方向に歯車が噛み合ったからこそ、二次試験 後半の合格者はゼロ名になってしまったのだ。

まだ試験官の二人は喧嘩してるが、レッツが不合格を認めてる以上、それは覆らないだろう。

「ふう〜〜〜……合格貰えたかもしれなかったけどな……」

あとは形を正解するだけというあと一歩の所だったが、そこで終わってしまった試験。

レッツは、盛大に息を吐いていると、そこにキルアが話しかける。

「レッツが不合格になったのはあのハゲが悪いな。」

「……………何かあったの？」

「あ、そっか。あの時、レッツは火種を取りにいつて居なかったな。それがよ、294番のハゲがな、作り方を盛大にバラしやがって、片っ端からあの試験官は味見するハメになったんだよ。」

わざと声がやたら大きかったので、数人のじろりとした目線がハンゾーに向かう。

ハンゾー本人は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「そんなことがあったのか……。(…あの人、闇討ちしたいかも。でも、プライドを優先し

ちやつた自分のせいでもあるから、逆恨みもいいところだからやらないけどね。)フウ…。材料が余るのもなんだから、君達の感想も聞きたいな。」

という事でレツはさらに集めてきた材料を全て使い切つて、豚丼や、さらに作つた手鞠寿司に改めて正確なカタチを知つた魚の握り寿司。締めに爽やかさ優先の先ほど危険として採つたリンゴジュースという(お茶もあるが、流石に試験官のテールから勝手に拝借はできないし、しなかつた。)ラインナップで構成された一通りの昼食を四人に振舞う。

「……美味いわコレ。」

「美味いじゃねーか! で、こっちは……?」

「ホントに美味しい!!」

「これは……美しいな。そして確かに美味しい。」

上から、キルア・レオリオ・ゴン・クラピカの感想である。四人は続ける。

「うくん、お茶が欲しくなるな、これ。」

「確かにこれは、無限に食べれるかのようなループだぜ!」

「すごい!! ミトさんみたい!」

「君ほどの腕があるなら、メンチを納得させるほどのスシを作っていたのに残念でならない。」

キルアは握り寿司、レオリオは豚丼をかつこみ、ゴンとクラピカは手鞠寿司を食べる。更にレツは感想を欲し、同じ女性受験者の、80番・スパイヤ、246番・ポンスなどにも振舞っていた。

ようやく喧嘩が終わった試験官、メンチは結論を出す。

「くう………!! 結論として、二次試験“後半”の料理審査、合格者はゼ」

《——その結論、しばし待たれよ。》

そう、スピーカから聞こえてきたのは、

ハンター協会のマークがついた、審査委員会の飛行船であり、すぐそこまで近付いていた。

少しでも来るのが速まっているのは、先ほど退席した時に、ブハラがこの状況を予測し、あらかじめ報告し先んじて呼んでいたためである。

そこから結構な高度にある飛行船から飛び降りてきたのは、白髭を蓄えた和装に高下駄を履いた老人であった。

その人物に他の受験者に食事が一通り終わった四人も見つめる。

目の前の人物をメンチが告げる。

「審査委員会のネテロ会長。ハンター試験の最高責任者よ」

そんな大物の登場にざわめきが一段と大きくなる。

二人は会話を続ける。

「ま、責任者と言つても所詮裏方。こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゃ。さて、メンチくん」

「はいー」

「未知のものに挑戦する気概を彼らに問うた結果、全員、その態度に問題あり、つまり不合格と思つたわけかね?」

「……いえ、受験生の一人にアタシのファンがしまして、その時点で受験生に求める合格基準を高めてしまい、かつ別の受験生に料理を軽んじる発言が重なり、ついカツとなり、その際 料理の作り方がテスト生、ほぼ全員に知られてしまうトラブルが重なりまして、頭に血が昇っている内に腹がいつぱいになり、最後に先ほど、ファンといつてくれた受験生の品を見たのですが、作り方をバラされた時にはこの場に居らず、規定のカタチ“ニギリズシ”ではなかったので、結果としまして、合格者がいないものに……」

フムフム「つまり、自分でも審査不十分だとわかつとる訳だな?」

「……はい。スイマセン! 料理のこととなると我を忘れるんです。審査員失格ですね。私は審査員を降りて先ほどのファンにアドバイスを送った後、この試験を無効にしてください。」

「ふむ……審査を続行しようにも、選んだメニューの難易度が少々高かったようじゃな。

よし！ では、こうしよう。審査員は続行してもらう、そのかわりにファンもいるようじゃし、先達として新しいテストには審査員の君にも実演という形で参加してもらうことにする。——というのでいかがかな？」

そのネテロ会長の発言にメンチはピクと反応する。ネテロ会長は続ける。

「その方がテスト生も合否に納得がいきやすじやろ」

そうネテロ会長は締めくくる。しばらくメンチは考えた後、

「そうですね、それじゃ、『ゆで卵』」

その発言に受験生は驚き戸惑う。メンチは構わず続ける。

「会長、私たちをあの山まで連れて行ってくれませんか。」

「なるほど、もちろんいいとも。」

そして一通り片付けを終え、残骸はきちんと地面に埋葬する。

受験番号順に乗り込むこととなり、レッツも飛行船に乗ろうと並んでいると、前の301番の男が後ろに手をやり、指を一本立てていた。その不可思議なシグナルにレッツは【擬】を行うと、《二次試験、正式に合格後、話をしたい。》と、【隠】を使ったオーラを文字に変化させて会話を行う念の高等技術、【念文字】で書かれていた。

それにレッツは頷くと、男は【念文字】を解除した。



飛行船は、クモワシの巢、マフタツ山に出発した

## No. 10 / オモカゲ? ニ? ナミダ

飛行船から降りた場所は、間に深い峡谷があるマフタツ山と呼ばれる場所だった。

谷底からヒュウウウと轟音が響き受験生はゴクリと喉を鳴らす。

ある受験生は疑問を呟き、メンチは回答する。

「一体…、下はどうなっているんだ?」

「安心して。下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十キロ先の海までノンストツブだけど。それじゃ、先達としてハンターの仕事の一部を味わってもらおうにも、お先に。」

受験生の驚愕の声も無視し、メンチはそのまま崖から飛び降りる。

その一連の行動を、ネテロ会長は「マフタツ山に生息するクモワシの卵を取りに行つた」とメンチを参考に、合格する為に必要な条件を説明する。

そして崖をよじ登つたメンチは言う。

「よつと、この卵でゆで卵を作るのよ。」

その技に『こんな試験、もう一回やり直しになるに決まっている!』と飛び降りれない受験生は叶いもしない願いを願っていると、

「あー、良かった。」

「こーゆーのを待ってたんだよね。」

「別に難易度高くないからね。」

最年少三人組にその願望は断たれる。

そして五人が嬉々として飛び降りようとすると、ネテロ会長にレッツは呼び止められる。

「あ、302番。お主だけはさっきの試験で合格に値すると判断したので、やることはないぞ?」

端で聞いていた、既に降りるのを諦めた受験生たちは「ラッキーだったな、あの302番」と思っていたのだが、声には出さないし、出せない反論も続く言葉によつて、完璧に封じられる。

「え? 僕、結局合格できてないからやるよ。…というか、メンチさん。そんなことから、周りの受験生から失笑されるんですよ。」

「別にいいわ。こんなのもクリアできない、口だけの連中にどう思われようが。」

「それもそつか。じゃ、行つてきます。」

レッツの苦言に、メンチは笑つて毒舌を重ねる。多少、遅れたがレッツも飛び降りて卵をとる。

この後ゆで卵を作り、その味にクリアした受験生は舌鼓を打ち、美食ハンターのやりがいと喜びをメンチが語り、これで二次試験後半は終わりを迎えた。

十十

合格者四十二名はハンター協会の飛行船に乗り込み、ネテロ会長は飄々とした雰囲気のまま、集められて話を聞いているのは強面ぞろいの、ハンター試験受験者が醸し出しているピリピリという緊張感があるというのに、意にも介さず話を続けた。

秘書の人物から「三次試験の場所へは、明日の八時に到着予定」との連絡を受けた後、解散した。

各々、自由に時間を潰すことになった。

「ゴン!! レツ!! 飛行船の中、探検しようぜ!」

「うん!!」

「あはは、僕は止めとくよ。」

「元気な奴ら…!」

キルアの誘いに、ゴンは賛成し、レツは断る。

その二人のスタミナにレオリオは若干、引きつつ眩く。

レツとレオリオとクラピカは行動しながら会話する。

「オレはとにかく、ぐっすり寝てーぜ。」

「私もだ。恐ろしく長い一日だった。」

「じゃあ、二人が寝てる間にでも癒しの効果をかけるよ。」

そのレツの言葉に二人は目を丸くし、クラピカは確認する。

「いいのか? …その力はお守りの限られた残量しかないのだろうか?」

「いや、これは純粋な技術だからね。」

「お前、どこまで技術があるんだよ…。 料理も上手ーし。(仕込んだのは姉だろー

なー。ますます期待できるぜ!!)」

レツは二人の誤解を訂正し、レオリオは呟く。 …レオリオ人形劇は終わらない。

そんな思惑をよそにクラピカは疑問を呈す。

「……しかしーっ気になるのだが…」

「ん?」

「試験はあといくつあるのか、知ってるかレツ?」

「あく、ごめん。試験自体の対策は無いって家族から言われたから、その情報は知らない。」

「い。」

「じゃあ、俺が教えるよ。」

レツは答えられなかったが、そこに割り込むトンパ。

トンパは例年の試験数は、平均して5つか6つといい、忠告もする。

「く〜くなりかねない。次の試験、受かりたきやここでも気をぬかない方がいいつてことだ。」

トンパは置き土産にホラを吹く。

この言葉にクラピカから発言する。

「レオリオ、レッツ、どう思う?」

「…う〜ん、試験前のあれからすると、ウソっぽいけどな〜」

「というか、ウソだよ。前者の試験数はホント。後者の目的地に時間はウソ。」

「断言したな。…なぜそう思う?」

この二人の意見にクラピカはレッツに聞く。

「だって、兄さんのほうが、遥かに嘘が上手いからね。その経験。」

「…そんなに嘘が上手くて、血も繋がらないなら、兄貴にねーちゃん、騙されてないか?」

レッツは回答し、レオリオはまだ踊る。

「それはないと思うよ。一応、慣れれば分かるから。」

「そうか、安心したぜ!」

その疑問にもレッツは答え、レオリオは安堵し、クラピカは呆れかえっていた。

そこからさらに三人は各々、行動した。

十十十

その頃、メンチ・ブハラ・サトツの試験官三人はというと、夜食をとっていた。

やがてメンチが今年は何人くらい残るか話題提供をし、二人にも聞く。

「~~~~~いたじゃない。サトツさん、どお?」

「ふむ、そうですね。ルーキーがいいですね今年は。」

「あ、やっぱりー!? アタシは302番の男の子と294番のハゲもいいと思うのよねー」

(スシ知ってたからだね……)

「私は断然99番ですな、彼はいい。」

「あいつきつとワガママでナマイキよ。絶対B型!一緒に住めないわ! ブハラは?」

「そうだねー、新人じゃないけど気になったのが、やっぱ44番……かな。」

44番、とあげられた受験番号でメンチとサトツの二人は同時に表情を硬くする。

あげた本人のブハラもうんざりとした表情で、行儀悪くフオークを振りながら話を続ける。

「メンチも気づいてたと思うけど、試験が終わって合格者が出ない、って決まりそうだった

た時、一番殺気を放つてたの実はあの44番なんだよね。」

「もちろん知ってたわよ。抑えきれないって感じの凄い殺気だったわ。でも、ブハラ。知ってる？ あいつ、最初からああだったわよ。あたしら姿を見せた時からずーっと。」

メンチの言葉にブハラは目を丸くして「本当？」と尋ね返すと、彼女は唇を尖らせて肯定し、ついでにその所為でずっと自分はピリピリしていたと愚痴る。

「私にもそうでしたよ。彼は要注意人物です。」

サトツも無表情のまま肯定し、そして語る。彼から見た44番、「ヒソカ」という奇術師の人物像を。

「認めたくはありませんが、彼も我々と同じ穴のムジナです。ただ、彼は我々よりずっと暗い場所に好んで棲んでいる。我々ハンターは、心のどこかで好敵手を求めています。認め合いながら競い合える相手を探す場所……。ハンター試験は結局、そんな所でしよう。そんな中にたまに現れるんですね。ああいう異端児が。我々がブレーキをかけるところでためらいなく、アクセルをふみこめるような。」

サトツはメンチの誤解を修正するために言葉を続ける。

「……………あと、言おうと思つてたのですが、先程メンチさんが推薦した302番は女の子ですよ。」

「あら、それならなおさら良いじゃない!! 合格したら仕事に誘おうかしら。」



そのメンチの喜びに、サトツは爆弾発言ともいえる不安点を告げる。

「あなたが、それであの子を救い出せるといいのですが…」

「ん？ あの子、何か訳アリ？ ハンターって人種では別に珍しくもないわよね？」

「ええ…。先ほどブハラさんが話した44番に302番は兄を殺されていて、遺品も44番が持っているようです。試験前に一戦、交えていましたからね。」

302番は念を知ってしまっているが故に、具現化系と推察されるのもあって、あの若さにして無茶な制約と誓約をしていないか、不安なのです。：得てしてそういう人物は、不幸な結末に終わりますから。」

「あの44番…!! ホントに許せないわね…! でも、見てる限りそんな感じはしなかったわよ? 指先から炎を出していたし。」

「…なるほど。ならあの子の保護者もプロハンターだったので、よく教育されているんでしょ。」

「あの歳で念が使えるまでのスパルタ教育してるのはどうかと思うけど、感謝するわ。それはそうと、アドバイス書かないとね。」

そんな全く関係ないところで、ヒソカの好感度は下がり、シャルナークの好感度は上がる談義。

十十

一方、クラピカ・レオリオと行動を離れたレッツは、先の約束通り、301番の男・ギタラクルと落ち合っていた。

レッツが話し始める。

「それで、話ってなんですか？」

「ああ、キルになるべく近づかないでほしい、つてのが本題だったけど、キルの本音を一部だけでも引き出してくれたからね。当面は、念の存在を秘密にする今程度の距離感でいいよ。」

「すいません、キルってキルアのことでもいいんですか？ それとあなたはキルアの何ですか？」

ギタラクルが淡々と要望を伝える。しかし、レッツにはいまいち伝わらず、確認する。

「そう。キルはキルアのこと。で？返事は？」

「待って、結局、こつちの質問に答えてもらってない。」

「ああ、こつちじゃ分からないか。なら――」

「そういい、ギタラクルは顔中に刺さっている針をゆっくりと抜く。」

全ての針が抜き終わると、顔がビキビキと音を立てて変わる、いや戻るのが正確か。

レッツは目を見開く。なぜなら――

失ったはずの兄に、髪の色や体つき等、細やかな所は違うけれど。

髪の長さや、顔の輪郭・シルエットは近くて。

下の兄弟である自分たちを心配するところに酷似していて。

「……………にいい……………さん……………? ……う、うあ、ああ……………あああああ……………!!」

ずつと耐えてきたモノが決壊し、涙を流す

くくく

「…僕はっ……っ！　新しい家族から念を……二年間……教わって……強くなったはず……  
だった……!!」

「…僕が……っ！　力不足だから……っ！　弱かったから……っ！」

「遺品を……取り返す……どころか、傷一つ負わせることも……できなかつたっ!!」

「く……うう……っ……!!　……っ……っ!!」

レツの慟哭をイルミは黙って聞いていた。これだけ兄弟に想われるのも、自分たちとは別の在り方だからこそだと憶うから。しばらく経った後にイルミは話す。

「……落ち着いたかい？」

「……うん。ごめん、いきなり泣きついたりして。」

レツは素直に謝罪する。しばらくイルミは思案して、餓に発破をかけつつ、念いを確かめる。

「あきらめるの?」

「大切な遺品を奪われたまま、屈服するの?」

「君にとつて、兄はその程度の存在だったの?」

「そんな、訳が無い…。……………今度こそ、仇を討ちたい。」

その言葉に、レツは決意を出す。

しばらくして改めて挨拶から始める。

「そういえば、あなたの名前は? 僕はレツ。」

「ああ、オレはイルミ。キルアの兄だけど、キルには秘密にしててね。…今、家出中だから、試験から逃げ出されるのも困るし。」

「そっか…」

「わかつてくれた?」

そう言つて首を傾げるイルミ。

「…うん、分かったよ。それじゃしようがないと思う。」

レツは頷いた。そのまま、力を得るために打診する。

「…イルミさん、操作系の力を上げる方法に心当たりない？」

「うん？ レツは具現化系じゃないの？」

「そうだけど、補助として操作系の力が欲しいから。」

「操作系の力を底上げするものか…」

イルミは顎に手を当てて考え、ある知識と紹介を思いつく。

「…『アレ』なら、それに該当すると思う。でもここ、というか試験中は無理だから…」

うん、ウチに来るといいよ。場所は、パドキア共和国のククルーマウンテン。ライセンズ手に入れて、調べれば出ると思う。

（親父はどうか分からないけど、母さんは、気に入るだろうし。顔合わせはさせときたいかな。そういえばあの話からすると、大丈夫だろうけど、確認しなきゃね。）

…キルが家出中だから、一旦連れ戻そうと思ってるけど、どう思ってる？」

「うん。向き合わないと後悔するから、それは賛成かな。それと合格したら行くよ。」

「なら安心した。」

イルミの心当たり、家の場所を教え、キルア、というより下の兄弟としての質問をする。

レツは先の答えと返事を出す。イルミはその返答に頷く反応を見せた。

そして二人は解散した。

(あ、兄のことを聞きそびれたな…。でも、しばらくは話せるだろうからいつか。)

イルミは操作系らしくそんなことを思った。

＋十＋

レツは泣き腫らした顔のまままでいるのも恥ずかしかったので、飛行船内の案内板を見てシャワールームの位置を確認し、シャワーを浴びている最中に、ふと思ひ至る。

(あ、クラピカとレオリオを探して、回復させておかないと…。)

シャワーから上がったレツは、しばらく歩くと、泥のように眠る二人を発見し、軽く診察する。

(うくん、頭とかは起こしちゃうし、足の裏とか指の付け根のツボ押しも、内臓や局所の状態では痛みを伴うかも。…できるのは、腕と肩と足ぐらいかな。)

そう判断し、二人の体を癒していると、メンチがくる。

「…アンタ、何やってるの…?」

そこに来た、何も知らぬメンチから見れば、癒してるのではなく、卑してるように見えるのだ。

「? 何って、体の回復促進のマッサージ。…うん、よし終わり。」

「そう…。それならいいわ。あと、求められたアドバイスの紙。あと、コンロが無かったから仕方ないとはいえ、あんな包丁の使い方は絶対にしないこと！そこだけは物申したいわ！」

「ありがとう。うん、それは約束するよ。」

「そういえば、あなたの名前は？」

「僕はレッツ。」

「そう、レッツちゃんね。聞きたかったんだけど、何で男装なんかしてたの？」

そう、今のレッツは帽子を外して、長い髪が無造作に出てる状態である。

「あく、念のためでしかないんだけどね。女の一人旅は危険だからさ、旅に出る時は男のフリをしてるんだ。」

「え？でも、あなた使えるはずよね？」

「…そこは使える人のタブーになるかな。」

「大丈夫よ。別にあいつに教えたりしないから。」

「うーん、なら話すよ。まだ僕の【兇】は完成してないからさ。そのためにハンター試験をやってるんだ。」

「そういうこと。なら納得だわ。…まさか復讐に関する制約してないわよね？」

「あ…（危ない。その方向の制約しようとか考えてた。）」



「ちよつと。」

「ううん、今持つてるのはしてないけど、これからその方向で作ろうと考えちゃつてた。」  
「よかつたわ。間にあつたみたいね。…合格したらアタシと仕事しない?」

「ううん、僕の場合、綺麗なものに興味があつて、武術や物、料理にも当てはまる結果だから、まだ特定の分野は決めれない。」

「そう、分野がこつちになることを願うわ。それと、わかんないことがあれば聞いて。これあたしの携帯番号だから。」

「……………試験官と受験生が個人的にコネ持つていいの?」

「いーと思うわよー、あたしの試験もう終わったんだもん。」

「それもそつか。じゃあ、僕の携帯の番号はこれね。」

そんな話をして、二人は離れた。

くくく

レツは一応、ゴンとキルアの回復の為に見回つてみると、トレーニングルームにたどり着く。

汗臭さがまだ残るそこには、筋トレをしてるネテロ会長と、毛布をかけられたゴンが大の字になって、実に気持ち良さそうな顔で寝入つていたのだった。

「あ、いたいた…って、なんでこんな汗だくなの？」

「それはワシとゲームをしとったからじゃよ。」

レツの疑問に寝てるゴンは答えず、ネテロが答える。

「ちと退屈だったもんで、ワシからボールを奪えたら、ハンターライセンスをやるという内容での。お主もやるかの？」

「いや、こんな汗だくになるなんて五時過ぎてて、残り三時間しかないのにやることじゃないでしょ。…それにあの碎けた床。使ったでしょ？」

「それは心配ないぞい。先ほどワシが機長にゆーつくり飛んでくれないか頼んだところじゃからな。使ったとは？なんのことかのー？」

レツはそれを断り、ネテロに念という、ゴンとキルアに全く勝ち目がなくなる手段を聞くと、心配点を解消しながら、すつとほけたことを抜かすジジイ。

「それでもやらないよ。だって勝ち目が薄い以前にゼロって事ぐらいは分かるよ。」  
「ホ、そりゃ残念じゃわい。」

そしてゴンにも同様のことをした。

〃〃〃

またしばらく歩くと、キルアを発見する。

彼は苛立ったような、しかめっ面をしていた。

「キルア。血の匂いがするよ。」

レツの言葉にキルアは何も答えない。

「…ふう、まあ僕が言うことではないから、それはいいけど。キルアは? どこも疲れてない?」

「どこも疲れてねーよ。」

「そっか、それならいいんだけど…… えい。」

そう言うと、レツは手の《合谷》と《労宮》のツボを押す。

「~~~~~!! なっに、すんだテメエ!!?」

「あはは、今のは怒りを抑えるのと、精神を穏やかにしてくれる所のツボ押し。…少しは落ち着いた?」

「……まあ、悪かねーかな? けどよ、もうちよい何かあんだろ。」

「これくらいしないと機嫌、直らないでしょ。」

「……まあ、ちよつとは感謝する。」

「それなら良かった。」

そういう一幕があつて遅めの就寝についた。

十十十

到着予定だった八時になった頃。飛行船で最年少三人組は朝食をとっていた。

レッツは早々に食事を切り上げ、アドバイスの紙を読んでいた。

（うーん、確かに焦ってシヤリの部分を最後は怠ったかな…。あと、オレンジのみじやなくて他の果実も使うべきってのはそうだね。スダチとかを臭み取りに優先させるってのも。…あの二次試験の時間ではできないのも書いてるね。豚の解体に〔鋭〕と〔周〕した包丁で行っていたけど、大型包丁による解体方法まで…。

他には、やわらかい香りを強めるために、あの場で作れる、リンゴのスムークチップ…。《燻製》っていうのもあるのか。これは初めて知ったな…。）

そう読み進めると、ゴンが話しかける。

「レッツ？ 何読んでるの？」

「メンチさんからもらった料理のアドバイスの紙。」

「それにしても、ヒマだなあ。」

レッツが答えてると、そんなことをキルアは呟く。

ゴンは苦笑して、レッツは一通り、読み終わってしまったので、いつからかやらなくなっていた事を、昨日の事を振り返りながら思い出す。

「ならば、ちよつと見てよ。」

丁寧に入手入れてはいた、大道芸の相棒であるマリオネットを取り出す。

レッツは腕前の錆びの確認も兼ねて、マリオネットの糸を手繰って、ピエロの人形にお辞儀をさせてみせる。

(うゝん、細やかな所がダメかなあ。…いつからかこつちの“舌”を忘れていたんだな…)

その動きにゴンは無邪気に、キルアも素直に感心を示す。

「本当に生きてるみたいだね。」

「兄貴のフィギュアとは違う形の人形もあるんだな。」

どこかズレた感想をキルアは言う。

そこにネテロ、そしてメンチが来る。

「おや、お早う三人とも」

「おつはよー、チビさんたち」

「おはようー!」

「おはよー(ぎ)ぎいます」

「……ども」

それぞれ挨拶をすると、メンチはさらに数枚の紙の束をレッツに渡す。

その紙の束にレッツは？マークを浮かべる。

「メンチさん？ 僕は昨日、もらったはずだけど……？」

「ああ、昨日のマツサージを見ていて、これも役に立つと思つてね。」

そこに書かれていたのは、《薬膳料理》なるものであった。

「…料理にもこういう回復させるのがあるんだね。」

「そうよ。でもコツがいるから初めのうちは苦労すると思うわ。」

「そういうえば、俺が目覚めたのは、レッツのおかげ？」

「うん。それなりに効果があったなら良かった。」

「…ならなんでオレには、わざわざ痛いツボを押し込んだよ？」

キルアは若干、ふてくされながら聞く。

「それが効果的だったからに決まつてんじゃないん。」

レッツはそう答えると、メンチが要望を出す。

「髪おろしてれば可愛いのに。服装ももつたないわね。」

「ならさ、変身してみなよ。」

「うゝん、まあいいよ。」

ゴンがそれに被せ、レッツは今ある三つの能力を順番に5分ずつ使う。この程度なら影響がないだろうと判断したためである。

「ホントにもつたいないわねー。素材はいいのに。」

「試験の料理も美味しかったし、レツは良いお嫁さんになれるね!」

「そんなこと、考えたこともなかったなー。」

ブシャ「ゴホツ　ゴホツ」

メンチが感想をいうと、ゴンが天然で殺し文句を言い、レツは素直に言う。

キルアはちようど飲み物を飲んでいたのが不幸であった。

「「わっ!　どしたのキルア?」」

一切、分かってない二人に追い打ちをかけられ、キルアは呻く。

「あんたたちはそのままでいなさい。」

「ホツホツ、若いのお〜。」

メンチが助け舟:願望?を出し、ネテロは笑う。

その頃には九時半を回り、飛行船に到着を知らせるアナウンスが響いた。

『皆様、大変お待たせいたしました。目的地に到着です。』

そのアナウンスが響くと、受験生は目覚め始める。

レオリオは背を伸ばしながら、ふと呟く。

「~~~~~!　ん?　随分と体の疲れが取れてんな?」

「ああ、どことなく体の一部が軽い。」

クラピカもそれに同意する会話を交わしていた。

そこに三人が合流する。

「あ、良かった。ちゃんと効果があるね。」

「ん？ レツか。ホントに寝てる最中にやってくれたんだな。」

「俺も！ レツはすごいね！」

「感謝する。……ここまで多才だとは……」

「でも、起こさないように注意してたから、そこまで本格的なことはできなかつたけどね。」

「それでもありがたい。」

「さて、試験の続きだぜ。昨日より歯ごたえあるといいな。」

「この体力オバケどもめ……」

レツが効果の確認をし、レオリオ・ゴン・クラピカの順で感謝し、レツはできなかつたことを言う。クラピカは、改めてお礼を言い、キルアが傍若無人に言う。その言葉にレオリオが呟く。

五人はそんなことを話し、飛行船から降りてゆく。

——そして受験生は三次試験に挑む——



## No. 11 / ヒゲキ?・デ?・キゲキ

飛行船が到着した所から、円状になっているタワーに受験生は降ろされた。

「ここはトリックタワーと呼ばれる塔のてっぺんです。ここが三次試験のスタート地点になります。さて、試験内容ですが、試験官の伝言です。『生きて、下まで降りてくること。制限時間は72時間。』」

——それでは、三次試験スタート!!

秘書の人がひととおり言い終わると、飛行船はその後、受験生のみを残して飛び去っていった。

受験生は各々、状況を確認する。

「側面は、窓一つないただの壁か。」

「ここから降りるのは自殺行為だな。」

「普通の人間ならな。」

そう豪語する男は一流のロッククライマーであるらしく、壁やとつかかりを伝って降りていった。

それを見ながら、キルア・ゴン・レツは話す。

「うわ、すげ〜」

「もうあんなに降りてる。」

「でも、見た所、どこにも外壁に扉は無かったのに、あの人はどうするつもりなんだろう？（一応、【擬】すると、《外壁から降りるのは失格とする。》って【念文字】が外周沿いに書いてあるんだけど。）」

そんな会話をしていると、ゴンは呟く。

「あ…」

「ん？」

「あれ。」

降りていた男は、どこからともなく飛んできた怪鳥の餌になる形で、食べられて死んだ。

それを見て、レッツは続きを話す。

「…外壁をつたうとああなる、つてことだね。」

「となると、どこかに下に通じる扉があるつてことだな。」

「二人共、あれ。」

キルアが意見を出すと、ゴンが指をさす。そこには誰かが扉を降りていた。

三人はその扉を調べる。

「ちえ、ダメだな。下からロツクされてやがるぜ。」

「他にも扉があるってことだね。」

「どこにあるんだろ?」

そのまま、三人は受験生が半分になるまで調べていると、五つの扉を見つける。

「この扉をクラピカとレオリオにも相談しよう。」

というゴンの意見によって五人は集まる。

ゴンが扉の位置を教え、レオリオから話す。

「(ここ)(ここ)。あと(ここ)ちにも三つ。」

「五つの隠し扉、こんな近くに密集してるのがいかにも胡散臭いぜ。」

「おそらくこのうちのいくつかは罠…」

「それはないと思うよ。」

クラピカがそう話すと、レツから否定の意見が入る。

その考えにクラピカから質問する。

「何故、そう思う?」

「というか、僕からすればクラピカは、同じ考えにたどり着いても良さそうだけどな。…  
で、その結論だけどこのハンター試験って何が目的?」

その疑問に答えつつ、逆にレツが質問する。それにはレオリオが答える。

「そりや、ハンターになれる奴を審査するんだろ？」

「そう。じゃあ、いたずらに罠とか仕掛けるの？ 運だけで決まるレベルでしか判断材料がないのにな。」

「それは仕方がないだろう。」

「というか、さつきと言つちまえよ。その答えの根拠をよ。」

レツは続けて質問し、クラピカは少々諦観が入った言葉をこぼす。業を煮やしたキルアは結論を急ぐ。

「ごめんごめん。僕が言いたいののは、試験官からすれば、むやみやたらに人が命を落とすような真似はしないってこと。ハンター試験の目的は人を殺すことじゃないからねー。」

そのレツの答えにレオリオは嘖み付く。

「ハア!? いやいや、そりやありえねーだろ。現に今、さつきも死んでる奴が出てんだぞ!?」

「でも、あれって試験官が直接、殺しにきてないじゃん。というか今までも、ただ危険地帯を渡っただけで。ヒソカは試験官じゃないから、あいつに殺されたのはカウントしないよ。」

「なるほどな……。では、誰が最初に選ぶ？」

「まあ、扉は一人に一つずつだからな。」

その意見に4人は納得し、クラピカは扉の選択権を提唱する。キルアは端的に纏める。

ジャンケンでそれぞれの扉を選ぶ。

「決まったな。」

「1・2の3で全員行こうぜ。ここでいったんお別れだ。地上でまた会おうぜ。」

「ああ」

「1」

「2の」

「3!」

それぞれ石床の一端に身体を乗せると、ガタンと音がして床が回転する。

『!?!』

四人は顔を見合わせ、それぞれのリアクションをする。レツだけは、ジャンケン中に【円】をしてみても危険性がどれもないことを確認し、繋がっているのも把握していたため、特に驚かない。

その内部に降りるとそこは明るく、広い長方形の部屋の中だった。

台座に乗った○×ボタン付きの腕時計型タイマーと、その上に説明書きのようなもの

とスピーカー。扉らしきものは閉まっている。ここでゴンが呟く。

「この部屋……出口がない……」

ひと通りの確認を終えると、スピーカーから声が聞こえてきた。

《この塔には幾通りものルートがあり、クリア条件も異なる。ここは多数決の道。たった一人のわがままは決して通らない！ 互いの協力が絶対必要条件となる難コースである。それでは諸君らの健闘を祈る!!》

そこでアナウンスは途切れ、キルアは言う。

「ならさっさとこのタイマーはめて行くこうぜ。」

「そうだね。」

そして五人はタイマーをはめ、クラピカが確認する。

「なるほどな……5人そろってタイマーをはめると」

「ドアが現れる仕掛けか。」

続きをレオリオが言い、最初の設問もトラブルなく進む。残り☒71☒時間。

次の設問が早くも出る。レオリオが発言する。

「扉を出てすぐ、また設問かよ。」

そして右が多数であり、そちらが開く。そのことにレオリオが文句を言い、クラピカが説明する。

そんな流れを、レツは発言しながら思う。

「くくく左を選択するケースが多いらしい。」

「オレ（僕）もそれ、聞い（見）たことある。」

「ちよつと待て!! それだと計算が合わねーぞ、お前ら一体どつちだよ。」

「「右」」

「お前らなあゝ」ワナワナ

『『左』の方を選びやすいからこそ、『右』ってこと。（レオリオは一番年上なのに子供っぽいね。…でもクロロ兄さんとかも、そうなることがあるから、あんまり歳って関係ないのかも。）』

レオリオは捨て台詞を吐き、5人は右に曲がって、しばらく道なりに進んでいくと、ポツカリと空いた空間の中央に長方形のリングがある部屋に着いた。そこ以外に足場のようなものはなく、底は暗くてどのくらいの深さがあるのかさえわからない。その内の一人は「纏」をしていて、念能力者だと理解できた。

すると、スピーカーから声が聞こえてきた。

《その者達は、我々、審査委員会が雇った『試練官』であり、ルールは単純明快。その5人の試練官と、それぞれ一対一で戦い、三勝を上げる事がその突破条件である。》

ルール説明が終わると、またしてもここで受けるか受けないかの多数決を迫られる

が、当然全員○を押す。

「じゃ、まずはボクだね。錠を外してくれ。」

そういい、フードを外す。出てくるのは、連続爆弾魔・セドカン。

「じゃ、一番手は誰が行く?」

「俺がいくよ!!」

キルアが問うと、ゴンが挙手する。キルアは分析する。

「あいつ、肉体派じゃなさそうだし、まあ平気だろ。」

すると足元から伸びてきた足場を渡り、リングに向かうゴン。

一連の自己肯定が終わり、話し続けるセドカン。

「くくく? そんな2人の為に簡単なゲームを考えてみたよ。」

「?」

ゴンは疑問に思っていると、セドカンは二本のロウソクを出す。

「同時にローソクに火をともし、先に火が消えた方の負け。どう?」

ゴンは二つ返事で賛成し、セドカンは握りこぶしを開く。

そこには長さが違うローソクがあつた。

セドカンは一連の長さが違うローソクについて、多数決を求める。

クラピカは端的に纏める。



「くきりがない。『不自由な二択』ってやつだ。」

そのまま、セドカンは座り込み、たっぷり時間をかけてもいいという。

そこにレッツは発言する。

「?」なんて皆、悩んでるの?」

「あの長さの違いが、見えてねーのか! どちらかが、致命的な罠だからだろ!」

レオリオはレッツにツツコミを入れるが、レッツは淡々と答える。

「いや、なんで「両方とも罠」の可能性が抜け落ちてるの?」

そう、このような場面でも超一流の嘘つきのプロである、クロロとシャルナークによる経験値があるのだ。

その言葉にレオリオはセドカンを指差しながら、噛み付く。

「ハア? それってアイツはどうやって罠を回避、もしくは解除すんだよ!」

ここでキルアは気づく。

「あく、ローソクが《四本》あるってことだな? レツ。」

キルアもゴトーのコインマジックで一枚が二枚であるトリックに騙されたことがある。その経験から見抜けたのだ。

レッツは他の可能性も提示する。

「もしくは、短い方はほとんど握ってないだろうから、その右手に薬品が塗りこんである

とか。」

「……なるほどな。しかし、それではどちらを選んでも一緒ではないか？」

クラピカは納得するが、それはそれで問題点があることに気づく。

レッツは呼びかける。

「ゴゥン!! その人のボディチェックをしてみよ!」

「え? なんで?」

これで、先ほどいった内容を伝える。だが、

「ちよつと待ってよ。多数決で決めてゲームが始まっていないのに、ローソクに触れることは認められない。」

内心、焦っていたセドカンは、ルールを強調する言い方で、逃れようとする。

もちろんレオリオは吠えようとするが、レッツに止められる。

「ハア!? そつちが先にーモガモググ」

「ダメだよ。今の考えは、ほぼ確実だろうけど、ルール違反になったら、問答無用でこつちが反則になって負けちゃうよ。」

「そういうことになるな……。どんなに疑わしくても、ローソクに触れてしまえば、こちら側にタネを仕込む余地ができてしまう。」

レッツの意見にクラピカも同意する。そう、この言い逃れはルールを優先される言い方

である以上、『受験生』であるこちらにとつて、困り果てることになってしまふのだ。  
 勿論、回避方法を考察するが、小一時間ほど考えてしまった挙句、妙案は浮かばず、結局ゴンの勘だのみになる。

ゴンの答えに四人は脱力する。

もちろん、油がしみ込んだ長いローソクがゴンの手に渡り、一連の流れでゴンが勝利する。

…二時間分プラスだったのだが、ここで一時間浪費してしまい、時間に限りがある、この場の多数決においてやってはならないこと、『相談』をしてしまい、セドカン是想定以上の時間を稼ぎ、早々にバレた割に、大金屋といえる位になった。

くくく

ゴンが勝利の凱旋をする。

「くくく!! あとはオレとクラピカが勝つて、前進だ!!」

そうレオリオが発言するのを、キルアはカチンとくる。レツは  
 (あの中に『使える』人が混ざってる以上、どうなんだろう?)

こんな疑問を抱いていた。次にクラピカが出ると宣言する。

次に手錠を外され、フードを脱いだのは、体は筋肉ムキムキで血管の浮き出たマッ

チョマン、左胸にハートの刺青が19個。顔は何かあったのか、言葉では表せない惨状になっている。

つまりマジタニである。それを見てレオリオが眉をひそめて一言。

「げ。すげえ体……と顔」

クラピカが特に反応もせず一連の確認中、レオリオはクラピカの心配をする中、ゴンは直感を答え、レッツとキルアは小声で会話する。

「……やばそうな相手だぜ。」

「心配いらなと思うよ。だってあいつゾクゾクしないもん。」

「なんじゃそりゃ?」

(というか、僕達から見ると、見た目だけのただ肥大化した筋肉……だよな?)

(まあ、体はああ見えて実際は大したこと無い、ただのホラ吹き野郎ってこと。)

(肝心のウソもあんな動揺してたら、意味がないよね。)

(それもだな。嘘をつくなら、シレっとなんでもない感じにしないと意味がない。)

真実に嘘を混ぜ込めば、バレにくいとかテクあるけど、それが無いにしても下手だな。)

最後に嘘つくのが上手いキルアがゴツを語る。

リング上では試合が行われる。数歩近づいた時点で大きく跳躍し、上空からの落下の

勢いを伴って拳をクラピカ目掛けて叩きつけるマジタニ。クラピカはそれをバックス  
テップで避けたが床が砕かれる。

(威力小さっ!! …あの程度での威力ではハツタリにもならないよ…)。

呆れ顔を浮かべてレツはそんなことを思う。…比較対象が家族の強化系三馬鹿と称  
される人達と比べてしまってるのが間違っているのだが。

レオリオはそう取らず、アレが旅団員の証であることを説明する。

「……直接クラピカにも聞いたんだからな。」

「なら、クラピカの復讐は簡単に達成できそうだね。」

「ハア!? あの威力を………」

レツはイレズミを見たことがなく、かつ自分も復讐者なので、クラピカの難易度が緩  
いと誤解する。

レオリオは何か言おうとしたが、すぐさま沈黙する。リング上でクラピカがその距離  
を瞬時に零にし、片手で顔を掴み巨体を持ち上げ、もう片方の手で振り下ろした拳で地  
面に叩きつけたからだ。

そのままクラピカは旅団員の正式なイレズミを説明し、そこでレオリオもマジタニが  
偽者だと理解する。

…あの憤怒に染まっていた表情に、ちよつと引いてるからかもだが。

そのままクラピカを労わる四人。

くくく

「よし!! オレで決めるぜ!!」

そうレオリオが勇む。さっさとマジタニを片付けて次の奴を出せというレオリオだが、囚人側はまだ決着がついてないという。レオリオは吠え、クラピカに引導を渡してこいというが、却下される。

レオリオは自ら、もう一つのやってはならないこと、『挙手』をしてしまう。そしてレオリオのみが、トドメに賛成に手を上げ、キルアが手を上げなかったことに吠える。ここでゴンが纏め、レツが提案する。

「くくくしてしき、起きるまで待とーよ。」

「というか、レオリオが納得できないのつて、手っ取り早く白星を手にしないことだよね?」

「おう、時間が限られてることをテーマらはわかってんのか、つて言ってるんだよ!!」

「それで向こう側が露骨な時間稼ぎをしてると。なら、怒るべきは僕達や、意見を翻したキルアでもないし、トドメを刺さないクラピカでもなく、向こうの二人の囚人でしょ?」

「…そりやそうだな…。て、じゃあどうするんだよ!?!」

レツは昨日、取り返しがつかなくなる失敗をしかけたのもあって、少々“舌”に過敏になっているのだ。その言い方にレオリオは納得しかけるが、怒りの矛先が変わっただけであつた。

淡々とレツは意見を述べる。

「あの人が本当に気絶してるか、レオリオ自身が確認すれば、ひとまず納得するんじゃないの?」

「…それもそうだな。向こうの時間稼ぎが気に食わねーんだし、打開するにはそうなるか…。」

レオリオは前に立つと、確認をさせろと言い、向こうの囚人が『賭け』をしようという。

囚人：レルルートは、『賭け』の勝負内容を説明する。その説明が終わるとレオリオは引きつつ言う。

「イカれた女だぜ、てめエの刑期をチップがわりにするとはな。」

「慎重に考えろよ、レオリオ。もし、この勝負に負けたら、いきなりタワー脱出の残り時間が18時間程に……」

「なあ、それってかなり急げば、全然間に合うんじゃない?」

「そういうことになるね。一番体力がないのは『賭け』をするレオリオ本人だけど、すぐ

さま回復させて無理にでも走ってもらおうよ。」

「だからレオリオは心置きなく、勝負してよ!! 俺たちの事は、今は気にせずさー!」  
クラピカが状況説明をしようとするが、最後の言葉が尻すぼみになる。キルアは淡々と話し、レツは対策?を述べる。ゴンが最後に纏めて応援した。レオリオは冷静にかつ安心して仲間を信頼し、『生きてる方に二十時間』賭け、リングに行きレオリオはマジタニの脈を図る。

〈チップはレルート30：レオリオ70とモニターに表示された。〉

ゴンはレオリオのリードに喜び、キルアは不安点を述べる。次にレオリオは本当に気絶してるかどうか賭けるという。その確認方法にレオリオはマジタニを奈落の底に落とすと提案し、レルートは賭けの内容を翻す。

〈チップはレルート60：レオリオ40とモニターに表示された。〉

そして次の賭けでレルートの当初の目論見通り、チームワークがある意味、決定的に崩壊する。

「~~~~そつちが親だ。何を賭ける?」

レオリオがそう喋ると、レルートは錠を外され、フードを脱ぐ。

「そうね、それじゃ—— あたしが『男か女か賭け』てもらおうわ。」

この『賭け』は、レオリオが気づいていない、もうひとつの『男か女か賭け』がある



のだ。

「そいつは構わねーが…… オレが外れた場合、どうやって確かめさせる気だ?」

「あなたの気が済むまで調べていいわよ。あたしの体をね。」

それを聞いている四人。

「レオリオの奴…… 男に賭けるな。」

「「え? 何で?」」

その最年少組の反応にクラピカは目を見開く。キルアとレツは自分と同意見だと思っていたからだ。

「いや……? キルアとレツはわかるのではないか?」

「?」

「あ………」

その含みのある言い方にキルアはようやく気づく。そして趣も兼ねてクラピカに言う。

「ならば、オレ達が『男か女か』、クラピカ賭けてみね?」

「……まさか。」

このキルアの言い方にクラピカは驚きを隠せず、可能性があると思ったレツの帽子をとる。

その頃、レオリオは十時間『男』に賭け、ある意味クラピカ諸共、賭けに負ける。

仲間の中に『女』がいるということに――

レルートはレオリオのさらに後ろを見ながら降つて湧いた幸運に歓喜しながら結果発表をする。

「残念ね、あたし（達）は『女』よ。（いや、あたしも遠目からじゃ分からなかったわー。

…でも時間稼ぎする大チャーンス…♪）」

「マ……マジか!？」

「確かめてみる?（そのまま、声に耳を貸さず、後ろを振り返らず、火中の栗を拾いなさい!! ……できたらこのまま時間を使い果たして欲しいわね… 刑期もそうだけど、残りの二人には……）」

この時に、レオリオは声に耳を貸すか、後ろを振り返れば良いのだが――

「も、も、も、勿論だ!!」

レオリオはすでに火中にあると知らず、レルートの栗…いや、果実をもぎに行く。

その反応に、クラピカはゴンの目を塞ぎ、キルアも同様にレツの目を塞いだ。

「キルア（クラピカ）ー? 何で目を塞ぐのー?」

「黙って、このままで居ろ。耳も貸すな。」

—— しばらくお待ちください ——

十十十

〈チップはレルート50：レオリオ50とモニターに表示された。〉

今は、外れて悔いなしのレオリオ。そのリアクションにレルートは声をかける。

「あなた、後ろを振り返ってご覧なさい。」

「あん？ 何が——」

そこでレオリオが目にしたのは。

流石のゴンも隅っこで小さく丸くなってしまう程度に冷や汗をかき、

左にクラピカ・右にキルアが目を三角にして腕を組み、金剛力士像さながらの怒気を表す状態。

真ん中に帽子を取られ、髪が長く『女』だと分かる、レツが真ん中に居た。

レオリオはすぐさまレルートの方に振り返る。

ブオン「……………マジで?…………」ダラダラダラダラ

「マジみたいだね。」

あまりの首の振り向きに、風切り音が鳴り、冷や汗が滝のように流れる。

ここからチップが振り出しに戻ったのだから冷静に勝負すれば、まだマシな結果かもしれないなかったというのに、テンパりすぎたレオリオはあつという間にストレート負けした。

〃〃〃

#### 囚人サイド

「ねエ あの子達の残り時間、どのくらいかな？」

《69時間、52分だ。》

レルートは戻るなり、残り時間を確認する。その質問の答えが放送される。

セドカンが話を続ける。

「つまり、彼らに残されたのは、仲間割れを加味して、18時間位ってことだね。」

そこに男二人が重圧感を持って話す。

「残り時間なんて関係ない。：なぜなら俺の相手は死ぬしかなく」

「俺の相手は泣き喚きながら、犯され続けるしかないからだ。」

その言葉に三人は一旦、沈黙するが、セドカンが発言する。

「残りはあの子供二人か。 あいつらの犠牲になるなんてね。」

「かわいいそうに、まだ若いのに。」

レルートはそう言い、放送が入る。

《できれば、私も彼らは使いたくなかった。しかし、これもハンター試験だ。：手錠を外す。》

「二応、時間稼ぎが目的だろ？　なら俺からにしてくれ、本当に居た、あのメスガキを俺に犯らせるよ。溜まってんだからよ。」

片方の男は素晴らしい、遅れて手枷が外される。

そして足場もないのにリングまで一足飛びで移動した。

十十十

受験生サイド

レオリオはゆっくりと一步一步、戻る。クラピカが先ず発する。

「…何か弁解は？」

「オレは、レツに聞きたい！　何で男装なんかしてんだよ!!」

レオリオは、男らしく開き直った。

その言葉にクラピカは袋叩きにしようとするが、

「さっさと来い小娘。俺の相手はお前だって分かってんだろ。」

その囚人の言葉に今は後回しにする。：どうせこの後、50時間フルボッコにできるのだ。

「呼ばれたから行くよ。(あの人が使える人だね。：一応、50時間あるし、保険かけるか。)」

そのレッツの言葉にレオリオは盛大にヤバイというリアクションをし、続ける。

「しまったア〜!! どうしてもオレで勝っておかなきゃダメだったんだー!! クラピカ、ゴン、すまん!!」

「コイツすげームカつくな、レッツ。」

「まあまあ、戦う所、見せたことないんだから仕方ないでしょ。(うん、決めた。使おう。)」

「早くしろ!!」

囚人はレッツに出てくるように言い、そのままレッツはリングに上がる。

フードを取ると出てきたのを男を見て、レオリオとクラピカが表情を強張らせてしま

う。

そのままレオリオは言う。

「レッツ、あいつとは、戦うな。速攻で降参しろ。デログ。強盗殺人に強姦殺人など、わかってるだけでも100人は、殺してやがる大量殺人犯だ。」

「ふうん。(一応両方にエメラルド付けるかな。)」

レツはそれを聞いて保険をかける。

デロゴはルール説明をする。

「勝負の方法はどちらかの死亡か、相手に『降参』を宣言させるかのデスマッチだ。」

「わかりました。受けます。(ていうか、舐めるように僕の身体を見て気持ち悪いなあ。)」

「くひひ、制限時間たつぷり犯し抜いて、ヒイヒイ言わせてやるヨオ!!」

そう言うと、デロゴはレツの喉を潰そうと、手を伸ばす。

能力で緑の髪になったレツは、しゃがみながらこう思っていた。

(うくん? フェイ兄さんより遥かに遅いなあ。まあそのボディに、「碧の破壊拳／グ  
リーニンパクト」!! ウボオーと比べて弱いからこれで——終わっちゃったね。)

「がっふお!!」

しゃがんだ後、レツは一気に両手の殴り?押し出しで終わるとは思ってた。

レツの基準点がおかしいので、家族内でも屈指のスピードファイターであるフェイタ  
ンと比較し、耐久力を強化系の三人、弱くてマチかクロ口位の苦戦を想定していたため  
である。

そのままデロゴは、囚人側の左隣の壁にめり込んで、動かない。

「あくあ、これじゃあまた同じ気絶のくだりになっちゃうから降参。(キルアなら使えない人なら負けないだろうし。)」ピキ…パキン

そうレッツが言うのと、ちようどエメラルドの両手の指輪が砕けた。

そのままレッツは振り向いてさっきの場所まで戻る。

「おつかれ」

「さ、キルアの出番だね。」

「おう。」

キルアは特に驚かない。変身は知っているし、あの程度の威力の押し出しなら自分もできる、と思っっているのだ。そうとは知らぬ三人は驚く。

「…強いんだな、レッツは。」

「あれだけ強くてもヒソカはさらに上を行くんだね。」

「……………」

クラピカは畏怖混じりで言い、ゴンは素直に言う。レオリオは無言で土下座していた。ゴンが質問し、レオリオは戦々恐々と言う。

「レオリオ、何してるの?」

「いや…さっきのアレで殴らないで欲しいかなって。」

「? それより始まるよ。」



「お、おう……って!!」

ゴンがキルアの試合が始まることを報告すると、またしてもレオリオが冷や汗を浮かべる。そのままキルアに降参とレッズの勝ちによる突破を主張する。

「最年少組が分かっていないのを見かねてレオリオが理由を説明する。」

曰く、相手は解体屋ジョネス。ザバン市犯罪史上最悪の大量殺人犯であり素手で人を解体してのけるのだと。犠牲者はおよそ150人。そしてその被害者のすべてが体50以上のパーツにバラされたという、異常殺人鬼であるとも。

「あんな異常殺人鬼の相手をするとはねえ、本来ならここは突破できるはずだからな。」

レオリオがそう締めくくったけどキルアは興味なさげに聞いていただけだった。レオリオとクラピカのキルアを見つめる瞳は不安げに揺れているのは対照的に、キルアの勝利を確信しているレッズとゴン。

リングにてジョネスと、相対したキルアは問いかける。

「勝負の方法は?」

「勝負の方法? 勘違いするな、これから行われるのは一方的な惨殺さ」

「じゃあ死んだほうが負けでいいね」

それに対しジョネスが自信満々に語る。それは、まるで死刑宣告だった。

「バツカ野郎、そのルールじゃギブアップが無えだろうが！ 何考えてんだキルア!!」  
それを聞いて怒鳴るレオリオ。クラピカもキルアを制止しようと声を上げる。

「ああ、いいだろうお前が、」

そこまでジョネスが言うのと、目にも留まらぬ速さで動いたキルアが、すれ違いざまにジョネスの心臓を抜き取る。

「そ、それ、俺の……………か…返…」

酷薄な笑みを浮かべてそれを握りつぶすキルア。ジョネスはその顎の力も抜け、口をあんぐりを開けた間抜け面を晒した。

(うくん、僕達、特に殺り方が似てると思っていた、フェイ兄さんとは違う形だねえ。)

他の六人が驚いている中、レツはそんなことを考えていた。キルアが確認する。

「さて3勝2敗。これでここは、もうパスだろ?」

《ああ、今から橋を出す。…そこを通り過ぎると、小さな部屋がある。その部屋で負け分のチップ50時間が経過するまで、次の扉は開かない。》

放送が入ると、モニターとは反対の方向に橋が出現する。続きを話すと、放送は終わった。

「あいつ… 一体何者なんだ。」

「あ…そっか三人は知らないんだね。」

「暗殺一家のエリート!？」

レオリオとクラピカが慄いて、レオリオが発言する。それにゴンは答え、二人は驚くがレツは異なる。

「あれ? レツは居なかったのに驚かないんだね?」

「まあ、似たようなところだし。」

「はー」

レツの言葉にゴンは納得し、闇の人間が二人居ることに、再度レオリオとクラピカが慄く。

キルアが戻ってきて飄々と言う。

「さ、いこーぜ♪」

「うん!」

そして五人は小部屋、またの名をへレオリオ処刑場へと進む

## No. 12 / コウカイ? ナ? ショケイ

五人はしばらく進むと、確かに小部屋があつた。その部屋に入ると、スピーカーから声が聞こえてくる。

《この部屋で、50時間過ごしてもらえれば、先に進めるドアが開くので、待っていたまえ。》

その声を流して放送は終わった。

くくく

## 【処刑】

「やれやれ、これからここで、50時間も過ごさなきゃなんねーのかよ。」ドカッ

レオリオが言い、ソファアに座る。だが、彼はキルアの技に慄いて、忘れていることを思い出させられた。

「さて…、レオリオ、改めて問い詰めさせてもらおうぞ…?」

その声が聞き、ピクツと振り返った先にいたのは、口元をV字に笑っているが、やけに明度が高く目に炎の幻視をする位に、目は全く笑っていないクラピカ。それとは対照的に、口元をへ字にして、目には稲妻の幻視ができるキルア。

そして、自分の何が悪いかを言われるまでもなくわかつているレオリオは、一も二もなくその場で土下座した。

「その節はホンツツトすんませんでしたー!!」

だがその程度で、色々と最低なことをしてかしたレオリオが許されるか?

まあ、そんなことあるわけがなかった。

「歯を食いしばれ、レオリオ!!」

言い訳のしようがないからこそ、悟りの境地に達したレオリオは、クラピカの木刀とキルアの拳だか踵落としによつて、鉄拳制裁に沈められることを受け入れた。さっきの怒気を思い出したゴンも止めるに止められず、レツは家族内で何回でもある、というか巻き込まれたこともある、この空気や流れは読めるので手助けはしない。

そしてピクピクと気絶したレオリオ。

一時の欲望に身を任せると破滅するという、いい例である。

〈残り、48時間〉

くくく

【技術】

一通りフルボッコにされて気絶したレオリオ。部屋の隅にちぎつてはいないが、投げ捨てる。

それを横目に見ながら、クラピカは聞く。

「キルア、さっきの技はどうやったんだ？」

「あ？」

「相手の心臓を瞬時に奪っただろう？」

「ああ、あれ。技ってほどのもんじゃないよ。ただ抜きとっただけだ。」

その質問にキルアは答える。

「抜き取った？」

「ただし、ちよつと自分の肉体を操作して、盗みやすくしたけど。」ビキツ

シヤキンという擬音がなるような感じで、手も鋭く変化させる。

「す……」

それにゴンは感嘆を零し、キルアはジヨネスが大したことのない殺人鬼であることを語る。

「くくく元プロだし。でも、親父はもつと上手く盗むぜ。抜き取る時、相手の傷から血が一滴も出ないからね。」

「兄さんも首を刎ねる時、そこから一滴も血なんてでないけど、あれどうやってるんだろうね？」

「ホントだよな。」

(頼もしい…が、味方の内、はな…。)

そのままキルアは自分よりシルバの方の技が上であると言い、レッツも少し異なるが、同等の事を殺るフェイタンの技を言う。その事にキルアは共感し、クラピカは不安に駆られる。

〈残り、47時間。〉

~~~~~

【嫉妬】

「そういえば、レッツのあの押し出す威力は何?」

今度はゴンが質問する。

「別にあれも対した技じゃないよ。ただ当てただけ。ヒソカクラスになるとあんまし意味がないけど。」

「というか、あれぐらいオレでもできるぜ。」

何故かかぶせるようにレッツも答え、キルアはムツとしながら答える。レッツは具現化系ゆえの神経質でもあるので、意趣返しに挑発をし返す。

「なら、僕だつてさつきのはできるよ。」ス…ズバツ

そう言うのと、レッツは手刀で【鋭】をし、壁を軽く削る。キルアは自分と違い、肉体操作なしで、人体よりも硬いであろう、壁に切り込みを入れたことに嫉妬する。

そのまま、キルアとレッツはムムムと睨み合う。技比べを考えもするが、この足止めの部屋の貫通による反則失格も嫌だし、何より余波が酷いことになる。この場には殺つてもいい犯罪者もないので。しばらく考えて、キルアが提案する。

「ならば、腕相撲しようぜ。」

「いいよ。」

レッツはそれに賛成しテーブルもあるのです、即席でリングが作られる。一応、防御やうたれづよくなる【纏】に留めておく。ゴンはワクワクしながら観戦し、クラピカはその性格から審判と合図を任される。

「レディ……ゴツ!!」

するとミシツという圧力と共に、互いに本気で行う。

(オレとタメで、競り合う事ができるのか……!!)

(グツ、キルア、使えないよね!? いや、僕も【纏】だけど…ツ!)

そんなことを互いに思い、ギギギギという音が鳴る。

(だが、男のゴンならともかく、女のレッツに負けるなんてあっちゃやならね!!)

キルアが気合を入れ直し、その差でトンという音と共にレッツの手の甲がテーブルに付く。

「そこまで!! キルアの勝ち!」

クラピカがそう判定を出す。

「フウ~~~~、ヘツ、オレの勝ち！」

「くう……！ キルア、もう一回！」

「やだよ、疲れるもん。」

「へえへえ、逃げるんだ？」

カチン「……上等よ、もう一回だ！」

挑発に弱かったキルアは、クラピカの溜め息など無視し、もう一回する。

（オレが負けるわけにはいかねー!!）

（今度こそ……!!）

そうして、もう一度の試合は、無意識でレッツが攻防力55〜60の【凝】を行ってしまい、当然レッツが勝つ。

「なん……だ……と……!?!」

そうセリフを吐くキルア。勿論、納得できるはずもなく、

「クソツ!! レツもう一回だ!!」

「いいよ。（ちよつと【凝】気味になってたかも。）」

そしてしばらく行い続ける。十回で、クラピカは終わりが見えない審判を放棄する。ゴンも二十に届こうという時は、観戦をやめる。

これはお互いに疲れ果て、気絶するまで続いた。その頃には消灯時間になり、ゴンとクラピカも就寝した。

なお、結果は奇数回はキルアが勝ち、その繰り返しで偶数回はレツが勝った。と記しておこう。

〈残り、40時間。〉

くくく

【後悔】

「う、イテテ、ここは…。」

翌日になって〈残り〉が37時間。〈が過ぎた時、ようやくレオリオは気絶から目が覚めた。〉

「あくくく、そつか。この部屋で過ごさねーとなんねーんだった。…つてオイ!! なんでテーブルが一部ヒビ入ってんだ!？」

レオリオは状況確認をすると、摩訶不思議なテーブルの状態にツツコミを入れる。それには本を読んでいたクラピカが一連の流れを説明する。最年少三人組は、それぞれの技を説明しあっていた。

「…マジかよ…熱くなりすぎだろ…」

レオリオは少し引きながらも言う。その説明を聞き結局、レツと引き分けになったキ

ルアは悔しさを紛らわせるために、レオリオに精神攻撃を敢行する。

「てゆうか、これでオツサンの、特にレッツからの好感度はダダ下がりだな。もう、レッツの姉貴とは見合いできねーな。」

「グハツ!! ……そんな、そこをなんとか取り持つてくさいませんか、レッツ様?」

レオリオはそこを悪足掻きする。

「いや、僕は目を塞がれていたから、何が問題なのかわからないんだけど?」

「そうか……グハツ!?!」ゴツ

そのレッツの言葉にレオリオは露骨に安心し、その態度にクラピカはムカついたので読んでいた本を投擲し、説教をする。キルアはその間に肝心な所はぼかしつつ、レッツに女にとつていかに最低なことをやったのか、根絶丁寧に説明する。

「そっか、よく分からないけど、姉さんの紹介はしないでおくよ。」

「それで良い。」

「そ…そんな……な……」

レッツに肝心な所は伝わらなかつたが、というか、この場にはレッツ以外、男しかいないのにそれをやったらダイナミック・セクハラである。取りやめたことにクラピカとキルアは納得する。レオリオは絶望に彩られた声を上げるが、まあ当然である。

『後悔、先にたたず・もう後の祭り。』先人は良い言葉を残してくれている。

ここにヒソカ以上に道化を演じていた、レオリオ人形劇は終劇した。
 〈残り、35時間〉

~~~~~

【美色】

〈残り、26時間。〉になると、ようやく制約に定めた時間が過ぎたので、レッツはエメラルドの指輪を作り出す。それを見ていたレオリオは言う。

「え……？　今、その回復するためのソレを作り出さなかつたか……？」

「うん？　そうだけど。」

「は？　あの時間の縛りはウソだったのか？」

「いや、あれは一つあたりの使用時間だからウソじゃないよ。」

「複数作れるんだつたら、改めて——」ガシツ　ギギギ

レッツとレオリオがそんな会話をしていると、レオリオはそれを言い切る事ができなかつた。若干、目が赤みがかつたクラピカにアイアンクローされたからだ。

「イダダダダダ!!?　クラピカ何すんだよ!!?」

「すまない……今の頼みは違うとわかつてても蜘蛛とかぶつたからだ。」

「は？　……失礼だとわかつているが、何が尺に触つた？　……こればかりは確認し

ねーとわからねえ。」

「…いや、そうだな。…レツも私と同じ世界七大美色の内の一つだと思うから、それを欲する、レオリオを無理にでも止めさせてもらった。」

そう、クラピカは先の戦いでレツが緑のストレートロングの髪に、爆発的な身体能力の強化と見れなくもない、押し出しといった場面や、まだ他の能力を見ていないのでそこから、自分たち、クルタ族と同じような少数民族の末裔だと、レツが世界七大美色の『緑』担当であって、ヒソカがそれをコレクトするとは思えないが、緋の目と違い、回復能力があるとしたら、奪われた遺品も戦闘狂のヒソカにとつて有用な物となるので、筋が通ってしまう。

ゆえにそのあたりなのだろう、と思っているのだ。

クラピカ、渾身の勘違いであった。

「ん? 何でクラピカはそう思っているの?」

「というか、他にも変身できるからほぼ違うぜ。」

「そうだね。僕の兄さんの遺品を攫ったのは、今の兄さん曰く、『卯月の証』っていったし。」

ゴンは勿論、疑問を抱き、キルアはそれに答え、納得したレツは他にも変身できる、という事を見せる。

その中にはルビーの力による、赤い変身もあるので、ほぼ違うのが確定する。

「んな!? …すまない。…とんでもない勘違いをしていたようだ…。てつきりヒソカに奪われたのも、回復能力がある故に思ってしまったのだ…。」

「あゝゝゝ、まあ、俺も悪いから、クラピカは気にすんな。」

クラピカは羞恥で真っ赤になり毛布で顔を隠し、傷つけたレオリオ本人からフォローされたのが彼のプライド的に追い打ち、いやトドメだろう。

〈残り、24時間〉

＋十＋

〈残り、2時間〉になったら、しっかりとレツはエメラルドの指輪を増やしてしばらく過ぐす。

そして、〈残り、0分〉になり、扉が開く。五人は〈三次試験後半〉というには、大分過ぎてているが、走り出す。

「さ、続きだな。」

「ああ、残り18時間、急ごうぜ。」

キルアの相槌と、レオリオの言葉を合図に、走りながら道を進む。角を曲がった所に出て来たのは階段だった。登るか降りるかのマルバツを求められる。クラピカが眩き、キルアが追従する。

「登るか降りるか……」

「裏を考えると、登るのが妥当だろうけど……」

「待って、探知効果のそれをやる。(「円」!!)」

レツがその『相談』を遮り、キルアは自分ができない技術が、またしてもレツからできて唇を尖らせる。

50時間のペナルティ中、暇だったレツは部分伸ばしを鍛えて、バレないように【隠】も付加していた。その訓練により、普通の【円】の時、半径三十メートルが最低ラインになっていた。

「よし、わかったことを書き出して地図にするよ。」

その情報をレツは画用紙に書き出す。

「だが、これじゃどっちが合ってるのか分かんねーな。」

「四人も今までの道を覚えてる限り書いてみて。」

レオリオの発言に、レツはさらなる地図の精度を上げることがを要求する。

30分後、それなりの地図が完成し、クラピカが言う。

「ふむ…、この地図からすると、ここで降りなくては昇ってしまう道の先に、降りれる階段があるのが、限りなく薄い確率だな。」

「となると決まりだね!!」

ゴンのまともに皆、頷くとバツを選択し、階段を降りることにした。しばらくすると

階段が終わり、更に先の道へと進んだ。

《残り、16時間》

くく

すると、一つの部屋になり、その奥に扉らしき物が見え、その上に電子パネル。部屋の中央には地面から出ている謎のコードが繋がっている椅子が5つある。

『ここは、電流クイズの間だ。今から問題を出す。5つ正解すればクリアとなる。なお、解答者は誰でも構わないが、外れた場合は椅子から電流が流れ、小一時間は気絶するものと思ってくれていい。』

そうスピーカーからの放送が終わる。それなりに間違いがあり、キルアだけは電流耐性があり、気絶せずに済む。レツは気絶してしまった姿を見て、自分にしかできない事があると、キルアは勝ち誇った笑みを浮かべた。

《残り、14時間》

くく

そこから次の試練まで誰一人口を開かずただ走る。次に到着したのは、マルバツ迷路と書かれた場所。どうやら、マルかバツを選択していき、進む道を決める様だった。その証拠に、左右に道が分かれていた。

四人は、何の意味があるのだろうと疑問に思う。迷路にマルバツつけてどうなるの



かつて話だからだ。

「何の意味があるのだろうか。迷路なのにマルバツ……迷路の意味はあったのだろうか？」

いや、タイムロスを狙った構造なのだろうか？ ……レツ、探知を――」

「分かつてるよ。」

クラピカの呟きにしつかりレツは「円」をする。

「…これは、厄介かも。少し先に、今はバツの方向に落とし穴があつて、そこから一方の道がある。」

「ふむ…トゲといった致命的なトラップはないわけだな？」

「うん、そうみたい。」

レツが分かつた事を言うと、クラピカは質問する。それにもレツは回答し、クラピカは話す。

「となると…厄介だな…。一般的な迷路なら片方の壁に手をつけてれば、絶対にゴールできるというのがあるのだが、落とし穴にはまると、それが使えなくなる。三次元的な構造の迷路ということだな。」

「でも、即死のトラップが無いんなら、落とし穴の方が階層が下になる分、到着が早まるって事なんじゃねえの？」

意見をキルアが出し、最初の回転床から綺麗に着地した四人と、レオリオも頭から落

ちたとはいえ、そこまでダメージもないので、一緒に悩む。

「いちいち悩んでたら時間がなくなっちゃうから、ここで決めたのを貫こーよ。」

小一時間、『相談』した後、端的にゴンがまとめ、皆で落とし穴のバツを選ぶ。四人は  
いわずもがな、レオリオも自分のせいでこうなっているので、自責の念から多少のダ  
メージは飲む覚悟をしたためである。

「一応、危険なのがあったら止めるからね。」

「ああ、頼む。」

レッツはその結果に保険を掛け、クラピカが言い、他の三人もコクリと頷く。

ちなみに、レッツの【円】が半径四十メートルに更新された。

《残り、11時間》

くくく

次は地雷つき双六なるものだったが、レッツが【円】を張っても、サイコロの出目が弄  
れるわけではないので、精々、地雷マスが分かり、唾を飲んで、耐える心構えがピンポ  
イントでできる位だった。：おそらく一次試験のように、精神力を試すつもりだったの  
だろうが、意味がなかった。

レッツの【円】、半径五十メートルを突破。

《残り、10時間》

くくく

その次はトロツコであったが、最初の予測通り、確かにそれなりに疲れはするものの、命の危険があるかと言われれば、微妙なラインであった。精々線路の途切れによるスリルが変わるくらいであろう。

《残り、8時間》

くくく

さらに次は崩れる床。これは対抗心が途中の過程で火花がバチバチになった、キルアとレツが三人を安全地帯に投げ、二人は競争する。それだけであつさりとクリア。

《残り、7時間》

くくく

普通に一本道を走っていると、後ろから大岩がゴロゴロと転がり、それから全力で逃げる。途中、レオリオが遅れかけ、必死に手を伸ばす。それを見兼ねたレツは、

「レオリオ!! 大丈夫!?!」

「お、おう、ありがとな、レツ。一息つけるぜ。」

【透過する黄色の宝石剣／サンライトヴィジョン】の宝石剣をクロスさせて地面に刺し、岩を食い止める。

それをモニターで、見ていた第三次試験官・リッポーは、「甘い」といいボタンを押す。

「!? レオリオ、急いで!! さらに後ろから岩が来てる!!」

「なんだと!?!」

「レッツ!! その岩を砕け!!」

レッツが叫ぶと、レオリオは驚く。先に進んでいたクラピカは呼びかけ、レッツは止まっている岩を【硬】であっけなく破壊する。そのまま安全に進む事が出来た。

《残り、5時間》

~~~~~

またしても扉の開閉を求められるが、さしたる問題もなく突破。そして、最後の試練。モニターの上には、最後の試練の心の準備を問う者だった。もちろん全員マルを押しす。

すると女神像のようなものから、放送が入る。

端的にまとめると、『五人で行けるが長く困難な道を行くなら、マルを押し。三人しか行けないが、短く簡単な道を行くなら、バツを押し。』というものだった。

「……さて、先に言っておくぜ、俺はバツを押し。そして、どんな方法であろうと、三人の中に残るつもりだ。」

先に切り出すのは、レオリオ。心根が良いゴンは反論する。

「俺はマルを押しすよ、やっぱりせつかくここまで来たんだから、五人で通過したい。イチ

かバチかの可能性でも俺は、そっちにかけたいんだ。」

「おいおい、イチかバチかもクソもき、残り時間は一時間もないんだぜ。短い方を選ぶしかないよ。」

そうキルアは反論する。

「僕は、ゴンと同じ。五人で行きたい。」

レツのマル派になる意見が出ることで、ゴンは嬉しく笑う。続けて、キルアに説得を試みる。

「キルアは、あの質問に答えがでたの?」

「は? この状況じゃ——」

「違うよ。その前の方。」

「……そ、れは……」

その質問が三人は何の事か分からずゴンから聞く。

「…レツ? あの質問って?」

「ああ、この本会場に君たちも通ったって言ってた、クイズの話をしたんだよ。…このような状況を想定した質問なんだろうからね。」

帰ってきたレツの回答に、三人は悲痛な表情を浮かべながら納得する。確かに近いのだ。

今回のケースの場合、

『魔獣が出て危険だが早い道』と『三人しか行けない、短く早い道』がバツ。

『安全で答えがでない遠い道』と『五人で行けるが、長く困難な道』がマル。

今年のハンター試験に受からずとも死ぬわけではないし、キルア以外、凶狸狐の場所を知ってる為、また五人で来れることもほぼ確定しているのだ。

「……………フウー、まだ、先送りにするよ。でもこの場ではそうも行かない。レッツ、オレにマルを押させたかったら、あの腕相撲の引き分けに決着をつけよう。（今のオレにとって、同じ年のゴンとレッツに決める……）」ビキ ジャキン

そう言い、キルアは手を肉体操作する。

「いいよ。それがキルアのやり方なら仕方ない。（刀による峰打ちで十分でしょ。）」

レッツは有効的かつ致命傷にならないと判断したルビーの指輪を付ける。二人は戦闘力の誇示という方のプライドをかけた戦いによって、次第に壁や床は砕かれてゆく。

「やめろ、二人共!!」

「クラピカ! ……マルを押ししてくれるよね?」

「いや、理的なお前なら分かっているはずだぜ。バツを押しして戦うしかないってな。」

「ぐっ……（やはり、仲間内で戦うしかないのか……!?）」

クラピカはレッツとキルアの戦いを止めようと呼びかけるが、最後の一人であるクラピカ

力の票を取り込もうと、ゴンとレオリオが呼びかける。

十十

キルア⇒レッツ⇒ゴンの順番で合格と所要時間のアナウンスが流れる。

「うゝ、痛いなあ、もう。」

「短くて簡単な道がスベリ台になってるとは、思わなかったね。」

「ちえゝ、またいつか決着つけてやるからな、レッツ。」

「キルア」

「あははっ（さて、と、イルミさんは…）」

レッツが愚痴を零し、ゴンは感想を言う。キルアのみ方向性が異なり、それにゴンが少々、怒りをにじませる。レッツは笑いながら、しっかりとギタラクルの方向に「念文字」で念はバラしてないし、バレてないと書く。ギタラクルはコクリと頷いた。

「全く、イチかバチかだったな。」

「長く困難な道から入って、壁を壊し、短く簡単な道に出るなんてな。」

次にレオリオとクラピカが来て、同じく合格と所要時間の放送が入る。各々感想とその発想がでた、ゴンを褒める。

「（あの、極限状態で、二択をぶち壊すことができる発想か……これは家族内では学べな

かったことだな。ゴンはすごいや。)……さ、皆、手がマメだらけだろうから治療するよ。」

そんなことをレッツは思った。

「《残り、3時間》です。」とそこで放送が流れる。

〳〳〳

治療が一段落し、《残り、2時間》をどう潰すかあたりを見回す。

「え？」

そうレッツがこぼすのも無理はない。まさか、ヒソカが右肩と左腰に裂傷―トガリの【無限四刀流】によるもの―を負っているのだから。すぐさまギターラクルに【念文字】で確認するが、分からないと返事が来る。そこにゴンが質問する。

「どうしたのレッツ？」

「いやね。まさか、ヒソカがダメージを負うなんてね。…この試験官にそんな方法が

…？」

レッツは挑みはしないが、顎に手を当てて、どうやったのか、聞こうと考える。与えた本人である、トガリはヒソカに首を刎ねられ、死亡したので聞けないが、監視カメラにはモニターされてはいる。モニタリングしていたリッポーから聞けるだろう。

〳〳〳

「《残り、三分》です。」とそこで放送が流れた。

「ようやく終わりだ。」

「ああ、長かったな。」

「三次試験は、ここにいる、二十五人で終わりだな。」

三兄弟が番号の大きい人から順番に言う。そこに扉が開く。

「ハア ハア ハア フ フ、間に合った……………ぜ。」ドオ!!

その倒れた受験生に、ゴンやレオリオは駆け寄る。

「……………ダメか」

「せつかくここまで来たのに…」

「バカな奴だぜ。死んで合格よりも、生きて再挑戦すればいいのによ」

(全くだよ) な

レオリオが首元に手を当て、脈を図るもすでにこと切れていた。ゴンも気の毒そう
な顔を浮かべる。 大きい番号の三兄弟の内、最も番号が大きい男の死者をも冒瀆する
ような言葉に二人はいい顔をしなかった。 内心でレツとキルアはその男の方の意見
に同調していた。

その直ぐ後、

《タイムアップブー！！》

最後にそんな放送が入って締めくくった。

《第三次試験、通過人数は二十六名！！ 内一名死亡！！》

No. 13 / ヤミ?ノ?サンニングミ

四次試験官も務める、リッポアの説明が始まる。

「諸君、タワー脱出おめでとう、残る試験は第四次試験と、最終試験のみ。第四次試験は、ゼビル島にて行われる。では早速だが、諸君にはこれから、クジを引いてもらう。」

「クジ……?」

「それでいったい、何を決めるんだ?」

「『狩る者』と『狩られる者』」

ポックルとハンゾーの質問にリッポアは答え、続ける。

「この中には、25枚のナンバーカード、すなわち今残っている諸君らの、受験番号が入っている。」

リッポアの説明が終わると、一枚ずつ、早くタワーを降りた者順に引いていくことになった。

順番を待ちながら、レッツは思考する。

(えっと、いわゆるハズレの番号として、44番・301番・302番の僕は、使える以上ダメで、99番と294番も僕ら寄り強さの基準として、蜘蛛の団員のレベル)が一

人前であり、自分は半人前であると思っっているのプロだから、それもハズレ。 うん、博打が過ぎる。 …運否天賦に任せるしかないかあ…。)

そんな事を考えある種、祈りながらカードを箱から引く。

「全員、引き終わったね。では、そのカードに貼られた、シールを剥がしてもらえるかな。その番号が、それぞれのターゲットだ。」

続けてリッポーはカードは好きに処分しても良いこと、ナンバープレートの点数配分、合格条件は六点分のナンバープレートを集めることなどを伝えた。説明が終わると、レッズはリッポーに接触した。

「三次試験担当の人は何処？」

「…私が三次試験官でもあるのだが、何か聞きたいのかな？」

「うん、ヒソカ…44番に傷を負わせた人、もしくは方法を知ってるかな？ って。」

「その人物は死んだよ。私もモニターしてたから手段は知ってるが、これからの四次試験官でもある為、君にもむやみに情報を与えられない。」

「あー、メンチさんは、試験が終わったから教えたのか…。 うん、じゃあしよがな
いね。」

その方法は、立場があるため、今は聞けなかった。

~~~~~  
 〈舟の上〉

受験生は小舟に乗り、ガイドを務めるカラのアナウンス等を聞く。

「くく向かいまあーす。ここに残った25名の方々には、『来年』の試験会場への無条件招待券が与えられまあーす。たとえくく」

(……この人、合格条件を知らないのかな? 奪うこともそうだけど、早抜けがない以上、手っ取り早いのは、狩りに来た者はもちろん、狩る者も奪われた後にリトライすれば六点、一気に集まり得る。となると殺したほうが良い以上、『来年』があるのかどうか…… 多分、皆も気付いてるから、自分のナンバープレートをしまい込んで、こんな辛気臭いんだろーなー。明日をも知れないわけだし。)

それを聞きながら、考える時間はたつぷりあるので、そんなことを考える。例外的にナンバープレートのを晒しているのは、念能力者のみだった。

その時、ゴンとキルアがレッツのほうに集まる。

「レッツはプレート、付けっ放しなんだね。」

「僕は着けてても、奪われないう自信があるからだけど。それに僕達、かなり目立ってるから、今さら隠しても遅くない?」

「ま、そうだよな。……ってか、ゴンはどうなんだ? オレ達はプロだからともかく、ゴン

はヤバイだろ。」

「あはは、それがさ。」

するとゴンはナンバーカードを取り出す。そこには☒44☒と書かれていた。

「マジ……?」

「うん……来年、また頑張りなよ。」ポン

キルアは驚き、レツはゴンの肩に手を乗せる。当然ゴンは反発する。

「む、今は正面から行っても敵わないのはわかってるけど、それでも聞きに来たんじゃん。」

「と、言われてもなあ。」

「ああ、彼我戦力が違いすぎる。」タラリ

レツはゴンに出来る範囲の事でヒソカから勝つ、ないしはプレートを奪う方法など思いつかず、キルアも試験前の謎のプレッシャーを感じたのもあって、冷や汗を垂らす。

ゴンはその言われように苦笑しながら聞く。

「じゃあさ、二人のターゲットって誰なの?」

「ん? じゃあせーので見せっこしようぜ」

「いいよ。せーの、」

キルアのナンバーカードには☒199☒レツのナンバーカードには☒198☒と書か

れていた。

それを見てゴンは確認する。

「ん? この番号つてタワアの最後に、話しかけて来た三人組だよね? ……つてことは、

二人は一緒に行動するの?」

「あー、誰のかわからなかったけど、あの連中か、なら三人まとめて狩れるつて!」

「そういう事。だから効率を良くするためにバラバラに行動するよ。」

キルアは興味が薄い人物はとことん覚えてなく、続くその発言にレッツも同意する。

「じゃ、どっちが早いかな勝負だな? レッツ。」

「残念だけど、この試験に早抜けは無いから、それは成立しないよ。」

「あはは、二人共頑張りなよ。」

「そっちもね(な)。生き残りな(れ)よ、ゴン。」

その言葉にゴンはサムズアップを返して、三人は別れた。

くくく

〈一日目〉

《二分経過、それでは22番の方、スタート!》

(…この、ルールからすると、先に行ける方が後の人がターゲットだと、動向を伺える。

…うん、視線を感じるな。【円】しても、どの人が僕を狩る者なのか分からないから、意味がない。…ウボオーとか、フェイ兄さんなら「さつさと皆殺しにすれば良い」って、言うんだらうな。…となると、足に【流】!

そのアナウンスが聞こえるや否や、先に入った受験者を撒くことにしたレッツ。走りながら、レッツはさらに考える。

(この島は広いなく。まずは、全部一周してみるかな。できるだけ早く見つけて、ヒソカの観察したいし。)

そうして、しばらく走っていると、ターゲットの兄弟を見つける。

(居た、けどピンポイントで僕の×198番だけいないなく。なら、合流したら襲うか。

【絶】して…ん? あの人は…)

レッツは、この場にもう一人潜伏していたのを見つけ、その姿を見ると向かって行った。

++++

(ターゲットは、二人で行動してるな…。気を伺うしか——!?! ちい! 俺を狩る者か!?)

潜伏していた人物、ハンゾーは飛んできた木の实を躲す。その木の实は、木に命中すると、メキメキと音を立てて、ゆっくりと折れる。そしてその人物を見るやいなや、おしゃべり忍でもあるハンゾーは話す。



「!? なんだ、あの威力は!? …嬢ちゃんが俺を狩る者かい? なら、クジ運が無かったと思つて、今年は諦めな!!」

「いや? 違うけど?」

「ハア!? 一点を三人から奪うにしても、俺からか!? 俺と他の受験生の実力差がわかんねーほど、てめエは未熟でもねエだろ!! お前、俺に何の恨みがあるんだ!?!」

「わかつてるけど、二次試験の時メンチさんに喧嘩売つたつて聞いたから。せつかく見つけたし、一発殴りたいかなつて。」

「ハア!? …ああ、お前も違う形のスシ、知つてたな…。 つて、それただの八つ当たりもいところじゃねえーか!?!」

「うん、わかつてるよ。」

「このクソガキ…! てめーのせいで、ターゲット見失つちまつたじゃねえーか!?!」

「え? あ!!」

「…おい、テメーのターゲットは、199番とか言うんじゃねえーだろうな?」

堂々とレツの八つ当たり宣言にイラつき、すっかりその場を離れた兄弟を見失つた事に対して、怒鳴り返すと帰つてきた反応にハンゾーは聞く。すると、懐をレツは探るの警戒度を上げる。

「違うよ。僕のターゲットはコレ!!」

「あの場には居なかった、あいつらのもう一人の兄弟の番号じゃねえーか!! …少しばかりお仕置きしてやる!!」

「僕も、君を一発殴らせてもらう!!」

懐から出した、ナンバーカードを見ると再びツツコむハンゾー。流石にイラつきが限界に達したハンゾーは喧嘩を仕掛ける。レッツもそれに乗り、誰も得しない戦いが始まった。お前ら、真面目にやれ。

\*\*\*

先に仕掛けたのはハンゾー。手段が選べるのならやはりなるべく綺麗な手段を選びたいと思える程度に、ハンゾーはまだ若かったのだが、試験前の戦いから手加減は無用と判断し、手持ちの手裏剣を投げる。

「シーー！」

「危なっ！」

その手裏剣を左に避け、木に潜む。レッツも相手をむやみに殺したいわけでは無いので、手段を選ぶ。

（どうやって殴ろっかな? まず【凝】や【硬】を施すのはダメ。となると【纏】で、そうだな…）

レツが木に潜伏したのを見たハンゾーは接近戦を仕掛けようとする。するとズバア!!という音と共に燃え盛る木が自分の方に倒れてきて、慌てて回避する。

「なんじゃこりゃあ!? 火種をどつかに持つてんのかよ! じよ、冗談じゃねーぞ! なんちゆう凶悪なエモノ持つてんだこのガキ!」シユツ

慌てているがゆえにコンマレベルの時間の回避では、避ける場所も前方に進むしかなかったハンゾー。

「じゃ、そういう事で!」

「ガアフウア!」

そのスキを狙われ、アツパーカットを食らうハンゾー。ふらふらになりながらも、特製催涙煙玉で離脱を図る。だが、僅かに仰け反りもするハンゾーの手の挙動が分かる、レツは足に「流」で後ろに回る。

「は、はや——」

「お休み!」

スコーン!とやけに甲高い音の峰打ちを頭に喰らったハンゾーは、前につんのめり、ドオ!と倒れ伏した。

\*\*\*

「夜の帳が下りた」

「う…」

「あ、起きた？ 一応、治療して置いたけど。あと、安心して。プレートは盗ってないから。」

ハンゾーが気絶から目が覚めると、そこにはレッツが居た。さすがに冷静になると、正攻法で二次試験後半を合格できていたであろう人物（ハンゾーは真つ先に谷にダイブ組）からの怒りはもつともなので疑問を尋ねる。

「…俺なんか放つとけば良いのに、なんでそうしなかったんだ？」

「君もスシ知ってたし、魚の扱いを見て欲しかったからかな。…はい、コレ。」

「お、おう…」

差し出された焼き魚を食べようとするが、パチパチと音をさせ、煙も昇る焚き火にツッコむ。

「…って、そうじゃねーよ！ こんなところで、煙立てたら誰かいるってバレバレじゃねえーか!!」

「？ 僕と君、強いでしょ。…あー確認するけど、ターゲットは□I97□番でいいんだよね？」

「お、おう…。ホラ。…ってことは共闘しろと？」

ハンゾーはナンバーカードを提示し、そして思いつく。

「あー、ホントに☒I97☒番なんだね…。 三人揃って、ご愁傷様というか…。 それと、共闘とか仲間というよりはギブアンドテイクの一对三対一を作りただけ。無闇に気を散らすのも良くないしさ。」

「…なるほどな…それは理解した。 じゃ、いただくわ。」

レツの話に納得したハンゾーは、焼き魚を食べ感想と仕留め方のコツを語る。

しばらくすると、再びハンゾーは聞く。

「そういや、『三人揃って、ご愁傷様』とかなんとか言ってたよな。…もう一人の、☒I99☒をターゲットにしてる受験生を知ってる、ってことだよな?」

「うん。 その子はキルア。 99番の銀髪の子。」

「あの小僧か。 じゃあ仲良さそうにしてたけど、なんで離れているんだ?」

「あく、キルアも暗殺一家の御曹司っていう、僕らよりの人種。 あと、ゴン…405番の黒髪の子が潤滑油になってたからそう見えるかもだけど、僕たちはそうでもないと思うよ。」

「は? あんなに仲良さそーだったのにか?」

「君なら分かるんじゃないの? 僕らのような人種は距離感が分からないっていう感覚。」

「…俺は、自分から喋りまくるから、そういうのは良くわかんねエーな。」

「その単純さが羨ましいな。…ていうか仕事もそうなの？」

「いや、流石にそこらへんは使い分けてるわ。オメーもたまには難しく考えず直感に従ったらどうだ？」

そこまで会話すると、レツは腕を組んで唸ってしまった。それを見たハンゾーは苦笑して、さらに喋りまくる。

「あの兄弟も哀れだな。雲隠流の上忍と暗殺一家の子供。」

「それに不思議な手段を扱う僕っていう、闇寄りの三人に狙われるとか、質も数も向こうに勝ち目がないもんねエー」

「ホントにな」

下手な念使いにすら、念が使えなくとも勝てる可能性がある、どっぷり闇に浸かった人間×3。

内訳は、『忍者』・『蜘蛛』・『暗殺』。哀れすぎる…。

そういう会話をして、仮眠を交互に取った。…これも二人以上のメリットである。

〃〃〃

〈二日目〉

「じゃ、探す所からだな。」

「うん。探知系の技を使いながら行くよ。」

「そんな技術、見せても良いのか?」

「これは誰でも出来るから、特に問題ないよ。」

「マジかよ…。 昨日の炎も謎だし、ビックリ箱みたいだな。」

念を知らないハンゾーは、その不思議すぎるモノに闇の秘伝技術的なのを気にし、尋ねるが杞憂だった。

「あはは。じゃ、はっじめのよー。(一円)！)…ん? あそこに誰かいるね。」

「おう、早速か。 多分、どちらかを狩る者だよなあ。」

その草むらから出てきたのは、黒い丸刈り頭と点のように小さい目が特徴的で拳法着を来た男だった。

「…そちらは二人ですか。 私のターゲットは男の方なのですが…: 武術家は常在戦場。 二人で来られても卑怯、などとは言いません。 お相手願います。」

「おつ、そう真っ直ぐなのは嫌いじゃねえーぜ! 望み通り一対一で相手してやる!」  
そのハンゾーの言葉にケンミはひとつ頷くと構える。

\*\*\*

「俺の勝ちだな。じゃ、プレートを渡してもらおうか。」

勝者であるハンゾーが言うのと、ケンミはプレートを差し出す。

「いいセンいつていたが、不運だったな。また来年、頑張るな。」シユツ

そう言い残すと、ハンゾーはその場を後にした。合流してレッツと再び木々を移動すると、レッツが話し出す。

「…ハンゾーは優しいね。」

「あん？ 一点にしかなんねーのに、一応プレートを奪った俺がか？」

「だって、分かってるんでしょ？ ハンゾーにとっては一点にしかならなくても、再び挑んできたら向こうの人からすれば、一気に六点になるのに。それを防ぐには殺してしまった方が早いのに。」

「あの真つ直ぐさが、気に入っちゃったからなー。俺も甘いとは分かってるが、やっぱりなるべく殺しを、回避できるならそちらの方がいいもんだ。」

「…僕以外にも、そういう不必要な殺しはしない人種に初めてあった。僕のような考え方は少数派だと、思ってたよ。」

「あのガキとかオメーに技術を仕込んだ奴とかは違うのか？」

「うーん、キルアは三次試験に向かう飛行船で、二人殺ってるからね。」

「…二次試験の合格数と、三次に挑戦した人数が、違うのはそれが理由か…。」



「僕の家族からは、散々馬鹿にされることだろうし。喧嘩は買うどころか、盗み殺してでもやるっていうのが半分。もう半分は今のケースだと殺つちやう方が、僅かでもメリツトがあるから殺る、っていう感じだし。」

「…失礼と分かつてるが、どこの外道だお前の家族!」

ハンゾーの反応に、レッツは苦笑していると、どこかへ向かっている兄弟を見つけたので、二人は会話を止めて追跡と潜伏に徹する。そこには兄弟の最後の一人と、キルアが居た。

「兄ちゃん!!」

「!? (これは、オレの勝ち、かな。)」

「ちよいと手間どつちまった。」

「そつちはもう終わつてるよな。ん?」

アモリとウモリは、キルアを目視する。イモリはドツかれるのを覚悟していたが、来ないので疑問に思い聞く。

「ヒツ ……………? 兄ちゃん、怒らないの?」

「あく、手間どつちまったのは、それが理由でな。」

「赤つ恥モンだが、狩る者に気づけなかったのに、気づいたのが302番の嬢ちゃんだな。」

「そういう理由で、あんまし、強く言えねーんだわ。」

アモリとウモリが交互に発するその言葉に、ゴクリと唾を飲むイモリ。その言葉が聞こえてるキルアは不満を抱く。

「(あいつ、オレより速く接触したのか…。なんで仕留めずに別の方いったのか、わかんねーけど。) オレはレッツよりも強いから、全員でかかってきなよー。 …あんたらの中にさー、オレの欲しい番号もあるんでしょー?」

ムカチン(…ごめん、ハンゾーさん。ちよつとお灸すえに、後ろに回るよ。)

(まあ、ギブアンドテイクって言ってたしな。それでいいぜ。)

それをしっかりと聞いてるレッツ。ハンゾーは小さく溜め息をつきながら返事をする。

「ウモリ。」

「ああ、フォーメーションだ、マジでいく。こいつ、あの嬢ちゃんと同じく、タダのガキじゃねエ。」

そして、三兄弟は正面、左、右の三方向からキルアを囲む。瞬時にキルアは木から上に行き、アモリの背後を取る。そのまま鋭くした爪を突きつけた。

「コイツはI97番か。これくらいじゃ数はそっちが上だから折れないよね。なら…」

プレートを取ったキルアは、アモリの服の襟を掴むと、上に放り投げた後、16トン

掌底を腹にいれ、イモリにぶつけた。

「ゴフウア!」

「ギャツ!」

そのままキルアは近づきプレート回収する。

「あれ、こっちはレツのターゲットか。もーオレってこういうカンはずげー鈍いんだよな。」

そのまま、猫の耳と尻尾を幻視するキルアが最後のプレートを欲し、少し脅す。

「くれなかつたら、気絶してるこの二人を放り投げるだけだから。」

「あーあ、キルアだけで終わっちゃったね。…それと飛行船の中みたいに必要な殺しはやめなよ。」

その言葉にウモリはプレートを投げる。先ほどの会話による自信をつけたレツは、キルアを諷めるために飛び出す。プレートを受け取ったキルアは、猫の毛並みが逆立つように、鋭い目でレツに問いかける。

「……おい、あいつを尾行してて、今この場に來たってことは、この近くにいたんだよな?」

「そうだね。だから、さっきの言葉は訂正してよ。僕より強いとか言う血迷った言葉は。」

「ググ……！」

レツの言葉にちよつと不機嫌そうに表情を歪ませてイラつくキルア。実際に、決して気を抜いていたわけでもないのに、近距離にレツが居て、それに気付けないのは不服の上、暗殺者として致命的なミスである。

するとキルアは口角を上げて、のたまう。

「ならば、このいらぬプレートは……!!」ビュオオツ      ギュオオオ

「ハア、まあ予想通りの反応だけど。」

「残り五日あるとはいえ、追っかけた方がいいんじゃないやねえーの?」

「わかつてるよ……。でもムカつくから……！」

キルアは遠い所へプレートを投げる。ハンゾーはすぐさま、プレートを追いかける。レツは溜め息を零し少し話すと、先ほどの挑発にムカついていたレツは【絶】とあらかじめ採った、キルアの服の中に痒みが生じる草をぶち込んだ。

「くくく!?    なんだこれ、痒ツイイイ!?」

「アハハハハ!    流石に訓練していても、痒み耐性はなかったようだね!!    じゃ!」

「あつ、こら待て!    レエツウウウー!」

キルアの遠吠えをバックサウンドにもう一つのプレートを足に【流】して取りに行つたレツ。

…ちなみにこの場には三人も居たが、怒濤の展開に言葉も無かった。

くくく

### 〈三日目〉

他人の嫌がることを考える力は天下一品な団長・クロロシルフルの子供っぽいところがあるモードの“嫌だと思ふことは効果的だから、的確に他人へ行え”という躰の賜物をキルアに行つたレツは、無事?プレートを回収した。番号は□197□である。

「キルア…。ハンゾーにも気づいていてワザと逆の番号を…。(ちよつと罪悪感あつたけど、完全に無くなつたね。) …どうにかして、ハンゾーと交換できたらな。」

……さつきから感じる、このイヤなオーラはヒソカのだよね…。 居場所が分かつて、止まつたままだね。【絶】で観察してみるかな。」

この時にはヒソカは、クラピカとレオリオの成長に欲情して、オーラや殺気を撒き散らしているのである。

そこに向かい、分析を行うことを決めた。

\*\*\*

(…何があつたのか知らないし、理解できないだろうけど、居た。 ……大分【練】が収

まったね。【円】を使うわけにもいかないし、厄介な…。）

「…よし、行くか◆」ユラリ

そんなことを考えながら、ひっそりと潜伏するレッツ。ヒソカも歩き始めた。

ちなみに、この場にはゴンもいるが、真向かいの茂みに潜伏して、気配も絶っているので、互いに気づいていない。数十秒ほど歩くと、ニイイと笑ったヒソカは走り出す。

（くっ！ 速い！ 追うのが精一杯だなんて！）

レッツも頑張って追いかける。ほんの少し後に到着すると、胴体を覆うマントの剣士が剣を突き出し、ヒソカがその人物、アゴンを切り裂き、ゴンがプレートを横どったところだった。

（…ゴン、すご… あの、ヒソカからプレートを奪えるなんて…。拍手したくなるな  
〜）

そのまま、ゴンは茂みの向こうへ走り、ヒソカもプレートを奪った後、少し遅れて、そちらに向かった。

「ふう〜」。 …この場には僕だけになったね。 …うん、死んじゃってる…。（少し見てたけど、この武器に速くなるのを組み合わせると…？ うん、相当良さそうな能力かも。） …決まり。まずはイメージ修行だね。」

~~~~~  
 〈五日目〉

同系統の武器プラス慣れもあり、早々に具現化に成功したレツ。

「うん、自由に出し入れできるね。……さて、どんなのを作ろう? 速くなるだけなら、体鍛えるだけでいいから……。何か別のを、制約は後回しで良いから……。……そういえば、この武器もういらぬいな。」うん。ヒソカに対してヒントもくれて、ゴンの合格の匣にもなってくれたんだったね。……せめて墓は作ろう。」

【鋭】で一人が入る穴を作ったので、何を墓標にするか悩みます。

（う〜ん、剣だけじゃこの人ってわからないな……。気が引けるけど、この青い服を剣に着せるかな……。青、か。サファイアは作ってなかったね。うん封じる指輪は決まり。）青いマントはせめて脱がすと、ナンバーカードがポトツと落ちてくる。

「(ん?) ……このカードは……」

レツがそれを拾うと、そこには☒302☒と書かれていた。

「……この人が僕を狩る者だったのか……。もう、狙われる心配はほとんど無くなったし、どっちみち関わるはずだったんだね……。」

そして遺体を埋め、鞆ごと剣を地面に突き刺し、青の服のみ着せて、アゴンの墓を作った。

「…ありがとうございます。」

レツは諸々の事にお礼を述べた後、その場を後にした。

〜

〈六日目〉

レツは能力付与を考えるために青い鳥がさえずる川、ゴンが特訓していた場所に来ていた。

「服の色は決まって、指輪に格納して、左手も作った…けど何を付与しよう?」

そう呟き、焼き魚と焼きリンゴを食べていると、手裏剣が飛んできた。

「!? 何!」

「無警戒にまた、煙立てていたから、油断してると思って奇襲してみたが、いらぬ心配だったよーだな。」

そこに姿を表したのは、やはりハンゾーである。

「あ! やつと見つけた!」

「おう、また煙が上がるもんだから、比較的分かりやすかつたぜ。…あの濃密すぎる殺気を警戒して、しばらく近づくか、悩んだけどな。」

「あー、それヒソカの。」

「あいつか……。つてもしかしなくても近づいた、つてことだよな?」

「そうだけど、そこでね〜」

「おっと、面白そうな話の前に、やるべきことやってからにしようぜ。」

「そうだったね。はいコレ。」

「オメエのはこれだよな。…で、何を見てきた?」

☒T97☒と☒T98☒のプレートを同時手渡しで交換した後、暇つぶしも兼ねて、お喋りの続きをを促すハンゾー。レッツはゴンの見ていた行動のみだが、語る。

「ブハハハハ!! そりゃ確かに面白ーわ!」

クスクス「ホントだよね〜。見ていて飽きないし、僕らにはできない事だよ。」

「そうだな。たまには単純に、つっても俺も、そこまではできねーわ。」

そんな感想をお互いに言い合っていると。

ピクツ（「円」に、ひっかかったたな……。直前で気づけたとは言え、ハンゾーと合流後、一応張っていたけど。）

「おい、なんかいるんだな…?」

「うん。おかしいね、狩る者は撃退したのに。ねえキルア?」

その方向を見ながら呼びかけると、拗ねてふくれっ面しているキルアが出てくる。

「チィ、なんで気づけるんだよ!?! 相当自信あった、ていうかプロなのに!」

「それは僕たちも、プロってやつだからね。」

「…ていうか、この小僧、逆のプレートにしゃがった奴じゃねえーか！　ちよつとボコらせろ！」

「はあ？　オレが自分の実力で手に入れたプレートをどうしようが勝手だろうが。お前が間違えたから悪いんだろーが。なんで、ボコられなきやなんねーんだよ。逆恨みじゃねえか。」

「うるせえ！　わかってるよ!!」

「とりあえず、皆六点あるんだし、川沿いに下って集合場所に近づく？」

「それが良さそーだな。」

「そうだな。一応、この \square 362 \square があるから、交渉材料もあるしな。」

ハンゾーとキルアが揉めていると、レッツが意見を出し、二人も頷く。

最後のハンゾーの言葉にキルアは疑問を持つ。

「ハア？　この三人で負けうる奴なんているのか？」

「ヒソカのことでしょ。」

「ああ、あの濃密な殺気はヤバすぎる。三対一でも勝ち目はないと思うぜ、俺は。」

「…確かにな。レッツはゴンのこと見たか？」

「うん、ヒソカを観察していたら、ゴンがプレートを奪うところ見れたよ。」

「ハア!? ヒソカからか?!」

レッツとハンゾーの答えにキルアも同調し、三人は頷く。

三人は、ゆつくりと川の流れに沿って歩きながら話しだし、キルアの疑問に答えて、再び一連の展開を話す。

「アハハハ!! そりや面白れーわ!」

「あのヒソカの間抜け顔を見せれないのが残念だよ。あと、キルアも面白かったよ!!」
 「あ!! そういやレッツ! あんな特大の嫌がらせしやがって!! この辺りの水場を見つ
 けるまで、痒みが収まらなくて、大変だったんだぞ!」

「フーン、タイヘンダツタンダネ。」

「デメエ…!!」ピキピキ

キルアは痒みの恨みで、レッツに攻撃。

ハンゾーはプレートノすり替えの恨みで、キルアに攻撃。

レッツはキルアごときに、隠密が気付かれていたからの恨みで、ハンゾーに攻撃。

三つ巴の逆恨みによるプライドのための戦闘が始まった。

その戦闘は、夜の帳が下りて、夜目が利くとはいえ、見えなくなるまで続いた。

くくく

〈七日目〉

目覚めた闇の三人組。暇なお互い様であり、また声を出してもほとんど心配はないので、レッツが話題提供をする。お喋り忍びハンゾーも乗っかる。

「…聞きたいんだけどさ。やっぱり物量って強いのかな？」

「いきなりどーした？」

「いや、二次試験前半で豚を大量にヒソカにけしかけたんだよ。すこし手間取っていたからどうなんだろ？って。」

「しかし、ただ数だけではダメだぜ。それなりに硬いモンの必要はあると思う。」

「生物は効果的ではない？」

「そうなると思うぜ。」

「うくん…（フラン兄さんの能力みたいなのを付与しようと思ったけど、放出系のゴリ押しのためわりに。物による操作を選ぼうかと思っただけど… うん、シズク姉さんみたいに、非生物縛りとか？ これだけでは、まだ足りないよね…。）」

ちなみにキルアは、ゴンがプレートを奪ったとは言え、まだ見当たらないことにピリッとしているので混ざらない。

レッツが制約に関して、四苦八苦しながら考えてるだけで、その日は過ぎた。

~~~~~

〈最終日〉

ポオーー!!と船の汽笛が響く。

《ただ今をもちまして、第四次試験は終了となります。受験者のみなさんは、速やかにスタート地点へお戻りください。これより一時間を猶予時間と、させていただきます。それまでに戻られない場合、不合格とみなしますので、ご注意ください。なお、スタート地点へ到着した後の、プレートの移動は無効です。確認され次第、失格となりますので、御注意下さい。》

アナウンスが島に響き終わり、橋が架かりカラがチェックを入れていく。

《~~~~~ 302番、レツさん! と、合格者はこの七名かな? あら?》

そこにゴンが呼びかけ、アナウンスは、駆け込みセーフと言ひ、合格を認める。

「あ! レツ! キルア!」

「おー、ゴンも無事通過したか。」

「ちよつとキルア、無事じゃないよ。全身何かに噛まれてるし。…毒は? 大丈夫?」

「うん。解毒はしてあるよ。噛まれた傷だけ。」

「なら良かった。解毒は今すぐにはできないからね。」

そんな会話をして、キルアはムツとレツを睨む。レツはゴンを「癒しの碧玉／ホー

リーヒーリング」による治療をしていて、ゴンを取られたように感じる上、二人は気にしないというか分からないが、耳年増のキルアはこの中に飛び込めないのも、弊害であつた。勿論、このあとレオリオも治療した。

これにて四次試験が終わり、そのあと、レッツは改めてリッポーを訪ねると、リッポーは戦闘情報を明け渡した。それを聞き終わったレッツは、【兇】の有効性を感じていた。

## No. 14 / モウシユウ?ノ?サイシユウ

移動の為に飛行船に乗った十人の受験者達。

六日間の汚れを落とす為にシャワーを浴びたレツはこんなアナウンスを聞く。

《えー、これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は、二階の第一応接室までおこし下さい。 受験番号44番。 ヒソカ様から、よろしくお願いいたします。》

十十

——ヒソカの場合——

「まあ、すわりなされ。」

面談トップバッターにして今年度ハンター試験で一番の問題児が、座る前にまず訊いた。

「まさかこれが、最終試験かい?」

「全く関係がないとは言わんが、まあ参考までにちよいと質問する程度のことじゃよ。」

「ふうん……」

ヒソカが最も望まない、戦闘が全くない試験ではないことにとりあえず納得したのか、大人しく座布団の上で胡座をかき、面談は開始される。

「まず、なぜハンターになりたいのかな?」

最初の質問は、まるで就職の面接じみた志望動機だった。

もちろんヒソカの志望動機が平凡なものであるはずもなく、当り障りのない動機を取り繕う訳もない。

「別になりたくはないけどね ♣」

「けどオ?」

「資格を持つてると色々便利だから ♡」

「ホ、例えば?」

「例えば人を殺しても、免責になる場合が多いし ♣」

何の美点にもならない正直さを發揮して答えるが、ネテロはヒソカの危なすぎる思考に何の興味も示さず、さらさらと言われたことそのままメモしながら、さつさと次の質問に移った。

「なるほど。(質問1) では、おぬし以外の九人の中で一番注目しているのは?」

ネテロの次の問いに表情は変えぬまま、ヒソカは一拍間を開けたあと、静かに言う。

「99番 ♡ 302番とは手合わせしたし、405番も捨てがたいけど一番は彼だね ♣」



いつか手合わせ願いたいなあ ♣ くつくつくつ ♣

今にも鼻歌を歌いそうなくらい機嫌よく彼は答えて、低く笑う。

それをネテロは冷めた目で眺めながら、次の質問に移った。

「ふむ……。では、最後の質問じゃ。(質問2) 十人の中で今、一番戦いたくないのは？」

「それは、405番……だね ♣」

顎に手をやり、より真剣みを増した表情だが、ヒソカの答えはほぼ即答だった。

「99番もそうだけど……今はまだ戦いたくない……という意味では、302番もそうだが、405番が一番かな ♣」

単純に「戦いたくない相手」を答えるのではなく、ネテロが言った「今」という部分を重視して彼は答える。そしてやはり、「今」という部分を重視してヒソカはまた彼独特の不気味な笑みを浮かべ、粘着質な殺気を増幅させて遠慮なくネテロにぶつけながら言った。

「ちなみに今、一番戦ってみたいのは、あんなにだけどね ♣」

無礼・不躰が過ぎた尊大すぎる発言だが、ネテロはサラサラとヒソカの答えをメモして、そのメモを眺めながらしれつと言った。

「うむ、(´)苦勞じゃった。さがってよいぞ。」

しかしあつさりと躲され、ヒソカのぶつけた殺気は虚しくネテロをすり抜けた。ヒソカは思わず殺気を消し、仕方なく立ち上がって部屋を出る。

(……くえないジイサンだな　まるでスキだらけで毒気ぬかれちゃったよ◆)

部屋から出て無視や無反応というより、風に揺れる柳のように何もかもを受け流すその態度に、少し不満気ながらも、ヒソカは肩すかしを食らった気分ですう思い、廊下を歩き出した。

——ポツクルの場合——

(質問1の場合)

「注目しているのは404番だな。見る限り一番、バランスがいい。」

(質問2の場合)

「戦いたくないのは、44番。正直、戦闘ではかなわないだろう。」

——キルアの場合——

(質問1の場合)

「ゴンとレッツかな。405番と302番のことな。二人共、同じ年だからかな。…30

2番とは戦いたいね。」

猫の目のように細めながら、最後の言葉を付け足した。

(質問2の場合。)

「戦いたくないのは、53番かな。戦っても面白そうじゃないし。」

—— ボドロの場合 ——

(質問1の場合。)

「44番だな。いやでも目につく。あと、試験前の戦い、特に初撃の抜刀術から、私のポリシーに反するのだが、武闘家として302番とも、手合わせ願いたい。」

(質問2の場合。)

「405番と99番は、まだ子供だ。戦うなど考えられぬ。そういう意味では、302番も遠慮したい。」

—— ギタラクルの場合 ——

(質問1の場合。)

「99番・302番」

(質問2の場合。)

「44番」

——ゴンの場合——

(質問1の場合。)

「44番のヒソカが一番気になってる。色々あつて。」

(質問2の場合。)

「う〜ん……99・302・403・404番の4人は選べないや。」

——ハンゾーの場合——

(質問1の場合。)

「44番だな。こいつがとにかく一番ヤバイしな。∴再びの手合わせ、つていう意味なら同業者として99・302番だな。」

(質問2の場合。)

「戦いたくないのは、もちろん44番だ。」

——クラピカの場合——

(質問1の場合。)

「いい意味で405番。悪い意味で44番。」

(質問2の場合。)

「理由があれば誰とでも戦うし、なければ誰とも争いたくはない。」

——レオリオの場合——

(質問1の場合。)

「405番だな。恩もあるし合格してほしいと思うぜ。」

(質問2の場合。)

「そんなわけで405番とは戦いたくねえな。」

くくく

受験番号302番が呼ばれ、レツが応接室に入る。

「まあ、座りなされ。」

ネテロは他の受験生たちと同じように声を掛け、レツは座布団の上に行儀良く正座で座る。

「まず何故、ハンターになりたいのかな?」

「うん、ハンターにはなりたいわけでもないかな。…あと、戸籍がないから身分証明にあると便利だよって兄さんに言われたから、っていうのが受け始めた時の感想。」

「今は違うと?」

「うん、綺麗なものを集めるのに、良さそうに思ったからかな。　　:まだ分野らしいのは、決めてないけど。」

「なるほどのお。(…分野によっては、直弟子とウマが合うかも知れんのー。)」

そんなことを思いながら、ホントの目的は「発」の制作であり、メンチから聞き、四次試験の時、レッツに付いていた試験官の報告を受けているネテロは、これも本物に感じつつ、次の質問に移る。

「ふむ。では、おぬし以外の9人の中で一番注目しているのは?」

この質問に、腕を組み首を傾げるレッツ。

「……405番と99番に294・403・404番が距離感が分からないかな。　　:良意味、では注目してる。嫌な意味なら、44番。」

「ふむ……。　　:……では、九人の中で今一番闘いたくないのは誰かな?」

「今は合格を優先したいから、44番と301番の使える人、かな。あれ、言っただけ良かったのかな……。」

「構わんぞい。それはこちらも把握しとるからの。」

「なら、良くないけど良かった。」

以上の面談結果をもとに、ネテロは筆を走らせる。その結果を見て、愉快そうに笑う。

「ほお！ 思ったより偏ったのお！」

出来上がったものを見た試験官達は目を見開いて、それを凝視する。

「会長……これ、本気ですか？」

「大マジじゃ。」

「…確かに本気の日ですな。」

「ほ、本気の日、なんだ……あれ。」

ネテロが本気かどうか、ブハラが確認すると、ヒエヒエヒエと笑いながらネテロは肯定する。

サトツ曰く、本気であるらしく、メンチが確認する。

「これで、勝てば晴れてハンターの仲間入りじゃ。」

最後にネテロはそう締めくくった。

十十

四次試験終了から、三日後。飛行船が到着したのは、審査委員会が経営するホテルで、試験終了までは受験生の貸しきりになっている。と、ネテロが説明する。

そのまま最終試験官でもある、ネテロは試験のルールを説明し始める。

「最終試験は、一対一のトーナメント形式で行なう。」

体育館並みの大きな格技場に、おそらく試験官のハンターであろう黒服の男たちとともに受験者たちを集めたネテロは、布をかけたホワイトボードを前にそう言う。

「その組み合わせはこうじゃ!!」

ネテロが布を取り払うと、そこにはひどく歪なトーナメント表であり、露わになった組み合わせに受験生は目を見開く。そのトーナメント表は、ネテロの性格の悪さを如実に表したものとなってある。

(うぐん、これはヤバイかも)

レツの一回戦の相手は、ギタラクルであり、ただでさえ勝ち目が薄い、もしくは無いのに、次にあたるのは対抗心目当てで、確実に昇るであろうキルアである。はつきり言っただけでもない時点で、苦戦しないのだが、無駄に目覚めさせて、操作系の約束を反古にされても嫌なのだ。

「最終試験のクリア条件だが、いたって明確じゃ。たった1勝で合格である!!」

続く受験生の驚きをよそにネテロは続ける。

「つまりこのトーナメントは勝った者から抜けていき、敗けた者が上に登っていくシステム。つまりこの表の頂点は、不合格を意味するのじゃ。不合格者は一人、誰にで



も二回以上、勝つチャンスが与えられている。何か質問は?」

「組み合わせが公平でない理由は?」

「うむ。当然の質問じゃな。」

ボドロの質問にネテロは頷く。

「この組み合わせは今までの試験の成績をもとに決められておる。簡単に言えば、成績のいい者にチャンスが多く与えられているということじゃ」

その言葉にキルアがピクリと反応する。

「それって納得いかないな。もっと詳しく点数の付け方とか教えてよ。」

「キルア：… ゴンにまで対抗心だしてどうするの。」

「はあっ!?!」

レツは頭に手をあてて、(レツも乗ったのだが)キルアにとつて凶星な所を遠慮なくぶつ刺した。

「な、何言つてんだ!?! 俺が一体いつ、そんなもん気にした!?!」

「今、審査基準を食つて掛かつて訊いたのに言い訳の余地がないよ。散々、対抗心バリバリで僕とキルアは三次、四次と争つたじゃないか。その前科がある時点でさあ…。」

不満を言い当てられたキルアは、悔しいやら恥ずかしいやら腹が立つやらという、いくつもの感情が一気に湧き上がって若干パニくるが、道連れにカウンターをレツにも入

れようと足掻く。

「……じゃあ、レツは気にしてねーのかよ。」

「…多分、目的を見失わない事を優先してるんだと思う。(「舌」を最優先にしているとハンター試験、全て通してそう感じるね。) だからヒソカからプレートを奪ったゴンが優先。目的が無いキルアや、見失なっていた僕が下。そのあたりだと思ってるから飲む。」

「…まあ納得できねーけど、百歩譲ってそれはいい。だが、レツとしてはヒソカより下も飲めるっていうのかよ!？」

「……」まで、説明してなんで分からないかなあ。もしヒソカがそんな人物なら、試験前で僕。あと、一次でゴンとクラピカとレオリオは死んで、ここに居ないよ。兄さん達は戦闘狂じみてる人もいるからね。そのあたりだつて予想する。ほら、目的に正直じゃん。」

その反論にキルアはカウンター材料がなくなってしまったので、引き下がるしか無かった。

シレつと言うレツの発言を聞いている四人、ヒソカは感嘆、ゴンは嬉しさ、クラピカとレオリオは戦慄しながらも、納得する。

(うゝむ、一番大事な印象値の部分の当てられてしまったな。そうじゃ。若人よ、目的

を見失ってはいかん。………ワシのようにな。」

ネテロはそんなことを思いつつ、続けて説明する。

「戦い方も単純明快。武器OK、反則なし、相手に『まいった』と言わせれば勝ち！ ただし………相手を死にいたらしめてしまった者は即失格。その時点で残りのものが合格。試験は終了じゃ。よいな！」

そのルール説明にレツは聞く。

「ちよつと待つて、僕達は試験が終わるまで、この格技場から出られないんだよね？ 食事とかはどうするの？」

レツの質問に受験生は訝しげな表情を浮かべるが、ネテロの性格の悪さを知っている試験官、ゴンの性質をある意味、一番把握しているヒソカは驚かない。それが必然だからだ。

「ホッホ、心配無いぞい。試験がおわるまで、このホテルは貸切じゃ。ゆえにその辺りは手配済みじゃ。」

そのネテロの言葉に納得したレツは頷く。

~~~~~

「それでは、最終試験を開始します。第一試合！ ハンゾー対ゴン!! 前へ！」

ハンゾーとゴンが前に出て、他の受験生は壁際に寄る。立会人を務める試験官がま

ずは名乗った後、ハンゾーは四次試験では受験生一人一人に試験官が尾いていることを語る。ハンゾーはそのまま礼を言っておくというのに、レツは思う。

(…二人共ウボオー並に似た者同士で、折れないだろうな。実力差とか関係なく、どちらも長引くこと確定。 …一日はかかるかな？ 殺したら失格だしね。)

「それはそうと、訊きたいことがあるぜ！」

「何か？」

よくしやべる奴だと内心で呆れながらマスターが先を促すと、ハンゾーは改めて試合のルールを確認した。

「勝つ条件は『まいった』と言わせるしかないんだな？ 気絶させてもカウントは取らないしTKOもなし。」

「はい……それだけです！」

(なるほど……、こいつはちつと厄介かもな)

それを横目にレツはキルアに話しかける。

「キルア、キルア。」

「なんだよ……？」

「絶対ヒマになるからさ、どっちが勝つか賭けない？」

「ハア？ ……ゴンには悪いが、絶対あのハンゾーの方の勝ちだろ。」

「じゃあ、僕はゴンだね。賭けた理由は、どちらも似た者同士だから。」

「どういう意味だというのだ?」

「僕は大量にパズルのピースは出した。ヒマになるんだし、クラピカも考えなよ。」

最後のクラピカの質問には答えずにクイズを出し、生真面目なクラピカは腕を組み、本当に本気で考える。

それとは、別に試合が「始め!!」の号令ともに開始される。

開始と同時にゴンが横に全力で走り出すが、ハンゾーは音も出さず一瞬でゴンの目の前に移動する。

「!!」

「おおかた足に自信ありつてとこか。認めるぜ」

ハンゾーは鋭い手刀をゴンの首筋に叩き込む。舌打ちしながらキルアはイラつきを保持したまま、レッツに話しかける。

「今のを見ても、ゴンに勝ち目があるっていうのか? 賭けはやめさせねーけど。」

「やめる? 僕が? それともゴンが? …僕に対してだったらやめないよ。あとチップはどうする?」

「……………なら、命令権を一つ行使できるで。」

「いいよ。」

そのレツの反応に毒気を抜かれたキルアはチップを決める。

「さて、普通の決闘ならこれで勝負ありなんだがな……」

ハンゾーはメンドそうに眩きながら、ゴンを仰向けにして体を起こし、意識を覚醒させる。

「ほれ、目え覚ましな」

「っ……………」

ゴンは意識がはつきりするも、体が思うように動かず吐き気と目眩を起こす。

「気分最悪だろ？ 脳みそがグルングルン揺れるように打ったからな。分かったろ？ 差は歴然だ。早いところギブアップしちまいな」

「……………嫌、だ！」

即答したゴンに、ハンゾーはゴンの側頭部を平手で強く叩き、脳を再び揺らす。ゴンは脳を強く揺さぶられたゴンは強烈な吐き気に耐え切れず、嘔吐してしまう。気絶出来るほどではないもの……完全に攻撃ではなく拷問の手段を用いて彼は冷たく言う。

「げほっ……………おえっ！」

「よく考えな。今なら次の試合に影響は少ない。意地張つてもいいことなんか一つもないぜ。さっさと言っちまいな。」

「……………誰が言うもんか！」

直後、ハンゾーは冷めた目で眺めながら次は腹部を蹴り上げる。脳がダメなら内臓を痛めつけることにしたらしい。ハンゾーは、どこまでも合理的に痛めつけられる拷問ゴンは再びうつ伏せに倒れて呻く。

(いや、ハンゾーさん、あなたがそれを言う?)

そんなツツコミを心の中に入れるレツ。それとは別に試合は、ハンゾーの「言え」という問いかけにゴンは答えず、意地を張り立ち上がるうとする。直後、ゴンの腹部に拳が突き刺さり、再びうつ伏せに倒れて呻く。その姿にレオリオがたまらず叫ぶ。

「ゴン! 無理はよせ! 次があるんだぞ! ここは——」

「レオリオ」

何げに思考をやめてはいない、クラピカが呼び止める。

「お前がゴンの立場ならまいったと言えるか?」

「死んでも言うかよ! あんな状態でえらそーにしゃがって!」

「じゃあ、ゴンも同じだ!」

「分かってる、分かってるよ!! だが言うしかねえだろ!」

「矛盾だらけだが、気持ちをよくわかる。(ここは引け! ゴン!! 自滅するぞ!)」

レオリオの矛盾な意見にクラピカも頷く。

プロハンターでも、ここまで子供に拷問なんて行為を冷徹に割り切れる者は、ごく少

数であろう。そんな拷問に耐える少年に、メンチは戦慄しながら呟く。

「全く……会長の性格の悪さときたら私たちの比じゃないわよ。気軽に『まいった』なんて言える奴がここまで残れるわけじゃないの。一風変わったところか、とんでもない決闘システムだわ……!! あのコ、やばいわよ。(あ、いや、いつそ死んだらいい方、下手すれば一生ハンター試験を受けるどころか、日常生活すらままならない後遺症を残す結果になってもおかしくないけど、念をさせるあのコなら治せるか。…だから、冷静なのかしら?) でもそれは、あのコが勝つっていう結果にはならないわよね。」

その戦慄はすぐさま解除され、先程レツが言った、クラピカに対しての質問にメンチも考え出す。

くくく

ゴンはまいったと言わず、ハンゾーはひたすらゴンを攻撃すること、三時間。

「もう……3時間だぜ。」

「もはや血反吐も出なくなっているぞ。」

ポツクルとボドロが慄くように言い、回復の力を体験していても、思いつかない、また思いついたとしても、止めるであろうレオリオが、遂に我慢の限界を迎え、怒鳴る。

「いい加減にしゃがれ……! ぶっ殺すぞためエ!! 俺が代わりに相手してやるぜ!」

その言葉に黒服とレツが止める。

「ダメだよ。ハンゾーもゴンと同じタイプ。…もう、答えを言っちゃうと、仮にゴンとハンゾーの実力が逆でも、同じようにこうなる。間違いなく、千日手になるんだ。

それを覚悟して行っている。…これを回避するには、どちらかが殺して、失格になる覚悟を決めるしかない。(ホントはそれがもつとも良さそうんだけど。ゴンもだけど、ハンゾーもヒソカが助けに入って、何かしらであいつが失格のルートになればなあ…。)」

(…なるほどな。食事などを確認したのは、その為か…。だが、それは……。)

「(…ヒントをもらったが、余計にめんどくさいってことが分かっちゃまったな…。)…見るに耐えないなら消えろよ。これからもつと非道くなるぜ。」

「なんだと……!」

思考しながら言い放つ、ハンゾーの言葉にレオリオのみ乗り出そうとする。クラピカはその答えに納得はしたが飲めていない、がまだ見守ることにした。

「二対一の勝負に他者は入れません。仮に、この状況であなたが手を出せば、失格になるのはゴン選手ですよ!!」

その審判を務めている試験管の言葉にレオリオは怒りをこらえ仰げ反る。

黒服が止め、レツは自分の言葉を聞かなかつたレオリオを一旦、無視しキルアと小声

で話す。

(とうとうか、まだ温いほうだよね。)

(うん？ 電流で気絶していたのにあれ以上の拷問知ってんのか？ レッ。)

(僕でも回復させることが出来ない、目や歯の破壊。あと、無理やり回復させての煉獄拷問とか、かな。)

(お前の家、オレン家よりイカれてーねーか？ ソレ。 …まあ、炎や毒、電気を使つてないからな。)

やがて、血反吐も出なくなる程の拷問にゴンが、耐えて耐えて耐え抜いた。その結果、ついにハンゾーが『取り返しのない結果』も辞さなくなった。

「腕を折る」

ハンゾーの言葉にレオリオ達は息を呑む。

「本気だぜ。言つちまえよ！ まいったと！」

「……い、嫌だー！ー!!」 ボギッ

会場に耳障りな音が響き、左腕を折られて悶絶し、床に額を押し付けるようにして腕を押さえて悶えるゴンに、ハンゾーはさすがに後味悪そうな顔をしつつも言う。

(流石に許容できないかな…？ 【凝】！ オーラの流れは断絶した感じで澱んでいな

い。 ……やっぱりハンゾーは優しいね。アレならさしたる問題もなく治療できる。)

「……さあ、これで左腕は使い物にならねえ。」

ハンゾーはゴンを見下ろして、言い放つ。しかし、その顔に余裕は一切ない。すると、隣から殺気が溢れてきて目を向けると、そこには歯を食いしばって怒りに震えるレオリオがいた。

「クラピカ、止めるなよ。あの野郎がこれ以上何かしやがったら、ゴンにや悪いが抑えきれねえ……!」

「止める? 私がか? 大丈夫だ。恐らくそれはない……!」

クラピカも目を見開いている。瞳が赤く点滅しており、怒りに震えている。レツはそれを見ながら、キルアに相談する。

(キルア、気絶させて。)

(まあ、殺されてもおかしくないな。たかが左腕が折られたくらいで騒ぐ程度なら、な。)

(そういう事。僕達は、二人よりは、)

(ゴンの覚悟と意地を優先する。)

「……まあ最後の望みだけと呼びかけるか……。あとハンゾーにも怒りが向かない言い方となると……」二人はなんでそんな騒いでるのさ?」

「……お前、今、何て言った?」

一通り思考してレッツは、レオリオの逆鱗に触れるように言い放ち、当然レオリオもクラピカもキレかける。

「僕達のような人間にとつて、まだまだ甘い範囲で収めてくれてるハンゾーも責めれないし、お門違い。」

「あれでか…？ あれが優しいだと…？」

「その程度で怒るなら、クラピカは復讐に向いてないよ。自分がアレをやることにならなくて覚悟は？ レオリオはともかく、クラピカは怒れない。それにレオリオも。」

…大前提にハンターは、どちらかというと言密猟者の討伐もあるし、賞金首ハンターなんてのもいる。総じて、僕達、闇寄りの拷問や、殺しが必要な職業だね。それでも我慢出来ないなら、ハンターに向いていないよ。だから、ここで辞めるってどちらかが宣言すれば終わるよ。ある意味、資質がないって判断にもなるから試験官達も納得するでしょ。」

「けどよお……けどよお……！」

そんな三人の会話に気付いていながら無視して、ハンゾーはゴンに言う。

「痛みでそれどころじゃないだろうが、聞きな。俺は『忍』と呼ばれる隠密集団の末裔だ。忍法という特殊技術を身につけるため、生まれた時から様々な厳しい特訓を課せられてきた。以来十八年、休むことなく肉体を鍛え、技を磨いてきた。お前くらいの年には人

も殺している。 レツの言うとおり、まだ優しい範囲だ。」

何故かいきなり片手で逆立ちをしながら語りだすハンゾー。 キルアとレツは、ちゃんと聞いていたが、彼らからしたら自分の家と同じような環境なので、「いばる程のことかよ。(な?)」と内心で切って捨てられる。

「こと格闘に関して、今のお前が俺に勝つ術はねエ!!」

いろんな意味で報われない反応をされていることに本人は気付いていないのか、ハンゾーは自分の身体能力を誇示する為、体を支えるのを掌から五指に、そして指の数も一本一本減らしてゆき、ついには人差し指一本で逆立ちをしたままキメ顔で言う。

「悪いことは言わねエ。 素直に負けを——」

するとゴツ!! と、ハンゾーの鼻っ柱に強い衝撃が走って、指一本で体全体を支えていたハンゾーは当然、派手に倒れる。同時に、ゴンは自分の入れた蹴りの衝撃に折れた左腕が耐え切れず、彼も転んで倒れた。 だが、すぐに体を起こして、左腕を押さえながら涙目で言った。

「つてくくそ!! ……でも、痛みと、頭はすこし回復したぞー!」

「よっしやアア! ゴン!! 行け!! けりまくれ!! 殺せ! 殺すのだ!!」

「それじゃ負けだよ、レオリオ…… (だが、冷静になるとそうだな。 ……今はその技術を観察し、盗もう。)」

ゴンの反応に便乗して、レオリオもテンションが上がって無茶苦茶なことを言い出し、逆に冷静さを取り戻したクラピカが静かに突っ込み、レツの話のことを考える。そんな声など聞こえていないようで、ゴンはハンゾーに言い放つ。

「十八っていったら、俺と六つしか違わないじゃん。それにこの対決はどっちが強いかわからない。最後にまいったって言うか言わないかだもんね。」

その言葉にハンゾーが飛び起きる。打ちつけた痛みで反射的に出た涙と鼻血を流しているのに決め顔をして、ぬぐう前に起き上がった。

「わざと蹴られてやったわけだが……」

「ウソつけー!!」

レオリオがツツコむ。ハンゾーはそれを無視して、鼻元を拭う。

「分かってねえぜ、お前。俺は忠告してるんじゃない。命令してるんだ。俺の命令は分かり辛かったか? なら、もう少し分かりやすく言ってやろうか?」

ハンゾーは脅かすように刃を見せつけて言う。

「脚を斬り落とす。二度とつかないようにな。取り返しのつかない傷口を見れば、「ハンゾーさん、それ僕が治療できるから脅しになってないよ。」……空気読め、テメエは!!」

「いや、だつてあまりのピエロっぷりについて……今のハンゾーは、ヒソカ以上に道化師の格好が似合うよ。」

そのセリフをついついレッツがインターセプトしてしまい、空気が緩んでしまう。

「(あとで、リアルファイトだ、このガキ! それはそうと、ありつただけの殺気を出すか。) : : : ならば、目を横一文字に潰す。 流石にこれなら治療できねーだろ。 今度こそ、取り返しをつかない傷を負えば、お前も分かるだろう。 だが、その前に最後の頼みだ。『まいった』と言ってくれ。」

気を取り直し、再度脅すと、殺伐とした緊張感が蘇る。

「それは困る!!」

しかし、速攻でその空気は持たなかった。 その言葉に全員がポカーンとしてしまふ。

そのまま、ゴンはその何とも言えない空気の中、真つ直ぐに堂々と言い放った。

「脚を切られちゃうのも、目を潰されるのもいやだ! でも、降参するのもしやだ! だからもつと別のやり方で戦おう!」

「な……つ、てめー! 自分の立場わかってんのか!? 勝手に進行すんじゃないよ、なめてんのか!! その目に耳あたりも、マジでたたつ切るぜコラアアア!!」

あまりのわがまま発言に、レオリオとクラピカは顎が外れそうなほど口を開けて唾然として、ヒソカは耐えきれなかったのか低く笑いだし、それにつられて堅物そうなボドロも「…失礼。」と言い嘖き出す。

当然ハンゾーはブチ切れて怒鳴り散らす、それくらいでゴンは揺るがない。このくらいで揺らぐのなら、ハンゾーは一時足らずで試験に合格しているのだから。

ゴンは相変わらず真つ直ぐにハンゾーを見据えて答える。

「それでも、俺は『まいった』とは言わない!」

言い切つてから彼は、しれつと付け加える。

「そしたら、血がいつぱい出て俺は死んじゃうよ。その場合、失格するのはあつちの方だよね?」

「あ、はい!」

マスタの答えにゴンは胸を張つて、ハンゾーにまたもや堂々と提案する。

「ほらね。それじゃお互い困るでしょ。だから、考えようよ。」

「あゝゝゝ、ゴン?」

「何?」

「ハンゾーも君と似てるから、どんな勝負でも互いに「まいった」って言わないし、今から、ポイント制とかを付け足してルールを決めるところまで、漕ぎ着けたとしても、両方合格になる手段を模索するか、負けても「もう一回」って言う結末が見えるよ? だから三日三晩以上、終わらないんじゃない? …究極的には、どっちが餓死するか、になるよ?」

そうレツが付け足すことによって、さらにカオスになる。ハンゾーの脅しは完全に自分の墓穴となり、逆にゴンによって脅される結果となったのに、そのゴンの脅しも意味がない、ということである。

「……………!!」

ハンゾーは二人の意見に何も言い返せず、だからと言って先ほどまでと同じような拷問も出来ずにタジタジとなつてしまった。ハンゾーは齒軋りをして必死に突破口を探り、剣をゴンの額に突き立てる。再び空気が張り詰める。

「やっぱりお前は何にも分かつちやいねえ。死んだら次もくそもねえんだぜ。片や俺はここでお前を殺しても、来年またチャレンジすればいいだけの話だ。俺とお前は対等じゃねーんだ!!」

だが、追い詰められているはずのゴンは全く揺らいでいない。対する有利だったはずのハンゾーは汗を流し、間違いなく追い詰められていた。それを見ながらキルアはレツに小声で話す。

（レツ、実際ハンゾーの言うとおりだろ。戦闘技術に実力差がありすぎるのに、何故試験が始まる前から、こう予測できた？）

（ん？ ……似てる人を知ってる、からかな？）

実際に空気を壊して攫うのは、クロ口の団長モード、子供モードでもそうである。

意地の張りあいでは、強化系三馬鹿が気に入り、彼ら自身もそうなることがある。そのリアルファイトはコインルールが無かったら、今のようになるだろう。

「何故だ。たつた一言だぞ……？　それでまた来年再チャレンジすればいいじゃねえか。命よりも意地が大切だったのか!?　そんなことでくたばって本当に満足か!?!」

「親父に会いに行くんだ」

ハンゾーの叫びにゴンは全く揺らぐことなく、力強く言った。

「親父はハンターをしてる。今は凄く遠いところにいるし、一度も会ったことはないけど。それでも会えると信じてる。でも、もし俺がここで諦めたら、一生会えない気がするんだ。だから退かない」

「退かなきゃ……死ぬんだぜ?」

己に誓う様に言うゴんと、改めて剣を突き立てて告げるハンゾー。それでもゴンはやはり揺らがない。

数秒見つめたハンゾーは目を瞑って、突き付けていた刃物を引いた。

「(理屈じゃねーんだな……) まいった。俺の負けだ。」

武器をさらしの中に仕舞いこんでハンゾーはゴンから背を向けて、降参を告げた。

「俺にはお前は殺せねえ。かと言って、お前にまいったと言わせる術も思い浮かばねえ。俺は負け上がりで次に賭ける。」

そう言つて、ハンゾーはゴンの前から去ろうとするが、何故かゴンは不満そうな表情を浮かべた。

「そんなの駄目だよ、ずるい!! ちゃんと二人でどうやって勝負するか決めようよ!」

ピキ「……言うと思つたぜ。馬鹿か、てめえは!! てめえはどんな勝負をしようがまいったなんて言わねえよ!! …いみじくもレツが言つたとおり、俺もな!」

「だからつて、こんな風に勝つたつて嬉しくないよ!」

「じゃ、どうすんだよ!?!」

「それを一緒に考えようよ!」

無茶苦茶理論をまだ展開するゴン。とうとうハンゾーは坊主頭に青筋を浮かせる。

「要するにだ。俺はもう負ける気満々だが、もう一度勝つつもりで真剣に勝負をしろと。その上でお前が気持ちよく勝てるような勝負方法を一緒に考えろと。こーゆーことか!?!」

「うん!!」

「アホかー!!!」

かなりイイ顔で返事をしたゴンだったが、ハンゾーの素晴らしいアツパーで吹っ飛んで今度こそ完全に目を回し、試験官に担がれて、控え室で手当を受けることとなつた。

「おい、審判。俺の負けだ。しかし、そいつが目覚めたら、きつと合格を辞退するぜ。一

度決めたら意志の強さは見ての通りだ。不合格者はたった一人なんだろう？ ゴンが不合格ならこの後の戦いは全て無意味なものになるんじゃないか？」

「心配ご無用。ゴンが何と言おうと合格じゃ。それは変わらんよ。仮にゴンがごねて僕を殺したとしても、資格が取り消されることはない。」

「なるほどな。」

そしてハンゾーは、次の試合まで待機すべく、部屋の脇に寄る。

「…意外だったな。ハンゾーも似た気質だから、最低でも丸一日はかかると思っていたから確認したのに。」

「そんなにか？ あと、空気を壊しやがって、レッツ、後でリアルファイトな。」

「……………なんで、わざと負けたの？」

「……………わざと？」

レッツの発言にもキルアの発言にも、ハンゾーはやや心外そうに言う。そのキルアはどこか拗ねているような顔をして、もう一度訊いた。

「殺さず、『まいった』と言わせる方法くらい心得ているはずだろ、あんたならさ。」

キルアの疑問に、数秒間の沈黙が落ちる。同じ疑問を抱いていた者はハンゾーの答えを待ち、気付いていなかった者はおそらくキルアの言葉で気づいたのだろう。ゴンにとって大事な人を傷つけるという脅迫の方が有効であるということに。ゴンも「親

父に会えない気がする」という『妄執』に囚われたが、ハンゾーの方にも「ゴンにまいったと言わせる術が無い」という『妄執』に囚われた、と言えなくもないのだ。

その疑問に、ハンゾーはほんの少しだけ考えてから答えてやる。

「俺は、誰かを拷問する時は一生恨まれることを覚悟してやる。その方が確實だし、気も楽だ」

「?」

「どんな奴でも痛めつけられた相手を見る目には、負の光が宿るもんだ。目に映る憎しみや恨みの光つてのは、訓練してもなかなか隠せるもんじゃねー」

しかし、質問とはあまり関係のないハンゾーの自分語りが始まって、キルアは意味がわからないと言いたげな顔になる。それを気にせず、ハンゾーはそのまま語る。

「しかしゴンの目にはそれがなかった。信じられるか? 腕を折られた直後なのによ。

あいつの目はもう、そのことを忘れちまつてるんだ」

言われて、キルアも思ひ出す。ゴンのあまりにも真っ直ぐな、真っ直ぐすぎてハンゾーすら通り過ぎて見ていなかった、あの眼を。

「気に入っちゃったんだ。あいつが。あえて敗因をあげるなら、そんなとこだ」

ハンゾーは自分の敗因をそうまとめたが、キルアは納得しかねる顔をしていた。しかし、どうして納得できないのかが自分でもわかっていないキルアには、それ以上何を

訊けばいいのか、どこを反論したらいいのかがわからずに黙り込んでいると、レッツが賭けの中身を言う。

「さ、賭けは僕の勝ち、だね。」

「……おう。だが、もう一度なら……！」

「ここから先は賭けは成立しないと思うけど……。」

キルアは意外にも素直に負けを認め、例のギャンブルの悪癖がここで初めて露呈する。レッツはその事に、対戦カードを思い返ししながら、話す。そこにハンゾーが割り込み、話し出す。

「おい、なんだ？ 賭けって。」

「ああ、今の試合、どっちが勝つか賭けていたんだ。結果はレッツの勝ち。」

「おし、あらためてリアルファイト確定な！」

キルアはうすら寒いものを感じたのをごまかすようにレッツとハンゾーにバトルになるよう、告げ口した。

言い返しやゴンの回復は、次の試合の関係上、審判によって遮られたので、今は後回しになる。

くくく

「第二試合！ ギタラクル対レッツ！！ ……それでは……始め！！」

審判の試験官が合図を告げる。しかし、さっきの試合に感化されたのか、熱くなりつつある場の空気と異なり、ギタラクルとレツは動かなかった。せつかくの機会なので、レツはまず指を立てて、【念文字】で『【発】は抜きで、ご教示願います』と書き、ギタラクルは頷いた。

それを確認したので、レツはしばらく一方的に攻撃するが、ギタラクルは翻弄していく。…その中でも、攻撃するのが優先される、体の中心沿いに攻撃を仕掛け、無言で格闘方法を教え込む。また、足技も多用する方法という、ギタラクルとレツ、四次で接触したヒソカや、卓越した武人のネテロ位にしか分からなかった。小一時間は戦っただろうか。やがて、身体を動かすことさえ激痛が伴うようになっていったレツは倒れ込んでしまった。またしても拷問が始まるのか、と思いきやギタラクルの方が『まいった』を宣言。なお、しっかりと自力で回復するので、救護室に行かず、レツは観戦を続ける。

以下、第三試合、ヒソカ対クラピカ。

試合開始直後から、クラピカは臆すること無くヒソカへと突撃し、勇猛果敢に攻め始めた。対するヒソカはどう見ても手を抜いており、明らかに手加減しているヒソカとクラピカが闘ったあと、攻防を見る限りでは実力の拮抗したい勝負に見えないこともないが、その表情を見ればどちらが優位かは一目瞭然であった。歯を食いしば

り、必死に食らいつくクラピカに対して、ヒソカは非常に気持ち悪い舌なめずりまでして、随分と余裕な表情だ。周囲の人間が固唾を飲んで見守る中、ついにクラピカの剣の片方がヒソカのトランプの斬撃によって両断され、使い物にならなくなる。一瞬怯んだクラピカの、その僅かな隙を突いて肉薄したヒソカは、何故かクラピカに攻撃するのではなく、顔を寄せ、クラピカの耳元で何かを囁くヒソカが、その直後に負けを宣言。クラピカの勝利、ヒソカの負け上がりとなった。

第四試合はハンゾー対ポックル。

先ほどの温い拷問を時間をかけて行ったのを反省したハンゾーは、速攻でゴンと同じような展開を辿らせ、

「……悪いが、アンタにや遠慮しねーぜ？」

「っ!? ……ま、まいった。」

この一言が決め手となり、ポックルがあっさり負けを宣言した。

第五試合、ボドロ対ヒソカ。

この試合も一方的なものであった。必死に攻め、防ぐボドロを、圧倒的実力差で以ってヒソカは遊びながら翻弄していく。翔るようなヒソカの攻撃により、やがて傷つき、倒れこむボドロ。そしてまたもやその耳元に顔を寄せ、何事か囁くという不気味な行爲を行うヒソカ。しかし今度はヒソカではなく、ボドロが負けを宣言した。こ

れもしつかりレツが回復を行う。もう、自分の合格は決まり、残量を節約することに、そこまで意味を持たなくなったためである。

第六試合、キルア対ポツクル。

レツがあそこまでポコポコにされた男に勝てば、間違いなく自分が優秀であり、今までの意趣返しになると考え、キルアが「悪いけど、次の人と戦って、レツに勝ちを証明したいんでね。」と自信たっぷりに言い、負けを宣言する。

第七試合、レオリオ対ポドロ。

万全に治療されたポドロは万全であり、延期など起こらず、しっかりと戦いその末、僅かに戦闘能力が上であった、レオリオが勝った。

くくく

第八試合、キルア対ギタラクル。

「始め」と声がかかるなり、自分の強さを誇示したい、キルアは実戦において、圧倒的有利である先手必勝を狙う。すぐさま後ろに周り、気絶を狙おうとするも躲される。続けて攻撃を仕掛け続けるキルア。その間に顔に刺さっていた針を引き抜き抜きだしたギタラクル。

やがて顔が戻ると、ここにいるはずのない、有り得ないと思っていた、自分の恐れている人物に、完全に萎縮してしまったのだろうキルアは、おそらく無意識に、一歩後ず

さる。

「兄……貴!!」

「や」

キルアの驚愕で彩られた声が響き、素顔を露わにしたイルミは気軽に声を掛けるのに対して、キルアは冷や汗が噴き出して、思わず右脚が一步後ろに下がる。

(……あれ? ここで自分からバラすんだ?)

レツはそんなことを思い、首を傾げる。それとは別に事態に困惑する周りの人間を置き去りに、マイペースにキルアに軽く挨拶をして、事実確認を問いかけた。

「母さんとミルクを刺したんだって?」

「まあね。」

「母さん、泣いてたよ。」

「そりやそうだろうな。息子にひでえ目に遭わされちゃよ。」

「感激してたよ。あの子が立派に成長して嬉しいってさ。」

「はあ?!」

家庭内暴力では済まない惨劇を聞かされてツツコミを入れるレオリオだが、続けて放たれた言葉にずっこけ、その他の人間は脱力、もしくは困惑した。

「『でも、やつぱりまだ、外に出すのは心配だから。』それとなく様子を見に行くように頼まれてただけだ。奇遇だね。まさかキルガハンターになりたいなんてね。俺も仕事の関係上資格を取りたくてさ。」

「……別にハンターになりたかったわけじゃないよ。ただ、なんとなく受けてみただけさ。」

「……そうか。なら、心おきなく忠告できる。お前はハンターに向かないよ。お前の天職は殺し屋なんだから。」

断言するイルミの言葉に、キルアは更に汗を流しながらもイルミを睨み返す。

「お前は熱を持たない闇人形だ。何も望まず、何も欲しがらない。陰を糧に動くお前が唯一欲びを抱くのは、人の死に触れたときだけ。お前は俺と親父にそう造られた。そんなお前が何を求めてハンターになると?」

分かり辛い愛情だが、レッツには分かってしまい、兄の『妄執』に囚われる。

(……こんな、とこまで似てるんだね。)

「確かに……、ハンターにはなりたいたいと思ってる訳じゃない。だけど、俺にだって欲しいものくらいある。」

「ないね。」

しかし、イルミは即座に否定した。自分の言葉は、キルアの本意ではないだろうとは

分かつてる。だが、そんなものを持って欲しくないから。弱ければ、何も得ることが出来ない現実を知っている。今はまだキルア自らが持つのはダメと考える。せめて一人前になってから。そんなことは、表に出すこともない。憎まれていた方が気が楽だから。

そうとは知らぬキルアは、もうその答えに怒りを覚えることなどなかった。そんなことしても、この長兄は何も聞いてはくれない、何も響かないことだって、この十二年間で学びつくして諦め続けてきた。

だが、ここで諦めてしまえば、次はくるのか。様々な選択を迫られた試験の中で、本当に向き合うのは、『今だ』ということを理解できたから。

「ある！　今、望んでることだってある！」

「ふーん　言つてごらん。何が望みか？」

興味がないどころかキルアの叫びを言葉として認識しているかも怪しく思えるほど、気の抜けた相槌を打たれたが、珍しくイルミは続きを促し、キルアは僅かに躊躇する。「どうした？　本当は望みなんてないんだろう？」

「違う！　……ゴンと……友達になりたい。　レッツとライバルでありたい。」

キルアは俯きながら言う。

「もう人殺しなんてうんざりだ。普通に二人と友達になって、普通に遊びたい。」

「無理だね。お前に友達なんて出来っこないよ。お前は人という者を殺せるか殺せないかでしか判断できない。そう教え込まれたからね。今のお前にはゴンが眩しすぎて、測り切れないでいるだけだ。レッとは今は勝てず、殺せないからだ。友達になりたいわけじゃない。」

「違う……」

「彼らの傍にいれば、いずれお前は二人を殺したくなるよ。殺せるか殺せないか試したくなる。何故ならお前は根っからの人殺しだから。」

そこにレオリオが一步前に入る。

「キルア!! お前の兄貴かなんか知らねえが言わせてもらうぜ! そいつは馬鹿野郎でクソ野郎だ、聞く耳持つな!! ゴンとレッと友達になりたいだと? ふざけんな!! お前らとつくにダチ同士だろーがよ!!」

「……!!」

「少なくともゴンはとつくにそう思ってるはずだぜ!! なんならレッに聞け!」

「え? そうなの? ……どうなの? レッ。」

二人が目を向けると、レッは左目から涙を流して答える。

「おい? ……どうしたんだレッ!?!」

「……僕もそんなのが居なかったから、『分からない』としか返せない。この涙は、教

育まで死んだ兄さんに似ていたから……」

その意見にイルミは望外の保証を手に入れ、一つ安心する。自分は間違っていない、
 と言いつけさせる。他の人は懐いていた上、言質をレッツから取れなかったのが予想外で
 もあった。なんとかレオリオは再度、怒鳴る。

「…だが、ゴンは絶対そのつもりだぜ！　バーカ!!」

「そうか……。まいったな。ゴンの方はもうそのつもりなのか。」

顎に手を当てたイルミは数秒考えて、決められたシナリオ通りに動かされる人形によ
 うに言う。

「よし、ゴンは殺そう」

「!!」

キラア、レオリオ、クラピカが目を見開く。

(…本当に優しいね。　分かりづらいけど、殺る気なんて感じられない。　これを言っ
 たらキラアの兄だし、同じよう反発するだろうけど。)

レッツはそんなことを憶う。　実際にイルミは「練」を使っていないのだ。　絶句する
 キラアや受験生、試験官達をよそに、イルミは相変わらず舞台上で演技をするように言
 葉を続け、観客たる周囲の反応とは別に、レッツは人形師として違和感を感じる。

(…?　なんだろう…?　どこか歯車があつていない人形劇に見える…?)

「殺し屋に友達なんていらぬ。邪魔なだけだから。」

「そう言うといルミは扉へと向かい始める。」

「彼はどこにいるの?」

「ちよ、待つてください。まだ試験は……あ」

止めようとした試験官の頭にイルミは針を突き刺すと、試験官の顔が歪に変形し始めて、苦し気に呻く。

「あ……? アイハハ……」

「どい?」

「ト、トなりノ控え室ニ……」

「どうも」

無理矢理針を刺した試験官からゴンの居場所を聞き出したイルミは、扉に向かって歩き始める。レオリオ、クラピカ、ハンゾーや試験官達が扉の前に立ち塞がり、レツは参加せずにその場を動かさずにつ立っていた。レツに立ちふさがるよう三人は言つてたが、首を振つたためである。それとは別にイルミは扉に悠然と進んでいて、封鎖を優先した。その距離からレオリオが言う。

「レツ! お前、兄に似ていてもゴンを殺すとかいうやつが、本当にそうなのか!!?」

「……………」

その怒鳴りは聞こえるが、殺す気を感じないイルミなのに、酷くズレてるように聞こえるので、動かなかつた。一応イルミに目を向けて、『バラしてもいい?』と【念文字】を送ると、針が飛んでくるので首を振って躲す。

それはレッツにとっては『否定』という意味合いと伝わるが、他からすれば勿論、異なる。

「おい!? …レッツ、今殺されかけてんじゃねえーか! それでもか!」

続くレオリオの発言にもレッツは沈黙する。そのままイルミは続ける。

「俺達の事なんか別に、君にわからなくてもいいよ。そこ退いてくれる?」

その発言に対して、誰も引かないのを見て、イルミは続ける。

「まいったなあ……。仕事の関係上、俺は資格が必要んだけどな。ここで彼らを殺しちゃったら、俺が落ちて自動的にキルが合格しちゃうねえ。うーん」

そしてしばらく考え込んでいたイルミだが、突如「そうだ!」と、いかにも名案という風に、しかしやはり棒読みで言い放つ。「下手すぎる演劇だなあ」とレッツは感じていた。

「まず合格してから、ゴンを殺そう!」

ビク、とキルアの身体が大きく震えた。全身に、尋常でない量の汗が流れだす。

「それなら仮にこの全員を殺しても、オレの合格が取り消されることはないよね。」

「うむ。ルール上は問題ない」

倫理上大問題な発言も、ネテロは眠そうな覇気のない目で淡々とそう返すと、イルミは僅かに頷く。そして、嫌な汗をだらだらと流しながらもイルミの背中を見つめているであろうキルアに言う。

「聞いたかい、キル。オレと闘って勝たないと、ゴンを助けられない」

イルミは振り向き、オーラをゆつくりと増幅させ、“ただ”の【練】を行った。レッツとヒソカにはイルミの淀み無く広がるオーラが見えたが、他の受験者には、そしてそれを向けられているキルアには、得体の知れない圧倒的なものとしか感じられないのだ。

「友達のためにオレと闘えるかい？ できないね。なぜならお前は友達なんかより、今この場でオレを倒せるか倒せないかのほうが大事だから。実際にさつきレッツに攻撃した時も、お前は見捨てて動かなかった。それが唯一の本性だからね。そしてもうお前の中で答えは出ている。」

——オレの力では、兄貴を倒せない。無理はせず、100%殺れると思った時のみ実行する。“” 続くイルミの言葉にも反論しない。

そんな家族の『妄執』に囚われるキルア。

「勝ち目のない敵とは闘うな”。オレが口をすっぱくして教えたよね？ 俺と戦って勝たないと、ゴンは助けられない。」

「動くな。——少しでも動いたら、戦い開始の合図とみなす。同じくお前とオレの身体が触れたその瞬間から戦い開始とする。止める方法は一つだけ。わかるな？」

オーラをまとったイルミの手が、ゆっくりとキルアに近付いてゆく。キルアの緊張が極限まで張りつめるのが、全員にわかった。レツもこれを繰り返されてきた事、特に琴線に触れてしまうと喰らったこともあるが、流石にわざわざ嫌な感じにしたオーラを目の前に近づけさせられたら気分が悪い。オーラや念の存在を知らないキルアにしてみれば、ケタが違う恐怖感と不快感なのだろう。

「だが……忘れるな。お前がオレと闘わなければ、大事なゴンが死ぬことになるよ」

キルアは、端から見ても気絶してしまうのではないかと思うほど緊張している。レオリオが再度大声でキルアに声援を送るが、聞こえているのかいないのか、彼はゆっくりゆっくりと近付いてくる兄の手から目を離せないまま、とうとう言った。

「……………まいった。オレの……………負けだよ」

レオリオ、クラピカが驚愕に目を見開く。キルアは完全に俯いていた。もう緊張はしていない。人形の糸は切られ、演目は終わったのだ。イルミはそんな弟を見遣り、一瞬黙って、僅かに失望するが、同時に安心したように、初めて笑みを浮かべて軽く手を叩いた。

「あーよかった、これで戦闘解除だね。はっはっは、ウソだよキル、ゴンを殺すなんてウ

ソさ。お前をちよつと試してみたのだよ。」

レツは「やっぱり」と思う。クロロやらのおかげで、嘘を見破るのはわりと得意だ。イルミは初めから、ゴンを殺す気などなかった。正しく失敗をしないように、試してみた、もしくは確認したのだ。

「でも、これではつきりした。お前に友達をつくる資格はない。必要もない。」

失望感があるイルミはキルアの頭を撫でながら、ゆつくりと、しかし半ば本気で言った。

「今まで通り親父やオレの言うことを聞いて、ただ仕事をこなしていればそれでいい。ハンター試験も必要な時期がくればオレが指示する。今は必要ない。」

その後は、抜け殻のようになったキルアは、クラピカやレオリオのどんな言葉にも反応することはなく、じつと下を向いて、次の試合になった。

「…レツはなんかねーのか?」

「…これはキルアにとつて大事なこと。誰も手を貸しちやダメなんだよ。きつと。」

「それでも、さっきの攻撃などはどうなのだ?」

「…あれは、死ななきやセーフっていう、僕達独特の考えのやりとり。だから特に思わないよ。」

レオリオの言葉にレツは意見を述べる。続けてクラピカが確認するが、それにも闇の

世界としての意見が帰ってくる。納得はせずにはひとまらずは、次の試合が始まるのでそれを見ることにした。

「……最終試合！ キルア対ポドロ！」

そう宣言がされると同時に、ポドロは、すつと構えを取る。

「——子供と闘う拳は持たぬが、手合わせ、ということであれば良からう。殺しあい——」

ポドロはそれを言い切る事なく、審判の「始め！」という宣言がなされないまま、キルアの鋭い爪が、正面からポドロの心臓を破壊した。そんなキルアの答えにレツは話す。

「……キルア、『家族』と向き合いなよ。これが、僕のチップの使い道。」

「……………おう……………」

それ以上、キルアは何も言うことなく扉の向こうに消えた。

ポドロの身体から驚くほど大量に流れ出していく真っ赤な血が残され、レツの「癒しの碧玉／ホーリーヒーリング」をもってしても、流石に心臓の再生などは出来ない。蘇生不可能なほどに完璧に殺された、ということだ。後味の悪い雰囲気のまま、審査委員会はキルアを不合格とみなした。

——こうしてハンター試験は終わりを迎えた——

No. 15 / ゲキジョウ?ノ?ドウラン

翌朝、ハンター証を各自受け取った合格者達は講堂に集まっていた。

適当に座って待っていると、ネテロを始めとする試験官達が入室してきた。

「おはようじや、諸君。良き朝を迎えられたかの? では、これよりハンター証などについて改めて説明を行う。」

「それでは不肖ながら私、ピーンズが説明させていただきます」

その時、部屋の後方の扉が勢いよくバン! と大きな音を立てて、開く。

左手を三角に吊ったゴンが、険しい顔で部屋に入ってきたのだ。レツは、診察の結果、綺麗に腕を折ってくれており、完治後の方が丈夫になると分かっている。完治による、丈夫さが増すことを、妨げることもなる癒しは行わなかった。

ゴンは注目されていることなどお構いなく歩き出し、イルミの元へと向かう。

「ゴン」

レオリオが声を掛けるが、ゴンは無視をしてイルミの横で止まる。そして、イルミを鋭く睨みつけて、

「キルアに謝れ」

そう、力強く言い放った。

「謝る？ 何を？」

その言葉にも表情にも、人間味は見当たらず、ゴンはわずかに悲しむような憐れむような顔をして訊いた。

「……そんなことも分からないの？」

「うん」

「お前に兄貴の資格はないよ。」

だが、この言葉はレツの逆鱗に触れた。次の瞬間、瞬間的な殺気に、イルミの前にレツが「紅くなる灼熱／フレイムバースト」を発動させ、抜刀しようとする。ゴンは飛びのき、クラピカがゴンをかばうように、木刀を構え、ハンゾーは仕込み刀をレツの眉間に試験のゴンのように当て、鞘に収まっている刀は、ヒソカの「伸縮自在の愛／バンジーガム」で貼り付けられ、いつでも取り上げられるようになっていた。そのままマイペースなイルミは顔は僅かに驚きに染められつつも、特に反応をすることなく淡々と言う。

「兄弟に資格があるのかな？」

そのままゴンはその距離から怒鳴る。

「友達になるのにだって資格なんていらんない!!」

「……そうなの?」

レツは刀の柄から手を放し、ゴンに呼びかける。

「勿論! ちよつと驚いたけど、レツも俺の友達だ! 友達だから、キルアの元へ行くんだ。もう謝らなくなつたつていいよ。案内だけしてくれればいい。」

続けてゴンは言う。

「そして、どうする?」

「決まつてんじやん。キルアを連れ戻す。」

その言葉に再度レツは殺気が噴き出す。

「イルミさんはちゃんとキルアの兄をしてるよ。それを否定するゴンにはついていけない!」

「その通り。まるで誘拐されたような口ぶりだね。」

イルミはそれに畳み掛けるように言葉を重ねる。

「俺の命を人質にされて無理矢理従わされたんだから、誘拐されたも同然だ!」

ゴンは怒りを露わにして、イルミに向かって言う。　　「どうやら誰かから話を聞いたよ。うだった。」

「イルミさんは、そんなことをしてないよ。　　ゴンの事を殺す気は無かつたつてわかるから。」

レツはその言葉に反論する。バラされたことに、僅かにイルミが睨みつけてきたが。

「じゃあ、なんでキルアがここに居ないの。」

「あれは、キルアにとつての試験前のクイズのようなもの。今は答えを先延ばしにしたんだよ。」

「キルアは試験中に、友達になりたいって、望みを出したんだろ！ それを諦めさせた！」

そのまま、ゴンは続ける。

「もしも今まで望んでないキルアに、無理矢理人殺しをさせていたのなら、お前を許さない。」

「……許さないか。で、どうする?」

「どうもしない。お前達からキルアを連れ戻して、もう会わせないようにするだけだ。」

「それがダメだつて言ってるの。」

続くゴンの言葉にもレツは反論する。

「ゴン、キルアは自分の意思でここから出て行つた。ハンターの資格をあきらめて家に帰つた。誘拐されたわけじゃないんだから、連れ戻すとか言うのは、ゴンの目線では、イルミさんが誘拐犯に見えるかもだけど、その言葉は君も誘拐犯のセリフで、どちらも大

差ないんだよ。」

「! 自分の意思じゃない! キルアは操られてたようなものだよ!! 誘拐と一緒にだ!!」

「キルアは君が思うほど、殺人を厭ってないし、僕やハンゾーよりは殺人を手段にしているし、特に意味もなく、人を殺してきてるよ。」

ゴンはもちろん、他の受験生たちも絶句してる中、レツは続ける。

「確かにキルアはヒソカと違つて、人殺しを楽しいとかそんな事はないと思う。僕達と『友達』になりたがつてるし、もう殺し屋も嫌だと思つているのは本当なんだと思う。でもそれは、『家族』と向き合わずに逃げ出していたから。 家出した先にたまたまあつた選択肢が目新しいから選んだだけの、一時的な感情である可能性だつて十分にありえると思うんだ。

一次試験の後半に居なかつたから仕方ないかもしれないけど、キルアは君が思つてるより実家も家族も好きだつた。 結局、兄のことも嫌いとか、憎いとかは言わなかつた。

だから、よく考えた結果、『家族』を選んでもおかしくないんだ。 ギンのしようとしたことは、イルミとは意見が違うだけで、結局、キルアをあのかれ道のどちらかに連れ去ろうとしてる。 僕もそれを理解してるけど、外の世界は、想像以上に危険で、何かしらの力がないとダメだつた。 だから僕はキルアを連れ戻すことに賛成できな

い。」

ゴンが試験中のキルアが無理やり人殺しをさせられていたか、どうかと考えてみると、トリックタワーのジョネスとの戦いとも言えなかった戦いを思い返せば、彼は何の躊躇いもなければ悪びれもせず、罪の意識もなく相手を殺していた。さらに遡るなら、飛行船のキルアが純然たる血液の匂い、饅えた鉄錆にも似た「血の匂い」を纏っていた。数が違うところから、ジョネスのような罪を犯していないであろう、受験生のものなのだろう。それをわかってしまったので、結局ゴンは何も言い返せずに、次第にしょんぼりとテンションを落として俯き喋る。

「……ごめん、レッツ。俺、間違ってた。俺に怒る資格なんかなかった。」

思い込んで決意したらブレーキなしで突っ走るゴンだが、基本は素直なので納得さえすればハンドル操作が容易いのが幸する。ゴンは怒りの矛を収めて、それにレッツも荒々しい【練】を解除して、その後、各々の戦闘技能を構えていたのも解き、緊迫した空気が納まったことにホッと胸を撫で下ろした。

しばらく考えてゴンは続ける。

「レッツの言うとおり、今キルアは分岐点にいるんだと思う。でも、俺のすることは変わらないよ。キルアを連れ戻すなんてもう絶対に言わないけど、キルアに会ってみる。そして、どんな道を選んだのか、キルアがどうしたいかを直接聞きたい。」

キルアが家に残りたい、やっぱり殺し屋もやめたくないし家を継ぎたいって言うんなら、俺はもう何も言わないで帰るよ。

家を出たい、殺し屋をやめたい、ハンターになりたいって言うんなら俺は、誰を敵に回してもキルアを連れだすよ。

それと、キルアの答えがどつちであつても、俺はキルアの友達だつて言える。だから、キルアが俺を嫌わない限り、俺がキルアの家に来て欲しくないと思われぬ限り、何度だつて訪ねるよ。友達の家に遊びに行くのは、普通のことだから。」

これがゴンの結論であり宣言する。一触即発な雰囲気でも、その主義主張のぶつかり合いは大事だと思つていたがゆえに、止めなかつたネテロが声を掛ける。

「さて諸君、よろしいかな? とりあえず、キルアの所に行くにしても、まずは説明をしっかりと聞いた方が良いでしょう。」

その言葉を聞いた受験生たちは、大人しく席に座り、ビーンズの説明会が再開する。

「それでは改めて。皆さんにお渡ししたカードがハンター証です。カード自体は見た目は地味ですが、偽造防止のためあらゆる最高技術が施されている以外は他のものと変わりません。ただし、効力は絶大! まず、このカードで民間人が入国禁止の国の約90%と立ち入り禁止区域の75%まで入ることが出来ます。公的施設は95%が無料。銀行からの融資も一流企業並みに受けられます。」

(…………だから、先生は便利屋として扱われ続けたのか……)

「売れば人生7回くらい遊んで過ごせますし、持つてるだけでも一生何不自由なく生きていくことが出来ます。それだけに紛失・盗難には気を付けてください。再発行は致しません。我々の統計ではハンターに合格した者の5人に1人が1年以内に何らかの形でカードを失っております。プロになられたあなた方の最初の試練は『カードを守る』と」と言っているでしょう！」

「次に協会の規約についてですが、十ヶ条というものが定められています。」

【第一条】 ハンターたるもの何かを狩らなければいけない。

【第二条】 ハンターたるもの最低限の武の心得が必要である。

【第三条】 一度ハンターの証を得た者はどのような事情があろうと取り消されることはない。ただし、再発行はどのような事情があろうとも行われぬ。

【第四条】 ハンターたるもの同胞を標的にしてはならない。ただし、甚だ悪質な犯罪行為に及んだ者に対してはその限りではない。

【第五条】 特定の分野に於いて華々しい業績を残した者には星が1つ与えられる。

【第六条】 五条を満たし、かつ上官職に就き育成に携わった後輩ハンターが星を1つ得たとき、その先輩ハンターには星が2つ与えられる。

【第七条】 六条を満たし、かつ複数の分野に於いて華々しい業績を残したハンターには星が3つ与えられる。

【第八条】 ハンターの最高責任者たるもの最低限の信任がなければ、その資格を有することができない。最低限とは全同胞の過半数である。会長の座が空白になったとき、直ちに次期会長の行い、決定するまでの会長代行は副たる者に与えられる。

【第九条】 新たに加する同胞を選抜する方法の決定権は会長にある。ただし、従来の方法を大幅に変更する場合は、全同胞の過半数の信任が必要である。

【第十条】 ここにない事柄の一切は会長とその副たる者参謀諸氏との閣議で決定する。副たる者と参謀諸氏を選出する権利は会長が持つ。

これらを最低限憶えておけば、ハンターとして活動できると言い、ビーンズは注意勧告もする。危うく、“舌”を忘れかけたからこそ。

「さて、以上で説明を終わります。後はあなた方次第です。試練を乗り越えた自身の力を信じて、夢に向かつて前進してください。あと、先程のような場面で、いきなり【第四条】に反しかけるのはやめてください。特にレッツさん。」

「……は。こ。」

その諫めにレッツは、しょんぼりとテンションを落として答える。

「……あと規則上では、この瞬間ヒソカさんは、プロハンターになりましたので、この時点で以降、彼が【第四条】に反さない限り、あなたも彼を狩ることはできません。」

「……分かった。」

ビーンズの続きの言葉にレッツはそう答える。どうせヒソカは、いずれ反するだろうとは思う。また、狩れないというのは、どちらにも影響があるのだ。レッツは改めて【発】をじっくり考えるべきだと自分に言い聞かせた。

「ここにいる八名を新しくハンターと認定する!!」

そうネテロは締めくくる様に告げた。説明会が終わって、立ち上がるレッツ達。改めて、ゴンがさっきの続きとばかりにイルミに話しかける。

「キルアの居場所を教えてください。」

「……止めといた方がいいと思うよ?」

「誰が止めるもんか! キルアは俺の友達だ! 絶対にキルアの意見を聞く!」

「……後ろの二人も同じかい?」

イルミの言葉にゴンは後ろを振り返る。そこにはレオリオとクラピカが立っていた。

「レッツが知ってるから、って無理か。」

「そうだね。僕達の常識で、僕が勉強したくて訪れる約束をしてるのに、僕から利敵行為になり得るのは出来ないし、個人的にもしたくないかな。」

「横からレツは割り込み話だし、どちらにも付かないような微妙な立ち位置から話す。そこからへ実力を確認するようなシステムはあるの?」と【念文字】を書く。

「……いいだろう。教えたところで、君達は、たどり着けないだろうし。」

「そうイルミは言い、へもちろん」と【念文字】で返事する。

「キルは自宅に戻っているはずだ。ククルーマウンテン。この頂上にオレ達一族の住処がある。」

そのまま、【念文字】でさらに文字を作る。へ君にも試させてもらう。その実力を示さないと、俺が連絡しても意味が無いから」と書く。それにレツは頷き、ゴン達もレツの方を向いており、これが本当と、ある意味すれ違っている理解をする。

「分かった。ありがとう。」

「そういい、ゴン達にレツも離れる。イルミとしては、最低限の暗号通信ができ、ヒソカともこの後接触という二度手間を避けられた。」

くくく

四人は歩きながら、レオリオが切り出す。

「ククルーマウンテンか、聞いたことねーな。レツは誘われていたみたいだけど知ってるのか?」

「ううん、知らない。ライセンス手に入れたら、調べろって言われた。」

「よお」

レツが答えていると、ハンゾーは四人に名刺を渡す。

『雲隠れ流上忍 半蔵』と書かれており、ホームコードと電話番号も書かれていた。

「……闇の職業なのに、つていいのか。依頼人が居ないと成立しないもんね。」

「そういう事だ。あと、お前も無駄に殺そうとすんなよ。」

「あゝゝゝ、うん。反省してる。」

そのハンゾーの言葉にレツは頷き、続いてゴンがなんの穢れも疑念もない目で純粹な疑問として尋ねる。

「なんで、俺がイルミに啖呵きつたとき、レツはあんなに怒ったの?」

「……二次試験合格後にさ、接触したんだ。自分がキルアにどう思われているのか、一次試験の後半で引き出したからだろうね。それで、輪郭とか髪の毛の長さくらいしか似てない

のに、ある意味、真逆に近い人だったのに、やたらと兄さんに近くて思い出したんだよ。ヒソカに負けたことが悔しくて、泣きついたんだよね。…僕の慟哭を何も言わずに聴いてくれて、発破もかけられてさ。その上で暗号でキルアのことを教えてって、めっちゃ気にしてたからさ。あんな優しい兄さんに、『兄の資格が無い』って言うのは、許せなかった。」

そんなレツの発言に今度はレオリオが聞く

「……兄の事、好きだったのか?」

「……尊敬を好きと言って良いのなら、今でも好きだって言い切れる。……イルミさんのおかげで、ゴンに見せた『人形師』としての忘れていた自分を思い出せたから。」

そこまで言って、レツは自嘲の笑みを浮かべた。今度はクラピカが尋ねる。

「……私から見たら、奴はキルアの個性や人格を認めず、ただの操り人形にしようとしているようにしか見えなかったのだが?」

「ああ。あれは個性や人格認めてないというより、ただの過保護とキルアの才能を生かしたいっていう兄バカだと思うよ。いわゆる視野狭窄っていうのだと思う。あと、安全である家から出してくれなかった事とかも。……それも兄さんに似ていたね。」

イルミさんの場合は暗殺者。

僕は人形師。

僕の方は好きになったから、問題は無かったけど。……イルミさんがキルアに向け

る感情は確かに『愛情』だよ。そこは信頼できた。……多分、僕が『人形師』だから気

づけたぐらいの差。あのセリフはどこか台本を読んでいるようなチープな演劇にみ

えたから。」

そのレツの言葉に三人はよく分からず、眉を寄せるがハンゾーは分かり、発言する。

「……なるほどな。あいつが家族を深く愛していることは分かった。殺しを生業にし

て、携わる者が、家族として他者を慈しむのを見せていけないとも思ってたのかねエ。だとしたら、そんな望んでいないことをするために自分を殺すことに何の意味があるんだか？ まったくダリい生き方だぜ。結局、空回っちゃまって、わざわざ弟を畏縮させてさ。」

「ホントにそう思うけど、でも分からなくはないかな。分別はつけないと。」

「確かに。俺の里でも、普通は『抜け忍』として、情報を多く持っているからこそ、家出なんてしちまった時点で、殺されてもおかしくないし、事故にだって見せかけることもできたのに、それをしなかった、ってことだもんな。」

「しかも徹底的に、危険が多くて当たり前前な仕事なのに教育でとにかく死なないように危険を避けるようにって教え込んでるし。」

「そういう事だな。」

その家業としての意見にようやく納得する。（※跡取りの優先順は知らない）
心根が良いゴンは疑問を出す。

「…そんなの、俺たちは勿論、キルアにだって誤解されちゃうじゃん。」

「それは、何もかもが『余計なお世話だ』って帰ってくるだけだよ（ぜ）。」

そうレツとハンゾーは出し、ゴンも不満げな顔をするが、そう言われてしまうのを予想できた。

「それにキルアの家族に関しては、誰も口出しする筋合いはないよ。」

続けて言ったレツの言葉に皆納得し、会話を切り上げ、ハンゾーは去っていった。

しばらく歩くと、ポツクルもホームコードを渡してきた。そのまま、ポツクルは何を成すかを語る。

すると、ポツクルは何か知りたい情報があつたら探つてやるといい、ゴン以外がホームコードを交換した。

そして四人の『ハンター電波系三種の神器』の講義をゴンに行う。終わつた後、ポツクルは手を上げて去っていく。次に、レオリオが言う。

「よし、俺らも行くか。」

「ちよつと良い? アタシが用があるのは、レツちゃんなんだけど。」

「?。」

チケットを予約に行こうとしたら、メンチが声を掛けてきた。レツは三人を先に行かせて、話を聞くことにした。講堂に再び戻ると、ネテロ達もいた。一方、サトツは入口でゴンをうまく引き離し、ジンのライセンスについて話していた。

「なんですか?。」

「念のことについてよ。」

その言葉にレツは警戒し、咄嗟に【堅】をする。

「そんな警戒しなくても何もしないわ。」

「そういうことじゃ。実はハンター試験はまだ終わっておらんのじゃよ。ヒソカにギタラクル以外はの。ある意味ではお主も違うが、完成したのかの?」

「……念の習得も試験ってこと?」

「そうです。先ほどの説明されたハンター十ヶ条【第二条】は念の修得の事を指します。」
「裏ハンター試験って言われててね。プロハンターが教えることになつてるんだけど……」

「……あー、僕はまだ【発】が完成してないから、ってこと?」

「ある意味ではそうじゃの。だが能力までを教えたり、誘導はせんよ。ちよつと、水見式を行つてもらいたいのじゃよ。」

そして一連の準備をし、レツは【練】をしてグラス一杯に水の中に結晶化される。

「ふむ…… 良いの。これでお主も裏ハンター試験には合格じゃ。まあこれは予想されとつたから良い。本題は次での。もし念を話すのであれば、しっかりと教え込んでくれと言うことじゃ。中途半端に会得すれば、下手に死にかねんからの。そして、もし教えたのであれば、協会の方に一報を入れてほしいのじゃ。」

「いや、ちよつと待って。僕のような半人前が教えちゃマズいでしょ。」

「そういえばそんな事、言つてたわねえ。」

「そう。だから教えないし、教えない。」

「それともう一つ。キルアのことじゃが。」

「何?」

「受ける気があるならば来年も受けるように伝えてやってくれんか?」

「僕はキルアを、家から引つ張り出す気はそんなにないよ。」

「それなら仕方ないわい。」

「念の確認だけ?」

「うむ。達者でのお。」

「あ、分野が決まらないなら、仕事一緒にしない?」

「えっと、【発】が完成してない、って言いましたよね?」

「でも、四個は持つてるじゃない。十分戦力になるわ。」

「:まだ、家族から出された試験が終わってないから、それまではダメ。」

「:相当なスパルタねえ。でもそれなら仕方ないわ。合格は各々が決めないとね。」

「じゃあね。」

レツは講堂を出て、調べるためにもパソコンの前に行くと、三人も集まっております、レツも顔を覗かせる。

「見つかったの?」

「おう。今日の夜に出発の飛行船を予約したぜ。大体3日くらいだよ。」

「なるほど。それで、他にもなにか調べてみたいだけど？」

「親父の事だよ。」

「ゴンの？」

「うん。ジンⅡフリークスって言うんだ。けど、ゴクヒカイイン？って奴みたいで何も分からなかったけど。」

「電脳ページの極秘会員？」

そのレッツの疑問に、クラピカが『一国の大統領クラスの権力と、莫大な金が必要』と教える。

「へえー、すごい人なんだね。」

「うん、ダブルハンターだってサトツさんが言ってたから。」

「ちよつと待って、兄さんに報告する。」

「そうか、じゃあ先に待ってるぞ。」

そう言い、レッツは一旦離れた。

~~~~~

『ようやく合格報告か？』

「うん。ハンターライセンスもらったよ。」

言われた通り、レッツはクロロに報告していた。

『そうか。で、『発』は完成したか?』

ちなみにこの携帯はシャルナークが特殊なフィルターを装備させているので、明け透けに秘匿すべき事も言えるのだ。

「二つは。で、これから残りを完成させに、ゾルディック家を訪れて、勉強することになってる。」

『……ゾルディック家か。まあ、それが必要になるなら良い。改めて完成したら、報

告してくれ。』

「分かったよ。」

そういう報告をして、連絡は終わった。

ちなみに『家族』のことについて電脳ページでは調べてない。名前しか知らないの  
で調べても出ないし、ゴンと違い、会えるのにわざわざ調べるなどは、ストーカー紛いの行為だろう。

くくく

「待たせたね。」

「レッツ! どうしたのその恰好!?!」

レッツがそう良い、ゴン達と合流すると、ゴンは驚き、他の二人も目を見開いている。

「うん？ 一応、家に行くんだから正装したほうがいいかなって。」

「そっちの方がいいよ！ すっごい可愛いし似合ってるよ！」

「またしてもゴンは殺し文句を天然で言い、他の二人はゴパツと吹き出す、アハハ、ありがと。」

「意が分からないレツはそう返し、何も起こらなかった。」

「じゃ、行こうか。」

「そうだね！ キルアに会いに行こう！」

—— 四人は飛行船に乗って パドキア共和国を目指す ——



## ゾルデイツク家編

## No. 16 / オソウジ?ト?ソウジフ

四人は飛行船から降りて、汽車に乗りククルーマウンテンを目指していた。すると、いつの間にか汽車の中が騒がしくなつて来ているのに気が付く。

怯えや悲鳴の声。爆発音と共に四人が居る車両のドアが吹き飛んだ。四人はすぐさま席から立ちあがり、もう一方の扉の前で構える。四人はす

「大人しくしろッ!……その嬢ちゃん、ハンターライセンスのカードを持つてるよな? 不用意にライセンスを使ったのが悪かったな。」

「ヒヒヒッ ハンター試験直後はお前みたいな人間が良く湧く。美味しいカモダぜ」「おいこいつ。とんでもねえ上玉だぜ!?!……なあお前ら、後で一発ヤラないか?」

何故、こんなことになつたかと言うと、レッツは操作系の能力の勉強会であり、期限がいつになるか分からず、なんなら念の修行である以上、考えるだけで、半年はかかる危険があるからだ。ゆえに期限を設定するわけにはいかなかったためである。

三人はいくらなんでも重火器の敵相手では、どうにもならないのでゴクリと唾を飲む。レッツは重火器を持って現れた相手に取り合わず、トパーズとルビーの指輪をはめて

いく。せっかく作った新しい「蒼流星の指揮／ブルーメテオタクト」は小回りが必要な  
ここでは論外だからだ。

「おい、あの指輪……」

「ああ、見る目が無くとも、相当な値打ちモンだぜ、ありや。」

「一生遊んで過ごせるハンターライセンスに、性道具としての美貌。　駄目押しに、あの

宝石の指輪。　こりや今までにない大成功だなア。」

そんな捕らぬ狸の皮算用をする賊達。　その前にレツは、念を見せても良くない、事

実として戦力には数え難いので、能力を行使する前に、素早く三人を気絶させ、隣の強  
盗犯がいない方の客室に放り込む。

「て、てめえ！　何のつもりだ!？」

「わざわざ不利になって、この人数差で勝てると思っているのか?」

「そうだ、さっさとライセンスを渡して、身売りされる!」

レツは仕事モードのルーチンになっている《兎の仮面》を被り、【透過する黄色の宝石  
剣／サンライトヴィジョン】を使い、宝石剣を具現化して構える。

相手は見るからに小悪党。二重の意味で舐めるような眼つきで見られたレツはこん  
なことを思う。

（あゝ、これは僕単体のせいだね。　三人は使えなかったから放り込んで正解かも。

さて、いわゆる“ゴミ掃除”の開始だね。

すると、ヒュツという軽い音とともに血飛沫が舞う。先頭に立っていた男の首が遅れてゴドン、という音を立てて床に落ちる。それはほんの一瞬の事で、念を知らない賊が介入する余地が無い速度で行われたものである。

「ウワアアアアアアアアアア!!」

「ハチの巢になりやがれエエエエー!!」

一拍遅れて、状況を認識した残った二人の男が絶叫しながら手に持ったマシンガンやらアサルトライフルの引き金を引く。レッツは狭い室内の壁を地面を走るように縦横無尽に駆け巡り弾丸を回避し、レッツはそのままその車両内に居た賊を討ち取って、汽車内に残った残党を探す。

三人を放り込んだ方とは別の隣の車両のドアを開けると、それを待ち構えたように、一斉射撃がきて、銃声が鳴り響いた。

「バカめ!!」

「対策済みなんだよ!!」

それも予測していたので、「紅くなる灼熱／フレイムバースト」の炎を纏った刀で、斬り払いながら、再び賊に縦横無尽に駆けて、切り払う。

「な、なんだその炎は!?!」ボウオ

「ウツソだ……」ザシユ

さらに次のドアを開けると、これで終わっている予定だったのか、レッツは乗客全員を銃で脅しつけ、反抗する者に鉛玉を贈る賊達を発見する。残酷に笑う賊達に彼等は震え上がり、懸命に誰かの助けを願った。

「ハア、意味ないだろうけど言うよ。銃を捨てて降参する？」

「——な！　こ、こいつ!?　なんで此処に!?!」

「馬鹿野郎、つまり失敗したんだ！　早く撃て——」

降参しないのが言い切る前に分かったので、淡々と賊を始末する。“ゴミ掃除”をしゆき、最後の車両になった時点で、レッツは《兎の仮面》を外し突撃する。勿論、どんな始末してゆき、親玉のみになった最後の賊は一応、念使いではあったようで、【絶】で回り込み、吠える。

「動くな!!　こいつらをどうにかしたければ、ハンターライセンスを渡せ。俺はそこらの奴らと違うぜ。……死にたくないのなら、生き残りたいのなら俺と手を組め。したら仲間の敵討ちはまあ勘弁してやってもいい。」

親玉は、念使いでもあるがゆえの傲りで、こんな尊大な事を言い、乗客へ銃を向け人質に取ったまま交渉する。レッツはため息を一つこぼすと、【透過する黄色の宝石剣／サンライトヴィジョン】にして、具現化系にあるまじきことだが、二本の宝石剣を投擲

し、腕を磔にした。その速度は一瞬の出来事である。

「……この、化け物め……」

「フウ。 終わり。」

などと親分は喚いた。可憐な少女のレッツが銃を持った大男達を倒していく姿は、恐怖に怯えていた乗客達にとってはまるで映画のように現実感が薄いものであったのか、数秒間深い沈黙に包まれた車内が次の瞬間、爆発した様に歓声を上げた乗客達の声で騒がしくなる。命を脅かす悪漢を打ち倒した美しい少女。人々は彼女に大きな拍手を送り、称える様に喝采を挙げた。

レッツがそれに柔らかな笑顔を返していると、本格的に意識を落としてはいなかった三人が来た。

「レッツ！ 大丈夫!!」

「俺らが急に気絶させられたから、どうなったかと思っただぜ！」

「しかし、あの人数に、リーチが違う重火器と対峙し、無傷とは……」

「あんな手段も方法も選ばない、節操なしな賊なんて平気だよ。 さてと……」

ゴンとレオリオの心配は杞憂であり、戦闘技術に関してクラピカが聞く。それにレッツは答えると、「透過する黄色の宝石剣／サンライトヴィジョン」を消し、左手に「紅くなる灼熱／フレイムバースト」を。右手に「癒しの碧玉／ホーリーヒーリング」のみ行

使できる指輪以外は外した。するとレッツは賊の右足に左手をあてた。

「ギャアアアア!!」

「レッツ!!」

「残り人数は？ 本当に僕のライセンスが目的？」

「いぎい……!! あ……あづ……」

「ねエ、聞いてる？」

「あづいいいい!!」

「おい、レッツ!! もうやめろ!」

そう、残りの情報を引き出すため、拷問を始めたのである。別にレッツは他者への加害によって興奮を覚えるフェイタンのような、所謂『加虐体質』ではないが、必要なことなので行うのだ。それにゴンは驚き、次にレオリオが止める。

「せめて、賊の数とか、残り人数は確認しないとだ……よ!」ゴキイ

「あがあああああ!!」

次にレッツは四肢の残った中で、最後の左足を握りつぶす。

「やめろと言ってる!!」

クラピカも叫び、それらに応じたのか、レッツは四肢を治療する。それに三人は安心しかけるが、

「……フ、フ、回復をさせやがって——ゴパツ!?!」

「理解した? 回復させても無駄だつてこと。だから情報を吐くまで、徹底的に火傷と損傷に回復を繰り返さないでダメなんだ。クラピカの勉強にもなるよ。ハンゾーとは違う、僕たちの家の拷問。」

「そ、それは……」

賊は回復するなり、レッツの細い首を絞めようと手を伸ばすどころか、上げかけた時点で顎を殴られる。

レッツは淡々と喋り、拷問を続ける。それにクラピカ含め、三人は反論を失いかける。「さ、続けるよ。だけど、繰り返しても経験上、あんまり意味ないんだよね…。なら

…」

「!!? がああああ!!」

賊は一瞬何が起こったのか理解出来ず、右側頭部に熱と激痛が走って悲鳴を上げ、見ようとして理解した。右目が見えないということに。

「レッツ…、もうやめてよお、ここまでする必要ないじゃん…」

ゴンは今も左腕が折れたままだが、自分がハンゾーに受けた、結果は優しい拷問ではなく、絞れるだけ搾り取る、壊すことしか考えない凄惨極まる拷問に口を出す。

「何を言ってるの? こいつらは先に僕たちの命を狙ってきたんだよ? なら、こんな

ることくらい覚悟してるさ。　ゴンと違って……ね！」ゴキイ

再び耳障りな音が鳴り、ゴンと同じ左腕という箇所だが、再生が見込めないような折り方をする。

「ぎゃあああ!!」

「やめろといってるんだ…　レッツ…」

レオリオは今しがた賊の腕を折った、レッツの右腕を掴む。さすがに反応したのか、レッツはレオリオを見上げる。

(……もうすぐ次の駅に着くね…。　ひとまずはこの人で終わりだし……)

だが、レッツが見ていたのは身長の関係で、レオリオの方向を向いていたに過ぎず、その奥のアナウンス表示を見ていた。

「……………そうだね……」

その言葉に三人は、今度こそホツとするが、レッツは【鋭】の手刀で、首を斬り飛ばした。三人は唾然とした顔を晒し、賊の頭は床に転がっていき、体の方の切り口から、血が大量に流れ出た。

「さ、終わったよ。」

その闇の世界の一端を、レッツは何げに三人の前で初めて見せた。

少しして駅に到着し、乗務員達が遅れて死体にこんなこともあろうかと列車の中に常



備されている死体袋を被せて、四人へと頭を下げた。

くく

一連の処理が終わり、座っていた席に戻っていると、親玉が居た所と隣の客室からは聞こえていたのか、何も言われず、化物を見るような目で見られたが、その次からの客室からは称える様に喝采を挙げて、嬉々とした小声や目線を送られる。レツが先に座り、三人は複雑そうな表情で座った。レツは純粹な疑問として尋ねる。

「別に終わったことは、どうでもよくない?」

「お前……マジか?」

二人は目を見開き、ゴンは腕を組んで悩んでいる。

「うん、何なの。そんなに拷問を気にしてさ。別にどーでもいいじゃん。いつもの」

「ゴミ掃除」と変わらないよ。気にしすぎだよ。」

その言葉にレオリオは絶句する。試験のように怒らないのは、彼らは悪人で、医者志望の自分の前で、自分では助けられない命であったからだ。当たり前だが、医者は傷を負ったものを治療するのであって、傷を負う前に敵を始末する職では無い。

クラピカは歯を食いしばり考える。反吐が出るようでも、いずれやることになるのだろう。それは理解出来るが、実際の所の葛藤がある。なんなら、レツを売り飛ば

そうとしてたので、「ゴミ掃除」には共感もある自分がいた。しばらく考えていたゴンはようやく発言する。

「……俺さ、今を見て分かったんだけど、……それでもやっぱり、キルアに人殺しなんてしてほしくないのが本音だったんだ。勿論、レツにも。試験会場のレツの言い分が正しいのは、分かってるけど。」

俺、結構鼻が利くんだ。だからハンター試験中の飛行船の中でキルアがさせていたのと同じ匂い……血の匂い……レツが今、匂わせる人殺しの匂いと感じて、気付いていたんだ。」

ゴンが言ってる……純然たる血液の匂い、饅えた鉄錆にも似た「血の匂い」を語る。

ゴンは、二人の本性が決して善人なだけではないと気付いていた。気付いていながら、しかしゴンは変わらず主張し続ける。依然変わりなく、大切な友達であると。

「二人は人殺しだけど、オレの初めての友達だから会いにいくんだ！」

その言葉に三人は微笑み、納得した。

くくく

ククルーマウンテン。標高3722mの死火山で、周囲は樹海で囲まれており、そ

のどこかにゾルディック家の屋敷があると言われている。汽車の中で、樹海に囲まれた

死火山が見えてきて、レオリオはやや顔を険しくして呟く。

「見えてきたぜ。暗殺一家のアジトか……。実際に見るといやーな雰囲気だな」

「まあ、綺麗ではないね。」

レツは綺麗好きなのもあって、眉間に皺を寄せて呟く。

「うむ…周囲の聞き込みから始めるか。」

「まず、宿を確保して作戦立てようぜ。」

「いや、作戦ってあんまり意味ないと思うよ。(正面から試練があるんだろうし。)」

「レツの言うとおり、大丈夫だよ。友達に会いに來ただけなんだから。」

ゴンが不思議そうな顔をしてレオリオとクラピカに言う。意味合いが違うので、レ

ツも含めて「脳天気な……」と呆れる。

やがて、駅に到着し、聞き込みをしていくと、デントラ地区では1日1回。山景巡りの観光バスが出ており、その山がクルーマウンテンである。そのため、必然的にゾルディック家のことも観光の目玉とされている。というのが分かる。

「……暗殺者のアジトが観光名所?」

「僕の家族は、好き勝手に動いていて、多分ライセンスの力で雲隠れもするけど、別に目につく人間全員殺すわけじゃないよ。基本的に自分たちに利にならない殺しはしないよ。目標を達成するためなら他人を巻き込むことは躊躇わないけど。多分その辺

りかな?」

「ハンターが来たらどうすんだよ?」

「返り討ちにするだけでしょ。」

そんな会話を三人はするが、今更になってゴンは確認する。

「そういえばレツは何でキルアの家に行くの?」

「二次試験でイルミさんに泣きついたって言ったじゃん。」

「言ってたな。」

「その時に、イルミさんに発破をかけられた時に、欲しい技術や強くなる手段は知ってたけど、僕の家族は知らなくてさ。だからイルミさんに聞いたら教えてくれるって言うから。まあ、キルアのことでもヒソカは美味しそうとかって、見たのに気づいたから、協力してくれるんだらうけど。多分、イルミさんにとってヒソカは依頼人でもあるから手出しできないだけで。それをやったら、依頼が来なくなるからね。」

三人はそれに納得し、早速判明した、観光バス乗り場に向かいバスに乗った。

くく

バスガイドが明るい口調でゾルディック家について、説明している。

バスの中には一般の観光客に混じって、賞金首ハンターのような者達が二人ほど混

じっていた。

「……明らかにカタギじゃねえ奴らが乗ってるぜ。」

レツは何の気負いもしていないので、聞く。

「あんな奴等は、放つといていいのか?」

「どうせ、迎撃されて死ぬだろうから別にね。」

《さて、皆さま。これよりゾルディック家の正門前にて一時停車致します。あまりバスから離れないようにお願いいたします》

そのアナウンスの5分後にバスは停止し、四人は降車する。目の前には巨大な門があり、七までの数字が記されていた。門の横には守衛室と思われる小屋があり、その隣は小さな扉があった。

「おお……こりやすげーな。」

「ここは通称『黄泉の門』と呼ばれております。入ったら最後、出られないという意味からです。ちなみにここから先はゾルディック家の私有地となっておりますので、見学は出来ません。」

「何いー!?! まだ山までかなりの距離があるぜ!?!」

「はい。ここから先の樹海はもちろんククルーマウンテンも全て、ゾルディック家の敷地となっております。」

「……マジかよ」

「つまり、これ全部が庭つてことだね。」

レオリオは唾然と目の前の門を見上げる。ゴンはその横で悩まし気に門を見上げている。恐らくどうやって入ればいいのか考えているのだろう。レツはこの門を開けることが試練の一部と理解する。

そのまま、ゴンは質問する。

「ねエ ガイドさん。」

「はい?」

「中に入るにはどうしたらいいの?」

(? この門を正面から開けるんでしょ? …少なくともあの連中が居なくならないと、話せないのがもどかしい。)

ガイドの答えとは、別にレツはそんなことを思う。ゴン達はともかく、確実に利敵行為だからだ。もつとも、レツはゴン達の助けになるつもりはないが。目的が異なるのだから。

しばらくゴンとガイドは門答をしてると、賞金首ハンターが喋りだす。

「ハッターだろ? 誰も見たことのない、幻の暗殺一家。」

「奴らの顔写真にさえ、一億近い懸賞金がかかってるって話だ。」

それを聞いているレツは、所謂、裏の相場はシャルナークに教えられているので、(安くない?) 割にあわないというか…。それにハツタリって…)

そんなことを思い、また、あの男達の言葉に、ウボオーギンに言われてしつかり鍛えた腹筋で必死に笑いをこらえる。

「ウワサだけが一人歩きして伝説となり。」

「実際は全く大したことがねエツてのがオチよ。」

(遠回しな自虐かな? 対象は逆であることを理解していないみたいだから…つまり本気で言ってるのか…)

別に自ら積極的に命を捨てるようには教育されていないので、内心戦慄しているレツは、苦笑いを浮かべる。

その頃、守衛? が賞金首ハンターに投げ捨てられ、ボタンと閉まる。 守衛? にゴンは呼びかけた。

「いててて」

「大丈夫?」

「ああ、大丈夫だよ。 あーあ、またミケがエサ以外の肉食べちゃうよ。」

「え?」

その直後、悲鳴が聞こえ、次に門が開くとガイコツが出てきた。

その光景に観光客も悲鳴を上げ、バスに乗り込む。

「あなた達も早く乗りなさい！」

「あ、えーと。行つていいですよ。オレたちここに残ります。」

ガイドが四人によびかけるも、代表してゴンが答える。レツはようやく我慢する必要がなくなつたが、空気を読んで、深呼吸していた。

（（（

守衛室に迎え、守衛？は先ほどの番犬、ミケの食べた残骸の掃除夫であると、ゼプロは自己紹介する。

「なるほどねー キルア坊っちゃんとの友達ですかい。」

「あ、それと僕は勉強をしに来たから、生徒でもありません。」

レツの言葉に虚を突かれたゼプロは目を丸くするが、気を取り直して語る。

\*\*\*

正式名称は、『試しの門』と呼ばれる、全長数十メートルはあろうかという正門。

扉の片方重さ2トンあるという常軌を逸した門であり、鍵は一切掛かっていない。故に力ある者であるなら、どんな人物であろうとゾルディック家の敷地へと入る事ができ



る。

重さ2トンというのは、【1】の扉の重さであり、押し込む力に呼応して【2】の門、【3】の門と扉は一緒に開き、門が一つ上がる事に重さは倍になるという。【1】の門は片方2トンの合計4トン、【2】の門は8トン、【3】の門は16トンという。

ちなみに、鍵の掛かった普通の扉も存在するが、そこから入ったら命令された猟犬に、骨にされて出てくるという地獄への扉だ。この命令は、正門から入れば適用されないで、死なないようにするにはやはり正門から力押しで入る他、方法は存在しない。

\*\*\*

これらのことをゼブロは説明する。それに驚いたレオリオは門を押す。開かないことに文句を言うレオリオ。

「単純に力が足りないんですよ。」

「アホかー！ー！！ 全力でやってるっだったんだよ！」

ゼブロは端的に語り、レオリオは吠える。

「なら、ゾルディック家に勉強をしに来たという、嬢ちゃん。これを押して見なさい。これが突破できない輩は、ゾルディック家に入る資格なしってことです。」

「うん。イルミさんと暗号で交わした、僕が試される試験のひとつなんだろうしね。」

一応、念のことに気付かれてはマズイので、【絶】をして門を押す。すると【2】の

門まで開いた。レツはかなり頑張った結果でもある。ゼプロはキルアが【3】の門まで開いた事を語った。やはりキルアは生まれついた瞬間から鍛えているのに対し、レツはこの二年程でしか鍛えていない。やはり実際の身体能力は劣るという事だ。それを見ていたゴンは言う。

「レツが開けられるなら、問題ないね!」

「え? 僕は今、資格を見せたけど、君達は示していないじゃん。僕は個人的にはキルアはまだ家にいるべきだと思うから、僕一人で先行しても会いにいかないから、ついてきても無駄だよ。」

「だって、友達に会いに來ただけなのに試されるなんて、まっぴらだもん。」

「ゴン。」

「何」

レツは花の貌というべき顔で微笑みながら、ゴンにアツパーカットをいつぞやのヒソカ、ハンゾーが繰り出したようなそれで吹っ飛ばした。

「ゴン!?! 何してん(るの)だ、レツ!」

「試されるのは、僕らの常識の一つなのに、それを無視して死に行こうとするから、ぶっ飛ばした。ゼプロさん。ゴンが目覚めても吠えるなら、追い返して。」

それに二人は絶句するが、理解しているゼプロは、一つ頷く。

「なら、良かった。じゃあ、三人とも資格を手に入れられるよう頑張つて。」

レツはそんなことを言い、行動を別にする意思を示した。

三人はその後、電話口のゴトーに怒鳴るなどして、侵入を試みたりする。この家に雇われた門の守衛、ではなく掃除夫であったゼブロは、友達として会いに来てくれたゴン達を気に入って、修行をする事を提案した。

ゴンを気絶させた段階で、別に改めて自力で門を押したレツはゾルディック家に入つた

## No. 17 / カンスイ? ノチ? カンセイ

伝説の暗殺者一族の巣・ゾルディック家敷地内に足を踏み入れたレッツは、道なりに歩いてきた。

「次の試練は何かな…? (一応、「堅」とルビーの指輪をしてつと。)」

レッツが歩いていると、すぐ近くの茂みから音がする。

そこから現れたのは巨大な犬型の獣。その獣にレッツは身構えるが、何もしてこなかった。

「!!? ……??」

しばらく考えて、レッツは先のゼプロの話を思い出す。

「この子がミケつていう番犬か…。あのガイコツになった人を咬み殺したはずだけど

…僕を襲わないのは、ちゃんと識別ができてるのかな? …できてなかったら、家主すら襲つちやうだろうから、できてるんだね。」

さらに歩いていくと、山小屋のような物があった。そこには煙草を吹かしている、山賊くずれのような人物、シークアントが居た。

「お?… 客人とは珍しいな。」

「…君も、試練を課す人?」

「いや、俺は聞いてねえし、表で会っただろうゼブロと同じ、掃除夫だ。俺は違え。」

「なら、このまま道を進んでいくの?」

「悪rierが、俺もここで働いてそれなりに長いが、ある門より先は、知らねーんだ。だがさらに道なりに歩くといいぜ。」

「そっか、ありがとう。」

「ふん。」

そのまま、山小屋から歩いていくと、試しの門を開けてしまった侵入者を迎え撃つための場所に、姿勢正しく立っていた。いつもは見習いのカナリアが待機している場所であるが、そこにはゴトーがいつもの無表情ながらも迎えに出たのである。

「あなたが、イルミ様から試すように、言われたレツ…で、よろしいですか?」

「そうだよ。…となると、」

「ええ。せめて我々、執事を超えなければ、教えることは無いと仰せつかっている。」

「そっか。じゃあ戦るしかないね。」

最後の言葉でゴトーの丁寧な口調が外れたのは、まだレツは『客人』ではないためである。

そして、苔が生えた地面の線からゴトーとレツは、向かい合っていた。

ゴトーの役目は、迎撃であり勝利条件は無い。ゆえに先手を取るのには、必ずレッツであり、明確な勝利条件として、線を完全に踏み越えるだけで良い。

それを互いに理解しており、ゴトーはすぐにコインを撃ち出せる構えで、睨んでいる。一方レッツは時間はある種、無制限であるので、ゴトーについて思考する。

（まずは「円」！ …うん、この門以外には道はなさそう。あたりは樹海…。あの構えから考えらるるのは、コインを『核』にした、放出系攻撃。強化はともかく、操作とも相性がいいから、なにかしら付与されると見るべき。試練つてことは、自動迎撃・カウンター型のような能力だと、ほとんど突破できないだろうから、違う、というか可能性から捨てる。なら――）

一通り思考が終わったレッツは、新能力の「蒼流星の指揮／ブルーメテオタクト」で剣を突き出そうと突進する。ゴトーはレッツの膝と剣を突き出すからこそ、伸びきる腕にコインを当て、迎撃する。

まだ、その能力のスピードを扱いこなせてないレッツはそのまま転んでしまう。すぐさま、追撃のコインが来るが、そこは回避する。

「つつ!!」（あの人の能力はコインを銃弾のように撃ち出せる能力、かな。 …それとは別に、なにかフィン兄さんのような、静かな怒りを感じる？）

「どうした？ その程度か？」

「まさか！ 次は…」

レツはコインを一通り集めると、そのコインにオーラを流し込む。そのまま剣先をゴトーに向けると、コインが一斉に襲いかかった。

「なめるなよ、回転も掛かってねエコインなんざ、全部、撃ち落とせんだよ!!!」その程度でいい気になるなよ。」

「っ!!」

さらにゴトーはコインを連射し、レツは横に跳び出しながら、さらに考える。

(今の状態からすると、次の手は\_\_\_\_\_)

次にゴトーに襲いかかったのは、燃え盛る木の葉だった。レツは速くなるだけの、左手は有効ではないと考え、サファイアからルビーに切り替えたのだ。それなりに風の影響を受け、不規則に揺らめきながら、予測困難であるはずの攻撃に、的確に木の葉とコインがぶつかり、炎が舞い上がる。ゴトーは回転を強めにかけて、コインを発射し、最後の方の木の葉を貫通しレツに攻撃する。

「言ったらうが。いい気になるなつてよ。」

ゴトーは右手で眼鏡を直しながら、レツに言う。

そのまま、レツは情報収集と、能力確認に、狙う場所を変えたりして、一日目が過ぎた。

念能力者なら一週間ぐらい寝なくても大丈夫なので、このまま完全徹夜である。

くくく

次にレッツが考えたのは、木を切り倒して、それに点火して、燃え盛る丸太をゴトーに向けた。ゴトーはコインを縦にして発射し、燃え盛る丸太を真つ二つにし、残る丸太は、石の門にぶつかり、ゴトーは無傷で済む。そのままゴトーはレッツを見据える。レッツは額に大汗を流しながら後退り、トパーズの指輪をつけ、放出系に苦手であろう、インファイトを挑む。

石に関しては、すり抜けるので、何の問題もなく、振り抜ける。その透過した剣にゴトーは僅かに驚くが、人差し指と中指に、中指と薬指、薬指と小指に、三枚ずつコインを挟み、メリケンサックの要領で剣戟を広げる。そのままゴトーは足に【流】をして、レッツを蹴り飛ばす。

「あぐツ……!」

「どうした? もう剣を振り抜けねえのか?」

「がはっ……ゲフツ……まさか!」

一息付くと、【癒しの碧玉／ホーリーヒーリング】で自分の治療を行い、再び挑む。

このまま、レッツはゴトーの突破を成せずに、二日目が過ぎた。



くく

一日目は遠距離、二日目は近距離、なら三日目は？ 今までの情報を加味しての、複合バトルである。

「スウー、ハアー…。 …行きます！」

「来い、だがハンデがあるとはいえ、たった三日で突破できるほどに、ゾルディック家の執事を舐めんじゃねえ！」

レッツは今、ルビー・トパーズ・サファイアと【堅】も加味して、七倍の消耗率。 早期決着が求められる。

焼き直しのように、コインと木の葉が飛んできては、迎撃し、瞬時に切り替え、レッツはすぐに駆け出して、突破を図る。ゴトーは全てを迎撃しきる事は不可能と読み、軌道を見て、飛んでくる弾に、角度の跳ね返りがレッツに向かうよう、コインを撃つ。 レッツはしやがみ、ゴトーの足元を狙う。

「くっ！」

（ ……だ！ ）

さしものゴトーでも撃ち終わったインターバルの時に、足元を狙われては、コインの

持ちかえなどもできず、飛び退いてしまい、その距離から迎撃しようとする。

レツはそのタイミングで、「蒼流星の指揮／ブルーメテオタクト」を発動させ、一気にゴトーの遙か後方に駆け抜けた。

「フウー」。これで良い？」

「…ええ、お見事でございます。今日は日が暮れます。この先に我々、執事が常駐する屋敷がございます。翌日、ゾルディック家本邸にお送りします。」

「ありがとうございます。えっと…」

「失礼、私の名はゴトーと言います。」

「ありがと。それで気になっていたんですけど、何でどこか、怒っていたんですか？」  
「ええ、先ほど、キルア様の友達だと、幼く愚かで自分の事しか考えていない身勝手な反論を聞かされましたね。挙句の果てには、「いいからキルアを出せ！」などと…。」

「ハア。…ゴンを一回ぶっ飛ばしただけじゃ足りなかったかな。」

ゴトーとレツは歩き始めながら、そんな会話をし、最後のゴトーの言葉にレツは頭を痛める。

「…時に確認したいのですが、レツ様はキルア様の『友達』だとおっしゃりますか？」

「僕も二年前まで館に幽閉されたから、『友達』は居なかったし、分からなかったけど、向こうの扉の前の人達曰く、『友達』らしい。…ゴトーさんが求めてる答えじゃないか

も知れないけど、実際にそうとしか返せないんだ。」

「それでございますか。」

そのままレッツは執事用の館で休んだ。

~~~~~

翌日、レッツはゴトーに案内され、結構な距離を歩いて辿り着いたゾルディック本邸は、屋敷というよりも城と言った方がいい位に大きかった。レッツは辺りを見回しながら、先ほどからずくずくと誰かに見られているような感じがするので、その出処の把握をしたかった。やがて、「こちらでお待ちくださいね」と高級そうな調度品の置かれた広い応接間に案内された。

しかしイルミはまだ仕事巾着らしく、しばらくの間ここで時間を潰していて欲しい、と湯気の立つミルクティーを出された。壁の立派な柱時計がチクタクと鳴るのをBG Mに、レッツはゆつくりと紅茶を飲んだ。

そしてレッツは目を見開いた。

（毒があるって分かるのに、それ含めて美味しい……！ どうやったんだらう!?!）

レッツは、その方法を聞き出すことを、頭の中にメモしながら、どうやって時間を潰すか考える。

部屋の中には大きなベッド・立派なクローゼット・立派な花瓶に綺麗な花・高価そうな絵画・トイレにバスルームまで完備されていた。しかし、TVとか本はないから暇を潰す事は出来ない。クローゼットの中も空っぽ。あまりにヒマなので、残り二つの【発】を考えるにしても、たかが知れてるのだ。

~~~~~

しばらくして、仕事が終わったイルミが帰ってきた。二人は客室から出て、廊下を歩く。

「…此処に居るってことは、ちゃんと試練を完遂したんだね。」

「うん…もしかしなくても玄関から戻ってきた？ …ならゴン達が門の前にいると思うから会はずだけど。」

「いや、オレは裏口から。 …『友達』かどうか分からないのに気にするの？」

「やっぱり気にはなるから…かな？」

「ふうん…まあ下手なウソつかれるくらいなら、そっちの方が誠実だけど。 …掃除夫の家で泊まっているみたいだね。なんでも『自力で試しの門を開けるために特訓する』みたい。」

「…よかった。 正面から資格を手にするように、考えてくれたみたいだね。」

「試しの門を自力で開けたところで、ここまで来れる可能性はないと思うけどね。」  
 「うーん、念が使えないからねエ。」

イルミは淡々と報告をするのに対し、レッツは腕を組み、首を傾げて、考え込んだ。

「…まあ、レッツならライバルとしていいかもしれない。」

「? なんて?」

「今、オレの弟のミルが逆恨みで『お仕置き』してるけど、それが終わると筋トレしてるし。」

「…そんなに悔しかったんだ。」

「そういえば、入口の門、何番まで開けたの?」

「でも僕、【2】の門までしか開けられなかったのに。」

「え? 念使いとしては下の上じゃん。だけど、ハンター試験の時の動きからするともう少し重い扉まで開けられてもいいはずなんだけど?」

「ん? …【絶】状態で開ける門なんじゃないの?」コテン

「…:そんな決まりは無いよ。まあ、それなら納得だね。」

レッツは首を傾げて答え、イルミとの認識のズレを修正する。

イルミとしては、レッツ個人の意思を把握し、キルアに悪い影響を与えているとは考えていない。 実際さらに強くあろうと努力という良い影響の方があ。 何より互い

に『友達』かどうか分からないというので、比較的フランクなのだ。

レツとイルミはそんな話を話しながら、目的の部屋に着いた。

~~~~~

イルミは、早速、レツの操作系の知識の把握を求めた。

「まず、どこまで操作系に可能か把握してる？」

「えっと、人や物に刺して、人形化……するくらいかな？ 有利不利なもの、特に把握して

ないかも。まずは、具現化を完成させろって言われたし。」

「……なら、出来ることからだね。何かを具現化した様子も無く、強化、変化、放出系じゃ

操作系は解除できないのが特徴。操作された人間を再起不能、もしくは針などを外せ

ば解除出来る。操作系同士なら基本的に『早い者勝ち』。可能性としては、特質系や

具現化系の特種な念能力なら、ありえるかな？ ってくらい。条件を満たせば、確実

に勝ちなのは、メリットだよ。不利な点としては、愛用品を手放せないってくらい。

例外として、操作を上書きする特殊な操作系、という可能性もあるだろうけど、そう

言う場合は逆に条件が難しくなるから、ほとんど考えなくていい。」

イルミは続け、レツはしつかりと考える。

次にパターンとしては、『生物操作』タイプ、『物質操作』タイプ、『概念操作』タイプ

がある。『生物操作』タイプは、生き物に愛用品を刺して利用する。勿論、人に刺して人形化するのにも含まれるボクラよりの人種ならよく見るタイプ。『物質操作』タイプは、操作する媒体もセットに持ち歩くタイプ。ちよつと珍しいのが、『概念操作』タイプ。機械類を用いれば観測はできるけど、人の目には見えない特質よりの力。それと、よく効果を強めるのに称される制約も説明する。これも、「説明」・「承認」・「契約」に分類される。いずれか一つでもかなり強力になるよ。」

「うん…」

「…でも、これらのパターン化されたケースで、求めているのは操作力自体を強めるものだよね?」

「うん。 僕の持ちたいのは、『生物操作』タイプかなあ。」

「その中で細かく分けると、〔強制・半強制〕型、〔要請・条件〕型、〔催眠・誘導〕型になるけど、いずれも容量がほとんど持てくから、かなりキツくなる。」

「御もつともなんだよね。流石、操作系のプロフェッショナル。」

「だから、アレと称したのを教えるよ。 オレは使わないけど。 で、【神字】っていうんだけど、知らないんだよね。」

「…全くピンと来ないから、僕の家族は使わないんだと思う。」

「…ここまで講釈しておきながら、愛用品が見つからないと、意味ないんだけどね。」

「それは、なんとなく決まってる。刺す物がいいなって。」

「…それなりに考えていたんだね。【神字】の勉強の前に、武器庫かな。」

~~~~~

二人は滅多に使われないが、きちんと掃除されてる、武器庫にきた。

「オレもそこまで来ないんだけどね。でもインスピレーションが大事だからか、それなりに揃えてるけど。そこからオーダーメイドだね。」

「短剣とか暗器の類がいいんだけど。」

「それはここの棚かな。」

そしてしばらく探してみても、パリイングダガーやトレンチスパイクといった、短剣もあるが、ピンとは来なかった。そこで、さらに広い定義として、片手剣の類を見つめる。

「……これがいいかな。」

「うん？ それはフリントロックソードやガンブレードといった、『銃剣』と呼ばれる武器だね。」

「それでイルミさん。この刃渡りを短くすることって出来る？」

「それくらいなら、時間はさほど取らないけど、でも一朝一夕じゃ、できないよ。」



「分かった。その間に【神字】の勉強をするのかな?」

「そうなるね。それと、会わせたい人もいる。」

「??」

「…でも、まだ【発】が完成してないんだらう?」

「うん。」

「なら、完成させてからだね。」

そう、イルミがまとめ、レツは再び客室に戻った。

~~~~~

「こちらでしばしお休みください。夕食の用意が整い次第お呼びいたします。」

「ありがとうございます。」

レツは最後の【発】に関して、思考していた。

(うくん、今のは、ダイヤに格納するかな…。どっちみち武器が完成してからじゃない

と。最後のアメジストはどうしようか? やっぱり見えていて、クロロ兄さんやコル兄

さんみたいな、これから作る操作系を補うものを考えたいな。…でも、これは誰にも

教えちゃダメな切り札になる。)

ということをしばらく考えた。…ちなみに夕食もしつかり毒入りであることを把

握した上で、食べていた。

くく

翌日、元となる武器があつたので、いふなればコルトパイソンダガーとでも言うべき銃短剣が二本、レッツの元に届いた。

しばらくは、朝に武器の操作性付与、残り一つの【発】の思考。 昼は、武器の手応え確認。

夜はイルミの操作系に許されることの確認、執事の【神字】の文字とできることの講義だった。

そのまま一週間が経過した。

「うん：ダイヤはこうかな。あとこれを補いえる、紫の【発】だね。 …名前は、人形：劇。 うん、【舞い踊る僕の人形劇／ステーションマインドール】かな。」

さらに一週間後。 ようやく切り札たる、最後の【発】が完成した。

まずレッツは与えられた部屋でのんびりしながら、再びクロロに電話を掛けた。

「クロロ兄さん、【発】完成したよ。」

『…早いな。 まあ、それはそうとして、どんな武器だ？』

「えっと、短剣と操作系と細剣になった。（最後の一つは秘密にしないとね。）」

『…なるほど……………』

「クロロ兄さん? もしもし?」

『いや、覚えたばかりの【発】をコントロールさせる場所などを考えていた。…そうだな『天空闘技場』に行くといい。そこに扱う獲物が近い、フェイとシャルを向かわせる。しつかりと鍛えてもらえ。』

「分かった。」

『それと、観察眼もそこで養ってもらおう。どちらが勝つか賭けると云う物で、そこで5億は稼げ。』

あと、200階までは、両手を使うことを禁ずる。シャルが探知するから、ズルしてもバレるぞ。』

「そんなに稼げるものなんだ…。そのハンデも頑張るよ。」

『じゃあな。』

「うん。またね。」ピッ

そこでレッツはクロロとの電話を切り、レッツはイルミにも報告することにした。

「イルミさん。ようやく【発】が完成したよ。」

「遅いよ。じゃあ、着いてきて。」

レッツはゾルディック家に来てから、17日目にして、一段落した。正直、かなり速

い部類だとレツは思つてるのだが、イルミにとつてはそうでは無かつたらしい。

【発】が完成に至つたところで、イルミの発言に、レツは首を傾げ、着いていくことにした。

~~~~~

「さ、ハハハだよ。」

イルミはレツに扉を開けることを促し、それを不思議に思いながらも、レツは扉を開ける。

扉を開けた瞬間、無数の紙吹雪を蛇のように連ね、集中して飛ばされてきたので、レツは左手の「紅くなる灼熱／フレームバースト」を突き出し、燃やすことで防ぐ。

「な、何？」

レツは落ち着いて、扉の先に居た人物を見る。

そこには、顔面に巻かれた包帯に、異様な存在感を放つモノアイのスコープをつけた、豪奢すぎて時代錯誤なドレス姿という服装からして、女性に、黒地にきらびやかな花の刺繍が施された女兒用の振袖を完璧な着付けで着こなした、おかつぱに口元のほくろが子供ながらに色つぽい10歳前後の子供。

先ほどの攻撃は、こつちの子供の方らしい。すると貴婦人の方から、自己紹介が始ま

る。

「私、イルミヤキルアたちの母でキキヨウと申します。こちらは末っ子のカルトちゃん。以後、お見知りおきを。」

キキヨウさんの言葉に合わせてペこりと無言で頭を下げるカルト。

「えつと………レッツです………宜しくお願いします。」

「それではレッツさん、御両親はどんなお仕事を?」

「…僕の家族は、兄や姉はいるけど、他はいないです。 …イルミさんに似ていた、兄と暮らしていた時も、他の家族は知らないです。 仕事は…殺しかな?」

「ご趣味や得意な事は?」

「あの、料理と裁縫と掃除と癒しの技術が趣味です。(最近やっていない以上、人形劇は…違うかな?)」

「まあ!女の子らしくていいですね!」

「そうなんですか?」

「それとレッツさん、あなたは今お付き合いのしている男性などいらつしやいますか?」

その質問にレッツは首を傾げ、答える。

「えつと、どういう意味ですか?」

「あら、ごめんなさいね。」

「あのー、キキヨウさん？ 結局質問の意味は一体……」

「いえ、キルはずつとゾルディックの中で育ってきました。だから外の人間と関わる機会にはありません。あの子の交友関係の全ては、家族、使用人、標的の三つと言つても過言ではなかつたのですよ。」

（…それは兄さんが居なくなる前の僕みたいだな…。）

「そのキルが私と兄を刺して家を飛び出し、初めて外の世界に触れました。無論戻つてきてくれましたが。その時に知り合った男の子達が来たときは、それはもうたいそう憤慨しましたとも。」

「思つたんですけど、本当に外の世界を知る前の僕みたいところなんですわね…。」

「あら？ あなたの家も？」

「今は、もう無いですけど…。でも外の世界は本当に危険で、ある程度の強さがないとダメで。それを知ってるからなんですけど。」

そのキキヨウの話にやはり少しは共感できるので、レツは聴いていた。

「…どうやら、悪いことばかりでは無かつたようですね。まさか、女の子の知り合いまで作るとは、少し予想外でした。……………レツさん！」

「何ですか？」

「私はキルの、ゾルディックの事を考えると、一つ私の息子達には足りないものがある事

に気づきました」

「イルミさんにも? それって一体——」

「女性です! あの子達には、ガールフレンドの影も形もありません! このままでは、ゾルディックは途絶えてしまいます!」

「……………?? (えっと、なんて言ったらいいのかわからない。)」

「だからレッツさんをキル、もしくは別の息子達のお嫁さんにもどうかと思ひまして」

「話が飛躍してますよね? でも、具体的には分からない…。(全く脈絡ない、と思うけど…)」

「色々な特技が、嫁らしくていいじゃないですか。まあ家ではほとんどの事を使用人が行いますけど。」

「それって、今までの技術の有無関係無いような…?」

「実力としても、イルミが認めたのであれば問題ありませんし、思想も私たちに近いものを持つておられる様子。おまけにそこそこの毒物は聞かないようですよわね。」

「それは今の家族のおかげですね。」

「まあ基本家業は男性陣が行うので、レッツさんは家にいてもらって構わないのですが。」

「はあ。」

「この家に来て全く物怖じしないというのも素晴らしいです。中々の度胸に実力。後、

容姿が可愛いのもポイント高いですよ。綺麗な金髪と翠眼ですわね。」

「あの………ありがとうございます。」

「そういえば、あなたの出身地は？」

「…本当に分からないんですよね。しっかりと覚えてるのは、兄さんに着いていって、人形店を営んでいた時。…それ以前は、思い出したくもないですね…。兄さんが居なかつたら、どうなっていたか…。」

「ふむ…。あなた、流星街出身？ 私と同じところの。」

「名前が無い土地ってことは把握してる位で、正確に何処かは分からないんです。」

「となると、ますます流星街の可能性が高いですわね。あの土地の流星街という名前は、通称というだけで、一切の干渉がない、政治的空白地でありますもの。」

そのキキヨウの言葉に、レツは苦い表情を浮かべながら、聞いていた。

すると、キキヨウは何かを考えだし、結論を出した。

「なるほど…。だからその手の知識がなかったのですね…。 なら私が、同じ流星街出身として素敵な女性になれるのか、特と教え込みますわ！」

「あれー？」ズルズル

レツはキキヨウに首根っこを掴まれて、どこぞに連行された。

ちなみにイルミとカルトもこの部屋にいて、レツの目配せにも気付くが、どうにもで



きないことを知ってるので、何もしなかった。

## No. 18 / ボクツコ? スエツコ? ダンギ

レッツはキキョウに連行されて、女や妻としてのアダルトイイな領分の話や知識を仕込まれ、耳年増に改造されてしまった後、翌日になって、イルミとカルトが居た部屋に返された。

レッツは顔から湯気が出るくらいに、プシュと真つ赤にさせていた。

「うう……（ああ……、もしかなくても僕、ゴンに口説かれていた、ってことだよな。……今ならキルア達の反応がよく分かってしまう……）」

戻りながらも、レッツは気づかなくていいことに、気づけるようになってしまったのだ。そして扉を開けると、イルミはいつもの無表情だが、カルトは、物凄く忌々しそうに鬼の形相でギリギリしていた。そのリアクションにレッツは質問する。

「……何があつたの?」

「……ああ、つい三日前に、ゴン達が試しの門の「1」を開いたらしくてね。」

「せっかく帰って来た、キル兄様は連れていかせない……!」

「……なるほど。 本当に兄弟が好きなんだね。 ……羨ましいな。」

そのレッツの言葉に、カルトは八つ当たりに近い感情で、レッツにも怒気を向けていた（ち

なみに昨日、容易く攻撃を防がれたことも入っている。)のが一気に霧散した。

「…昨日の話を聞いてると、ボク達を羨ましいと思うのが分からないんだけど?」

「…今の僕の『家族』は、そこまで分かりやすく感情を出さないからね。一回り歳が離れた末っ子だからなのか、たまに何考えてるのかわからない時があるんだ。あと、とんでもないウソつかれる時もあるし。」

「ふうん……ボクと同じか、近い関係の『家族』なんだ。」

「そっか、君も末っ子って言ってたね。」

カルトの疑問にレツは答え、少し考える。そこでイルミから話がかかる。

「そういえば、昨日母さんに連れられたけど、まだ親父達と会ってないよね?」

「? ……うん。会ってないと思う。」

「ならレツにはそこにも行ってもらわなきゃだね。道はオレが案内するよ。 ……カルトはどうする?」

「…【絶】で、試しの門付近まで行ってみて、自分で観察してみる。」

その言葉にイルミは僅かに目が細まったが、カルトはそのような思考では無いと、把握している。「そうか」と返事をして、三人はバラけた。

くくく

「さ、ここだけど、オレは次の仕事が入ってるからここまでだね。」

「そっか、イルミさんも元気でね。……絶対にヒソカあたりに殺されなないで。」

そのレツの言葉にイルミは僅かに目を見開きつつも、尋ねる。

「……それはどういう意味かな。」

「単純に死んで欲しくないし、キルア達に僕と同じ思いをさせないで、つてだけ。」

「……オレたちは殺し屋だからね。残念だけど保証はできない。でも、態々殺されてやりはしないよ。」

「フウ……、お邪魔します。」

そこには、クツシヨンが沢山盛られた上に堂々と座ったゆったりと寛ぐライオンのよ

うな豊かな銀髪美丈夫の人物であった。

「お前が、キキヨウとイルミが勧める、レツか。」

「はい、そうです。」

「ほお、この娘がイルとキルが、ハンター試験で会った、知り合いの子じゃな。」

すると、唐突に後ろから、発された声に振り返ると、レツの斜め後ろには、両手を腰

の後ろに回した老人が立っていた。鋭い眼光と顎より長く垂れ下がった口髭と『一日一

殺』と書かれた服が特徴的な人物。

殺』と書かれた服が特徴的な人物。

殺』と書かれた服が特徴的な人物。

「儂は、ゼノゾルディック。」

「俺は、シルバゾルディックだ。」

「レッズです。おじゃましてます。」

二人は興味深そうな顔で、レッズを上から下まで全身を一瞥された後になんか納得した。レッズがはてなと首を傾げる。

「…なるほど、確かに、キキヨウが嫁候補に、どうだと言うのは、どんな娘っ子かと思つてな。」

「ああ、なかなか面白い素材だな。」

「はい?」

レッズをそつちのけでよく似た笑いかたを披露する親子に、レッズは疑問符を浮かべていると、本題を切り出した。

「何、キキヨウから提案されての。ちと質問に答えてくれ。」

「といつても、聞きたいことは二つだ。…今、ここを目指している『友人』に関してはどう思っているんだ?」

シルバはゴン達について質問してきて、レッズがどのような思想を抱いているのか、今一度確認したいのだ。

「う〜ん…僕たちを『友達』と言つてくれたのは、やっぱり嬉しかったな。でも僕個人

としては、やっぱり分からないのが、結論かな。」

「そうか…では、俺の子についてはどう思ってる?」

「うん、しばらく考えて見たんだけど、キルアとどうしても良い感情が無かったのって、兄さんが居なくなる前の僕に似てるからなんだなって。その眼鏡を外すと、互いに距離感が分からない。」

そのレツの発言に、二人は眉を上げる。そのままレツは続ける。

「イルミさんは、やっぱり兄さんに似てる人っていうのが大きいかな。カルトの事はそんなに話していないから分からない。」

「ふむ…なるほどな。」

「なるほどのお… 儂は良いと思うがの。」

「そうだな…。」

「?」

レツをまたしても置き去りに、二人は領くと相談をし始める。

しばらくすると、ゼノが喋り始める。

「キキヨウの推薦を実際に見て、聞き、判断しようと思っていたが、まあ嫁候補としては十分じゃろ。」

「え?」

「ああ、これは俺と親父、キキョウの3人で決めたこと。まあ、だからと行つて強制もしないし、特に変わるわけでは無いから、安心してくれ。」

「これで、お主は大義名分を得た。キルトと、そこにいるであろう、お主の武器を監修した、もう一人の孫にも会うていくと良い。」

その言葉にレツはつい固い声音になつてしまふが、シルバは特筆するべき心配事は無いと言ひ、ひとまず納得したレツは挨拶をして、その部屋を後にし、そこに居た執事に着いていった。ちなみにしつかりと番号交換は行つた。

十十

遡ること三日前。

一方、この十五日で《試しの門》の「1」をクリアした三人は、ミケに食い殺された侵入者を片付ける掃除夫が暮らす山小屋。

「いや、驚いた……まさか三人とも、二週間と一日で、やつちまうとは。」

「うん……」

「……どうした? ゴン。」

ゼブロはそんな感嘆の言葉を言い、それとは別に腕を組んで悩んでいるゴンを見かねて、二人は話しかける。

「……ずっと考えてたんだけど、レッグが【2】まで開けたのに、【1】だけでキルアを託してもらえるのかな？　って。」

「確かに、女性に力で負けているというのは、やはり辛いかな……。」

「まあ、割と真剣に男の沽券に関わるもんなん。」

「このような思いがあり、その分、過密にしたのだ。結果としてかなり速いペースで開いたのだ。その言葉に、二人は眩き、ここでクラピカは一つ推論を出す。

「だが、力は最も分かり易いパロメーターの1つだからな。……もつと鍛えるか？

いや力だけで全てが決まるわけではないが。理論上は滞在できるビザの半分で開けたのだから、もう半分で【2】が開ける可能性はあるが……」

「けどよお、なんか得体の知れない力を、ヒソカとかが使ってたから、それなんじゃねえーか？」

「それは考えにくいから、迷ってるんだよ。湿原の時のヒソカとか、講習の時のレッグみたいな嫌な感じはしなかったから。」

レオリオはその得体の知れない力について、疑問を出すか、ゴンがそれを否定する。まさに天性のそれで【練】の有無を感じ取ったのだ。

「……鍛えよう。絶対に鍛えよう。」

「俺も【3】の門に挑むか……」



「うん、できたら『2』が開くまで、しばらく続けようよ。」

その結論を出した三人。ゼプロそっちのけで決めてしまったが、その話にゼプロは「構いませんよ。」と答えをもらい、三人は特訓を続けることにしたのだ。

十十十

「キルア様はこちらに居ます。」

やがて一つの扉の前にたどり着くと、執事が扉の横で立ち止まってそう言った。廊下は長方形の石で上下左右が構成されている。光源としては窓と、今は点いていないけれど廊下の両側にランプがあるのみ。

（それにしても、ここに居るのか。中からバツシンバツシン聞こえてくるってことは、今も『お仕置き中』なのかな? …何も言わないってことは、入っていいのかな。正直、僕の印象と勘としては、全くといっていいほどいい予感がしないのだけれど。）

とは言え、このまま音が止むまで扉の前で待ちぼうけ、は退屈が過ぎる。ので、覚悟を決めて扉を開けた。

「失礼します……………」

「フウー、ブフフー……………! あ?」

「あ? ……………レツ?」

レッツが扉を開くと、鼻息あらくこちらを振り向いた男、とんでもない肥満体だが、この人がもう一人の孫なのだろう、と理解する。その手には、鞭が握られている。その鞭でしばかれていたのは、キルアであった。しかも半裸である。彼はレッツがここに来ると思つてなかつたようで、こちらを向いたまま目を見開いて固まっている。キルアの身体は、手足が天井から伸びた鎖と背面の壁にある枷にそれぞれ繋がれており、さらに鞭で叩かれた跡が無数のミミズ腫れとしてあちこちにあつた。

レッツが、冷静でかつ何も変化がなければ、『お仕置き』がただの拷問だと分かつていただろう。しかしそれとは別に、おそらく兄弟が半裸の弟を鞭で叩いてるつていう絵面が、もうなんかキツイものがあるだろう。こんなことは旅団内では発生しない。軽く戯れに戦うくらいでのバトル位。男の鼻息が荒いのもプラス、キルアもそんな手枷や足枷なんて自力で壊せるだろう。つまり自ら鞭に叩かれている、ということも理解したのである。そしてつい数時間前にレッツは耳年増になつてしまつている。この前提状況から、導かれる結論は一つ。

キルアを含め、この二人は常軌を逸した変態、にしか見えない、ということだ。

「ああいや、うん、なんか部屋間違えたのかなあ?」

ドン引きしているのを隠すこともなく、なんとも言えない表情のまま、そう言つてレッツは部屋から出る。廊下で控えていた執事と顔を合わせ、無言で部屋を指さすと、彼

もまた無言で首を横に振った。

(……キルアは、ゴンとは違うし、僕たちとも、全く考えもしない方向で、離れていたな……)

キルアにとって、ある種、もつともされたくない方向で、レツに誤解をされた。しばらく閉ざされた拷問部屋への扉の前の廊下で、佇む。イルミやキキヨウは、キルアをゴン達から引き離そうとしてたが、この時レツは、ゴン達をキルアから引き離そうと、ある種、誓った瞬間である。

十十

レツがさつき扉を閉めてからの、拷問室。

キルアは拘束されてるから、ともかく、もう一人の兄弟である、ミルキも先程立っていた場所から動いていない。未だにキルアを鞭でしばけるポジションに居るのだが、その状態からミルキは呟く。

「……なんだ？ キルの拷問中に水指しやがって。……しかし、まるで人形みたいだったな……。あんな、1/1スケールかつ自律型の人形なんか注文したか……? (念の可能性もあるが、そんなのは容易く撃退するはず。万が一ここまで来たとしても、攻撃を加えなかったのが、意味が分からない。)」

ゼノ曰く、『頭がいいが、バカである』を最大限發揮した考え方をする。そのままミルキは「…キル、お前何か知ってるか?」と聞こうと振り向くと、キルアは真つ青になつて冷や汗を流し、ひどい顔色だった。

「——何だ? ようやくお仕置きが効いてきたか。」

それを見て、ミルキはにやにやと笑つてそう言つた。勿論、どんなあらぬ誤解を受けたか、気づいたキルアは即座に言う。

「ちつ……げ——よバカ! 気づけバカ兄貴!」

「はア? ……オイお前、今、俺のこと『バカ』つたろコラア!」

「バカだからそう言つてんだろ! 今! どんな誤解されたか気づけ!」  
「誤解?」

そうミルキが呟き、しばらく何とも言えない空気になり、ミルキは手に持つてるムチと、半裸のキルアを交互に見る。そして、キルアやイルミと、兄弟なのだとわかる、よく似た顔で目を丸くする。

「……………まさか。」

「そのまさかだよ、クソ兄貴イ!」

ようやく気づいたミルキは、その言葉をキルアと交わすと、扉に急いで向かつた。

「ちよちよ、ちよおオつと待てええええつ!!」

レツが扉を閉めて、程なくして、室内からバタバタと慌ただしく扉へと近づいてくる足音が聞こえ、扉が破壊されたのかと思うほどの轟音と、叫び声と共に扉が勢い良く開け放たれ、中から肉塊が転がり出てきた。

(なんて威力のタツクル。あんなの僕が食らつたら、軽々と吹っ飛ばされてる。かうじて無事だった扉の方も凄い。 なるにも「神字」とか「周」もされていないのに。)

どこか、ズレたところで、ゾルディックの技術に感心と関心を示すレツ。それとは別に、鞭を手に持ったままで、明らかに焦った様子の男は、向かい側の壁に激突する前に、たたらを踏みながらも何とか止まり、両膝に手をつきながら、首を巡らせてレツを補足すると、勢い良く状態を上げつつ叫んだ。

「違うからなつ!!」 お、お前は勘違いをしている!!」

名前も分からないし、実際に大ダメージを受けるのはキルアだけなのだが、それとは別に自身の名誉のために、必死の弁解をする。レツは盛大に苦虫を噛み潰した顔を、なんとか解除し、発言する。

「大丈夫だよ、何も勘違いはしてないから。」

「ほ、本当か? ならいいんだが……流石にあんな趣味だと思われたくないからな。」

レッツが微笑みながら勘違いしていない、と言うとほっと胸を撫で下ろす男。ブラウンのズボンに白の長袖シャツに不釣り合いな真つ黒の一本鞭が非常にシニールなのが。レッツの言葉とやわらかな笑みで安心感を与えたのも束の間。

「見紛う事無く、殺しとは別の方向にアウトの行為だったもんね。あれには勘違いなんか、生じようが無いよ。」

「だアから違うツツつてんだろオ!？」

「んなわきやねエだろーがツ!？」

扉の向こうから、キルアの声が聞こえてきたので、そちらに届くように声を張るレッツ。

「いや、うん。安心してよ。キルア、そういう趣味の持ち主だったならしようがない。ゴン達も来てるけど、僕が責任をもって帰らせるよ。」

「何も分かってねえじゃねえかこのアマツ!」……つていうか、来てるのか!? ゴン達!!」

その言葉に、ようやく理解した、ミルキはふてくさりながらも、いらいらした怒鳴り声とともに、鉄扉が勢いよく開け放たれる。

「あ? おいキル! ヘンなガキがお前に会いに来てるぞ!」

「あと、僕の武器を監修してくれた、君にも改めてお礼いつとかなきゃね。ありがとう。」

「あ? ……ああ、あの二週間ほど、前のアレか……。……キル! この女が帰ったら、

またお仕置き開始だからな! …ふん、俺は部屋に戻ってるぜ。」

それにレッツが素直にお礼を言うのと、それこそ素直な善の感情を向けられることなど、レアだったミルキはこれまた、キルアと兄弟だとわかる、キルアのスマートな体と違い、ミルキは完全にデブであるので、全く萌えないし、意味が分からないツンデレを發揮し、全身の肉を揺らしてドスドスと足音荒く歩き、バンと鉄扉を閉めて出て行った。「改めて、久しぶりだね、キルア。二十日ぶりくらい?」

「そんなもんか。その程度だと全然久しぶりって感じしねーけどな。」

取り敢えず、一応久しぶりに会ったのだから挨拶から入る。返事をするキルアの様子から、さつきも思ったけれどあまり意気消沈しているようには見えない。

「で、改めてだけど。ゴン達が、キルアの答えを聞くから待つて、てき。」

本当はゴン達の言葉を、どころかキルアと会えると思っていなかった、レッツは折角会えたのだから、講習会での伝言を伝える。それを聞いたキルアは少し俯いて目を細め、しかし嬉しそうに、滲み出そうな笑みをかみ殺しているようだった。

(素直に喜べばいいのに。そこんところは、フィン兄さんや、フェイ兄さんもだけど、なんで隠すのかよくわからないんだよな。)

そんなことをレッツが思っていると、しばし喜びを噛み締めている様子だったキルアは、俯いたままポツリと眩きをこぼした。

「……そっか、ゴン達が………って、おい、ホントーに、アイツらこっちに向かってんのか!？」

突如勢い良く顔を上げたキルアが大きな声で問いかけてきた。それにレツは返事をししてゆく。

「迎えにってことはそういうことですよ。浮かれ過ぎだよキルア。」

「ばっ、浮かれてなんか……! つっつかレツも止めるよ、ウチに来たら下手したら殺されるぞ!？」

「ん。僕としては最低限、不法侵入しようとしたゴンを、これからもう一回ぶっ飛ばすから、それはいいんだけど。……ただ、ホントーにキルアはそういう趣味じゃないんだよね。」

「お前、しつつけーな!!? だから違うっつってんだろが! いいからさっさと言え!」

レツが再び確認すると、キルアは怒鳴り返しながらも答える。そのまま続きを促す。

「来てるよ。門の所で僕と別れた。」

「はあああ!!? おい、大丈夫なのかよアイツら!？」

大声で反応するキルア。たしかにこの家の侵入者への対応を知っていれば、良からぬことが起きてしまうのではないかと心配するのも仕方のない事だろう。



レツと別れる前である、その時点で命に別状はなく、少なからずレツと会話できる状態であったのは確かだが、時間の経過した今もその状態であるのかは二人には分からない。

「大体、二週間くらい前から居たし、僕が一回ぶつ飛ばして、その上でもう一回不法侵入を試みたみたいだからぶつ飛ばしに行くんだけど。伝言を頼んだゼブロさんも付いてるから大丈夫だと思う。」

「ああ、何だ……。二週間も前から何やってんだ?」

「試しの門を開けて、最低限の資格を手に入れようと、頑張ってるんじゃないかな?」

ゴン達の現状について推測すると、キルアは安心したように息を吐いた。二週間見逃されていなければ多分下手なことはされないだろうし、ゼブロがついていけば、やはり安心を補強するだろう。

ちなみにレツは《試しの門》をゴン達が開けてるのは知ってるが、それでも二日も来ないのはオカシイので、こう推測し、実際に合っているわけだが。

その推測にキルアは納得したように頷いた。出られるにしても、流石にあの門を開けられない者達との同行が許可されるわけがないと理解しているし、これはキルアにとってもクリアーして欲しい。

「ゴン達については以上だね。で、今度は僕自身の用事済ませたいんだけど、いいかな

「？」

「ん、いいぜ。俺もレッツが何で来られたのか聞きたいし。」

紆余曲折のドタバタがあつたが、今度こそレッツは聞く。

「試験の時イルミさんにさ、人殺しはもううんざりだ、普通にゴンと友達になつて普通に遊びたいって言つたじゃん？ あれ、どういう意味だつたのさ？」

「……どういう意味つてのは？」

「僕はさ、ここに来るまでも、わかつてると思うけど、人殺ししてきてるんだ。そしてその技術をゴンたちの前で、僕たちがどういふ人種か、わかつてもらうためにも、見せてきたんだ。それでもゴンは会いにくつてさ。」

「……豪胆なのか、呑気なのか、わかんねエー奴。」

「アハハ。それで続きだけれど。人殺しというよりは、仕事つてそこまで嫌がるものなのかなつて。まあ、辞めるかどうかは別にいいんだけど。この家から出て、キルアがその先に何を求めているのか、どう生きようと思つてるのかが知りたい。」

レッツが知りたかつたのは、キルアの答え。此処を出てゴンと一緒に過ごす中で、彼が何を求めているのか。普通に友だちになつて、遊ぶ。今のような生活ではなく、大多数の誰もが過ごしているような日常を欲しているということなのか。それとも、ただゴンという存在が欲しいだけなのか。

「それは……、……」

眩いたキルアは下を向き、俯いてしまった。沈黙。つまりキルアは答えを探しているようだ。

(キルア自身の言葉なのに。イルミさんに反抗してまで言つたくらいだし、確かに僕達と言葉の通りの関係になることを望んでいるんだらうけど。)

「……お前は、なんでそんなことを聞く?」

レッツの言葉や思いとは別に、目線だけをこちらに向けて、キルアはそうレッツに問いかけた。

その質問に、レッツは目を閉じ、一息をつく。

「僕も、キルアが望んでいるのと同じ。外の世界を見てみたかったんだ。」

レッツがかつて持っていた望みだ。新たな『家族』と話して、しばらくはヒソカを殺すことに執心していたが、点と舌を繰り返して気づく。あの普通の暮らしが、何よりだったと。

もう、二度と手に入らない、想い出。

「兄さんが家から出してくれなかった時は、手が届かないと思っていたそれが、気づいたら近くにあつてさ。……今は、また『家族』がいるから良かったけどさ。気づいた時には遅かったけど、無意識にそれは手に入るところにあつたってこと。……でも、それ

は外を知らなかったから、分からなかった。だから後悔は……してないって言ったら嘘になるけどね。」

「……そんなものかよ?」

しかしキルアは続けて、言った。

「なあ、レツ。」

「なに?」

「……オレ、オレは、それでも……ここから、出たいんだ。」

それは本当に絞り出すような声で、レツは首を傾げたまま、黙って聞いていた。

「レツは……オレの気持ちもわかるけど、兄貴の気持ちも分かる……って事だろ?」

「うん。 ……兄さんが死んでから、初めて気付いたけどね。」

キルアが複雑極まる顔をしていたが、レツは確信を持っていた。イルミ達は間違いなく重度の家族愛があると。

「イルミさんほどヘビーじゃなくて、最低限、人形店を営むくらいには、外の人と交流があつたけど、僕も死んだ兄さんが好きだったし、今の『家族』が好きだよ。だから家

出しようとは思わないし、『家族』に出て行って欲しくない、っていうイルミさん達の気持ちはわからなくもない。でもキルアは、かつての僕みたいに、『家族』よりかは、外

の世界の方が勝る程度に、『家族』のことが好きじゃない、ってことだよ。」

「あー……まあ、そうだな。」

こどももまつすぐ簡単な言葉で答えを導かれると、何だかとてもあつけない。キルアはそう思いつつも、しかし心のどこかがポンと軽くなった爽快感も覚える。

「ならさ、出たかったら出られるように頑張れば良いよ。少なくとも、兄さんが行方不明になって、最後のメモを手がかりに、なし崩し的に、家を出ることになった僕と違って。」

それはとてもあつけなく、簡単な答えだった。それにキルアは思う。

(……『普通に』なりたいたいような、外の世界を知りたいような、とにかく何か、と思ってきたけど、こう言ってみると、オレのやったことは、普通の家でもやるようなことと、さほど変わらないんじゃないかねエーか? ……ただ、オレの家が暗殺一家という、極めて特殊だった、つてだけで。)

それとは別にレツはといえば、「暗殺者ほど殺しに理性を使う職業もないだろう。」と思っている。ヒソカは特に、またウボオーギンにフエイタンも顕著であるが、盗賊であるクロ口達もまた、感情によつて、衝動によつて人を殺す。欲しいもののために殺す。

しかし、仕事で人を殺す暗殺者はそうではない。それは戦いの前に暗殺をするという、作業という言葉がしつくり来るようなものだろう。それは戦いの前に暗殺をするという、秒もないであろう、ジョネスやポド口の殺害は、いかに手際よく終わらせるか、その

実際に素早く、時間にして、十

みを狙った手腕はプロフェツシヨナルという言葉が何よりも似合っていて、『家族』の行なう殺ししか知らないレツには、酷くシヨツキングで、その姿を新鮮に、どこか「格好良い」とも間違いなく感じていた。

「だからさ……。 ごめん、僕も上手く説明できなかったね。」

「……なんだよ……。結局、混乱しただけじゃねーか。」

「ゴメンゴメン。でも、こうして自分から壊せるのに、枷に繋がれてるって事は、今も考えてるんでしょ？」

「……………ああ。」

「なら良いよ。 ……じゃあね、キルア」

「ん？ ……てゆーか、何でレツはここまで来れてるんだ？」

「あー、それはね、なんかキキヨウさんとゼノさんとシルバさんに嫁候補に認めるから会いに行けて 大義名分を付けられたし。」

「ブツ！ ゲホツ、ゲホツ！」

そこで初めて知った、キルアが吹き出した。レツもなんとか意識しないように頑張っているが、二人の顔は、気のせいかなや赤い。と言っても、互いに文句を言われなくても困るし、そのような対象になるかは全く別の話である。

キルアは微妙な顔で相槌を打った。おまけにそれが親や祖父のご推薦であるなら

ば、レッツはこれから先も、比較的容易に来れるようになるだろう。

「……行くのか?」

「うん。今度は、ゴン達と一緒に行くよ。」

「そっか……」

そして、二人は別れた。

~~~~~

拷問室を出たレッツは、取り敢えず、ここでの用は済んだのだが、

(そういえば、試験の時に、僕とは違う人形を扱う、兄さんが居るって言ってたな……)

こんな予測をして、次はミルキの部屋に案内して貰い、向かうことにした。

そしてその部屋に着く。

「ミルキ様。 客人が改めて、お礼にと。」

「なんだよ? ……ああ、ここに来たって事は、キルのお仕置きも再開だな。」

「その前に、キルアが言っていた、人形を集めてるっていう兄貴って君のことでもいい?」

「あ? ……んなもんこの部屋を見れば分かるだろ?」

執事の声と共に扉を開けると、こちらを振り向きながらそういうミルキ。 続けて発

したレッツの言葉に首肯し、続きを毒づきながら話すミルキ。 後方で扉が閉まる音がし

たのに気付きながらも、レッツが言われた通り、見渡すと。

その部屋の内部は、大きな棚に並べられた美少女やヒーロー、怪獣などのフィギュアが今では30畳ほどの部屋の2分の1程を占めている。人間大の物も複数あり、それが余計に場所を取っている。来るたびに物が増えて段々部屋の奥への道が狭くなってきた。いくつかはショーケースにも格納されていた。

奥にあるパソコン等が、その半分程度の割合を占めており、いくつかのハードに大量のモニターが設置されている。壁や天井には棚に並べてあるようなもののポスターが貼られているが、石造りのそれが露出している部分は少ない。更に他の部屋に続く扉にもびっしりと。

「……………」

「あ？ んだよ？ 急に涙流して、気持ちワリーな。」

レッツは無言であたりを見て、その光景にレッツは右目から涙を流す。それにミルキはやはりぶつきらばうに言う。その涙を流した理由をレッツは答える。

「ごめん、この涙は、部屋構成が死んだ兄さんと暮らしていた家に似ていたから……」

その意見にミルキは片眉をあげつつも、少々予想外の言葉だった。が、同じく人形を集めるというのも思い出し、ミルキは態度を軟化させ、自己紹介をする。

「そうか。オレはミルキ。キルアの兄貴だ。…キルと付き合うのは大変だったろう

？」

「なんだ。キルアの兄貴なのに、イルミさんと違って、話せるんだ。ホントにキルアは変に対抗心だしたりするから、ちよつと大変なただけど。人をすぐにおちよくつてたし。」

「ああ分かる分かる。すぐに人を小馬鹿にするんだよ。昔はまだ可愛げがあつただけどな。」

「うん、気が合うね。」

「そうだな。基本的には仲良くやれそうだな。で? —— えーつと…。」

「あ、ゴメン。僕の名前はレッツ。」

「そうか、で、レッツの扱う人形ってなんだ?」

「そこからレッツは、人形師であつたこと等を説明し、異なるが人形を扱う点について、話した。」

「……二人は一通りの雑談が終わつた後、人形の情報交換や、持ち込みの契約を持ちかけた。今のレッツの短剣は、ミルキ監修であり、その紛失補填などを条件に、レア人形の持ち込み等を依頼した。勿論、手に入つたらでいいし、せつつかせる事も無いという。こんなギブアンドテイクの取引をして、別れた。」

「……なお、この時の瞬間から、ミルキの趣味に、フルオート1/1の人形制作や改造

という趣味が追加された。

関節の動きに、命令理解のプログラム等、様々なハードルがあるのだが。

くくく

その後、レツは修行も終わつたと伝えるので、ククルーマウンテンから降りて、ゴンたちとの合流を目指していた。その過程でカルトと遭遇した。そしてカルトは、次第に訝しげな目で眉を寄せて、話し出す。

「……お前も、キル兄さんを連れ出そうとしてるんだよね？」

「ん？ 僕は積極的に、キルアを連れ出そうとは思わないよ？」

「……………そうなの？」

「だって、それはキルアが決めることだし。」

返ってきた答えに、カルトは黒曜石のような瞳をきよとんと丸くさせた。

「でも、キルアが外に出たいっていうなら、なるべくその助けもしたいけど。」

「……………」

続けて放たれたレツの言葉に、ムツとカルトは唇を尖らせる。

「まあ、それとは別に、君の目線の『家族』を聞かせてよ。同じ末っ子同士としてさ。

まずは僕の話でも聞いてよ。」

「そう言い、レッツは話し出す。レッツは目を閉じて、懐かしむように、だが眉を寄せて語った。」

「それに、せつかくだから教訓として聞いとくと良いよ。ずっと、館に閉じ込められて、好きか嫌いかも分からないのに、ただただ外の世界を見ようと、実際に見れた時は、もう手遅れだった、僕の話をさ。」

それにカルトは訝しげな表情を浮かべつつも、その言葉はキルアと近いので、聞いてみることにした。当の本人である、キルアはお仕置き中であるし、また母親と一緒に、拷問室でキルアと会ってはいいても、ろくに話をしていないから。

くくく

「僕、ものごころ着いた時には、『家族』は兄さんしか居なかったんだよね。そこから、好きになった人形店を営んでいたけど、ある時、帰ってこなくて、不思議に思っていたんだ。渡されていたメモはあったから、その通りにそこに行ったら、今の『家族』と出会って、その後、兄さんが死んだって聞かされてさ。その時に理解したんだ。僕は兄さんのことが好きだったんだって。もう、そこには僕以外の誰もいなくなっただよ。」

「……………なら、なんでキルア兄さんが、外に出るのを手助けするって結論になるんだよ。」

「？」

それとは別に、カルトは黙って聞いていた。だが、カルトの望みを叶えないのは既に聞いており、改めて質問をする。

「それは僕が嫌っていた、束縛に近いからね。それにそれは、結局の所、赤の他人の僕がすることじゃない。それは、『家族』である人達が自分の言葉で、会話することだから。」

「……………」

それを聞いたカルトは、何処か不安げに目が揺れている。その感情にも理解があるので、レツは話す。

「……………ふう。その不安になる感情もわかるけどね……………。言えばいいじゃないか。自分の希望を相手に強制するのはダメだけど、自分の希望を伝えることくらい、責められるいわれはないんだから。もちろん、それがきっかけで喧嘩になるかもしれない。でも、僕の今の『家族』みたいに喧嘩することなく、二度と会えなくなるよりはマシだよ。……………もしも、どうしても互いに譲れない部分が許容できなかったのなら、それは仕方がないと思う。そこまで深くわかり合いたい人がいた、それほどその人が好きだったということなんだから。いつかは十分に綺麗な思い出、という宝物になるよ。」

穏やかにレッツは、カルトの不安を取り除こうとする。

「……それとも、カルトは己を殺していいないと、自分が愛されなくても、思っているの？」

そしてレッツは、同じ失敗をして欲しくないし、もう自分が手に入らないモノを、全て揃っているからこそ。

「なら、それは勘違いだよ。僕は、キルアや、イルミさんじゃないけど、それでもカルトは十分、特別でなくとも、カルト自身で愛されているよ。それは話していて確信したから。」

その言葉に、カルトのどこか迷いがあつて、揺れていた目に、どこか怯えて蒼白だった顔に赤みが差し、頬を紅潮させ、トリップ状態になった。それをどうにか呼び戻そうと、レッツは「カルト?」と呼びかけた。

「……なに?」

「そんなすれ違つてる誤解をして、だから、自分の希望やわがままが言えないという変な遠慮をして、すれ違っているのなら、そんな悲しいことはないよ。だから、君たちはどちらも遠慮なく話して距離を縮める。」

そのレッツの言葉に、カルトは目を見開く。

生きる世界が違つても、見ている先が真逆でも、求めていて、満たされない欲望を満

たすためにも。

……関わって、繋がって、話すことはできる、ということ。

それは何の打算も裏もない、幼くて真つ直ぐな望みだからこそたどり着けた真理だった。

そして、末っ子同士として、レッツが純粋な興味本位で、聞きたかった事に移る。

「だから、君の話も聞いてみたい。」

「……それはできない。だって、不必要に『家族』を他人に話すなんてのは、できないよ。」

「……あー、僕の過去の話ならともかく、今の『家族』の話はそう簡単にできないよね。僕らの常識を忘れていた、僕が悪い。ゴメン。」

その言葉に、二人は何も語れないが、同じ社会に生きるものとしての常識があつた。それを互いに理解していた。

そこにカルトを探して、合流したキキヨウが、操作系のマイペースらしく、割り込み話し出す。

「カルト！ 見つけましたよ！ あんな外の間人を見に行つたと聞いて！」

「ごめんなさい、母様。でも、今は同じ末っ子として話してただけだから。」

「あら？ そうですか？ そういえば、レッツさんは私の自慢の息子たちに面会したよう

ですわね。誰と結婚しますか?」

「……………正直、そもそもこの人と結婚するかどうかわかんないよ。」

「……………そうなの?」

「うん。だつてまだ十一歳だし、結婚とか言われてもわかんないんだよ。 ……好感度順なら、イルミさんと君かなあ? ミルキさんは、痩せればまだ。 キルアだけは有り得ないというか、どうも想像つかない。」

改造されたとはいえ、性根が変わったわけではないので、キキヨウとカルトの順の質問に、レッツは答えてゆく。その答えに少しキョトンとした表情を返したカルトは、少し拍子抜けしたように「ふうん」と言つて目を逸らした。だがこの答えが気に入らないのが一人。

言わずもがな、キキヨウであり、ヒステリックに喚き出し、再び結論を出した。

「なんですつて!!」 キルの素晴らしさが分からないとは…。 勿論、どの子達も自慢ですが、それでも最も才能がある、キルが有り得ないだなんて!? ならば私が、今までのキルの素晴らしさを、特と教え込みますわ!」

「あれー?」ズルズル

レッツはキキヨウに首根っこを掴まれて、再び、どこぞに連行された。

やはりカルトも同じ場所において、レッツの目配せにも気付くが、どうにもできないこと

を知ってるので、何もしなかった。

No. 19 / シロガネ?ゾルディック?ヤミ

レッツは再び、キキヨウに連行されて、キルアの素晴らしさや、自慢話を延々と話され、理解してないと思われると、その話を繰り返すのだ。さらに試験中のキルアの殺しを語ると、目を潤ませて、再び褒めちぎるのだ。そんな風に改造されてしまった後、またしても翌日になって、開放された。

レッツはグルグル目になっており、少しばかりゲンナリともしていた。

「キルの素晴らしさが分かりましたか!？」

「はい。キルアは素晴らしいです。」

操作系を使われていないにも関わらず、そんな返事をしてしまうレッツ。その返事にキキヨウは満足し、開放した。そして改めて、レッツは下山を開始し、ゴン達の「1」を開けたにも係らず、まだ特訓しているのが不思議であったのだ。

〃
〃
〃

レッツが再び降りると、そこに居るのは、ゾルディックの使用人のゼプロと、ゴン、レオリオ、クラピカの四人である。四人は開けたことのあるはずの門を再度、開けよう

としているようだった。近づいてくるレッツに彼らも気づいたようで、作業を止めてこちらへと体ごと振り向いた。

「レッツ？ 戻つてきたんだね!？」

「久しぶりだな。ここまで走つてきたのか？ それと何やら武器……が、増えているようだが?」

「ホントに久しぶり。山からここまで走るといい運動になったよ。コレが僕の個人的な、用事の成果。」

門の前まで来たレッツに、ゴンとクラピカが話しかける。それに答えつつ、頭を下げるゼブロに、会釈を返す。そして、身体はこちらに向けているけれど、門に背を凭れさせて俯きながら座り、息を切らせている上半身が裸のレオリオは、周囲の声でレッツの登場に気づいたらしく、顔を上げた後ブルブルと痙攣している手を軽く上げて、切れ切れの言葉で話しかけてきた。

「よう、案外、早かつ、たじゃねーか。レッツが来る前に、この門、同じ数だけ、開けてやるよ、としたのによ。」

「用事自体は、比較的、時間が掛からずに終わっちゃったよ。つていうか別に無理して今喋らなくても、呼吸整えてからでいいのに。」

レッツの返事を聞いたレオリオは、また頭をガクリと落として「ゼエハア……」と酸素を

補給しだした。

そんなレオリオを見て、レツは無言でゴンとクラピカへと視線を向けると、 gon は苦笑いをし、クラピカは肩を竦めた。

「この門、僕と同じ数の【2】を開けようとしてたんだね。」

「うん。【1】は開けられるようになったけど、まだまだ俺たちじゃ、ビクともしなかったから、ゼブロさんに鍛えてもらってるんだよ。」

「この通り、常にこれを着てここで生活させてもらっているのだ。徐々に重さを増やしてな。」

ゴンとクラピカの順で答える。彼らはキルアが出てくるのを待つのではなく、門を開けて自ら中に入り、答えを聞くことを選んだようだ、とレツは理解する。

クラピカが示した通り、彼らは大量の重り入りのベストを着用しており、 gon は緑色の上着を脱ぎ、同色の半ズボンと靴、青のシャツの上にベストを着け、クラピカは青を基調に橙で刺繍をした民族衣装っぽいのを脱いで、黒の靴に白いズボンとシャツの上からベストをつけている。

半裸のレオリオは今はベストを付けていないけれど、彼のすぐ傍に転がっているのがそれだろう。下半身は試験中も見たスーツルックだ。その会話を聞き、回復力は高い方なのか、既に息が整いかけているレオリオがぼやいた。

「ヒデー話だよなあ、ダチに会うのにも資格がいるときたもんだ。」

正確には、門を開けることで得られるのは敷地内に足を踏み入れる資格なのだが。

「まあ、『友達』として会うんだったら、尚更資格が必要になるんだよ。【2】の門が開けるまで、考えてみて。」

レッツはそう言いつつ、ゴンを見る。レッツが先行する前の時と、ゴトーの言葉から、最もキルアへのゾルディックの対応について不満を漏らしていた、と理解したからだ。

それに gon は不服である、という表情がありありとわかるが、それとは別に、ちゃんと考えることにした。

くくく

さらに十日後。

とうとうゴン達三人は、【2】の門を開いた。それを見て、レッツは問う。余計なお世話だろうが、この絶対に覆らない、『事実』にたどり着けねば、もうビザの残り二日か三日ほど、通さず、追い返すつもりだった。

「さて、『資格』が居る理由は、何でか分かった？」

レッツに問われた gon は、悔しげな表情を見せながらも、強い意志の籠った瞳で答えを返した。

「……キルアはゾルディックで、いろんな人に狙われる立場で。それなのに一緒にいるオレたちが弱いままじゃ、足手まといになるから……だよな。」

『友達』として試される意味。もしもの事態の時に足手まといになって、互いに心身共に傷つく事の無いように。ゾルディックとしても、大切なキルアの傷つく事のないように。

《試しの門》は単純に敷地内に足を踏み入れるものを、ふるいにかけるだけの物だろうけれど、キルアの友達として訪れた彼らにとつてはその理由で十分なのだから。

「……良かった。もう一度、僕がゴンを殴る必要はなさそうだね。」

「だがよう。レッツ、入口で、あそこまでぶつ飛ばす必要は無かったんじゃねーか?」

「キルアは高額賞金首だろうし、プロアマ問わずハンターに狙われたり、復讐目的での襲撃だつてこの先あるかもしれない。それに金持ちつてだけでも、十分に狙う理由になる。列車の時みたいだね。そういう意味だと、レオリオもある意味、覚悟しておいた方がよいよ。」

「……………」

レッツの言葉に、レオリオが苦言を呈すが、それにもキルアの例を語りつつ、実際に“ゴミ掃除”の列車の例があり、もしキルアが彼らとともに行くことになって、そんな連中に襲撃を受けた時、自分の回りにいるのが弱つちい奴らであつたら大きなマイナスで

ある。そうなるとキルアやその周囲が肉体及び精神的に傷つく可能性が高まるし、最悪の場合は誰かが死に至る可能性もあったのだ。まさしくお荷物にしかねなかつたので、三人は言い返すことなく、苦虫を噛み潰した顔をする。

それはどんな貧乏な患者でも救うために、医者になる決意をして、大金を求めるレオリオにも、いずれは関わる話なのだから。このゾルディック家は、忘れがちだが、暗殺一家以前に、普通に金持ちの家なのだ。

レッツの言葉に沈黙してしまうレオリオ。それは事実であり、レオリオはハンターになるときに、心の底から気に食わないが、知識としてはあるからこそ、気づいてしまった。合法的な殺人に含まれる、『トリアージ（——救急現場などで、患者の治療や搬送の順番を決めるために行われる識別作業のこと）』にすら、きちんと罪の意識を持つていながらに、その上で『見殺す』。不当な殺人が免除されるハンターライセンス持ちなら、依頼されやすいだろう。その時に患者に、救える識別をつけ、〈黒のタグ〉という、『治療不要』：ようするに『無駄だとわかつて使う薬がもつた見殺しにする』ということ。これに関しては、遺族にとつて、ある種、正当な復讐となるだろう。

そこまでは知らない、レッツは気を取り直して、話します。

「ゴメン。辛気臭くなっちゃたけど、今度こそ、揃って会いに行こう。（もう、キル

アも答え出してるといいな。」

「うん! キルアに会いに行こう!!」

そしてゴン達、四人は、ゼプロとシークアントにお礼を言い、出発した。

~~~~~

そしてしばらく歩き続けると、つい先日、ゴトーとレッツが戦ったため、どこか焦げている木々と本数が減ったぐらいの違いがあるが、それ以外は周囲を囲む塀というにはいささか低すぎるそれは、実際に試しの門のように外敵を阻むという意味合いはない。

本来のこれはただの、境界線であり、ここまでならば穩便に済ませてやるという、ボーダーラインであった。

そこには仕立てのいい燕尾服を自然に着こなしているが、おそらくはゴンとそう歳が変わらない少女であることがあまりに意外だったのか、四人は目を丸くして固まった。

「出て行きなさい」

イルミヤ番犬であるミケを連想させるほど機械的な声音で彼女は、レッツ以外の三人に向かつて淡々と警告する。

「あなた達がいる場所は私有地よ。断りなく立ち入ることはまかり通らないの」

「ちゃんと電話したよ。試しの門から通ってきたし。」

流石に28日前と違って、カナリアの言うことが正論であることを理解しているのと、相手が女の子だからかゴンは以前と違ってケンカ腰にはならなかったが、それでもやはり不満が隠しきれない声音で抗議する。

もちろんカナリアがゴンの抗議に納得して譲歩するわけがない。

「執事室が入庭を許したわけではないでしょう？」とまたしても正論でゴンの言い分を叩き伏すが、めげずにゴンは尋ねる。

「じゃ、どうしたら許可がもらえるの？ 『友達』だって言っても繋いでくれないのにさ。」

「さあ？ 許可した前例がないから。」

嫌味ではなく素で疑問だったゴンの問いに、カナリアはいけしゃあしゃあと答えになっていない返答をする。さすがにこの答えには腹が立ったのか、ゴンは少し強い口調でレッツを指さして反論する。

「レッツがいるじゃん！」

「レッツ様はゾルディック家ご子息の婚約者候補。初めからあなた達と立場が違うのよ。」

「婚約者候補オ!!」

ゴンの反論に即答したカナリアの言葉に、レッツは天を仰いだ。それにレオリオとゴンは好奇心全開の目をレッツに向けていた。クラピカは二人に呆れながら、軌道修正を



図る。

「では、結局、無断で入るしかないのでは？」

「それはそうね。」

カナリアとしても、この空気は正直、罪悪感をどこかに感じるのだから、それに乗っかった。

：レツは、このまま二人が、何も聞かず、なんなら忘れることを望んだ。

「とにかく、温情があるのは、ここまでです。ここを一步でも越えたら実力で排除します」

シンプルだが宝石のような石をグリップに埋め込んだステッキを構え、三人に向かってカナリアは宣言する。もうそこに、一瞬だが垣間見えた12歳前後の少女らしい人間味は見当たらない。

そこにいるのは、ゾルディック家の執事だった。

冷たいロボットじみた忠誠心と、揺るぎない人間的な覚悟を矛盾なく調和させているゾルディック家の執事に、ゴンは三人に手を出さないように、合図し、向き合い、そしてそのまま歩を進めた。勿論、カナリアは殴り飛ばす。

「手を出しちゃダメだよ。俺に任せて」

そう言って、ゴンは殴られて出た鼻血を拭つてもう一度歩いてくる。

誰も止めずにただじつと彼の行動を見守る。

その異様な光景に、理解できない行動にカナリアの背にまた悪寒が走る。心の内で泣き叫びながら、カナリアは何度でもゴンを殴り飛ばす。

そして、ゴンはもう一度起き上がって彼女に伝える。

「つたゝ。俺達、君と争う気は全然ないんだ。キルアに会いたいだけだから」

カナリアは執事としての、言葉を喋りつつも、困惑していた。……カナリアは知らなかった。

「キルアに会わせない」と宣言した時、ゴンが「キルアに会いに来た」と言った時、顔こそは人形のように無機質な無表情だったが、瞳があまりに有機的に、人間らしく揺れたことに四人は気付いた。

だからこそ、ゴンは反撃も防御もせず無防備に歩み、そして殴られるを繰り返す。

それ以外に、出来ることなど何もなかったから。

カナリアだけが何もわからないまま、泣き出した気持でただステッキで殴打し続けた。

……その姿を、カルトが見ていることに、レツは気付きながらも、その目で見て、判断して欲しかった。

くく

起き上がる。

歩む。

近づく。

踏み入れる。

殴り飛ばす。

…もう、時は夜の帳が落ちて、どれだけこの一連の流れを繰り返しただろうか。

「もう……やめてよ……」

カナリアの「ゾルディック家執事」としての仮面がひび割れて、怯えるような懇願を唇から漏らす。

もはや、ゴンの顔面は人相が変わり果てている。

かろうじて右目が開いているという有様で、それ以外の全てが腫れ上がり、顔面を赤黒く染め上げている。

それでも、彼は決して退かないし、挫けないし、屈しないし、諦めなかった。

何度も何度も立ち上がって、歩み寄り、境界を踏み入れるくせに、それなのにゴンはそれ以外の行動は取らない。カナリアの殴打を受け止めるそぶりもなければ、避けよ

うともしない。むしろ、自分からその攻撃を甘んじて受けている印象すら与えていた。「いい加減にして!! 無駄なの!! わかるでしょ!! あんた達も止めてよ!! 仲間なん……」

しかしその言葉は途中で途切れた。3対の目が真っ直ぐにカナリアを見据えた。

その眼は、レオリオとクラピカの目は、カナリアに問う。

カナリアが被っていた、今は見る影もない人形のような無表情を彼らも被り、ただ眼だけが言葉にするよりも鮮烈に彼女に問いかけた。「その程度か?」と、彼女の覚悟を問う。

侵入者に自分の覚悟を裁定されるような目で見られるというだけで、カナリアからしたらまったく理解できない状況だった。

「……なんでかな」

殴られ続けて、ようやくゴンが口にしたのは疑問。

「友達に会い来ただけなのに……」

理解できない不条理に対する怒りとやるせなさを込めた疑問を口にする。

「キルアに会いたいだけなのに……」

ただただ、彼の顔と同じくらい悲痛な願い。それが叶わないことよりも、叶わない理由がわからないことの方が悔しくてたまらないと言いたげに、彼は叫ぶ。

「なんで、こんなことをしなくちゃいけないんだ!!」

互いに一番したくない方法を取らなければならぬ不条理が無性に悲しくて、悔しくて、やるせなくて、腹が立って、自分たちをそうさせた“線”が許せず、初めてゴンは拳を振るった。

……カナリアではなく、彼女の傍らの石柱に。

自分達と彼女のいる場所を隔てる、境界の一部を破壊する。

ゴンの行動が唐突なのか、ようやく起こした当たり前の行動なのか、カナリアにはもう判別がつかなかった。

もう、自分が何をすればいいのか、何がしたかったのか、自分は何を覚悟していたのかがわからない。

何もわからなくなったまま、縦るようにステッキを握りしめるカナリアにゴンは声を掛ける。

「ねえ……もう、足……入ってるよ。……殴らないの?」

「あ……」

ゴンに指摘されてようやく、カナリアは彼が境界に踏み入れていることに気付く。……なのに、ステッキを振れない。ゴンを先ほどまでと同じように、殴り飛ばせない。

「君はミケとは違う」

そこにゴンが答えた。

「どんなに感情を隠そうとしたって、ちゃんと心がある」

何も言えない、何もわからなくなっているカナリアの代わりに、本人だけがわからなかった、彼女以外の全員が初めからわかりきっていた答えを教えてやる。

「キルアの名前を出した時、一瞬だけ目が優しくなった」

その言葉に、あの日、叶えたかった願いを見捨てることしかできなかった自分に残された、ただ一つの贖罪を祈るように懇願する。彼女の答えは——いつだったかの、自分では謝る事しかできなかつたソレを四人に託した。

「お願い………キルア様を、助けてあげて。」

パアアン！パシイ！

一瞬、何が起こったのか、目の前にいたゴンやカナリアはおろか、クラピカやレオリオも分からなかつた。勿論、カナリアをかばい、その前で、拳を握った右手を前に出したのはレツツである。

「あらまあ、流石の身のこなしですね。右手に負傷や火傷などは大丈夫ですか？」

「えっと、一応平気です。(手の方は、初速を出す為に足に少し、ついでに手で受けるつもりだったから右手だけに念を分散して込めたから、大したダメージにならなかつた。

若干ピリツときたくらいかな。実際に銃弾を止めるのは、初めてやったから、不安

だったけど。避けるだけなら簡単なんだけど。『家族』全員、普通にできるし。

……にしたって、いきなり何の予告も無しに、銃撃するとはね。」

その声があった瞬間、カナリアの顔から色が失せて、警戒心をあらわにゴン達三人は声があった方、山の斜面に視線を向け、そしてまた目を丸くする。

貴婦人の見本と言わんばかりに豪華なドレスを着た女性と、女兒用振袖を着こなしたおかつぱの少女にしか見えない少年。

もうこれだけで現実なのに出来の悪い合成写真じみた違和感の塊であるが、何より違和感なのはドレスの女性の包帯の上に、顔につけているバイザーの赤い瞳なのだから。

しばらくカナリアを罵った後、キキヨウはキユイン！ と音を立てながらモノアイの照準をゴンにあわせ、カルトの方は不愉快そうにレツ達四人を睨み付けた。

カルトは睨み付けたまま何も言わないが、キキヨウの方はしばしゴンを眺めてから穏やかに、けれどイルミの母親であることを表すような無機質な声音で彼に語りかける。

「あなたがゴンね。イルミから話は聞いてます。数日前からあなた方が庭内にいる事もキルに伝えてあります。キルからの伝言をそのままお伝えしましょう。」

——来てくれてありがとう。すげーうれしい。でも、今は会えない。ごめんな——

「以上です」

「キルアは今、答えに悩んでいたのが、十日前だったね。あと、キルアは自分が刺した兄さんにお叱り受けてた。これは僕が自分で見てきたから、安心して。」

レツの言葉の後、キキョウのバイザーになんか連絡なのか監視カメラの映像でもみたのか、何やら、情報が送られたらしい後、若干発狂したような態度になり、次に平静な装いでそそくさと去っていった。カルトは一瞬、レツを見たが、それでもスイッと無視して、キキョウについて行った。

「あの……この近くに執事室があるから、そこから屋敷直接電話してみるっていうのは………どうかな？」

カナリアの提案に乗っかり、ゴン達は歩みを進めた。そして、レツの存在が疑問だった、カナリアは疑問を出し、ゴンが重ねて聞く。

「それにしても、ゾルディックに使用して、初めて客人とも言える人物を見たわね。」

「そういえば執事室が入庭許可した前例無いつて言ってなかった？」

「そのはずだけど………」

「それは、護衛も仕事になる、執事室が勝手に許可出せるわけじゃないじゃん。それをしてから完全に利敵行為だよ。危険がないと判断するのは、直接ゾルディックの人が許可した人だけだと思うよ。」

「なるほど。執事室は許可した前例は無いが、雇用主が許可した前例はあると。中々と



んちが聞いているな。」

そのカナリアの言葉に、レツが、ずっとツツコミたかった事にツツコむと、クラピカが妙な所に関心しだす。そんな一幕があると、明かりのついた執事室に着いた。

十十

どうしようもなく、寂しかった。

何故かその日、キルアは寂しくて悲しくて仕方がなかった。

今まであつて当たり前だった何かが……、自分の体の一部に等しい「ナニカ」が足りないという喪失感に襲われて、孤独が自分を苛んだ。

家族も、執事も、いつもと変わらない……はず。

いつも通りのはずなのに、どうしようもなく寂しくて、悲しくて、辛くて、悔しくて……。

今まで感じたことなどない感情ばかりが胸の内にあつて、訳がわからなくなっていた時に出会った。

自分の家では珍しい、自分と同一年くらいの少女の使用人が挨拶にやって来た。

本当にいつも通りだったのなら、キルアはその挨拶を聞き流して相手の名前などきくと覚えなかつたらう。相手が自分と歳の近い少女だということすら、きつと気付か

なかった。

けれど、その日のキルアはどうしようもなく淋しくて、胸にぽっかり空いた穴を埋めたくて仕方がなかった。だから、言い、頼み、求め、願い、望んだ。

「俺と『友達』になつてよー」

『友達』なんて単語を知っていたことに、その意味を知っていたことが今思えば意外だ。そんなもの、この家では一番使われなくて意味もない単語だった。

そして、本当に意味などない。

「申し訳ございません、キルア様」

叶はずなどない願いだつたはず。キルアは思い出せない。わからない。あの日、どうして自分はあるなにも寂しかったのか。自分が失つたものが何であるかが、わからなかった。

それでも……これだけはわかる。

キルアの世界の全てだった「ゾルディック」という箱庭に不満を覚えたのは、この日からだということだけは、覚えている。

ここにいる限りこの空白は埋められないことだけは、思い出せない「ナニカ」がくれたものが教えてくれた。

くくく

そんな夢を見た。おそらくは、五年以上前の過去の夢だろう。

カナリアに初めて会った日。

自分は「ゾルディック」という箱庭に、閉じ込められていることに気付いた日の夢を見た。

やつと今年で12歳になるキルアからしたら、人生の半分近く前の出来事などあまりに遠い過去に感じておかしくないはずなのに、何故かつい最近のここのように感じる。それは、この箱庭で過ごした日々があまりにも代わり映えのない毎日の繰り返しだったからかもしれない。現にまだ一ヶ月も経っていないはずなのに、ハンター試験に関しては逆にひどく懐かしかった。

こちらの方がはるか昔の出来事のように感じるほど、記憶は鮮明なのにあまりに遠い。

どうしようもなく、遠いと思っていた。

……今まで、ロクに見向きもしなかった、カルトから、「どうか外に行かないで」と懇願されるまで。

レツから、ゴン達は自分に会うためにここまでやってきてくれたことを聞かされるまで。

今も遠いことには変わらない。

けれど、抱いていた不安は彼らがやってきてくれたという事実で雪解けのようにあたたかく消えてなくなる。

それでもキルアがゴンやレツよりも自分の命を優先したことに変わりはない。レツは同業者だからまだしも、ゴンには軽蔑されて、失望されて、嫌われても何らおかしくなかったことだけは、心が軋むほどにわかっている。

それでもゴンが来てくれたのならば、今も本当に自分のことを『友達』だと思つてくれているのならば、もう自分も諦める訳にはいかないだろう。

母親の手前、その本音をはつきり口に出せば、他の四人が危なかったもので、「今は会えない」という伝言をするしかなかったが、それでもキルアからしたらあの伝言は母親に、イルミに、そしてこのゾルディック家に対する宣戦布告同然だった。

もう何を言われても、どれほど自分を縛りつけて閉じ込めても、絶対に諦めない。

必ずこの箱庭から出てゆくことを誓った言葉だった。

……しかし、意志としての夢はともかく睡眠で見る夢はあえなくミルキの声にて、強  
制終了させられた。

「起きろ！」

鞭による焼けるような肉皮を裂く痛みはもはやなじんだものなので、今更この程度の苦痛でキルアの表情筋は仕事をしない。だがさすがに睡眠は続けていられないので、

キルアはヒステリックな声にうんざりしながら目を覚ます。

「ああ、兄貴おはよう。今、何時?」

キルアにとつてあの程度の一撃はその程度同然であり、その耐久性はやはりゾルディック跡取りにふさわしいのだが、もちろんキルアに『お仕置き』としての拷問をしていたミルキからしたら、全てが気に入らない。

「いい気になるなよ、キル」

フーフーと実に健康に悪そうな呼吸をしながらミルキは弟の胸にタバコの火を押し付けるが、普通なら大人でも泣き叫ぶような苦痛もキルアはケロリとした顔でいけしやあしやあと、思つてもいけないことを棒読みで言い放つ。

「あちち、そんなア。オレ、すげー反省してるよ。ゴメン。悪かったよ兄貴」

「うそつけ!!」

もちろんイルミ以上の棒読み発言を真に受ける訳がなく、ミルキは鞭を大きく振りかぶつて今度は弟の顔を思いつきり打ちのめす。しかし、それでもやはりキルアから余裕を取り除けない。

両手足を拘束されているにも拘らず、キルアはぶたれた拍子で口の中でも切つたのか、血を吐き出してからうつすらと笑う。

「やっぱわかる?」

弟の言葉で頭に血が昇るが、弟が浮かべる表情にミルキは不気味そうに一歩退いた。以前から自分に対して酷く生意気だったが、殴りつけて反抗することはあつてもこんな嘲弄するように笑いはしなかった。

自分を見下しているというより、そもそも眼中にないと言わんばかりの余裕が、その余裕の出どころが理解できず、「勝率が100%でないなら手を出すな」という教育は実弟にも当てはまり、ミルキはキルアに手が出せなくなった。

唐突に電話が鳴り、キルアに会いに来たとかいう侵入者とレッツが、ついに執事室近くまでやってきたという連絡。

その連絡を聞き、ミルキの顔は愉悅に歪む。

『友達』なんて甘えたものを欲しがって、その挙句が現在の惨状であることを思い出させる為に、自分の立場を思い知らせる為に、何よりもキルアの謎の余裕を奪う為にミルキは口にする。

「くくく、どうするキル？　俺がママに頼んで執事に命じてもらえば、あの連中は……ひっ!？」

さしものレッツでも、たった一人の念能力者では、数も質も兼ね備えた、執事たちには敵わない。それは事実である。だが、その言葉は弟の逆鱗に、触れた。

「ミルキ」

キルアを縛る鎖の一つが外れた。木綿糸を千切るかのごとく、自力で鎖を引きちぎって彼は殺意を湛えた目で無機質に実兄を見据えて、宣言する。

この宣言は、全く尊敬していないし、できない『家族』の中で嫌いな部類に入る、とはいえ血の繋がった兄弟だからこそ、逆鱗に触れられても思いとどまった温情であることを伝える。

「あいつらに手を出したら、殺すぜ?」

ある意味では思惑通り余裕を奪えたが、同時にキルアから敵認定された拳句にこのような拘束はいつでも簡単に抜け出せる、キルアはミルキなど何一つとして恐れておらず自分の意思でここにおいてやっていくことを思い知らされて、ミルキは悔しさに呻いた。しかもその「一応兄貴だから」という建前は、ゼノがキルアを独房から出してやったことで本人があっさりミルキに向かつて暴露した。

「兄貴、オレ、反省してないけど悪いとは思ってるんだぜ。だから大人しく殴られてやったんだよ」

四肢を拘束していた鎖や枷をバキバキと壊して外しながら、キルアは言い放った。

「キル……シルバが呼んどうるからな」

「親父が? ……わかった」

ゼノからの伝言を聞き、キルアが独房から出て行った途端にミルキは持っていた鞭を

床に叩きつけてゼノに八つ当たり気味で抗議する。

しかしゼノは息子の嫁そっくりなヒステリーを見せる孫を冷めた目で眺めてから、静かに一言で自分のキルアへの対応の理由を言い表す。

「アイツは特別だからな」

意外にも、その一言にミルクからの反論はなかった。

「お前から見てキルアの力量はどうだ？」

「……そりやすごいよ。」

続けて発言する、ゼノの質問に対しては、ミルクはなんとも複雑そうな表情だったがやはり素直に認めた。『家族』であろうが、相手との力量差を正確に測れないのは暗殺者として致命的なので、そこらへんは冷静に、客観的に見て認めているらしい。

「才能だけなら長いゾルディック家の歴史でもピカイチじゃない？ それはママも認めてるし、俺もそう思う。でも暗殺者としては失格だよ。ムラツ気があってさ。『友達』なんか作ってる奴にゾルディック家は継げないよ。要するにあいつは弱虫なんだよ、精神的にさ。あるとしても、俺みたいに、ギブアンドテイクの契約にしておくべきだ。」

しかし、やはり気に入らない弟だから評価が厳しいのか、自分とレッツのような、『取り引き』であるべき、とも付け加えた。その評価は、キルアを「暗殺者失格」とミルクは



言い切った。

そんな評価を下す孫をゼノは一度頭のとっぺんからつま先まで見渡して、一言つぶやいた。

「ふむ。」

怪我をしていない、ミルキ。自分が独房に入る直前に膨れ上がった殺気と、既に引きちぎっていた鎖。

何を言ったのかはさすがにわからないが、自分が来る前にミルキがキルアを怒らせた、それもあの殺気からして逆鱗に触れたのは見ていなくてもわかる。

だが、ゼノの知る今までのキルアならば間違いない、ミルキは無事で済んでいないだろう。現にミルキはキルアの家出騒動に巻き込まれて、わき腹を刺された。

ゼノの知るキルアは、殺しの才能はピカイチだが年齢の所為もあつてか精神が酷く不安定で、普段はヒステリックだが仕事となれば感情の制御が完璧にできているキキヨウやミルキよりもはるかに、感情に振り回されている子供であつたはずだが、帰ってきてからは不安定だった情緒が落ち着いて、あんなに毛嫌いしていた兄に対して、まずは忠告をする程度に感情を制御できるようになつていた。

弟の精神面での成長に全く気付いていない孫を、一瞬憐れむように見て、しかしそのことを指摘するとまたヒステリーを起こして面倒なので、ゼノは内心でキルアの成長を

喜びながらテキスト極まりない相槌を打つ。

「そういうことだな。」

「ね。その点、俺は依頼があればいつでもだれでも始末するぜ。　そうだ、今度の爆弾はすごいぜいじいちゃん!!　超小型でさ、雌の蚊にとりつけてその蚊が血を吸った瞬間に爆発するんだぜ!!　火力はまだ爆竹程度で、蚊がターゲットを識別できないのが難点だけど。」

「ミル。お前は頭はいいが、バカなところが玉にキズだ。」

やはり家から仕事以外で一切出さず、『家族』だけと関わりを持つという超閉鎖的な環境では成長はしないということを、ミルキとキルアに、ある意味、参考になったレッツを、頭の中で比べて思い知りながら、今までの教育方針をゼノは少し反省した。

十十十

言いたいことがあった。

「キル、『友達』ができたって?」

「……うん」

しかし、父親を前にするとその言いたいことが言葉にならない。　思えば、キルアは父に対して親子らしい会話もやり取りもした覚えがない。　母親や祖父母相手ならば、甘えたりわがままを言ったり反抗した覚えもある。普通の兄弟なんてわからないけれ

ど、少なくともシルバと自分の親子関係と比べたら、イルミ相手でもまだ普通の兄弟関係に近いのではないかと思っている。父のことは決して、嫌いではない。純粹に尊敬しているし、憧れている。けれど、自分と父の関係は親子というより師弟か上司と部下の方が正確ではないかと、家出する前はともかく今は強くそう思う。

「どんな連中だ?」

「どんなって……いっしょにいると楽しいよ。」

会話や関わるのが怖いわけではない。イルミと違って特に緊張もなく話せるし、『友達』の存在も簡単に肯定できる。

「そうか……」

しかし、会話が続かない。何を話せばいいかわからない。雑談など、特に意味のない話題を上げていいのかわからずわからない。

「試験はどうだった?」

「ん……簡単だった」

どうしても、一言二言で終わってしまう会話。思えば、昔からそうだった。シルバとキルアの会話は、会話とは言えない。ただの情報交換と現状確認でしかなかったのだ。それ以外の会話など、お互いにした覚えなどなかった。

「……………」

気まずい沈黙が数秒間続き、シルバは一度息をつく。それは溜息なのか、溜息だとしたらどんな感情をこめた溜息なのかはわからない。

「キル……こつちに來い」

「え？」

けれど、その溜息がシルバの中に押し込めていたものを吐き出すきっかけになったのか、彼は自分に一番よく似た息子をまつすぐに見据えて言った。

「お前の話が聞きたい。」

キルアは自分の望みを全否定される覚悟でやってきたのに、シルバから掛けられた言葉は自分の想像とは真逆に近い言葉だったからだ。困惑している息子にシルバは少しだけ苦笑し、キルアの緊張をほぐすように彼は言葉を続ける。

「試験でどんなことをして、誰と出会い何を思ったのか……。どんなことでもいい。教えてくれ」

父からの「命令」ではなく、「提案」もしくは「頼まれて」何かを話すことはもちろん、何かをすることは初めてだった。……初めて、キルアは目の前の人物を「父親」と認識したのかもしれない。

「うん」と答えたキルアは、戸惑いながらも嬉しげに父の隣に腰を下ろした。

くくく

何から話すかを迷ったのは、最初の内だけだった。一回、話を始めたら、あとは湯水のごとく自然に次々と思ひ出が、話が湧き上がった。試験会場についてからの、ゴン達四人との出会い、トリックタワーでの激突、ゼビル島でのハンゾーと、レツのいざこざの愚痴、そして最終試験でのゴンがやらかしたわがまま。身振り手振りでキルアは父に話した。

「キル」

そんな息子に、年相応に無邪気にはしやぎながら楽しかった思い出を語るキルアに、シルバは改めて尋ねた。

「『友達』に会いたいのか？」

真っ直ぐに、父の傍らに寝そべるペットの犬たちよりもはるかに獰猛な獣を思わせる双眸がキルアを見据える。その眼は、長兄とは別種だが同じくらい怖いものだった。

今でも、その認識は変わらないし、これからもそうだろう。それでも、キルアは答えた。

「うん」

何の迷いもなく、躊躇いもなく、恐れつつもその恐れをねじ伏せて、キルアも真っ直

ぐに父を見返して答えた。

「親父。 やっぱりオレ、『家族』のことは好きだよ。」

言いたかったことは、やっと言葉になった。 もうとつくの昔に見つけていたのに、どうしてもどういえばいいのかがわからなかった言葉がスルスルと口から、一番伝えたかった自然な形となって出てくる。

相手を『家族』だと思えば、あまりに自然に、何の緊張もなく言葉にすることが出来た。

「オレのことを親父たちが大事にして、期待してくれてるのは知ってる。 そのことは嬉しい。 オレに跡を継いでほしい、殺し屋になって欲しいって思う気持ちもわかる。

才能があるってわかってるんなら、そりやその才能が一番生かせる道に進んでほしいよな。 それにレツの兄貴みたいに、どっか知らないところで、『家族』が死ぬのは、嫌に決まってるよな。」

反感の種だった「跡取りとしての期待」も、「殺し屋としての才能」もゴン達と別れて、最後のレツとの賭けに負けてから、考えて考えて考え抜いて、今ではそんな風に考えて受け入れることも出来た。 もちろん今でも、「勝手に俺に期待を押し付けるな」という思いはある。

自分のしたいことを「才能がない」、したくないことに「才能がある」と言っただけで決めた。

けて反対したり押し付けけるのは確かに間違いだ、それがあまりにもあからさまだとわかっていたら言いたくなる気持ちくらいは想像できる余裕が生まれた。　なのでもう、ムカつく以上の感情はもう芽生えない。　だから、レッズの体験を理解して、受け入れつつもキルアは否定した。

「でも、親父。オレは嫌なんだ。　オレ、ゴン達と一緒にいて楽しいって思ったんだ。

『家族』以外の誰とも関わりたくないで、信じないで、ただ殺して生きていくのは嫌なんだ。　オレはゴン達みたいに、たくさんの人を信じて、信じてもらって、笑って生きていたんだ。」

自分の今までの生き方をキルアは否定して、選んだ答えを、生きていたいと望む世界はどこかを訴えかける。

「親父。　オレは、親父のことを尊敬してる。　憧れてる。　けど、親父と同じ道はもう歩めない。　親父が教えてくれたことは全部感謝してるし、これを生かして生きたいとも思ってる。　でも、オレはこれを誰かを殺すことじゃなくて、誰かを守って生かす為に使っていきたいんだ。　家のことを、家の歴史や仕事を否定したい訳じゃない。　オレたちは正義なんかじゃないけど、それでも必要な仕事で存在だと思ってる。　……けど、それでも、オレは嫌なんだ。　オレのわがままだけど、それを捨てたら、それは親父たちの作った『人形』だ。　キルアっていう一人の人間として生きていたい。」

この家に守られていたこと、『家族』に愛されていたことは、ちゃんとわかった。理解した上で、自分の言っていることがどれだけ幼いわがままなのかも知った上で、それでもせめて知って欲しくて、誤解のしようがなく正しく自分の望みを理解してほしくて、キルアは語る。

拗ねて膨れて一人勝手に思いつめて、眼を閉ざして耳を塞いで逃げ出した先で、向き合わされた、『失敗』を教えてくれたライバルのおかげで、ようやく見つけた答えをキルアは伝える。

その答えをシルバは黙って最後まで聞いてから、一度目を伏せて眉間を揉むように手で押さえてから深く息を吐く。キルアが父の反応に戸惑って、「親父？」と声を掛けてやるとシルバは絞り出すように呟いた。

「……まいったな。子の成長は親が思うよりよほど早いとは聞くんが、これほどか」

感心したように、何かを惜しむような、今まで聞いたことがないほど人間らしい父の言葉にキルアは呆ける。顔から手を離し、少し項垂れていた頭を上げてシルバは現状を理解できていないキルアに……まだまだ面差しはあまりに幼い息子に少し苦笑する。

「思えば……お前とは親子として話をしたことなどなかったな。」

キルア自身が感じ、思ったことと同じことを呟きながらシルバの大きな巖のような手がキルアの頭に伸びる。



「俺が親に暗殺者として育てられたように、お前にもそれを強要してしまった。俺とお前は違う……。お前が出て行くまで、そんな簡単なことに気付かなかつたが……。そうか……。そんな俺でも、お前は俺を尊敬して、憧れていてくれるのか……。」

シルバの手がキルアの頭を、息子の中で唯一自分の銀髪を受け継いだその髪をわしわしとかき混ぜるように撫でる。

心地よさを感じた、その手。シルバは息子の頭に手を置いて、改めて伝える。

「お前は俺の子だ。だが、お前はお前だ。」

今まで血の繋がりのみに甘えて、考えたこともなかつた己とキルアの関係を改めて伝え、そして同時にキルアの出した答えを肯定し、背を押してくれた。

「好きに生きろ。疲れたらいつでも戻ってくればいい。な……。う。」

この箱庭から飛び立つことを決めた息子に伝える。疲れたのならば、いつだって羽を休めたらいい。そんな場所としてここを定めてくれてさえいればそれでいいと、親が出来る最後にして唯一、そして最大の愛情を伝えた。

「もう一度訊く。仲間に会いたいのか？」

「うん!!」

その答えは、決まりきっていた。最初の問いよりもさらに力強く頷いたキルアに、シルバも頷いてその答えを受け取った。

「わかった。お前はもう自由だ。……だが、一つだけ誓え」

しかし、最後に一つだけキルアに誓わせる。自分の親指の先をかみ切って血を滲ませて、その指を突き付けてもう一度真っ直ぐに獣のような目でキルアを見据えて尋ねる。

「絶対に『友達』を裏切るな。いいな」

その誓いにもキルアは即答だった。同じように親指を噛み、血を滲ませてその親指を互いに押し当てて強く誓った。

「誓うよ。裏切らない。絶対に！」

十十

「一体何を考えてるの!? お義父様もあなたも!! せつかくイルミのおかげでキルアが戻ってきたのに!!」

予想はしていたが、相変わらずヒステリックな妻の言葉にうんざりしながらシルバは面倒くさそうに言い返す。

「しばらく好きにさせとけよ」

「だめよ、何言ってるの!? キルが立派な後継者になれるかどうか、今が一番大事な時期なのよ!!」

シルバの言葉はキーキーと耳が痛くなる金切り声で反論されるが、その程度のヒステリーで折れるようではゾルディック当主が務まるわけがない。彼は不敵に笑って、命じる。

「わかっているじゃねーか。じゃあ、つべこべ言わず黙ってる。」

夫を尻に敷いている恐妻のように見えて、シルバにベタ惚れだからこそゾルディックという家の栄華と繁栄に執着するキキヨウは、夫に強く言われたら何も言えなくなつて素直に黙り込んだ。

シルバは低く笑いながら独り言を呟いた。

「いつか必ず、戻って来る。」

シルバがキルアに伝えた言葉は、全て本音だ。息子の成長は喜ばしいが、少し淋しくも思う。

暗殺者としての道を否定しつつも、自分を尊敬して憧れていると言われたのは、素直に嬉しい。

やはり自分と息子は全くの別人。同じ教育を施しても同じように育ちはしないという事だ。

諦めてなどいなかった。

そう簡単に諦められる程度の才能ならば、家出した時点で跡取りを、長男のイルミに

戻して、流石に不必要に情報を漏らすなら、死人に口なし、というのもありえたのだ。才能はもちろん、キルアはあの「何か」の……、ゾルディック家の地下深くに封じた「アルカ」の内に潜む得体のしれない怪物の手綱になり得る。それだけでも手放せるわけがない存在なのだから。

父親として「好きに生きろ」と背を押してやった言葉や思いに嘘はない。

しかしシルバは『キルアの父』でもあり、『ゾルディック家当主』でもあると、何の疑いも不満もなく思っている人間であった。

彼の「好きに生きろ」という言葉は、へゾルディック家の迷惑にならない範囲で、ゾルディック家に利益をもたらす形で、という前提が自然についているのだ。

嘘はないが、初めからキルアとの認識とは酷いズレがあったのだ。勿論、シルバは気付いていたが、あえて無視した。不必要に、何が崩れるとも知れぬ、膿を出す必要などないのだから。

家から出てしばらく好きにさせる許可を出したのは、明らかにキルアが良い方向に成長していたから。

殺しを嫌がるようになってしまったのは残念だが、元々その傾向はあったので仕方がない。

イルミによって埋められた極小の針によって、キルアは『友達』よりも何よりも自分

の命を優先してしまう。

キルアに無自覚で、キルアの自意識を奪わない程度の洗脳なのでその効果は酷く微弱な、下手したら念能力者でなくても頭の中に響く命令をキャンセルすることが可能なはずの針だが、イルミがその針に込めた命令は生存本能に訴えかけるもの。

必ずキルアは、最終試験のように仲間を裏切って自分の命を優先してしまう。

そしてキルアは父親であるシルバを尊敬して憧れているからこそ、そんなシルバが送り出してくれたのに、信じてくれたのに、だからこそ誓った誓約を守れなかった罪悪感で勝手に自分で自分を縛り、失意にまみれて戻ってくるのが簡単に想像がつく。

方向性は『家族』の誰とも違うが、プライドが高いからこそ責任感がある所は一番、自分とキルアが似ているとシルバは感じていた。

実際に、元々キルアが生まれるまで、当主候補だった、イルミという成功例があるのだ。ゆえに、他の兄弟と違い、当主たる自分や、さらに父親のゼノの枷など無くとも、ゾルディック家にメリットになることを半ば自動的に行ってくれる。

本来、弟の分になるはずの、仕事をほとんど請け負う、そのワーカーホリックぶりは少々予想外だったが、どこまでいっても、今のイルミは、キルア、もしくは順当に成長し、鍛えれば、カルトのスペアでしかないのです、問題は無かった。

そこまで考えて、何もかも上手くいっていることにシルバは笑う。

キルアが家出した時は頭がひたすら痛かったが、あまりにシルバに都合がいい方向に物事が進んでいる事実には彼は機嫌よく笑い、だからこそシルバは自信を持って、断言する、ように呟いた。

「あいつは、俺の子だからな。」

その笑みと、立場の使い分けは、どこぞに居る、当初は『流星街の幼馴染』で結成された、『幻影旅団団長』のクロロルシルフルの美しき闇の魔王の様な男と称される、仕事モードの顔に似ていた。

……もつとも、クロロの笑顔は企みを隠すための笑顔であり、シルバは裏があることを前提に、それがばれても痛くもかゆくもないという余裕の笑顔という違いがあるが。

十十十

ゴン達は、道をカナリアの案内で進んでいくと、その前に綺麗に並び立つ五人の執事達。実際に歓迎されている囲気だった。

執事の人たちに執事室の中に案内されて、客間みたいところでソファーにかけた四人。そこから、電話でもしたいところなのだが、ゴトーが言うには、「今、キルアがこっちに向かっている」と。

「ふふ………さて、ただ待つのも退屈で長く感じる物。ゲームでもして時間を潰しませ

んか?」

「ゲーム」

執事長である、ゴトーが、懐から取り出したのは、一枚の金色に輝くコイン。親指の上に乗せたコインをピンと弾き、落ちてくると同時に、両手を動かし、コインを掴み取った。

「コインはどちらの手に?」

今の速度だったら、だいたいの人でもわかるレベルであり、いわゆる、ゲーム説明も兼ねてのデモンストレーションなのだろう。そして四人は即答した。

「「左手」」

「ご名答。では、次はもつと早くいきますよ?」

ゴトーの実力的には、全然本気を出していないと、実際に戦ったレッツには分かる。だが、二回目はさつきよりも、少し早くなっていた。これに対してもゴンは即答した。

「また左手。」

その言葉に、ゴトーは左手を開くと、金色に輝くコインが現れ、ゴトーさんにはつこりと笑った。そしてふと思いついたかのように、レッツの方を向く。

「ああ、そうだ、レッツ様には、奥様から伝言を預かっております。少々お一人で別室によろしいでしょうか?」

「あ、大丈夫だよ。ちょっと行ってくるね。」

「おう」

ゴトーが合図すると、後ろに控えていた別の執事の人先導して、ゴン達の方は、次のゲームが始まった。

~~~~~

レッツが執事に連れられてきた場所は電話だった。

「おや、レッツ様、髪を結われているそのリボン、少しほつれてますね？」

「え？ あー、自分で直せるからこそ、億劫になっちゃったかな？」

レッツの言葉に執事は次の提案をする。

「良ければこちらで直しましょう。時間はあまり取らせませんので。」

「あ、じゃあお願いします。」

「かしこまりました。そちら今、通話となっておりますので、どうぞ受話器を取ってお話ください。」

そう言つて恭しく、レッツのリボンを受け取つて執事の一人は別室に行つてしまった。

流石執事というべきなのか、裁縫スキルも完備であった。

一応ゾルディックなのだが、戦闘能力だけで人を決めてるわけではなかったようだ。

とりあえず電話を取り、レツはそのまま耳に当ててみた。

「もしもし? レツですけど……」

『もしもし? すみませんねえ、時間を取らせてしまいました』

「それは良いんですけど、キキヨウさん、どうしたんですか?」

『いえね、少しレツさんに、お願いがありました』

「お願い?」

キキヨウがわざわざレツにお願いというのも不思議である。

だが、とりあえずは、聞いてみることにした。

『たまにでいいんです。キルアの様子を教えてくださいたらと』

「………やっぱ、キルアの事、心配ですよね。」

『そりやもう!心配ですとも!今が大事な時期ですからね!できる事なら家にいて欲しいです! でも、パパもキルも決めた事。なら、ここは見送ってあげるのも一つの手だと思ってます。』

(……母親ってこんな感じなのかな? 姉さん達とさほど変わらないような気もするけど。)

そんな風に、二つの『家族』を頭の中で比べてしまう。

「分かりました。できる限り、キルアの事を送りますよ。知ってるゾルディックの人に送ればいいんですよね？」

『やりやすいようにしてもらえれば構いませんわ。後はキルに危険が無いように、くれぐれも注意してくださいね！ 後はお菓子の食べ過ぎに注意するように！それからあまり夜更かしはしないように！ 後は……………』

「…そこまでキルアが信用できませんか？」

『そんな事はありませんわ!! でも、そうでしたね。そのように取られても仕方ありませんでした。あそこまで冷たい目ができるなんて、将来が楽しみですわ！ それではレッツさん、ごきげんよう。』

その電話が終わると、傍にいる、執事に「どこか着替えるための部屋に案内して欲しい」という。

そしてそこに移動し、男装モードに、着替えていた。

++++

一方、レッツが離れてからの応接室。

「じゃ、次は少し本気を出します。」

ゴトーは和やかに穏やかに笑いながら宣言し、そして実行した。

コインを指で弾いて落とすまでは一緒だが、今度は腕を交差させるだけではなく彼の腕

が届く範囲にまでコインが落ちてきた瞬間、上下左右に両手を動かしていくつものフェイント、いったん掴んで離して逆の手でキャッチをしたかと思えば、また指で上空に弾き上げるを繰り返し、そしてまた先ほどまでと同じように両手の拳を三人に見せて尋ねる。

「さあ、どつちっ?」

ゴトーの問いにレオリオが、「ん、自信薄だが……多分、右……」と答えるがゴトーは他の二人の答えを促すこともなければ、正解か間違いかも答えず唐突に話を変えた。

「私は……キルア様が生まれた時から知っている。僭越ながら、親にも似た感情を抱いている」

緩やかに、けれどはつきりと場の空気が変わってゆく。この屋敷に招き入れられた当初の半端に重々しい空気など可愛らしく感じるほど、彼らがカナリアに案内されていた時に覚悟していた「敵意」がその場に満ちた時、ゴトーが表情を一変させて三人に告げる。

「正直なところ……キルア様を奪おうとしている、お前らが憎い」

「……………」

やはり歓迎されていなかったことを思い知らされて、三人は沈黙する。何と答えるべきか迷う三人に、ゴトーは彼らの主張に興味はないと言わんばかりに今更、ゲームの

答えを求めて促す。

「さあ……どつちだ？ 答えろ」

「左手だ」

クラピカが答えると、ゴトーは無言で左手を開く。その掌には、紙を握りつぶしたかのように変形した金貨が一枚。それを見せつけてもう一度ゴトーは俯き、酷く何かを悔やむような声音で言った。

「奥様は……消え入りそうな声だった。断腸の思いで送り出すのだろう」

その言葉は、ゴン達に向かつて言ったのか、それとも独り言だったのかはわからない。ただ、伏せていた顔を上げて次に発した言葉は確実に、ゴン達に向けられていた。

「許せねエ」

こめかみに極太の青筋を浮かばせて、ゴトーは一方的に宣言する。

「キルア様が来るまでに結論を出す。俺が俺のやり方でお前らを判断する。文句は言わせねエ。……レツ様にもだ。」

ゴン達に対する敬語はとつくの昔に捨て去ったが、直接、実力を確かめた、レツに対しての敬称は抜けない。

それでも、彼女すら敵に回すことも構わないと彼は宣言し、他の執事達もゴトーの言葉に同意するように隠し持っていたのか大振りの刃物を一齐に取り出し、ゴン達を取り

囲むだけではなく、彼らを招き入れたことで裏切り者と認定されたのか、カナリアの首にその刃物を突きつけた。

「いいか、一度間違えばそいつはアウトだ。」

キルア様がくるまでに三人ともアウトになったら……この程度の実力しか持たない奴らを招き入れたレッツ様も同罪だ。キルア様には「四人は先に行った」と伝える。二度と会えないところにな……」

ゴンは、「キルアは……」と何か発言しようとするが、それをゴトーは遮り、次のゲームに移行する。

そしてしばらく三人は答えないので、ゴトーは発言する。

「おい、人質に取った、レッツを殺してこい。」

「OK!」

「え!?!」

「ああ、このリボンに見覚えがあるだろう?」

そのリボンは確かにレッツのものであり、三人は唾を飲み、レオリオが「待て!!」というのを皮切りに、ゲームに答えていった。絶対生き残って見せると決心して。

レツが着替えて、待機していた部屋に、最後の可能性を追い求めた、カルトがやってきたのだ。

カルトは未だ、《試しの門》を【1】までしか開けられず、殺し合い、ないしは純粋な戦闘では、まだゴン達三人と比べて、念の有無は大きく、負けるという事はないが、それでも一部は劣ってしまったのだ。

ちゃんと話し合つて、キルアと自分は、別人であつたことを、理解しているが、カルトの胸の内では湧き上がる願望は、独りよがりでありあまりに幼くて身勝手なわがままであることでも、望む。

「レツ、どうか、キル兄さんがもう出て行かないように説得してほしい。あんな弱い奴なんか大切にしないで欲しいんだ……」

「——カルト、ごめんね。君が話し合つて説得できなかったなら、僕が言つても無理なんだ。」

レツの答えに、カルトは最後の望みが絶たれた事に、酷くショックを受けるが、それも納得しないが、理解はできるので、同時にまた機嫌が悪くなつてカルトは黙り込んだ。

そしてカルトは感じていた。

（ああ、そうか……。 やっぱりレツは、どこかキル兄さんに似てるんだ。）

自分と2歳しか変わらないのに、何もかもが自分より優れている、なのにイルミとは

違つて親しみやすく優しい兄は、いつもどこか家族とは違うものを見ていた。

血だまりの闇ではなく、どこまでも暖かな日だまりにいつも焦がれていたことを、カナリアが屋敷に来た頃、自分と歳の近い子が来たことに喜んでいたのを、カルトは知っている。

きつとカルト以上の血にまみれていながらも、キルアは光へを、レッツは光へも求め歩いていく人なのだと、闇の中でしか生きられない、闇こそが心地よいと思うカルトとも、一人として例え、双子であつたとしても、やはり別人であるのだ。

「——やつぱり、お前達なんか、大っ嫌いだ。」

唇を噛みしめて、涙を瞳に浮かべてカルトはレッツにそれだけを言い捨てて、また勢いよく扉を開けて、そのまま帰つて行つた。

(嫌いだ嫌いだ! 大っ嫌いだ!!)

光などに焦がれたことはないけど、兄の闇にはそぐわない優しさは確かに、どうしようもなく好きだった。

自分の体験をもつて、大事な意見をくれ、感謝はしてたのに、兄を引き止めもしないレッツに、カルトはただひたすらに、罵つた。

そんな兄と同じように、近いのに、同類なのに、同じ罪を負っているのに、同じ闇の中で生きる者のはずなのに、自分には手が届かない光の下に、兄を連れ去ろうとどう

ちようするレツも、嫌いだと心の中で罵り続けた。

繋がることや一緒にいることは出来ても、キルア達と自分が住み、暮らし、望みを持つて、生きていく場所が違うことは、泣きたくなるくらいに理解してしまつたけれど、それでもやはり、幼いわがままが胸の中で声高に叫んだ。

十十

そしてカルトが扉から出ていき、レツはなんとなく理解したので、苦笑していた。

しばらくしたタイミングで、先ほどの執事の人がリボンを持ってきてくれた。

「お待ちせしました。どうぞ、確かめてください」

そう言つて見てみると完璧な仕上がりであり、まるでクリーニングにだしたかのよう
で、まるで新品みたいな仕上がりであつた。これをこの短時間に行つたのだ。ゾル
ディックの執事の優秀さが示された瞬間である。お礼を言つて部屋に戻るよう案内
されると、なんだか拍手喝さいの場所だつた。

「あ、レツ!? 無事だつたんだね?」

「どうしたの?」

「いやさ、ゴトーさんがお前を人質にしたつて言うからさ。お前のリボン見た時はそら
びつくりしたもんだ。」

「あー、そういうリボンの使い方してたんだ。でも大丈夫だよ。」

「…………お前は能天気だな。」

そこにゴンとレオリオ、クラピカの順で、発言し、合間にレッツは答える。

「とうか、あの服、可愛かったのに！ 勿体無い！」

「…………あゝゝゝ、うん、ありがと…………／／／」

「？」

そして服装が変わっていることに、ゴンの殺し文句が発動する。それに気づけるようになった、レッツは、顔を仄かに赤らめながら返事をし、その態度にゴンは分からないが、クラピカとレオリオは分かるので、注意をする。そんな一幕の後、キルアが来た。

「おい、ゴトー！ ギンはまだか!?!」

「キルア！」

「ゴン！ レツ！ それにクラピカと…………リオレオ！」

「レーオーリーオー！」

お互いのヒドい顔に笑い合いながらも、しばらくしてレッツから発言する。

「それじゃどうする？ もう出かけるの？」

「ああ、ここじゃお袋がうるせーからな。ゴトー、お袋が何か言ってもぜつてーついてくるなよー！」

「承知しました、いつてらっしやいませ。」

(恭しく、主に下げる頭はなんか少し違うって感じけどね。　　まア、僕たちの仕事モードみたいなものなんだろうけど。)

そんなことをレツは思い、ゴンは、ゴトーに「キルアがいなくなると、寂しくなる」と話し、ゴトーはそれを否定する。　　今度こそ執事室を出ようとしたとき、ゴトーはゴンの声をかけた。そして、コインを弾いて両手で掴んだ。

「さあ、どつちでしよう。」

「?　左手でしよ。」

ゴンの動体視力は野生動物も真つ青な精度を誇る。　　ゴンのその言葉にすつと開くと、そこには何もなく、右手にコインが握られていた。ゴンは「うそ…」と、驚き、ゴトーは忠告する。

「そう、トリックです。世の中正しい事ばかりではありません。　　お気をつけて。キルア様を、どうかよろしくお願い致します。」

そう言つて頭を下げるゴトーに、最後にゴンに挨拶されたカナリアは、キルアの事が大切だと分かる、暖かい感情に包まれていた。

No. 20 / ワカレ?ト?ヤクソク

2月下旬。五人は合流を果たし、ゾルディック家の正門に辿り着く。

誰でもいいが、それを誰が開けるのか、というのがあり、ふとキルアが呟く。

「そーいや、どれだけ力上がったのか、確かめてみるか…。」

ギイゴオオオン!!

「「「え!」」」

キルアが押し出すと同時に、四人は驚き、純粋な筋力から生み出された力が伝播し、
 「1」の扉が開き、「2」の扉が開き、「3」の扉が開き、そして……………「4」の扉
 が開いたのだ。

「……………」

しかし、維持や平然と開ける訳ではなかったらしく、ギリギリ開けた位だったよ
 うだ。

そのままキルアが手を離してしまい、再び壮大な音を立てて、扉が閉まる。

「ふう。ギリギリって感じか…。ん? お前らどうした?」

「いや…ゼブロさんに、「3」の門を開けたって聞いていたのが、上になっていたから…。」

そうゴンが言い、キルアは得心が行く。

「そっか。お前からここ突破……………ん？ レツ、お前の開けた門は何番だ？」

「レツは入るとき、〔2〕まで開いたから、追いつこうと俺たちも開けたよ。」

だがその言葉に疑問を持ち、尋ねるとそれもゴンが答える。

「……………（ニヤリ）なら、俺の勝ちだな。」

「む。なら今度は僕が押すよ。」

そのキルアの言葉にいい気はせず、なんなら尺なので、レツは今度こそ念念を込めた腕を巨大な扉に押し当てて、一気に開く。スコアは同じく〔4〕の扉が開いた。

「『え!』」

今度はレツの代わりに、キルアを含めた四人が驚く。なぜキルアも驚くのかというと、レツはそのまま固定状態を維持している。しばらく維持しても四人は通らず、レツが話す。

「……………あれ？ 四人とも通らないの？ 早くしないと閉めるよ？」

「あ……………うむ。」

「レツ、お前って一体何者？」

「チクシヨウ…！ オレと同じ扉開けるのかよ…！」

「うーん、もうどう突っ込めばいいのかわからない。」

クラピカ・レオリオ・キルア・ゴンは、それぞれリアクションを取るという一幕があり、ゾルディック家敷地内を出て、夜を徹して移動したので、観光ビザの最終日に間に合い、五人はデントラ地区の町に到着した。

〳〳翌日〳〳

町を歩いていると、最後のゴトーのコインマジックが不思議だった、ゴンはその話を
する。

「ああ、俺もそれ、騙されたよ。タネあかしされると、ハラたつくらい簡単だぜ。」

「おそらくこういうことだろう? ゴン」

キルアが懐かしむように言い、クラピカはゴンの説明だけで既にタネがわかったらしく、硬貨を取り出して実践して見せる。

ゴトーと同じように、はつきりとゴンの動体視力なら左手がコインを掴みとるのが見えた。むしろ今度はイカサマをしているというのがわかった上で見ているので、ゴトーの時より自信を持って確信していた。

そしてやはりゴトーと同じようにクラピカは「どっちだ?」と尋ね、戸惑いつつも
「……左手でしょ?」とゴンは答える。

「!?」

しかし、やはりコインはこれまたゴトーと同じくクラピカの右手にあった。

「なんで!? ねーどうして!？」

「要するに、ゴトーはコインを2枚持ってたのさ。一枚を右手にかくし持ち、もう一枚のコインを上げて相手にわかるように左手で取る。」

ゴトーのゲームで最後の3人がかりに見せかけた4人がかりのコイントスさえもクリアしただけあつて、動体視力に自信があつたゴンはその自信をさつそく粉碎されてやや涙目で種明かしをねだり、クラピカは苦笑しながらもう一回、説明しながら実践する。「この時少し、コツがいる。『どっちだ?』と訊く隙に、拳を相手の目よりやや高い所にあげて、こぶしを握った状態でさりげなくコインを袖の中に落とす。」

「ああ〜〜あー!」

「その通り。」

そこまで言われて、ゴンは手を打って納得する。キルアの言う通り、技術は多少必要だがそれもさほど難しくないシンプルなイカサマに、「う〜ハラたつ〜」とゴンは実に子供らしく憤り、他の4人はその様子を微笑ましく見る。

「まあ、そのトリックを使ったのは最後だけだと思うよ。たとえばゲームでも、ズルは嫌いだから、ゴトーは。」

「…なるほどねー。僕の『家族』みたいに違和感なく嘘をつく人と出会うからもしれな

いからか。だから忠告のつもりでゴンに見せたんだね。」

そのまま、キルアはゴトの性格を話し、レツもその真意を把握する。次にキルアは、何故かゴンの顔をやや呆れたように凝視してから言う。

「お前、本当にガンコだな〜」

「え? 何さ、いきなり」

ゴンからしたら唐突なセリフだったが、キルアからしたらそんな方法と知った時からずつと言いたかったことらしく、ゴンの鼻先に指を突き付けてどれだけ意味のない意地を張ってるのかを指摘する。

「ハンター試験に合格したんだろ!? ならハンター証を使えば、観光ビザなんてなくてもずつと外国滞在できるんだぜ!!」

「俺達もそう言った。」

「僕は勉強で、いつになるか分からなかったから、使ったけどね。でも結果的には良かったかも。」

レオリオにも言われ、クラピカも「よくやるよ」と言いたげな目で見られ、次のレツの言葉にキルアは目を丸くし、列車の“ゴミ掃除”などの内訳を話す。

ちなみにイルミの講習は話していない。無闇に火種を作る必要もないと判断したし、念を教えないと決めてて、それを抜くと、せいぜいが、新しく武器を作ってもらい、

その扱い方としか言えない。

キルアはそれに頷き、レッツが改めて尋ねる。

「なるほどな…。ハンターライセンスもそこまで便利じゃねーかもな。」

「そうだね。で？ ゴンがハンターライセンス使わない理由は？」

「あ、それはね、決めたんだもん。やること全部やってから使うって。」

ゴンは、クラピカとレオリオは自分のわがままに巻き込んだ自覚があるので居心地の悪さを感じるが、しかしこの程度で退かないからこそゴンであるので、自分の意地は譲らないと宣言するゴンにキルアは諦めたような溜息を一度ついてから「なんだよ、やることって」と一応、友人の意地の理由を尋ねた。

「えーとね、まずはお世話になった人達にあいさつに行って…。なんとかカイトと連絡とって落とし物を返したいし…。そして一番肝心なのは……」

ゴンはポケットから丸いものを取り出し、それは『44』と書かれているハンター試験で使われていたヒソカのナンバープレートだった。

「かくかくしかじかで渡されたこのプレートを、ヒソカに顔面パンチのおまけ付きで叩き返す!! そうしない内は絶対、ハンター証は使わないって決めたんだ!!」

前半は律儀で礼儀正しい理由だったが、一番肝心な理由はやはりゴン個人のわがままであった。

それはもう彼の性格とヒソカとの因縁を全員が良く知ってるので、「いつになるんだよ?」という水を差すようなことは誰も言わない。代わりにキルアは、割と根本的なことを訊く。

「ふうん、——でヒソカの居場所は?」

「もしくは、連絡先知ってたりするの?」

続けてレツは眉を寄せ、苦虫を噛み潰した様な表情であるのを浮かべ、ゴンに尋ねる。二人に言われて、目をまん丸くしたゴンがキルアとレツを交互に見つめる。そして数秒後、気まずそうに笑ったのを見て全員が脱力した。

ゴンのボケで抜けた気をも、何とか最初に入れ直して持ち直したのはクラピカだった。

「私が知ってるよ、ゴン。」

その返答に、ゴンは驚き、レツはその不快な表情を浮かべた顔をクラピカに向ける。……さらに「纏」が解けかかって、荒々しくなっている。クラピカはその謎のプレッシャーに、冷や汗をかきつつ、話す。

「本人から直接聞いただけだから、ヒソカと仲良くしてるとかでは無いから、レツ、落ち着いてくれ。」

その言葉にレツは顔を戻し、レオリオは「最終試験の時か」と尋ねれば、クラピカは「講習の後だ」と答える。深入りするるのは、九分九厘ありえないが、ヒソカと懇意にあ

るような、その答え次第で、レッツとクラピカに亀裂が入りかねないと、そこまで理解しつつも、レオリオは訊いた。

クラピカのことは信頼しており、ヒソカと一緒に快樂殺人などするわけがないが、彼はすぐに自分を責めて思いつめることを知っている。だからこそ、気が付いた時にはすでに手遅れという後悔は、医者という夢を志す理由となった親友一人で十分だからこそ、何も聞かずに信じて見守ってやることはレオリオには出来ないのです、拒絶覚悟で尋ねた。

「前から訊きたかったことだが、あの時ヒソカに何を言われた？」

数秒後の間はあったが幸いながら拒絶されることはなく、クラピカは静かにヒソカの言葉をそのまま全員にも教えた。

「――グモについて、いいことを教えよう♥」

そのままクラピカは、レッツの貫くような視線も意には介しつつ、ヒソカとの話を再開する。

「……奴に旅団のことを話した覚えはないから、一次試験の時にレオリオとの話を聞かれたか、他の誰かが話したのか……、緋の眼も見られているからそれでカマを掛けただけかもしれない。とにかく、グモ」は旅団のシンボルだ。ゆえに旅団に近い者はヤツらをそう呼ぶ。それを知っていたヒソカの情報に興味があつてな。――で、講

習の後、ヒソカに問いただした。」

そこまで話して、クラピカは自分の方を見もせずほぼすれ違いざまに告げた、ヒソカ曰く「クモについてのいいこと」をゴン達にも伝える。

『9月1日、ヨークシンシティで待つてる』

思った以上にシンプル極まりない内容に、思わず全員が沈黙して戸惑う。

ちなみにヒソカは、最高の玩具が相打ちで、同時に失うのは最悪なので、せめてどちらかだけでも自分が美味しくいただけるようにと考え、十中八九当たっているであろう、レツの事は話していない。

その意に気付けるはずもなく、五人は会話する。

「9月1日、半年以上先だね。」

「ヨークシンシティで何かあんの?」

ゴンとキルアが疑問を出す、それにはレオリオが答える。

「世界最大のオークションがある!」

「そうだ、9月1日から10日までの間、世界中からの珍品・希少品・国宝級の貴重品が集まる。もちろん、その何十倍の二セ物もだが……。それらを目指し海千山千の亡者達が欲望を満たす為やってくる、世界で一番金が集まる場所だ。」

そこまで説明されてやっと全員が、ヒソカのシンプルな伝言の意味を知る。

確かにそのような場所ならば、盗み目的かもしくは盗んだものを非合法に売りさばくためか、どちらにせよ旅団が訪れる可能性は高く、少なくとも、「幻影旅団が現れた」という情報から後追いつするよりは効率がいい。いなくても、奴らに関わる外道を見つけたことが出来れば、次からはより精度の高い情報を得ることが出来るとクラピカは考えた。ヒソカを見つけたら、二人に連絡することを言う。

「じゃ、私はここで失礼する。」

「え？」

クラピカがそう言い説明を始める。

ナチュラルにこれからも五人一緒だと思っていた、ゴンが驚きの声を上げる。

「キルアとも再会できたし、私としては一区切りついた。これからは本格的にハンターとして、仕事を探す。オークションに参加する金も要るしな。」

「そうか。」

「クラピカ。ヨークシンで会おうね！」

レオリオやゴンも笑い、別れを惜しみつつも彼らも笑顔で再会の約束を交わして別れを告げる。

「…じゃ、俺も故郷に戻るとするか。」

「レオリオも!?!」

「やっぱり医者への夢は捨てきれねえ。国立大学に受かれば、バカ高い授業料もハンター証で免除だしな。これから猛勉強よ。」

「へえへえ、ハンター証ってそんな事にも使えるんだ。」

レツはそれに感嘆の声を上げる。

そう言っつて自分のハンター証をひらひらと振るレオリオ。

次にゴンは、レツに話をふる。

「それで、レツはどうするの?」

「そういえば、レツに関しては、結局、俺達そこまで知らねーしな。どっから来たんだ? 故郷にかえるのか?」

「言っつてなかったけ? 今の『家族』は基本的に世界中に散らばってるから、帰る家は…今の『家族』に出会う前の、元々の家があることにはあるけど、戻っても、僕一人しか居ないしね。あと、ハンター試験は『家族』から出された課題の一つだから、次の所に行くよ。」

「どこに行くのー?」

「えつと、『天空闘技場』に行けつて、言われてるんだ。」

「なんだ、オレ達もそこに行つて特訓するから、結局、同じだな。」

「え? 何で? 遊ばないの?」

レツの答えにキルアも答え、ゴンが疑問を出す。キルアは説教をし、まだ離れていないレオリオ、クラピカも納得する。

「くくくムリだつっーの!!」

「そりやそーだ。」

「ああ、あの門で鍛え上げられるのは筋力だけだからな。」

「技術に関してはそうだね。」

「うう…」

樂觀的なゴンに四人は呆れて、ゴンは再び項垂れる。そのままキルアは木の棒を持って、ヒソカとハンゾーをデフォルメした図を書き始めた。

「ヒソカとハンゾーの力の差をこれくらいだとすると…」トントン

そのままキルアは棒を持ったまま端に引っ張っていく。

「こーこ!! かなりオマケでな!」

「…(ちよつとムカつく。)」

「実際にそうなのか? レツ。」

「多分。」

「そこまで離れてるのか…。私も仕事を探す必要がなければ、同行していたかもしれないな。」

「いや、クラピカは木刀に、レオリオはナイフ術といった、それなりに武術の心得があるでしょ。このゴンの図ほど離れてはいないと思う。」

キルアの大声にゴンは不服な表情を浮かべ、レオリオが質問し、レッツもそれに答え、クラピカの言葉にも律儀に答える。そこにキルアが再び近づき、ゴンが話す。

「じゃあ、キルアはどこなのさ!？」

「オレか?」ンー

そのままキルアは書き加える。

「まあ……………ここだろうな。(平常モードで)」

「へえ、ハンゾーの方が強いのか? ……レッツはどこになる?」

それに感想をいいながら、ゴンはレッツにもどの辺の強さか尋ねる。

「ん? 僕はハンゾーに勝ったから、その間?」

「そっか、ハンゾーがそっつてことは、レッツはキルアより強いんだね。」

バツ「!!」?

「!!」フフーン

そのままレッツは先の図に書き加え、それに無邪気にゴンがいらぬ発言をし、キルアが図から目を離し、見上げると、そこにレッツは腰に手を当てて、盛大にドヤ顔をしていた。

「なっ……………これは平常モードで謙虚にした結果だ!! 本当はもう少し上だ!」

「キルアアア。一ツ回イ書いたアのうオウ訂正イくしてもツ、虚勢ツにくしかアア見えツないツよ」ガツクン ガツクン

「だから虚勢じゃねえーって言ってるんだろがーっ!!」

そのキルアの言い訳と肩掴みに、レツは言葉を重ねる。それこそ同い年の女に勝てない事が、認められないキルアのプライドが、爆発した結果の叫びなのだが、三人どころか、ゴンまでも妙に優しい目をしているのだ。

「うん、わかったよキルア。わかったから。」

「絶対に何もわかってねーだろうがーっ!!」

ゴンの言葉にキルアは叫びを重ね、言い訳というかりカバリーを試みる。

「大体！レツなら仕事モードと、平常モードの違いくらい、分かってるだろー！」

「安心して、キルア。」

「あ？」

「僕がハンゾーに勝ったのは、その平常モードだから、どちらにしてもキルアの負けは覆らないよ！」

プライドのあまり言い訳を叫びながら、暴れ回りそうになったキルアに、レツが静かに声を掛ける。まさしく花の貌という表現そのもの、もはや殴りたくなるくらいに良い笑顔を浮かべるレツ。

そしてキルアはもちろん、その言葉を認めるわけにはいかない。

「なら、バトるか? お?」

「これ以上、恥の上塗りしてどうすんの?」

互いに挑発に煽り言葉を重ね、全く目だけ器用に笑っていない笑みでギスギスとした牽制をぶつける二人に、レオリオとクラピカはバカらしくなり、ため息をつくが、ゴンは自分の余計な言葉がきっかけであることはわかっている、オロオロ狼狽えながら何とか二人を宥めようとする。

「え? えつと……キルアとレツは互角つてこと?」

「違うわ(よ)!!」

そのゴンの言葉はブレーキにはならず、アクセルが余計にかかる。

「あ? ゼツテー、オレはレツよりも強いに決まってるよ。」

「それ以上、強がっていると、白けるよ。」

「もうー、まだ2人とも喧嘩してー」

キルアは喧嘩腰にドスが入り始めた口調という熱が入るのに対し、レツは呆れたような溜息を吐き、逆に冷えるように話す。ゴンは呆れながらも頑張つて仲裁しようとするが、始まってしまった論争は、当然両方が譲れるものではなく、どれだけ自身の主張が正しいのかを示すしかない。それは徐々にヒートアップしていき収まりがつかない。

くなつてきたのだ。

「このアマ……！ 何でこんなのが、オレと同じ門を開ける……！」

「同じだつて？ その台詞、訂正してよ。僕は〔4〕の門を維持できたけど、キルアは数秒しか持たなかつたじゃん。」

「グツ……！ クソが、このまま言い合いをしていても埒が明かねえ！ おい、レッツ、そこでオレと戦え。決着つけてやる!!」

いい加減にゴンのみに任せても、無理と悟つたレオリオとクラピカも仲裁に加わる。

「いい加減、落ち着け。こんな公共の場で、戦おうとすんじゃねーよ。」

「その通りだ。それに、三人はその『天空闘技場』とやらに行くのだろうか？ 闘技場という名前なのだから、ルールも決まっているであろう、そこで正確に決着を付けなければいい。」

「……そうだね。まあ、キルアをからかうのは、これくらいにするか。」

「………チツ！ そこで絶対、ぶっ飛ばしてやる……！」

「楽しみに待つてるよ。で、ゴンの話だったね。」

その仲裁によつて、一時的とはいえ、ようやく落ち着いたのを気に、レッツが元々の話題に修正する。

期待に目を輝かせて二人を見るゴンが話す。

「そうだった。 やっぱ、二人共すごいや。 俺、自分と相手の力の差なんて、はつきり測れないからさ。」

「バーカ、いいんだよ。 こんなのでキトーでさ。」

「そうそう。 それに一発で終わる毒物使いとかでも、話は変わるし。(念を含めたら、それこそ可能性は実質、無限もいいところだし。)」

「オレには、毒なんか効かないけどな。 それに強い奴ほど、強さを隠すのもうまいからな。」

「多分、大抵の人が見たら、レオリオが一番強く見えるだろうし。 見た目っていう意味でも、そんなものだよ。 あんまりアテにはならないね。」

そのキルアとレツが交互に発言し、三人は頷く。

「まア、なんにしても、ヒソカは相当強い!」

「うん!」

「それに金も工面できるのが、『天空闘技場』 っていう所。 多分ゴン、そろそろヤバイだろ?」

「……うーん、実はそろそろヤバイ。」

「オレもあんまり持つてない。 そこは一石二鳥の場所なのさ。」

そうキルアとゴンが、交互に発言する。 そして飛行場に、というかしばらく前から

着いていたのだが。

「ま、なんにしてもここで一旦別れだな。」

「そうなるね。」

「また会おうね！」

「そうだな。次は……」

『9月1日。ヨークシンシティで!!』

五人は誓い合う様に言い、そのままクラピカとレオリオは空港で別れたレッツ達。そこから三人は飛行船に乗り込み、『天空闘技場』に向かった。そ

天空闘技場編

No. 21 / ジョウガイ?ノボリ?シヨウガイ

レツ達、三人は飛行船に乗って、天空闘技場を目指していた。

キルアとゴンは飛行船代で財布がほぼすつからかんになるらしい。レツも二人ほどではないが、少々危ない。

いざとなつたら〔絶〕で旅団仕込みのスリ、という術や、手元からしばらく放すと消える、宝石の指輪の空売りのような詐欺行為が、なくもないのだが。

日付は、3月に入り、飛行船を降りた三人は天空闘技場に登録する者達の列に並ぶ。

「すごい行列だねー。これ全部挑戦者なの?」

「ここはハンター試験と違って小難しい条件は一切なし! ただ相手をブツ倒せばいいだけだから。」

列はあつという間に進み、三人は登録窓口に辿り着く。

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要事項をお書きください。」

そう受付は言い、三人は、記入用紙に〈格闘技経験、十年と誤魔化し〉て記入し、登録を済ませた。

「キルア様は2054番、ゴン様は2055番、レッツ様は2056番となります。一階では番号でお呼びしますので、お聞き逃しのないように。それとレッツ様。その腰の武器は使用を禁じられております。」

「分かりました。」

受付はレッツに、腰のコルトパイソンダガーの使用不可を言い、それに応じ、外して鞆に仕舞った。受付はそれを確認すると、頷いた。

「それでは中へどうぞ。」

三人は中へと足を踏み入れる。ワーや、ウォーといった、中は熱気で溢れており、16個の小さいリングでは挑戦者達が戦いを繰り広げていた。

キルアが六歳の時の経験を述べ、「200階に昇るのに、二年かかった」と言い、続けて「ヒソカクラスのと戦いたいなら、それより上に行かないとダメだ」ともいう。

そこにアナウンスが流れてくる。

『1973番、2055番の方。Eのリングへどうぞ』

『1985番、2056番の方。Kのリングへどうぞ』

「あ、俺だ。うう〜……緊張してきた〜」

「ん？ 僕もか。」

「そう言えばゴン。お前、試しの門クリアしたんだろ？」

「え? うん」

「だったらさ、思いつきり押せ。それだけでいい」

「え? 本当に?」

「頑張ろ!」

キルアの言葉にゴンは懐疑的だった。そこまで力が上がったようには思えなかったからだ。

しかし、キルアは問題ないと親指を立てて笑みを浮かべ、レッツも励ます。

レッツとゴンはリングへと向かう。

二人の子供の登場に、周囲は小馬鹿にするように笑う。

「おい、見ろよ。ガキだぜ?」

「こつちもだ。」

「おいおい! おまえらあ! 怪我する前に帰んな!」

野次が飛んでくるが、もちろん二人は気にもしない。レッツの相手は黒髪でガタイの

良い男。審判が近づいてくる。

「ここでは挑戦者のレベルを判断します。3分以内に自らの力を発揮してください。それでは、始め!!」

「ひゃっはー!! 怪我してもしらねえぞ、ガキイ!!」

男が飛び掛かろうとした瞬間。

「いっはっ！」

男が突如、真上に飛ばされた。審判や野次を飛ばしていた連中は目を見開いて固まる。男はそのままアーチを描いて、観客席の最上段に墜落する。

リングには足を相手の顔、とくに顎があつたであろう位置に、右足を突き出し、左足で立っているレッツがいた。

「うゝん、足のみて、意外と難しいな……。」

ドオオオン!!

そこに音が響き、目を向けるとゴンが右腕を突き出して立っており、その先には巨漢の男がレッツと同様に、場外へアーチを描いて、観客席に吹っ飛ばされていた。

ゴンが行つたのは、ただシンプルに押したのは、変わらないのだが、「2」まで開いた筋力と、どうしても身長の関係で、審判から見ると、角度が鋭角に突き刺さるように、腕を伸ばしていたからだ。

「な!? なんだ、あの二人のガキ!?!」

「どつちもすげえパワーだぞ!」

「ああ……どつちも観客席に吹っ飛ばすなんて、並大抵のことじゃ出来ねエ。」

レッツとゴンの力に周囲がざわつくのをよそに、審判がレッツに近づく。

「2056番、貴方は50階へ行ってください。」

「分かりました。」

レッツはチケットを受け取り、観客席に戻る。ゴンも戻ってきて、キルアが入れ替わる様にリングへと向かう。

「50階だって。」

「僕も同じ。」

そのレッツの言葉に相槌を返していると、リングで再び、どよめきが走り、何やら黒髪丸刈りの男が吹っ飛んでいた。

「おいおい、他にもまだ化け物みたいなガキ共がいるぞー!」

観客から注目されていたのはキルアと道着を着た坊主頭の少年。坊主頭の少年は「押忍ー!」と挨拶をして、リングを去った。

キルアの方は、首裏、ではなく正面から首に手刀を入れ、変に對抗心を出したのか、その角度から、《観客席飛ばし》を同じく決行した。対戦相手の被害としては、ゴンはマシだろうが、レッツは顎の骨が折れるだろうし、キルアも深い所の顎関節あたりが折れただろう。

レッツはその少年が【纏】を纏っていることに気が付くが、この少年のみ、【纏】をしているのに、《観客席飛ばし》をしなかったのが、不思議に思っていた。そこにキルアが

戻ってきた。

「お疲れ、キルア！ 何階？」

「おう。 オレも50階からにでもらった。 金稼ぎたいし、同じ階でしか、対戦は組まれないからな。 ……絶対にレッツに勝つからな！」

「こんな観衆の面前で、恥を掻きたいなんて、キルアは物好きだね。」

「また、喧嘩してー さっさと上に行こうよ。」

再びギスギスとし始めるが、それとは別にゴンが仲裁する。 もうこれはお決まりのルーチンと化している。 エレベーターを使い、50階にまで、昇ろうと乗り込む。

エレベーターが「ここからは、10階単位で、振り分けられていて、ここの場合、勝つと、60階に。 負けると40階に降りるシステム」という。

「100階をクリアすると、専用の個室を用意してもらえるんだ。」

「へえー」

そこに追加情報をキルアが言い、二人は感嘆していると、道着を着た坊主頭の少年が話しかけてきた。

「押忍！ 自分、ズシと言います！ お三方は？」

「オレ、キルア」

「俺はゴン」

「僕はレッツ」

自己紹介を終えたタイミングで、50階に到着し、四人はエレベーターから降りる。

「さっきの試合、拝見しました。いやー、すごいですね。」

「何言ってるんだよ。お前だって一氣にこの階まできたんだろ?」

「そうそう」

「でも、《観客席飛ばし》出来るのに、それをしなかったのは何で?」

ズシの発言に、キルアとゴンが感想を言い、レッツは「纏」をしているのに、それが出来ないわけがない」と思っていて、質問する。それにズシはしっかりと答える。

「あんな真似は自分には出来ないっすから。自分なんかまだまだだつす。ところで皆さんの流派は何すか?」

自分は心源流拳法つす!!」

ズシはビシッとポーズをしながら流派を名乗る。しかし、レッツ達は顔を見合わせ

て、答える。

「別に……ないよな?」

「うん」

「僕は、きちんと教わってるし、ここで『先生』と合流予定だからね。」

「ええ!!」 お二方は、誰の指導もなくあの強さなんすか……。ちよつぱり自分シヨツ

クつす。 やつぱり自分、まだまだだつす。」

そこに拍手の音が聞こえてきた。

「ズシ！ よくやった」

「師範代！」

眼鏡をかけて寝ぐせ全開の優男がズシに近づく。レッツはこの男がズシに念を教えているのだと理解した。

ズシがシャツが出ていることにツツコミを入れ、その男は服を直し、発言する。

「そちらは？」

「あ、キルアさんと、ゴンさんと、レッツさんです。」

「初めまして、ウイングです。」

「「押忍!!」」

「初めまして。」

「まさかズシ以外の子供が来ているとは、思わなかったよ。君達は何で此処に?」
「ツさんは、念が使えましたね?」

ズシの紹介に、三人は挨拶をする。ウイングは発言しながら、「念文字」を右肩の上
に書く、という平行思考も要求される、何気に高度な事をやってみせる。

「えーと、まあ強くなるためなんだけど。」

「僕も同じ。《はい、使えます。》」

「キルア、ここの経験者なんです。」

それに相槌をしながら、レツも【念文字】で会話する。

「そうか……ここまで来るくらいなんだから、それなりの腕なんだろうけど、くれぐれも相手と自分、相互の体を気遣うようにね。《ここで【発】の特訓ですか?》」

「【押忍!!】《もう、完成していて、ここで使いこなす訓練です。》」

ウイングは頷き、ゴンとキルアは返事と思い、レツはそれに納得と理解をする。すれ違つてるようで、二つの目的に同時に答えたのである。

そのまま四人は、受付にて、チケットを出し、152ジェニーという缶ジュース一本分のギヤラを貰う。

そこでキルアは、自販機で缶ジュースを買って、この闘技場のファイトマネーの相場を話す。その話には、ゴンは疑問を出す。

「200階だと、大体いくらになるの?」

「んーとね、正確に言うとおレ、200階に言っちゃった時点で、やめちゃったから、わかんないけど、190階で勝った時は、二億くらいだったかな。」

そのキルアのコメントにズシとゴンは、どんなお菓子なのかと夢想し、レツは困惑しながら聞いていた。何せ、クロロに「五億は稼げ」と言われてるのに、これでは達成

できそうにないからだ。そこでレツは質問する。

「他にも、金稼ぎの方法ってあるの？」

「ん？ …ああ、ギャンブルスイッチって言って、どちらが勝つか賭けをするんだ。勝ち目の倍率に応じて、配当金が変わる。…だけど、選手登録したオレたちは参加できないぜ。金払ったら、観戦はできるけど。」

「なるほどね。（…あー、僕の能力で、変身すれば、そう簡単にバレないように、挑戦しろと。）」

キルアは「もう一試合、組まされる可能性がある」と言い、四人は控え室に入る。ベンチに座り、さらに続けて「この階程度なら、楽勝」といい、しばらく雑談する。

そしてアナウンスの呼び出しが始まる。

『2054番、キルア様』

「お、お呼びだな。」

『1963番、ズシ様。 57階、A闘技場へお越し下さい。』

「うえー！」

「あら。」

「押忍!! 胸をお借りします!」

「ああ、まあクジ運、クジ運。 次、頑張れよ。 じゃ、先にな。」

「うん。二人共頑張ってる。」

「いや、本当にズシはついてないね。」

「上の階で待ってるぜ。ゴン、レッツ。」

最後のキルアの言葉に、ズシはゴクリと唾を飲みながらも、その部屋から出ていった。「あんなにハッキリ言わなくなっちゃって良いのに。」

「でもそれが本当だから、仕方ないよ。」

そのゴンの言葉に、レッツが発言する。しばらくすると、再びアナウンスの呼び出しが流れた。

『2055番、ゴン様』

「お、俺の番!」

『2056番、レッツ様。 57階、B闘技場へお越し下さい。』

「……………」

二人は顔を見合わせ、苦笑する。

「えーつと、ゴン、試験のヒソカのプレートと言い、クジ運なさすぎない?」

「あはは、それは分からないよ。とりあえず、その会場に向かおう。」

~~~~~

『さあ、皆様、お待たせしましたアーーーーー!! こちらも隣のA会場と同様、“少年  
“ 同士の戦いです！ しかしこちらも———』

レツはそんなアナウンスを聞いて、フラッシュバックしていた。

男と思われ、四角い石のリング。 観客も居る。 違うのはアナウンスの存在くら

い。 これは致し方ない。

多分、一番悪いのは、レオリオである。 耳年増の原因である、キキョウは善意であるのに対し、三次試験のセクハラ事件は、完全に悪意といえれば悪意であるのだ。 それらの要素が綺麗にかみ合ってしまったが故の……ある意味悲劇だった。

対戦相手のゴンはゴクリと唾を飲んだ。

(……やばいかも。 なんかレツ、能面みたいな顔して、どこか怒ってる……)

そう、そのツケを理不尽に払わされるのだ……。 そんな緊張とは、別に紹介が終わってしまったアナウンス。 審判が合図を取る。

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!」

その宣言がなされると同時に、レツは駆け出した。 これには理由として、【絶】で心を落ち着けようと頑張っていたが、念は心が顕著にでてしまう。 長くは持たないと判断し、今の致命傷が特にない状態の内に仕留めるが吉と判断した。 ……その速度に、帽子が外れてしまうが。



隣のA会場では、ズシがK・Oしないことに業を煮やした、キルアが本気を出してしまっ所だった――

ドゴオ!!

「ゴハツ」ゴキベキ

「やば(べ)っ」

『どちらも、場外まで楽々、ふつとんだアーーーーー!! これは素人目に見ても、カンペキ病院送りコース直行オオーーーーー!!』

ゴンの肋骨が折れるだけで済むのは、元々強靱な肉体な上、さらに《試しの門》にて強化されてると、レッズが足技に不慣れであり、その蹴りを喰らった結果。

一方、ズシの肋骨が折れてしまったのは、キルアが純粹にパワーアップしてるからだ。そして二人は気絶……せず、不屈の闘志で、立ち上がりかけ、意識を明確に持つてはいるが、審判が「やれるか?」と、聞くも、リングに戻れなかった。

『ゴン選手、立てませんー!! ダウンによる、K・Oで、レッズ選手の一発勝ちー!!』  
 !! そして、レッズ選手はあの髪の毛の長さからして、この天空闘技場では、大変珍しい、女性選手だったようです!! 今後も、TKO勝ちを収めた、隣のキルア選手に、今回は負けてしまった、二人の少年にも、期待しましょうー!!』

そうアナウンスが流れ、試合は終わった。

「ゴン！ 大丈夫!? しっかりして！」

「アイタタタタ……、うん、大丈夫。レッツが治してくれてるし。」

そして試合が終わり、これで気兼ねなく手を貸すことも出来るようになり、落ち着いたレッツは、ゴンを「癒しの碧玉／ホーリーヒーリング」で、肋骨を治療してゆく。治療が終わったあとに、二人はその会場を後にした。お互いに隣の会場であり、キルアもそのモニターを見ているので、この57階の会場裏で合流し、レッツはもれなく、ズシの治療も行った。

くくく

三人は、そのまま60階に上がり、キルアとレッツはファイトマネーを貰う。ゴンは40階に落ちる事となり、ファイトマネーが貰えなく、宿代の問題が生じて焦るが、本来の力なら容易く、金を貰えるはずなのを、二人は理解しており、一時的な借金で手打ちとなったが、実際の所、些細な問題である。

「ありがとう、二人共。」

「どうつてことねーよ。すぐに返せるようになるだろ。」

「それにこんな組み合わせになっちゃたら、どっちみち避けられなかったよ。」

それにゴンがお礼を言い、キルアはぶつきらぼうに答え、レッツも話す。そこにゴン

から疑問を出す。

「……………そういえば、俺達の試合は、キルア達のかなり後だったのに、同時に決着って、ズシ、強かったの？」

「ああ、ちよつと手こずつちまった。」

「けっこう〜〜」

そうゴンとキルアが会話していくのを見ながら、レツはズシの【纏】のクラクリだとわかっているが、おいそれと言うわけにはいかないもので、どう対応しようかと、困惑していた。……………つまり無言で考えに没頭してしまったので、

「〜〜い！ おいレツ！」

ハツ「……………何？」

「いや、だからズシの師匠が言っていた、〃レン〃って何か？ っていう話。…………お

前、まさか知ってるのか!？」

当然怪しく、特にキルアからは一層、疑われる。レツは考えた結果、知識のみを教ええた。

「えつと、『先生』とかは、〃意志の強さ〃とかって、言ってたから、それかな？」

「レツは知ってるの!？」

「いや、そう喋ってるのを聞いてるだけで、本当にそうかは分からないよ。」

「ふーん。…でも、あの打たれ強さは、それだと説明つかねーな…。」

ゴンが食いつき、レッツは上手く誤魔化そうと、頑張った。

キルアは完全には納得してないが、レッツの言い方は、『先生』、ズシの『師範代』といった、特定の大人の技術と思いい、これ以上、レッツを問い詰めても何も出ないと判断した。

レッツは目的が違うのを知ってるので、ゴンに謝りつつ、「最上階を目指す」事を、宣言し、ゴンも乗っかり、レッツは200階までのハンデしか、教えられておらず、詳しくは知らないの、同じく乗った。

…ちなみに、レッツは帰ってから冷静になると、男装だった自分にも非があったので、公衆の面前では、あまりやってこなかった、女性と分かる格好をした。その格好はジャポンの誇る文化の宝、キモノである。

くく

3月7日。落ちた分、少々遅れたゴンが、個室を手に入れた。ちなみにキルアとレッツも、110階を突破し、『押し上げのゴン』・『手刀のキルア』・『蹴り上げのレッツ』という二つ名に、ゴンは一敗したとはいえ、そこからずっと一発で仕留めてるので、『観客席飛ばし』を行い続ける、未成年組として、人気を博していた。もれなく、ゴンは二人に借金は返している。キルアは『100階の壁』というのを説明するが、まあ杞憂

なので割愛する。

———  
そして。

『2054番、キルア様』

「お、決まったか。」

『2056番、レツ様。 123階、B闘技場での対戦となります。 翌日、闘技場へお

越し下さい。』

「ふう〜ん。」

ゴンは個室を手に入れたばかりだというのに、この二人の120階クラスを賭けた勝負の為に、ギスギスとした空気にしやがるので、怒ってもいいはずなのだが、冷や汗を流して、無言であった。

「……………」

「…………えつと、二人共頑張つてね！」

「うん！」

「おう！」

その言葉をゴンから貰い、二人はそのまま無言で別れ、英気を養った。

〜  
〜  
〜

『さあ、皆様、お待たせしましたア—————!! 再度組まれました、少年と少女の対決!! 二人共、それぞれ一発で『観客席飛ばし』を行い続けた二人! どちらがその無敗伝説を守るのか—————!!』

二人はその会場で、瞳に静かに闘志を燃やして、相対していた。キルアはただただ睨み、レツも声音が堅くなる。

「……………」

「なんだよ!」

お互いに、眉を寄せて、そのまま睨み合いを続ける。

『何やら、険悪な雰囲気! だがこのライバル関係も青春でしょう! それではいつてみましょ—————!!』

そのアナウンスを最後に、審判が、彼らの間近くまで進み出た。

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!」

まず仕掛けるのは、一つ冷静になっているキルアからだった。

(まずは、様子見…………)

「!?!」

『……………これは—————!?!』

開始の宣言とともに、スウ————…と霧が広がるような動きでもって、キルアの姿が

広範囲でぶれ……、幾人ものように見えた。歩行速度に緩急をつけることで残像を見せる、暗殺術の基本歩行術【暗歩】の応用技、【肢曲】。

レツはくるりと目を丸くする。フェイタンと戦った事が無いため、初見ではあるのだが、念では珍しくもない。落ち着いてレツは、自分の周囲を囲むようにして残像を見せるキルアを、足は動かさず、目線だけで追った。残像ということはわかるが、念など使っていない純粋な「技術」であるだけに見破るのは至難の技なのだ。

「な、なに！ 何で攻撃が効かない！」

「随分と攻撃が軽いねエ、キルアア？」

静かで流動的な動きから突如繰り出した鋭い手刀、今まで殆どの対戦相手を一撃で吹き飛ばして、今回は地に沈める技だが、しかしそれは、【凝】でレツは的確にガードした。

「ちい！ ナメてんじゃねーぞレツウ！」

「よつと。」

「何イ!?!」

キルアの追撃を軽く避ける。レツの動きが予想外だったのか、ここでレツも【纏】に抑え、攻撃に転じた。やはり一撃では仕留められないどころか、明確にダメージがあつたのかも怪しい。武者震いとともに、キルアは初めて笑みを見せた。そして様子見は終わりとばかりに、二人はすぐに地面を蹴る。

シャシャシャシャシャ!

双方から凄まじいスピードで繰り出される連続攻撃。だが、打撃音は、しない。

「うわ~~~~~」

またしても、『押し上げ』の一発で、『100階の壁』とやらに躓くことなく、あつさり勝負を終えて、観客席にて観戦をするゴンは、友人たちのその攻防に感嘆の声を出した。

……いや、あれを攻防、と呼ぶのは厳密には正しくない。それは、キルアもレッツも、お互いの攻撃を全て《避けて》いるからだ。

キルア、というより暗殺者は、『戦闘』になる前に、致命的な一撃を与える職業。〈

レッツ、というより念能力者は、へ一撃もらうだけで、致命傷、というか脳が破壊されるのもありえる、操作系能力者の存在。〉

それぞれの考え方は異なるが、ガードという行為は致命傷を避けることは出来ても、それが論外に近い、という考えであるのだ。

よって、出てくる引き出しの中身は同じ。ゆえに、彼らは出来る限りの攻撃を避けていなし、しかもその回避の動きもどこまでも最小限で無駄がない。そうすること、ガードのダメージを排するばかりか体力の温存も行なっているのである。少年少女の戦いとは思えない、かなり戦闘に慣れた動きであるのだ。



「貰つ——」

目にも留まらぬ戦りあいの中、レツが見せた左手の隙に、キルアが抜かりなく反応する。

「な——」

ニヤリ、と嘲笑を見せた、レツが右手をキルアの目前に翳した。基本的に足技のみだったが、保険として、キモノを選んだのはこのため。ヒラヒラと表面積が広い袖はキルアの視界を奪うためである。そして左を確実に殺そうと集中力を一点に集めていた彼は、それに反応するのが一瞬、遅れた。

——ドオン！

「あれ。」

「クリーンヒット！ ーポイント・レツ！」

左にかまけてガラ空きになったキルアの右横つ腹に打ち込んだ回し蹴りに、審判の判定が飛んだ。しかし当のレツはキョトンと目を丸くし、吹っ飛んだキルアもまるで猫のように空中で宙返りをする、綺麗に地面に着地した。

『はっ……速——い！ あまりに速いッそして無駄のない攻防！ 少年少女の戦いとは思えない熟練者のな試合です！ いつそ美しいとすらいえる動きでした、見蕩れて実況を忘れてしまった私を許して下さい——い！』

実況が叫び、大歓声が沸き起こる。

「うーん、やっぱり足のみでは仕留められそうに無いな…。」ポリポリ

「そう簡単に終わるかよ。」フン

レツはハンデを満たせなさそうな事に頭を搔きながら言い、一方、鼻を鳴らし、キルアが姿勢を正した。避けるのは不可能、そして左を攻撃しようと右手を伸ばしていたためガードすることもできなくなっていたキルアだったが、咄嗟にそのままレツから受ける蹴りの方向に自ら動き、ダメージを半分以下に減らしたのである。

（実戦慣れしてるね（やがる）。）

そのようにお互いを評した。

レツのフェイント・囷としての隙の作り方は非常に自然で、いかにも本当に気を抜いてしまったかのように見えたし、そのあと自分の服を生かして袖を目隠しに使うあたりも、教科書には載っていないタイプの、実践的な戦法である。

また、今しがた咄嗟にダメージを受け流すために、同じ方向に飛ぶ、キルアの技術も、それ相応に経験が無いと、見切りもできずに、モロに喰らうだろう。

形振り構わなくなった人間というものは、何をしでかすかわからない。それは「試合」では絶対に経験することのない状況であり、だから大会優勝の有段者と百戦錬磨のチンピラが殺しあいをしたとき、実際にやられるのは大概前者だと言われているのだ。

同業者として、お互い、実力者から教えを受けている、二人はそう確信した。

(でも僕(オレ)だって、実戦経験なら負けな(てねえ)。)

しかしお互い、闇の道のプロとして、かなりの数の人間を殺してきている。お互い、

その経験は負けずとも劣らないはずだ、と自負する。

(うーん、でもキルアから首裏に一撃もらってるんだよなあ。)

レツとしては、今の戦闘経過に、一点のみ不満がある。先に攻撃を貰ってしまい、それなりに痺れが来る、という点。なので、お馴染みの足に「流」をして、

「フツ！」

「なッ！」

キルアの目にすら、辛うじて映る速度で、首裏手刀の、お返しである。無論、キルアもまともに食らうはずもなく、咄嗟に吹っ飛ばされながらも、レツを見据える。だが、それは決定的な隙でもあり、連続して、レツは手刀をいれ続ける。素で32トン誇る、キルアと違い、どうしてもレツは「纏」のみの瞬間ダメージ効率は劣る。それを理解してるからこそその、連撃。

『手刀！ 手刀！ 手刀！ 無慈悲な連続攻撃——！！ 見せました、レツ選手の本気です！』

「クリティカル!! プラス2ポイント・レツ！ 3対0!!」

レツは【制約】の関係で、持久力を増している。念を知らない、今のキルアにとって、それはどうにかダメージを減らしても、一方的に蓄積されてしまえば、無視できないものとなるのだ。

リング上の、二次元座標の回避は得策ではないと判断し、たまらずともいう、キルアは上空に高く跳び上がった。しかしそれは決定的な隙でもある。レツもまた、ニヤリ、と笑みを浮かべると、膝を曲げ、一気に飛び上がった。

『た、高——い！ レツ選手、キルア選手より高いジャンプです！ そしてその服装に——マニアの皆さんがカメラを構えています、さあどうなる——ッ!?』

『ソレツ！』  
『グッ!!』

純粋な身体能力で跳び上がっただけのキルアに対し、【凝】によって足のみにオーラを凝縮して飛んだレツとでは、当たり前だが、その速度と高度は段違いである。

そしてそのガラ空きの腹に拳を叩き込もうと、レツは振りかぶり、キルアはその攻撃を腕にクロスガードして防ぐ。

『——レツ選手の服装は、『蹴り上げ』と同様、やはりスパッツ！ スパッツでした！ 抜かりなく、二つの意味で磐石！ またしても何やら控えめなブーイングが巻き起こっております！』

50階でゴンに勝った後、キモノの女性姿で挑み、それ以降、このお決まりの悪ふざけのアナウンスも、レッツにとつては《蹴り上げ》である以上、聞き慣れたものである。それとは別に、空中であるがゆえの、自由落下のダメージが重く、先の連続攻撃に、一瞬、立ち上がるのが遅れた。

キルアは顔を顰め、ダメージによる、疲労で動かない身体に必死で力を入れた。完全にマウントを取られた身体を起き上がらせられる可能性は皆無に等しく、レッツの折り曲げた足首は、キルアの足をがっちり押さえ込んでいて、腕も、もれなく【凝】で、押さえ込んである。

「クリティカル!! アーンド、ダウン!! プラス、3ポイント・レッツ! 6対0!!」

『こうなつては、立ち上がる事も、反撃の余地もないでしょう!!』

そう、アナウンスが入り、2〜3分程、それを観察していた審判。

そしてこのように身体の動きすら封じられたら抵抗することも出来ない。キルアが目を見開いた。動揺とショックが入り交じった顔で理解した。こうなつてはもはや手はない、完全なる敗北、詰みだ、と。

「勝者、レッツ!!」

「僕の、勝ちだー!」

「チ、チ、チクショウがアアアアアッ!」

これ以上は、何も変化がない上、逆転の余地が無いと、審判が判断を下し、レッズの勝利宣言に、俯いた顔を悔しさに歪めて歯を食いしばって響き渡るキルアの慟哭が、激闘終幕の合図となった。

~~~~~

「スゴかったね〜。」

「うん。久しぶりのまともな戦いだっただよ。」

「……………」

ゴンの感想に、のんびりとレッズは答える。キルアはどこか不貞腐れて、また訝しげにレッズを警戒しており、それにゴンは苦笑して、キルアに話を振る。

「キルア〜、すねてないで、元氣だしなよ。」

「すねてねーよ!! オレが気になったのは、初撃が入った時の、首裏の硬さ! レッツに聞きたいんだけどさ、やっぱりお前、"レン"、正しく知ってんだろ!」

「だから、聞きかじっただけって、言ってるんじゃない。」

キルアの質問に、このままレッズはすつとぼけるつもりだった。その答えに眉を寄せながら、ゴンは根本的に「ズシに聞こう」と提案する。

~~~~~

三人は、ズシの元に行き、ズシは、一連のそれを語る。

「~~~~~以上す!!」

「分かんねーよ!!」

「というか、レッズさんに聞けば、いいじゃないすか。」

そしてズシはレッズの恍惚続けた成果を壊した。勿論、悪気は無い。ゴンとキルアは振り向きレッズを見る。

だが、この☒ロビー☒にて、キルアとレッズは、シルバとキキョウの伝達ミスのおツケを味わった。

やがて思考が纏まったのか、レッズは眉間に皺を寄せて忌々し気に言葉を零した。

「あ~~~~、キルアの家から、キルアの婚約者にされちゃって、教えるわけには行かないんだよ。」

「おい、どこの誰が言ってるんだよそんな事!」

「あ、そうだ! 忘れてた!」

「婚約すつか!!?」

キルアは、「なんでこんな時に!!」と呻き、ゴンとズシは喰いつく。呻きながらも、

明らかに正気ではないと判断し、レッズに対する、不意打ちじみた精神分析的な攻撃を仕掛

けた。

「しつかりしろー！ オレ達、兄弟の候補ってだけだろうが!!」

「はあう!？」

叩かれた衝撃で我に返ったのか、レッツはどこか、グルグルとしたその瞳には混乱が解除され、何をやらかしたか理解し、一筋の冷や汗を流していた。

正気を取り戻したレッツにホッと安堵しつつも、キルアとしては困惑を隠せない。

そしてぎやあぎやあへと喚き立てる様に、カオスになったのを止めたのはウイングである。

「ズシー！ あなたはいつから人に物を教え、勝手に人の習熟を暴露できるほどに、物を収めたのかな？」

その注意の後、ウイングに部屋に案内され、キルアとゴンは、ウイングの、見えない障害のソレを味わった。

くくく

レッツは口出しを何もせず、そしてその帰り道。

「ウソ!？」

「ああ。話をもっともらしいしけど、それだけじゃ説明できないんだ。なあレッツ？



何でお前達は、あんな打たれ強いんだ？」

ゴンは驚きつつも疑問を出し、キルアは流石に疑りながら、質問をレツにする。レツは内心、その洞察力に舌を巻きつつ、「燃」で誤魔化す。

「だから言ってるんじゃない。ウイングさんは本当だよ。」

「いやー！ あれは“意志の強さ”なんかで、どうにかなるレベルを超えてるね！ 絶対、他に秘密があるだろ！」

「……………（さて、どうしようか？ …流石に限界が近いような…）」

キルアは冷静にツツコみ、レツは困りながら黙る。何よりキルアの疑り深い視線ならともかく、ゴンの「俺達にウソはつかないよね！」という、好奇心全開の目線が、いたたまれない。

「フウ~~~~。 ……ならさ、コレが見える？」

「……………何も見えないよ（ぜ）。」

「これを見えるようにするのが、本当とだけ。これ以上は、僕が怒られるか、死んじやう。」

「何で？」

「キルアの家からして、僕みたいな半端者が吹き込むとダメだからね。」

「……………」なるほどな。」

という事で、レツは「念文字」の〇〇〇〇を作りつつ、一部真実を話した。二人の意見にレツは答え、ゴンは後者の意味が分からずに発言する。レツは虚実を混ぜて、嘘のゾルディック家を盾にする旨の発言をする。ゴンは顔を顰めて納得はせず、キルアはスツと得心が行った。二人共、レツに死んでほしい訳ではないので、諦めた。

〃〃〃

この後は、20階分、仲良くゴンとキルアはレツに蹴落とされたが、レツ含め、三人は淡々と、階層を登っていった。

そして、3月20日。

『レツ選手!! 一発KO勝ち!! 今までキルア選手以外、どんな相手も一度の《蹴り上げ》で沈めてきました!! この天空闘技場では果てしなく珍しい少女闘士に、是非とも皆様、今後もご期待しましょう!』

そんなアナウンスを聞きながら、レツは200階クラスに足を踏み入れる事となった

## No. 22 / ケイカイ?ニ?ケイカイ

200階に上がったのでレッツは改めて、選手登録を行った。

色々と記入事項を埋めて、最後に戦闘希望日の記入を行う。

\*\*\*

端的にココのクラスのルールでは、あらゆる武器の使用が認められ、一度戦闘したら90日間準備期間が与えられ、その間は好きに過ごしてもいい。準備期間内に闘ったらまた90日間準備期間が貰える。無論、毎日戦ってもいいし、準備期間ぎりぎりでも問題無い。但し、その条件を満たさないと、即失格である。

クリアするには10勝が必要である。これを満たす前に、4敗すると、これも失格である。

クリア後の特典として、フロアマスターへの挑戦権を獲得できる。

\*\*\*

以上の説明を聞いたレッツは、申し込み用紙と睨めっこしていると、背後に気配がしたのですぐに振り向いた。そこには隻腕の能面男のサダソ、義足覆面の独楽男のギド、車椅子に乗った髪型が特徴的なリールベルト、が居た。その三人組に、レッツは警戒し

つつ、話しかける。

「……………何か僕に用事ですか？」

「いいや、オレ達も申し込みしたいから、並んでるだけさ。」

それを聞いて、レッツは“下に居た人達と同様に”弱いものイジメを目論んでると看破する。実際に、戦闘日に迷ってはいるので、首を傾げる。

「……うん……………（この人達、馬鹿なの？ ……僕の後ろに居て、説明を聞いて、”挑戦権”である事を知ってるはずなのに、その程度の実力でフロアマスターつてのに成れると……………」

何気に酷いことを考えつつ、レッツはしばらく悩んでいると、それを見兼ねた受付が発言する。

「…もし、お決まりでないならば、後からでもよろしいですよ。」

「あの、カレンダーはありますか？」

「希望日指定を行うつもりでしたか。 ……どうぞ。」

レッツは差し出された、カレンダーを見て、めくったり戻したりと、3月と4月を往復する。行っているのは、日付の計算である。約束した9月まで、半年も無いのだ。

枠の三日分を、フルに記入して提出する。

「それでは、3月27日・4月3日・4月10日、の一週間ずつでよろしいですか？」

「はい。それで申込みます。」

「では、こちらの2239号室となります。」

「分かりました。」

受付の人から部屋の鍵を受け取り、レッツはその部屋を後にした。

~~~~~

レッツは鍵を貰うが、すぐには行かず、下に降りる。行き先は、現在180階のゴンとキルアの所——ではなく。

そのまま地上に降りて、裏路地に入り、「紅くなる灼熱／フレイムバースト」を発動させ、わざわざ、腰に出現する刀を、忍び刀のように、背中に吊るす。

能力と「堅」の維持は別であるので、その状態のまま「纏」をして、賭場に向かう。

「はい、テルさん。今回の配当金は、ゴン選手の勝利が、3000万の1.1倍。同じく3000万のキルア選手も1.1倍。4000万賭けました、レッツ選手が1.2倍のオッズです。全問正答で、合計、1億1400万ジエニーです。どうぞご確認ください。」

「ありがとー! (ハア。これで一々、変身しなくても済むね。)」

周囲のざわめきを余所に、受付嬢から1億5000万ジエニー用の自前で用意した

ジュラルミンケースを、声色を変えてレッツは、その中身を確かめてゆく。

このようにレッツはキルアとの話以降、ギャンブルスイツチに偽名で参加し、稼いでいた。もれなく勝ち確定みたいな、期間限定のボーナスである。……ちなみに150階ですら、1000万を超える程度しか貰えないので、合計しても、未だ三億を少し超えた程度しか稼げていない。

「それで、テルさん。 貴方も『天空闘技場』に選手登録した方が、金額の効率はいいいですよ?」

「何度でも言うけど、テルの戦いは、この刀の扱いしかできないんだよ。 …うん、確認したよー!」

「やはり、武器の使用禁止が大きいのですね…。 また、誘います。」

「じゃあーねー♪」

そう言い、レッツは離れてゆく。 ちなみにレッツは和風のキモノ。 このテル状態は、洋風のドレスであることも、一役買っている。

また、『テルと同じ陣営に賭ければ、必ず儲かる! まさに我々を照らす少女である!』というジンクスが流れていた。 50階は賭けれなかったが、ある種の大一番であった、120階のキルアVSレッツを的中した以降である。 やはり女というのは、こゝと【野蛮人の聖地】などと呼ばれる天空闘技場にて印象が弱く見える。 つまり大抵の

人はキルアに賭けて、レツの倍率は滅多に見られない、十倍以上の倍率であったので、100万賭けでも一気に膨れ上がった。

くくく

レツは軽快にスキップしながらも、お粗末な尾行を行う人が、居るのに気付いていた。この天空闘技場において、アホな一部の輩からは、テルはいいカモにしか見えないのだから。

「フン、フフン、フウーン☒（ハア、これでやつと」ゴミ掃除 から離れられる…。）」
初めは「どうしようか」とレツは、考えていたのだ。 あっさりとは撒く方法はどのようなのか。

だが、このタイプの人種は懲りないに決まっているのだ。 これからも付け狙われる可能性が高い、それはメンドくさいし、万が一、変身がバレても、ダメなので却下した。ほどほどに叩きのめす方法は？ だが、その手段はリスクが大きくなる可能性を孕む。

また、目撃者を生かしておくのは、その後、変に恨まれる可能性があるし、数を揃えて、より厄介というより、これもメンドくさくなるだけだろう。

「フフン♪」スイツ

そしてレツは、向かう方角を調整し、闘技場の隅の方の、人気がない場所に移動する。(どうせ、ラッキーとか、思ってるだろうな。獲物がわざわざ自分から、ちようどいい場所に移動しようとしてる、つていう不自然極まりない条件なのに。)

レツはそんなことを考えながら、表情を楽し気に曲がると、いよいよ後ろの追跡者が交渉というより、恐喝に入ろうとする。

「なあ、嬢ちゃん。俺にはもう後がないんだ。そのジユラルミンケース、譲ってくれねエか？」

後ろからドスのきいた声がかかり、レツは後ろを振り向く。男の手には、ナイフが握られていた。レツは、呆れた表情を浮かべた。

「ハア~~~~~……………」

「テメエ、何溜め息ついてんだ！　いいから早く寄越せ！」

焦ったように語気を荒らげて、ナイフを強調するようにチラつかせた。

(レオリオのナイフ捌きよりも、つたなく弱いのに……何をやってるんだか?)

レツは知らぬ事だったが、テルの賭けに乗っかり、儲かった人はそれなりに居り、正に救いの女神の如く、救済された人物は居るのだ。ならばこの人物は何か？

単純に調子に乗って、ギャンブルスイッチにのめり込んだ結果、『破産者』になるまで、

ギャンブル中毒を発症した者の末路である。

「……………」

「おい！近づくんじゃ」

レツは一気に駆け出し、下手に男が大声を出す前に、先手必勝で左手の「紅くなる灼熱／フレイムバースト」で喉を掴み、焼き潰した。男の表情が、驚愕のちに恐怖に染まっていく。

「!!!」

色々、考察はしたが、いっそのこと、尾けてるやつを殺すのが、良かったのだ。

その方法ならば、恨まれて、あとあと変な刺客を送り込まれることもないので、限りなくリスクは小さいのだ。

（ハア。 ……クロロ兄さんなら、こんな尾行に気づくかどうかの特訓もあったんだろ
うなー…。）

レツは内心で溜め息を付く。観察眼を養うのもウソではないし、初めから「尾行するぞ、注意しろ」などと、忠告しては意味がない、というか有り得ないシチュエーションだろう。クロロは、まさに計算し尽くされた教育プランを練っている。

「さてと、練習台、願います。」

レツはそう言い、刀を腰に戻した。それを隙と見て、男は無様に、様々な体液を漏

らしながら、逃げようとする。

「スウー…ハアツ！」

「~~~~!!」

レツが抜刀すると、男の右足が切断され、血が溢れる。男はそのまま、ほふく前進で、進もうと足掻く。このようなカモを使ってレツは、ノブナガ直伝の技、【居合】の特訓をしていた。

ノブナガが人体を斬ったときは、形を保ち続け、刀を鞘に戻すか、触れない限りずつとそのままであるのだ。

「…うん…また失敗しちゃった…。」

レツはそんな事を呟き、足を失って確実に訪れるであろう死に、怯えて、逃げたくても逃げる事なんて、できなくなった、そんな絶望に満ち溢れた顔を男は浮かべる。

「やっ」と。

「?!」

男は声になっていないが、レツが【癒しの碧玉／ホーリーヒーリング】で治療をする事に戸惑う。だが、その「助かるかも知れない」なんてのは糠喜びである。男の上半身の血に塗れない下着を脱がし、再度服を着せて、抜かりなくレツは、腕と左足と、最後に首の練習を、男が失血死する前に練習した。

レツはその服と、ケースを持ち、少しばかり離れる。

「さてと……」

レツはそう呟くと、ここ最近の一連の流れになった、工程をする。具体的には、服の襟と袖を縫い合わせ、袋を作り、ジユラルミンケースの中身をドサドサと入れる。

そのまま空になったケースは、二重の意味で、念入りに壊す。所詮、ジユラルミンケース自体の、値段は高くても、50階の報酬より、安いのだ。

その袋を持って、ずっとレツの名で、借りてるアパートの一室に放り込む。

「フウ………」。200階からは、賭けられるみたいだから、こんなことをするのも最後かー。」

そしてレツは自分の部屋になった2239号室に、憂いがなくなつて、軽快な足取りで戻っていった。

くくく

レツが部屋に戻ると、テレビに

『戦闘日決定!!』

225階闘技場にて

3月27日、午後3時スタート!!』

と書かれていた。

(そっかア。 やっぱり、あの連中かな? まあ、考えてもしょうがないよね。)

こんなことを考え、レツは就寝した。

ここからの四日間、ケースの大きさにより、疑いを持たれても、つまらないので、鞆に数百万ずつ、忍ばせて預金として増やした。

十十

そして3月24日。 ゴンとキルアが200階に上がる日である。

レツは少し考えた結果、今しがた、190階のゴンとキルアの勝利分も、200階闘士となり、レツとしても賭けれるようになったが、やはり微量でも大きく、レツとテルの二重賭けを行い、5000万ずつ賭けて、2000万をあぶく銭として、回収し、3億5000万を突破した。

(ハア、さっさと終わらないかなー……)

レツは二重登録の分の金を預金するために、巷の銀行と違い、一回の最大預金額は、1000万であるが、その時間を待っていた。 今頃はゴンとキルアが、登ってしまっているのに、レツは何処か呑気なのは、【200階選手は、全員、念能力者である】ことを知らない為である。

十十十

一方、未知のフロアに足を踏み入れる事になったゴンとキルア。そして説明をする、女の運営と、この場にはもう一人。ヒソカIIモロウが居た。

ヒソカは電脳ネットのちよつとした裏技の説明をしていた。

「まあ、いずれここに来るのは、予想できたがね ◆ そこで、この先輩として君達に忠告しよう ♥」

ゴンとキルアは、息を呑み、ヒソカは続ける。

「このフロアに足を踏み入れるのは、まだ早い ◆」ヒユ

ヒソカが軽く手を仰ぎ、その風を受ける、二人。

「この資格は、レッツが知ってる ◆ その資格を手に入れるのが、どのくらい早いかは君達次第 ◆」

キルアが吠えるが、にべもなくヒソカは取り合わない。ソレに警戒しつつも、無理に二人は進もうとし、ウイングに止められ、引き返した。

くくく

エレベーターが一階に着き、ドアが開くと、預金を終えたレッツが部屋に帰る為に、上

がろうと鉢合わせした。

「ん？　なんで、一階に降りてきてるの？　200階で登録した？」

「それがね、受付に行こうとしたら、ヒソカが居て、その圧迫感を突破する為に、本当の“念”をウイングさんが教えてくれるって。」

レッツは純粹に疑問に思い、質問すると、ゴンが答えてしまう。

「……………ヒソカ？……………!!」ゴッ！

「!!?」バツ

当然、レッツの怒りは吹き出し、一気に荒々しい「練」となる。その圧に、二人は一気に飛び退き、警戒する。

「レッツさん!!」

そこにウイングの一喝が入り、ハツとしたレッツは、「練」を解除する。

「……………落ち着きましたか？（…それにしても、この二人の天性の感性は、素晴らしいものがある…。）」

「……………うん。」

そうなったところで、二人は改めて近づく。そこにキルアが質問する。

「…今のが、念？」

「ええ、その通りです。」

「ゴメンね。もう憚ることもないね、僕の【練】の所為。」

それには、ウイングが答え、レッツも謝る。キルアはさらに発言を重ねる。

「：レッツはいいのかよ? …オレの家の件は…さ。」

「ああ、あの言葉はウソ。」

「ハアアアアアア!!?」

平然とレッツは答え、ゴンも目を丸くし、キルアの声が響く。

「なんで、そんなウソついたの?」

「あの言葉について、僕が半人前なのは本当。でも、それだけだと、教えないことについて、信じてくれないでしょ?」

「そんな事はない!」

「いや、あるだろ。オレもだけど、特に gon は納得しないね。」

今度はゴンが疑問を出し、レッツはそれにも答える。gon は勢いだけで発言をし、キルアの冷静なツツコミが冴え渡る。レッツとウイングは会話を続ける。

「でしょ? …でも、そっか…。ヒソカが登録できないように、邪魔してるのか…。」

「ということとは、」

「ええ、これから私が念を教えます。200階クラスにいるのは、全員が念能力者です

から。」

「あ、だから止めに行っただけですね。」

「その通りです。……レツさんはどうしますか？」

「うん……ちよつと気疲れしてるから、もう休むよ。」

「そうですか。……くれぐれも、注意してください。無理だけはしないように。」

「分かった、ありがとう。」

そして別れようとする、最後にゴンが話す。

「俺達も直ぐに行くよ。だから待ってて。」

「ゴンも気をつけてねー！ ついでにキルアもねー！」

そんな言葉を交わし、別れた。

くくく

レツはエレベーターに乗り、自分の部屋へと戻ろうとする。

「（……僕の部屋は、受付に行く道がT字路になる、その先なんだけど………何!?!）」

そんなことを考え、歩いているとレツの目の前に、ランプが一枚、眼前を過ぎる。

「ククツ ◆」

「……ヒソカッ……!!」ゴッ

レツはヒソカを見つけるなり、苛立たし気に睨みつける。

勿論、当のヒソカは、レッツから向けられる、ひりつくような殺気に、快感を覚え、恍惚とした表情を浮かべる。その距離を保ったまま、二人の間に濃密な殺意が渦巻いた状態のまま、ヒソカは話し始める。

「というか、キミはゴン達に、ついてなくていいのかい? …もしかしなくても、このクラスにいるのは、念能力者のみという事を、知らなかったのかな?」

「…今、僕も下で会ってきて、それを知った。 …不本意だけど、二人を止めてくれたことには感謝してる。」

「別にそれはいいさ♥」

そう感謝など、ヒソカには縁遠いものである。彼は徹頭徹尾、自分のために活動をしているだけなのだから。 そのあたりは、彼もやはりハンターなのである。

レッツからすれば、この場に会話するのも嫌だが、元々修行しに来ている身なのに、斬りかかっても意味がない、と判断する。 嫌な顔を浮かべたまま、レッツは話す。

「…もう行くよ。」

「アララ ◆ ギンが来るまでの間、ヒマ潰しになってよ ◆」

「やだよ。 誰が殺し合う仇に、付き合わなきゃならないといけないのさ。」

「それは残念 ◆ キミとの戦いは面白いのに ◆」

そんな会話をし、レッツはそのまま道を進んで、就寝しようと、部屋に戻った。

十十十

ゴンとキルアは、【纏】を覚え、ヒソカの殺気を突破する。 gon は「手間が省けた」と言い、ヒソカは「いい気になるなよ ♣ 念は奥が深い♦」といい、ヒソカは両人差し指を立てる。

すると指の間でオーラが蠢き、オーラで ♣ マークを作り、さらに鬪體マークへと変える。

そこからヒソカは、立ち上がって「このクラスで1勝出来たら相手になろう♥」と言って、ヒソカは背を向けて歩き出し、そのまま照明の少ない暗い廊下に消えていった。

それを見送った gon 達は登録をするために受付に向かう。 例の如く、レッツに絡んだ、

三人組が、 gon 達にも絡む。

「俺、いつでもOKです！」

そう言っつて受付に、申込用紙を提出した gon は、後ろに立っている面々の方を振り向いた。

「だつてさ。」

「元気がいいボウヤだな。」

サダソ、そしてリールベルトと、ギドもまた、 gon の後について申込用紙に記入をし

た。

キルアはその様子をなんとなく見ていたが、ふと口を開き、言った。

「……なあ。 レッつていう、オレ達を負かした、子供の選手は強いのか?」

「200階に上がってきてからは、まだ試合をしてないから、何とも言えないがね。 ただ、俺と三日後に初戦を行うよ。」

サダソは、いやらしげに口元に笑みを浮かべながら、そう発言し、ゴンとキルアは顔を見合わせる。そして受付の係から部屋の鍵を渡された二人は、受付を後にした。

十十

翌日の3月25日。

レッツは起床するなり、ゴンの対決のカードを見つける。 死ななければ、治療できるので、止める事もなく、ギドが勝つ方に賭けて、もれなく配当金を回収。

冷たいようだが、一度こうなってしまうたら、一緒にいたであろう、キルアも止められなかったという事だ。

ならば、自分が今更注意しても、引き下がらないと判断し、自分の目標達成を優先するくらいには、合理的に考える事にした。

十十

3月26日。

ゴンの部屋に、キルアとレッツは来ていた。

「キルア、症状は？」

「ああ、右腕、とう骨に尺骨が完全骨折。上腕骨亀裂に肋骨が三ヶ所、完全骨折に亀裂

骨折が12ヶ所。全治、四ヶ月だとき、このどアホ。」

「……ゴメン。」

そのゴンの言葉にしばらくキルアは説教をする。

「……この程度で済んだ事自体、幸運なんだぞ!!」

「まあまあ、でも神経が逝ってないなら、大丈夫だよ。じゃ始めるよ。」

「……そーいや、それも念か？」

「うん。そーだよ。」

そこにコンコンと、ドアのノックが鳴る。

レッツは【癒しの碧玉／ホーリーヒーリング】を行使中なので、キルアが「はいよー」と返事をし、ドアを開ける。そこにはウイングが居て、ツカツカと歩いて行く。

「……レッツさん？ それは回復系の【発】ですか？」

「……【発】を尋ねることは、タブーだと理解してます？」

傍までウイングは近づいて、単純さが出てしまった質問に、レッツは聞き返す。

「それは確かにそうですね。ですが、今は【発】を止めてください。」

「…分かった。」

レッツが治療を停止すると、ウイングはゴンに平手打ちをする。そのまま説教を行った。キルアが「あ、それ、オレが言つといた。」と発言し、ウイングは安堵する。

「ホントにごめんなさい」

「いーえ、許しません！ キルア君かレッツさん。ゴン君の完治はいつ頃になるか知ってますか？」

「医者はずヶ月って言ってたけど。」

「あと、もう話すけど、確かに僕の【発】は回復系です。だから1ヶ月位に短くなつてると思います。」

キルアはシレッと嘘を付き、レッツは神経質ゆえに引つかかるが、実際の途中治療の見込みを言う。それらにウイングは「分かりました」と言い、1ヶ月の念の勉強を禁じた。

つまり念で行っている、レッツの回復も含まれる。そして“誓いの糸”を結び、レッツは【擬】でそれを見ると、念を宿しているのを、確認できた。

スツ 《【神字】ですか?》

「《そうです》 ……キルア君、ちよつと」

「ん？」

「……ああ、レツさんも。無理にとは言いませんが……」

「いいですよ？」

しつかりとレツは、人差し指で【念文字】を書き、ウイングと意思疎通する。

キルアを呼ぶのはともかく、レツも呼んだほうが、一応は不自然では無い、と判断したのだ。

くくく

ゴンの部屋を出て、三人はそこから遠くない休憩スペースにやって来た。

ウイングが「君たちの本当の目的は何なのか」とキルアに問い、まずレツが「発」の反復練習です。」と、キルアも改めてそこで知る。ウイングは既に知っているので、ポーズとして、頷く。

次にキルアが答え出す。そしてゴンがギド戦のあの状況で、「スリルを楽しみ、命がけで修行をしていた」ということに話が流れると、ウイングの顔色が僅かに変わり始めた。そんな彼に気付いたキルアは、静かに言う。

「……もう、遅いよ。もう知っちゃったんだから、オレも、ゴンも。教えたこと後悔して

やめるんなら、他の誰かに教わるか自分で覚えるかするだけ。」

だから責任を感じることはない、とキルアは淡々と言った。

「オレの兄貴もヒソカもレッツも、念の使い手だったんだから、遅かれ早かれオレもゴンも念に辿り着くようになってた。」

「……まあ、このままだと、僕の『先生』を尾行してまで、習得しようとしたらどうね。……いくら、僕が秘密にしようとしても、限界があつたよ。」

レッツの言葉に、キルアとウイングは、その『先生』によつて、ゆつくりと念を起こしてもらつた、というオーソドックスな方法と推測し、それとは別に二人の言葉にウイングは、考え込むように無言になつた。

「…………で、どーすんの? ……俺らの『師匠』、降りんの?」

「途中で降りる気はありませんよ。むしろ伝えたいことが山ほどあります。」

ウイングは揺るぎないしつかりした声で言い、さらに続ける。

「ズシが宿で待ってます。君も一緒に修行するといいでしょう。」

「……いや、いや」

「え?」

キルアの返事に、レッツに対抗心を燃やしまくつて、特に120階での叫びは記憶に新しい。そのような場面からして、すぐ飛びついてくると思つていたウイングは、意外

そんな表情を浮かべた。

「ぬけがけみたいで、やだからさ。ゴンが約束守れたら一緒に始めるよ」

そう言って、くるりと背を向けて早足で歩き出したキルアに、

「キルア君、ゴン君に燃える方の”燃”の修行なら認めると言って下さい！」

ウイングは声を投げかけた。「点」を毎日行なうように」という彼の指示に、キルアは遠ざかりつつも、片手を上げることで返事をし、レッツも付いていくように、去っていった。

——そして翌日の3月27日。レッツの200階デビューの相手、サダソ戦に望んだ。

No. 23 / カダイ?ト?カダイ

『さあ 今日注目の一戦! 破竹の勢いで勝ち上がり、《蹴り上げ》でほとんどの選手を一撃で打ち上げ、なんと無敗で200階に上がるといふ快挙をなした程の達人! なお、その容姿も優れているため200階に上がるまでに固定ファンが付いている模様です!! そんな見た目に惑わされては痛い目にあうのは間違いなし!! 今、この舞台に舞い降りた少女、レッツ選手が早くも登場です!』

“レッツちゃくくくくん!!”

まだ選手紹介のアナウンスの途中だが、レッツに対して野郎どもの野太い応援が響く。『対するは、200階の隻腕の闘士、サダソ選手!! 戦績はここまで6戦して、5勝1敗とまずまずの戦績を残しています!! 一体この二人は、どんな戦いを見せてくれるのかアア!!』

巨大な歓声に包まれる中、その歓声に混じって舞台を見つめる人間が3人。キルアはレッツの観戦チケットを買い、ゴンと一緒に観戦しようとしたが、念の修行が禁止した旨をウイングが伝え、ゴンは観戦できなかつた。なので、キルアはウイング、ズシと

観戦することなり、転売によって、金をファイにすることは無かった。

「くつそ、レッツの対戦チケット20万もしたぜ。　チョコロボ君が、1333個も買えるんだぞ、ちくしょー」

「キルアさん…………お菓子換算って、金銭感覚がおかしいっすよ…………」

「あはは。まあ、この200階に、というより天空闘技場に女の子が上がって来たのは、途轍もなく珍しい事ですからね。　観客も舞い上がっているでしょう。　先ほどの声援の通り、噂ではファンクラブもあるとか。　もう一人、選手登録をしない刀を背負った少女の、テルさんと人気を二分しているとも。」

正体はどちらもレッツだというのに、なんとも馬鹿な野郎共の派閥争いである。

「このロリコン共……………っていうか、もう一人、俺らと同じような奴がいんのか。」

「ですが、金稼ぎのみが目的のようで、刀を扱う為、選手登録をせず神出鬼没なんだとか。」

キルアは悪態を吐きかけ、続いた情報に、「ゴンが知ったら、探そうとしそう」などと考える。

伊達に甘いセリフを吐き、無自覚で口説くゴンではないのだ。　キルアはハンター飛行船の無自覚なレッツしか知らない。　もし、この場にレオリオかクラピカが居たら、毒牙にかからないように祈っただろう。

ウイングは情報を足し、「残念ながら、君たちと戦う事はないようですね。」と話す。次にズシが質問する。

「珍しいって事は、前にもこういう事はあったんですか?」

「あはは、どうだろうね。もしかしたら数十年ほど前ならあったかもしれないけど……」

微妙にウイングの表情が苦笑気味だが、ズシは疑問符を浮かべるとどめるのだ。そして今回最も気になる質問を、キルアはウイングに尋ねる。

「なあ、ウイングさん。 レツ、あいつに勝てると思うか?」

「ふむ、念能力者同士の戦いは、何が起こるか分からないのが常。 しかし、今までレツ

さんは、蹴り一つで、君以外の相手を仕留めてきただけに、今回のサダソとは相性が悪いかもしいれませんね。」

「アイツの【見えない左腕】ってやつか?」

「ええ。それに対する対策を、レツさんがどうするのか、見ものですね。」

サダソは200階でも通算6度の戦いをして、ある程度の戦闘スタイルは知れ渡っている。その最もたるのが、サダソの念能力である【見えない左腕】と呼ばれる力。掴まれればおしまいと呼ばれるこの能力。

なお、実戦において相手の能力を、あらかじめ知っているなど本来ありえず、レツは

サダソに関しては、全く欠片も情報を知ろうとしなかった。観察眼を養うなら、これもするのでは？と、独自の縛りである。

二人は内訳が異なる、笑みを浮かべ、向かい合っていた。

サダソの方は、卑しいと表現するしかないような、笑みを浮かべ、レッツは初戦にどこかワクワクしている、高揚感の笑みである。

「くくく。安心しなよ。ゴンちゃんと同じように、殺さないようにしてあげるからね。」

「よろしくー！」

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!」

審判が開始を告げ、手を上げると、同時にサダソの靡いていた左袖が、不自然に蠢き出した。

レッツは早速、「凝」をして注視すると、サダソの無いはずの左袖からは、オーラでできた腕がうねうねと、動いているのを、確認し、その場から後ろへと下がる。

直後、床に何かが叩きつけられたような音がして亀裂が入った。

ズガン!! 「へえ……」

(変化系の使い手みたい。だとするなら、具現化で特殊付与の可能性がある。……あの左腕には絶対に触れられないね。)

サダソは笑みを浮かべたまま、レツに体を向け、レツは思考を続けていた。

しばらく、サダソの一方的な攻撃と、レツは具現化付与の、観察と分析をする為に、回避し続けるという戦闘が繰り返される。

「ウイングさん。あれどうなってるの?」

「あれは自分のオーラを圧縮し手の形に変化させているのですね。それが見えない左腕の正体。自由自在に動くあの腕は少々厄介ですね。捕まるのはお勧めしませんね。」

「師範代にはあれが見えるっすか?」

ウイングも、「凝」を使い観戦していた。念と念の戦いは、「凝」をしつつ相手の念の動きを捉える事を最善として戦う。見えない攻撃であるからこそ脅威となりえるが、それが見える攻撃となってしまうえば、脅威は半減する。

「二人にも、修行すればすぐにできるようになりますよ。」

「どうしたんだい? 避けるだけじゃ、勝てないよ!」

(…そんな言葉を言うって事は、やっぱり触れて欲しいのかな?)

「師範代、もしかして本のページを、壁に突き刺したアレっすか?」

「その通り。他にもギドが使ったような、独楽の弾く力などもですな。」

その解説に、キルアは武者震いをする。

念の底知れなさと奥深さを、なんとなくだが、理解したのだ。

だが、レッツはチマチマとした戦いをするので、しばし愚痴が溢れる。

「ウイングさん!どうなってるんだよ! 正直サダソの念が見えねーから試合内容が分からん!」

「そうっすよ! レッツさんが見えない何かを躲して、石を投げてる事しか分からないっす!」

「せいぜいサダソの服の左裾の動き具合と、レッツの避け方でどういう軌道の攻撃しているか予測するくらいしかできねーよ!」

「すいませんキルアさん!自分そこまで分からないっす!」

流石と言うべきか、元暗殺者の超短期念取得者のキルア。見えない攻撃だろうとも、相手の動きと対戦者の動きから予測する技術は驚嘆すべきである。隣で観戦しているウイングも、素直に感心する程だった。

(ふむ、サダソの戦いは初めて見ましたが、オーラの操作技術は近距離はともかく、手の届く範囲をオーバーしたらとたんに大雑把になる。今まで新人潰しだけでしたので、

その辺りの技術の修練が足りないのでしょうか。あれなら、レッさんが全力を出さずに、直ぐに終わりそう……なのですが、少々相手を警戒しすぎてる節がありますね。）

レッは、しばらく同じ工程をし、どうやらあの能力は、「左腕限定」だとあたりを付けた。

ここで、レッは駆け出し、サダソから見て右側に回り、武器がない側面からの攻撃を考える。

近似してるものとして、盾持ちの剣士に対するような、戦い方である。

『ここで、レッ選手、いったー！！』

（来たー！）

このセリフが誰のものか分からないが、誰もが勝負が動きだした事に少なからず反応した。それは観客席にいた者達もそうだが、対戦者であるサダソもそうだった。

（チマチマとした戦いに、痺れを切らせてようやく来たか！ 攻撃をする瞬間、確実にこの【見えない左腕】で仕留める！）

動きは素早く、念の腕では本物とまた感覚が違うので、捉えきれない。

レッの身体能力は確実にサダソよりも早い。ならばどうするか？ 攻めてきた相

手に、自由自在に動き、尚且つ近距離が最も動かしやすい【見えない左腕】で持って、カ

ウンターの容量で、捉える。

(今までの5勝と同じく、この勝負も、いただく!)

だが、サダソは念の戦闘にあってはならない、思考停止のような状態だった。今までレッツは蹴り上げて、対戦相手を飛ばしてきた。故に最も警戒すべき態勢は分かっている。……つもりだったのだ。

(来た!ここだ!) グオン! ガツ ズルツ!

(さらに……!) ドゴオ!!

「(……なに?) ごおっ!」ズツ ガア ズガアン!! モクモク:

『なんとー! レッ選手、足払いを仕掛けたー! そして、そのまま場外へ蹴り飛ばしたー! っていうか生きてる?』

「クリティカル! アーンド、ダウン!! 3ポイント!! レッ!!」

サダソはくの字に体を曲げて呻き、二回床に触れながらも、壁に追突した。そこに審判が行き、「やれるか?」の質問に、首肯を返し、サダソはリングに戻った。

サダソは口から流れた血を拭いながらも、レッツを睨みつける。

「やってくれたね……!」

「……何か、隠し玉はないのかな?」

「……いいだろう。後悔しなよオ!!」ドガアン!!

サダソの左袖からオーラが噴き出し、巨大な左手に指は鉤爪のように鋭くなっている。

しかし、倒すことに力を入れたからか、「隠」を使えていない。

再び、蛇のように左腕がうねり、レッツに襲い掛かると、轟音が響き、リングの床が砕ける。

だが、巨大になるということは、その分大ぶりになる、ということである。

(…フェイ兄さんみたいな、ダメージによって、威力増大…っほいけど、逆に回避しやすくなってるのは……)

同じように、レッツは近づき足に「流」で、より高速に近づく。しばらくは、「纏」に目に「凝」をして、オーラを割っていたのだが、その必要がなくなったのである。

当たり前の事なのだが、威力を出すには単純な力と、速度が必要である。

「なっ!?!」

サダソが目を見開いて驚き、再度リング外に吹き飛ばされる。

「クリティカル! アーンド、ダウン!! プラス、ポイント!! 6-0!!」

『正に素早く、そして鋭い攻撃ー!! 一気に6-0の大差ー!! サダソ選手まだやれるかあ!?!』

(…ちよつと、いい練習台かも。 …TKO狙うかな?)

レッツはあまりに余裕であり、どこか拍子抜けしていた。この後のゴンとキルアの教材として考えるくらいには。サダソは胸を右手で押さえ、ふらつきながら立ち上がる。荒く息を吐き、汗も大量に流れている。

「ぐっ……!!」

「やれるか?」

「ああ……!」

ゆっくりと、だが確実にリングに戻ろうとする。そしてしばらくして戻る。

「これ以上、攻撃するのも、気が引けるから、ギブアップしてくれない?」

「っ! ふざけるなああ!!」

レッツは善意の忠告だったのだが、それを挑発と思ったサダソは、「発」を発動する。

「ハア……」

「なっ!? つ!? なにい!?」ズギヤ!!

レッツは再度、溜め息を付くと、サダソが再び目を見開く。一気に背中側に回り、首裏に【凝】の手刀をいれ、これまでのダメージもあり、サダソは気絶した。

「サダソ選手、失神KO!! 勝者、レッツ!!」

『圧勝です!! レツ選手の無敗伝説は全く止まる気配がありません!! これは今後も見逃せない!!』

「ウオオオオオオオオオオ！ レツちやーん!!」

レツは拍子抜けた顔をして、リングを去る。まもなく、野太い声援が響き、それを予測した観客席の三人は、耳を塞いでいた。

(レツはサダツの治療などしない。身内には甘く、そうでもない他人はどうでもいい、という考え方は、やはり蜘蛛の《子兔》であるのだ。)

++++

レツは試合を終えて、部屋に戻ろうとしていた。

「——レツ！」

だがエレベーターの扉が開いたその時、真つ正面に現れたのは、キルアだった。

「あ、キルア。……どしたの?」

レツは朗らかにしたが、しかしそれに反して、キルアの様子は険しかった、ので訪ねてみた。

それにキルアは歩きながら話すので、会話する為にもレツも歩いていった。

「お前、応用技なんてのも使えたんだな。」

「……ああ、うん。使えるよ。」

「……レツは何時、念について知ったんだ?」

「二年前になるかな。」

「ここで、『先生』と合流するって言ってたよな?」

「? うん。」

しばらく雑談しながら歩いていたら、いつの間にかゴンの部屋に来ていた。

「あ! レツ、大丈夫? 怪我してない?」

「うん。大丈夫。」

「そっか! 良かった!」

「試合はレツの勝ちだったんだけど、それでさ、今は言えねーけど、ゴン。ウイングじゃなくてレツの『先生』に教わるってのは——」

「駄目だよキルア。どうせそんなこと言って、ウイングさんとの約束をなかつたことにするつもりでしょ?」

「ちえつ。お堅い奴だなあ。」

「それに、なにかしらお金あたりを要求されるかもねー。」

「そこは心配ねーよ。」

「まあ、そうだけどさ。」

ゴンもレツの練度が分からなかつたので、心配していたのだ。レツが返事をしてると、キルアが（ゴンに対する抜けがけが嫌なのであつて、）ズルを打診する為に、連れて来ていたのだ。そんなちよつとした会話があつた。

くく

そして、レツはテルモードになって、配当金回収に来ていた。

「はい、テルさん。 今回の配当金は、サダソ選手とレツ選手の戦いで、レツ選手の勝利。 掛け金は5000万で、2.5倍になり、1億2500万でした。 どうぞご確認ください。」

「ありがとー!」

配当金の倍率が良いのは、そこそこの情報通なら知っている、今回戦ったサダソは、別名「新人ハンター」と呼ばれている。 つまりデビュー戦であったレツの勝ちを予想した者は多くなかった。

「テルさん。 やはりの中率100%を誇っているんですね。 改めて、貴方も『天空闘技場』に選手登録した方が、金額の効率はいいのですよ?」

「うくん……ごめんなさい。 テルはー」

そこに返事を出そうとすると、訝しげな声がかかる。

「……何をやてるね、オマエ……」

「あー! フェイ兄ちゃん!! ……っていうことで、4月にはココを離れるから、もうダメなんだよねー……」

「ノオオオオオオオー!!」 嘘だ…嘘だアアア!!」

レツを見つけ、声をかけたのは、クロロに派遣されたレツの師匠の一人、フェイタンである。声色を変えたまま、テルとして返事を出す。その声音に、奇々怪々としたフェイタンには写らず、さらに眉を顰める。

「…何をやたね、オマエ…」

「そうですか…。どうかお元気で。」

「うん♪」

だが、二人はファン、特に過激派の考えを甘く見ていた。

天空闘技場はその性質上、熱血漢や喧嘩っ早い者が、集まりやすいと言える。

「行かないでくれー!!」 あの野郎を仕留めちまえ!!」 粛清だー!!」

「うわわわわ!!」 タタタタ

「……?」 ヒュン ベキイ!

「ぶべえ!!」

テルにすがりつこうとする者。またフェイタンを撃破すれば、しばらくは居てくれるなどと考えたり、フェイタンの格好も相まって、「悪いお兄ちゃん（実際に、悪人ではあるが。）から、テルちゃんを救い出してみせる!」などと、間違ったヒロイズムに酔い、フェイタンに攻撃を仕掛ける者などが出た。当然、迎撃しながらフェイタンは、よく

分らないまま、この場から逃げたレッツを追いかけていった。

くくく

しばらく遁走をして。不機嫌オーラ丸出しで、レッツを睨みつけつつ、フェイタンは尋ねる。

「……いたい何をやたね、オマエ……」

「だってフェイ兄さん」

「ワタシに口答えするとは良い度胸ね。剥ぐよ」

剥ぐ場所を限定されないのが余計に怖い。フェイタンの殺気、もとい不機嫌オーラが更に増幅し、レッツは小さく縮こまる。

勿論、フェイタンの実力なら、あの程度の連中など苦にはならないのだが、流石に数が多いのと、一人一人は弱く、フェイタンの戦闘意欲を満たせない。その癖、絶え間なしばしばある、嫌がらせじみた攻撃と思うのだ。

では拷問などのサディスティックな趣味は、とも思ったが、それも数の多さでできなかつた為である。

「さあ、答えるね。さもないと、始めは指からね。軽く爪はぐ」

「……えっと、じゃあ〜」

レッツはクロロ口から出された課題を説明してゆく。幾分かマシになったが、根本的な

疑問は解決していない。だが、それはレッツが隠す意味がなく、それをフェイタンも理解しており「知らないのだろう」と判断し、それ以上の詰問は無かった。

「…それで、どうしてああなる…? ……それにしても、逃げるとか、信じられない行動ね。」

「うっ……」

続けて言われた言葉に、流星に逃げる必要は無かった自覚があったので、レッツは青ざめ、ばつが悪そうにさつと目を逸らした。しかしレッツが、目をそらしたせいで、フェイタンの殺気は更に大きくなる。

「当初のプラン五割増しで、鍛え直してやるね。表出る良い。」

「いや——!」

フェイタンは、猫のように脱力して、無駄かつささやかな抵抗を示す、レッツの首根っこを掴んで引きずって行った。地獄1stシーズンの開始である。

くくく

引きずられて、少しばかり広い荒野。レッツは、サファイアの指輪を付けて、新能力の【蒼流星の指揮／ブルーメテオタクト】を試しに見ることにした。

「来るといいね、レッツ。」

「……………!!」

細剣を握りしめ、まっすぐ突っ込んでくるレツ。

「バカか、正直に正面から敵に向かってくることはないね。」ハア

フェイタンはため息を吐きながら、それを手で振り払う。

「まるでお遊戯ね」

「……………」

「この半年で考え、作り上げたにしてはいい能力ね。しかし……それだけね。一撃一撃にたいした威力が無い。オマエのそれは、ただただ速い力、使えているだけ。使い

こなせてないね。」

「そ、それは……………」

「能力が有ても、レツの体はそのスピードに慣れていない……まあ、徹底的に扱いてやるね。楽に過ごせると思わないよ……」

その結果は酷評であつたが、それも仕方ない。ようやくスタートラインに立つたような物だからだ。フェイタンはゆったりした造りの上着を脱いで軽装になると、【絶】状態を保つように指示した。

「今のレツの弱点は、防御の技術が無さすぎるね。だから基本的に全身【絶】の通常組み手。けど要所所で【硬】の打撃混ぜていくから、攻防力も見極めてガードするよ。」
レツは、その言葉に顔を引きつらせる。僅かでもオーラ配分を少なく見積もつてし

まったら重症、それ以前にオーラ込みの攻撃をガード出来なかつたら、重症確定の組み手のどこが優しいのだろうか。

レツが異議のある顔をしていると、フェイタンは珍しく、とても機嫌良さそうにこりと微笑んで、言った。

「重症を負っても、続きができるのがオマエのいいところよ。」

そう、レツは「癒しの碧玉／ホーリーヒーリング」を所有しており、そう簡単には病院送りの怪我も自前で完治する。一つの指輪は、24時間で再生する。ストックは三個あるので、一つ使い切ったところで、終わらない。そしてサドっ気全開のフェイタンの笑みは、ひたすら薄ら寒いだけだ。

その目は確かに心から笑っているが、それは獲物を前にした捕食者のそれであり、吊り上がった唇の隙間からちらりと舌が覗いた。フェイタンがここまで積極的なのは、ヒソカが早く死んでくれることを望むからである。一つ目は、このような速さを扱う為の訓練。

くく

フェイタンは小柄な容貌もあつて一目ではそうと見えないが、強化系のフィックスと手合わせをして同等の結果を出せる、かなりの肉体派である。そしてその強さの秘訣

は、類い稀なる格闘テクニクによるものだ。さらに、いつも手にしている仕込み傘の剣に始まり、あらゆる暗器類の扱いにも精通している。

「…ツ！」

「甘い、ね!!!」ドッ

バアアア「がはあ！」

たとえば、フェイタンから見て完成度が遥かに低い、レツのナイフ術を見切り、《鶺鴒入林》を叩き込み、吹っ飛ばすとか。

そして怪我をしても、オーラと緑の指輪さえ、あればたちまち回復し、指輪の数を見越して、フェイタンはほとんど容赦というものが無い。刺す、殴り潰す、骨を折るなどは既にデフォルト。——フェイタンは異様に機嫌が良かった。

「もう治たか。いいことね、次々いくよ」

薄ら寒い笑顔でそう言い、嬉々としてどこから出したものやら拷問具を取り出ししている。

さすがのレツも顔を引きつらせて、必死にならざるを得なかった。二つ目は暗器術。

くくく

今日も今日とて、「蒼流星の指揮／ブルーメテオタクト」の訓練中。どこからか聞きつけたのか、男たちが徒党を組んで、数が居れば有効と思ったのか、襲撃をしてきた。

「おい！ その女の子を解放しろ！」

「そんな小さい子を痛めつけるなんて、卑怯者め！」

特訓内容は、もはや拷問の域に到達した内容と、テルに今回は水色の髪をしたレッツ。

ええ、完全にロリコンに対する、闇の幹旋業者にしか見えないフェイタン。

今はその誘拐に抗おうとする、青い少女の奮闘。それを助けに来た、という見方になる。

レッツは一つ気になっていた技のことがあり、これを利用することにした。

「あ、ありがと……」

「良かった、……こちらで保護する。」キツ

近付いて来るフェイタンに怯え、レッツはまるでレイプ魔にでも襲われているかのような反応を見せる。演技なのか真なのかは、彼女がこれまで受けた仕打ちを思えば、それも仕方の無いことではあるが……

フェイタンは訝しげな顔になり、レッツはその人達の背中から、「念文字」を使い「あの真つ直ぐに向かう技の実演をして欲しい。」と書く。それにフェイタンは投げやりな

がらも応じた。

「ひう……………」

「ささと来るね。」

「おい！ 怯えてるじゃないか…！ それ以上は武力を行使する！」

「…………お前たちじゃ、ワタシを止める事は出来ないね。」

「ほぎけエエー…!!」

そして大勢の攻撃を、フエイタンはあつさり駆け抜けては、首と胴体を切り離していく。

ハア「アホなことやらせないでほしいね。」

「…今の技はどうやってるの？」

「…………これはただの突き技。 純粹に速度だして突進する。」

「僕が一番最初の状態みたいなの？ でも、それは出来ない。」

「そうね、普通は直線的な攻撃は、カウンターを狙いやすい…こちらのメリットは直線と短い分、速いだけね。 …そうね、これも習得してもらおうよ。」

ということ、三つ目は純粹な最速、カウンターを見切り、最小限の動きで回避する術。

レツ本人は気づいていないが、これにより生存本能の速度のセーブの上限が上がっ

た。 見ることもできない速度を、無意識でも出せる訳が無いのだ。

くくく

余談だが、格闘のメツカ天空闘技場に師匠と弟子で足を運ぶのはさほど珍しいことではないが、師匠が選手登録をしていない場合、その個室はもちろん用意されない。同伴者は選手としての弟子の部屋に共に寝泊まりするか、もしくは天空闘技場の外に宿を取るかのどちらかだ。 先の襲撃で、フェイタンは後者であることを強制された。

ちなみにしばらくは行方不明としか、表現が仕様がないう状態だったが、キルアから、生存報告を尋ねられ、レツはきちんと連絡した。

：兄のシゴキに耐え抜いた者同士なのか、憐憫と同情が籠っているのが、よく伝わるメールであつたとか。

十十十

そして、4月2日。

ようやく解放されたレツは、部屋に戻つた。 レツは心身共にボロボロであり、今日ほど動きたくない気分であつた。 とりあえず、【絶】をしながら体を休めることにしたが、どんな修行だつたのかと、久しぶりにレツに会えるのも会って、ゴンとキルアも部屋に来ていた。

「…なんかレツ、やつれてない？」

「……ああ、ゴン。生きて会えて嬉しいよ……？」

「ねえ、お前、誰？ オレの知ってるレツではない気がする。」

キルアの言うことも、もつともであろう。精根尽き果てているレツは、完全に人が変わっている風というか、目が虚ろであった。決して、ハイライトオフ的な病みでは無い。

「……そんなんで明日の試合かよ」

「準備は大丈夫？」

「いつでも戦えるようにしとくのが普通ってさ。まア負ける気はしないけど。」

レツは部屋に備え付けられていた、飲み物を飲みながら、余裕全開で言う。

ゴンとキルアは、先の試合から、そう簡単にレツが負けるとも思っていないが、あまりにも油断しているように見えて不安になる。

「……それにゴンにも集つたのはムカついてるんだ。面白いものをみせてやれると思うよ。」

「え？ これは俺の所為なんだからー」

「うん、これは僕の自己満足だから気にすることはないよ。」

「……………」

レッズの小悪魔っぽい悪戯な笑みに、二人は何をするつもりなのか、怖いものと興味半分で二人は黙った。

＋＋＋

4月3日。

『さあ 今日注目の一戦！ 200階では二戦目の試合となるレッズ選手！ 早くも再び、登場です！ なおも無敗伝説を守るのかー?!』

“レッズちゃ~~~~ん!!”

『対するギド選手は闘技場ですでに6戦。ベテランと呼べますが戦績は十日前にゴン選手に勝ち、合計6戦して、5勝1敗という記録を残しています!! 一体この二人は、どんな戦いを見せてくれるのかアア!』

巨大な歓声に包まれる中、その歓声に混じって舞台を見つめる人間が3人。言わずもがな、キルア・ズシ・ウイングである。

「くっそ、レッズの対戦チケット、30万台に値上がってやがる。チョコロボ君が、2000個も買えるんだぞ、ちくしょー」

「それよりも始まるっすよ。今の自分達との差が良く分かると思うっす。」
「そうですね。先日、ゴンくと戦いましたので、よく違いが分かると思いますよ。」

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!」

戦いが始まり、ギドが独楽を杖の上に並べ、臨戦態勢になったのだ。

『出ました!! ギド選手の舞闘独楽!! 独楽を自在に操り、敵を攻撃するという、彼独特のスタイルです! レツ選手はどのように攻略するのか!』

「行くぞ!」【戦闘円舞曲／戦いのワルツ】!!」

ギドから独楽が打ち出され、技を繰り出す。そのかけ声とともに、凄まじい回転がかかった十個の独楽が、舞台上に広がる。

「はは、どうした!?! 怖くて動けんか!?!」ガッン!

突っ立ったままじっと動かないレツに、ギドが高笑いする。そしてその時、独楽と独楽がぶつかり、一直線にレツの正面に向かって行く。

「バカ、避けっ……!」

「マズいつす……!」

キルアとズシはが思わず席を立つ。しかしレッツは動こうというモーションを全く見せなかった。「ゴンの二の舞になる」と二人は冷や汗を浮き上がらせた。だが二人の予想に反して、レッツは「練」で防ぐ、もしくは回避すると思っていたが、落ち着いてサファイアの指輪を付けた。

「蒼流星の指揮／ブルームエテオタクト」!

「何?!」

『あーつと……戦つてる最中ですがレッツ選手の姿が……青い髪と水色のドレスに変わったアアアア! 正に、劇的な技術に、劇的な舞台の、劇的な演出だアアアア!』

全ての独楽を右手に出現した細剣で弾き落とし、いなし、軌道を変える。たまにレッツ自身にあたりそうな独楽は、「逸」をレベル差でもって、実現し逸れていく。ギドがその光景に「信じられない」というような、ひっくり返った声を出す。アナウンスもその演出に、観客の声も最高潮になる。

観戦していた念を深くは知らない二人は、ギドと同じような声に感想を抱く。

「…え？　今、武器が急に現れなかったすか？」

「あれは、オレも知らない新しい武器だな。……それはそうとして、なんで独楽がことごとくレッツから逸れていくんだ!？」

「新しい武器が出るのは、【発】の一種。　独楽が逸れるのは高等応用技の一つですわ…。」

ウイングも、目を丸くしていた。　おそらく、レッツの念技術の習得率は世界最年少クラスだろう。　ゴンとキルアの天才ぶりにも散々度肝を抜かれてきたが「こちらも負けずとも劣らずだ」と彼は世界の広さを実感していた。

「くっ………！　……ええい、これならどうだア!？」

ギドが叫び、更に独楽を増やす。　数が増えたことでぶつかり合う回数も増えた独楽は、数個がいっぺんにレッツ目がけて飛んでゆく。　だがやはりレッツは全く動じない。

——それから、およそ5分。

「まさか、あれで終わりなのー?」

「ふ、ふざけやがって……！　ならば、これでどうだアッ!」ギュアン!

レッツはまたしても拍子抜けした言葉を述べる。

打開策を出そうと、風を切る音を立てて、ギド自身が大きな独楽のように回転を始め

る。

『おお——ツとギド選手、出ました必殺奥義・【竜巻独楽】！ 攻防一体のこの技に攻撃は効きませんつ、あらゆる攻撃はその回転に弾き飛ばされること確実、今までも幾人もの手手がその犠牲になってきましたっ！』

「どうした!?」【戦闘円舞曲／戦いのワルツ】はまだ続いているぞ！ 防戦一方ではどうにもならんぞ！ さらに行くぞ!! 【散弾独楽哀歌／シヨットガンブルース】!!! これならば、対処しきれまい!!」

ギユンギユンと回り続けるギドは、ただいなし続けるだけのレッツにさらに追撃を加えんと、技の重ねがけをする。

「……なら、こうだよー」ガキン ガン ギン

『なーんと、レッツ選手、独楽の動きを変えて、全て相殺した——ッ!』

次にレッツは、【戦闘円舞曲／戦いのワルツ】の独楽は先に操作されているが、【散弾独楽哀歌／シヨットガンブルース】の方の独楽は、動きが止まってしまった。それに細剣の剣先を突き刺し、それをギドに向けた。

「馬鹿めつ、どんな攻撃をしかけようとこの回転で跳ね返して——」

レッツはふわりと右手を振りかざす。

『なーんんと!! レッ選手、ギド選手の【散弾独楽哀歌／ショットガンブルース】を繰り出したー!! これはどういふことだー!!?』

「はー!」

「どうなってるすか!」

ウイングは口角を上げて微笑み、このような常識が通用しないレッズの演出に、弟子たちがあんぐんと唸っている様子を、気づかれないように少し楽し気に見つめる。戦闘中なら隙だらけになりそうな行為だが、今は修行中。念能力者同士の闘いは、考えながら行う事も必須。いわゆる戦闘考察力。それに観察力や洞察力。それが相手の能力を見抜く力になる。無論念に限らず、相手の戦い方を見抜く事にも役立つだろう。

(さて、どういふ結論になりますかね……)

ウイングは、先の未来を楽しみに思い、このトリックはここでは解説しないことを選んだ。

「なっ、何!」

ギドも度肝を抜かれる現象であった。レッズはわざと、似てるように【逸】の逸れる方法をとった。そんな彼女に【散弾独楽哀歌／ショットガンブルース】を繰り出すと

いうことは、自分の【竜巻独楽】とぶつかれば数発は弾けても、同じく十個以上となると、怪しいというのを認める事になるのだ。念は思い込みが、完全ではないが、現実になってしまふ。特にこのレベルなら尚更。そして彼の本来の系統は、強化系。

【竜巻独楽】は操作も要求されるが、対して【散弾独楽哀歌／シヨットガンブルース】は直接相手に独楽を投げつけているため、放出系の威力が高まるのである。元々の練度が違うのもあって、そのまま偽りの連撃を食らってしまう。

ガツ キイン バキツ「わ、わっ、ぐわっ」ドシャアツ

「面白かったよ。」バキイン

ギドの一本足の義足を持つ身体が床に倒れ込む。素早くレッツが駆け寄って見下ろす形で、細剣を突き下ろす。

『な、なんとお!? レツ選手! ギド選手の鉄の義足を打ち砕いたあああつ!! これもどんな威力が込められているんだあの剣にはアアアツ!! これは勝負あったあ! 義足が壊されては最早ギド選手に対抗する術ないでしょう!! なおも無敗神話は続く

!!!

「——ギド選手、試合続行不可能! 勝者! レツ選手!」

「アイぞー、レッツちゃんー!」 変身、可愛かったぞー!」

レッツは試合が終わり、さっさと部屋に戻り休息を取ろうと、エレベーターに乗り込んだ。
だ。

「——レッツ！」

だがエレベーターの扉が開き降りると、真つ正面に現れたのは、白い銀髪を持つ少年だった。

「あ、キルア。……どしたの？」

レッツは、それなりに朗らかにしたつもりだったが、しかしそれに反して、キルアの表情は険しかった。

「お前、アレどーやったんだよ」

「あれって？」

「……今日の試合だよ！」

「ああ、面白かったでしょ？」

急いだ様子で、キルアが険しい声を飛ばす。興奮しているらしく、妙なテンションのまま喋る。

「なあ、あれ念にしたって全然、オカシイ気がするぜ！ あんな技の応用はともかく、コピーなんて！」

うまく騙せてることに、レツは心の中で笑みを浮かべながら、返事をする。

キルアからすれば、レツには様々な武器があるのが分かっているが、もし敵対する上で恐ろしいのが、相手の能力を即座に自身のものにする常軌を逸した念能力。

手の内を明かせば明かすほどに、不利になるその理不尽さ。プライドがあるがゆえに、いつかはレツに勝てる事を目標にしているからこそ、勝てる未来への展望が、全くもって広がらない。

「昨日の様子といい、お前どんな修行をしてんだよ?」

「(どんな修行ときたか)……僕が受けている修行を聞いて、休息後に自分達にも適用しようと思っっているだろうけど、今のキルア達では無理だよ。」

「何だよ! 修行を受けている立場のレツが判断することじゃないだろ!」

「でも基礎がないとダメだっていつてたし。ねエ『先生?』」

レツは、柱の影によく知る人物の気配があるのに、うつすらとだが感じており話しかける。

そこから姿を出すのは、勿論シャルナークが迎えに来ていた。フェイタンは表立って動けない、というより純粋に一々、はっ倒すのがメンドくさいので、この階には来ない。

「うん! ちゃんと基礎を怠っていないみたいだね。」

「それは当然だよ。」

「で、話を聞いていたけど、同意かな。これからも行っている修行は、まだまだと見えるね。」

「な!?!」

レツに食いかかるキルアに対して、シャルナークも何の義理立てもないが、修行の続きをするには、さつさと離れるのが良く、そのためには同意する旨を伝え、それに納得してもらう方が良いと判断した。

だがそれは仕方ないことである。今のキルアとゴンはまだ基礎を固めている段階であり、点を日々こなし、よりオーラを増大・安定させなければ、レツがしている修行を受けてもあまり効果は見込めないだろう。

「僕も始めの内は修行の大半が点と【纏】だったよ。基礎をしつかりと築いていないと後の修行に響く事になるんじゃないかな?」

「……分かったよ。しばらくは点を続けるよ。ただし! 修行が解禁になったら、絶対に修行内容を教えてもらおうからな?」

「え、それは無理。」

「何でだよ!?!」

レツの答えにキルアは少しでも得をしようと粘る。だが、レツはあっさりと断る。

「いや、自分の手の内を積極的に明かすとか、正気？」

「ぐっ……！」

そう、レッツは誰でもできることと、「発」も上手く誤魔化すことを図っている。そしてキルアは呻きながらも納得せざるを得なかった。そして悔し紛れに、キルアは特大の爆弾を放り投げた。

「そういえば、この人がレッツがハンター試験で「便利屋扱いされてる」先生か。」

ビクッ「ちよっ、キルア!!」

「…レッツ、オレの事、そんな風に思っていたんだア。」

そうキルアが発言すると、ピシリと空気が凍る。レッツが恐る恐る振り向くと、シャルナークは、表情はそれはもう優しいげな微笑であるのに、その怒気ときたら、静かにドス黒く渦巻いているのである。当たり前だが、事実であると本人が理解していても、人の口&陰口&末っ子にすら言われてしまうのはいい気にはならない。

そしてそんな笑みを浮かべて、シャルナークは言った。

ガシッ「よし、訓練の量、五割増しだね。」

「キイルアアアア!! 恨むからねエー……!!」ズルズル

「ザマア」

シャルナークは、猫のように脱力して、無駄かつささやかな抵抗を示す、レッツの首根つ

こを掴んで引きずって立ち去った。地獄2ndシーズンの到来である。

キルアは、いつぞやの暴露系カウンターが成功した事が、爽快だったのだろう。清々しいモノが混ざった愉悦な笑みを浮かべていた。

くくく

そして連行される道すがら、シャルナークは興味本位で質問する。

「そういえば、あの少年は何？」

「あゝ……僕に、クロロ兄さんが示した縛りを破らせた子とだけ。」

「へえええ！」

そのレッツの返答には、正直予想外でもあった。あの少年がレッツに足技縛りの禁を破らせたこと知ったのだから。そして表に出て、修行内容を伝える。

「それじゃ、操作系に多い、操るモノに依存しすぎて、体術が疎かになりがちでもある。

まずはそこからだね。」

「っ!!」

「それに言われてから、構えるようじゃまだ未熟。」

シャルナークは一瞬でレッツに詰め寄って、両手で銃短剣を握っているレッツの腕を弾く。

「なっ!?!」

「操作系はその性質上『操るための操縦桿』が必須。相手に刺すか、自身で振るうとか、またはその両方。刺される前に、その動きを止めてやれば、レツの新しい能力は簡単に封じられるんだよ。」

「ぐっ……!」

「それに牽制も兼ねて、その銃でもある武器を選んだんだから、当たらずとも撃鉄を引かないと。」

「……ッ!」

「あとは、刺すタイプなら投擲術とそれを利用した連続攻撃。それと――」

シャルナークは掌底をレツの腹に入れる。

「……!!?!? がはっ!?!」

「この考えてくれた【浸】の特訓。やっぱり完成させると便利だからね。」

もれなくフェイタンにも協力してもらって、純粋な体術の向上が要求されるのが一つ目。投擲術が二つ目。【浸】により、何度も倒され、血反吐を吐いて転がる事になる攻撃が三つ目であった。

十十十

4月9日。

レツは解放されるや直ぐに怨嗟の声を上げながら、キルアに遭遇した。

「キイルアアア……よくもやってくれたねエ……!!」ピキピキ

「完全な逆恨みじゃねーか、オレは悪くない！」

「暴露したのは違うと思うけどなア……!!」

「アハハア……ヤベツ」ビュン

「あ、待て!!」ダツ

そんなアホな追いかけつこがあつたとか。普通はこんな公共の町を巻き込むのは怒られるのだが、何故か周りの人達の顔は、ホツコリとしていたという。

＋＋＋

そして4月10日。レツは三戦目の相手、リールベルト戦に望む。

『さあ 今日注目の一戦！ 未だ無敗である、華凛な少女、レツ選手が再び登場です！

今日は初めから、銃のような物を腰につけての登場!! 対するは、200階の闘士、

リールベルト選手!! 戦績は7戦して、5勝2敗とそこそこの戦績を残しています!!

一体この二人は、どんな戦いを見せてくれるのかアア!?!』

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!」

レツは早速、ダイヤモンドの指輪を付け、「舞い踊る僕の人形劇／ステージオンマイン
ドール」を発動させる。その新しい変身に、アナウンスマも声援も大きくなる。

『なーんと、レッツ選手、今度は白いッ！ また別の変身です!! そして銃を乱射した——!』

レッツは、先手必勝でリールベルトの腕を潰さんと、腕を狙う。これは初めから鞭を構えなかったリールベルトの失態である。

!!! (【爆発的推進力／オーラバースト】!!!)

飛んでくる弾丸に、たまらず能力を使う。その方向にあつさりとレッツは【流】で近づき、左腕にコルトパイソンダガーを突き刺す。その左目が見えなくなる、未知の体験に、再び【爆発的推進力／オーラバースト】を発動するといった発想に至ることなく、残る右腕にも、もう一本の銃短剣を刺される。

これで完全に詰みであり、リールベルトは実害が無くとも、失神してしまふほど精神が脆い人物である。大抵の人間ならパニックる視界と聴覚を失い、そのまま失神した。

「リールベルト選手、失神KOとみなし!! 勝者レッツ選手——!!」

『なーんと、電光石火の如く勝負がついてしまいました!! 未だレッツ選手の無敗伝説は続く——!!!』

あまりの速さにリールベルトの鞭を使う【双頭の蛇による二重唱／ソングオブディフェンス】などの力、キルアたちの勉強要素も、限りなく薄いまま決着が着いてしまったのだった。

十十十

レツは、シャルナークとフェイタンと合流し、三戦を見て問題点を挙げる。

「勝つことは勝てた、けど。 熟練した人との経験かな……？」

「うん、中距離、遠距離にも対応できる人が望ましいかな。」

「ワタシの能力も、対応するけど即死させてしまうよ。」

「……レツ？ シャル？ フェイ？ ……こんなトコでなにやってんの？」

三人は順番に新たな課題を語っていく。

そこに声がかかった。 その人物を見て、三人は再び順番に言う。

「……熟練した実力者で。」

「……中距離、遠距離にも対応できて。」

「ワタシのような即死ではないね。」

「……何？」

その人物、マチは訝しげに眉を寄せる。

ここでレツは、地獄の再来を恐れて、《子兎》のコードネーム通り、脱兎の如く逃げ出

した。

理想

マチ シャル フェイ レツ

(?。 | 。) (; ∩) (# ∩) ε || ε || ε || ∟ (; ? ◇ ?) L

現実

マチ シャル レツ フェイ

(?。 | 。) (* ^ ^) ε || ε || ピタツ (T | T) (|| ||) ヒユバツ

レツはあつさり捕まり、\ (^ o ^) / オワタ という表現が相応しい、表情を浮かべた。

むしろ逃げ出す、という最もやつてはならないであろう対応を、今回のケースの場合、特にマチに対して取ったので、チクられることによる、地獄3rdシーズンは確定になるだろう。

幸いにも、明日の4月11日は、ヒソカの戦いがあるらしく、先送りにはなった。

No. 24 / ウツキ? ハ? ウソツキ

レッツの捕獲後、シヤルナークはアンテナを首裏に刺して、意思を残しはする【携帯する他人の運命／ブラックボイス】を発動し、改めてマチの質問に答える。

「オレ達が、此処にいるのは団長の命令でレッツの【発】の特訓をしろって。それどこに来てる。」

「ああ、なるほどね。」

「そういえばマチ姉さんは、こんな所で何してるの？ 僕達の中じゃウヴオーとか師匠とかが自主的に来そうな所なだけけど。」

「……………ちよつと、団長に伝言頼まれてね。それを言いに来たんだよ。」

「団長に？ こんな所にか？ 誰ね？」

「……………ヒソカ」

「……………」お疲れ「ね」

「というか、アンタ達が来てるなら、アタシが伝えなくてもよかったじゃないか……………」
マチは不貞腐れたように諦めのぼやきを続ける。

「まあ、【念糸縫合】を何か依頼されてるから、どっちみち会うのか…。」

「ん? マチに依頼つて事は、ヒソカ怪我する予定でもあるつて事?」

「!?」

「アイツの考える事は分からないから。とりあえず金さえ払えば文句ないし。だから
レッ、そんな目をして諦めなよ。」

「う〜ん……」

「…そういえば、何でいきなり走り出したんだい?」

「ピシリ」

シャルナークの質問に、レッは驚きつつも目を向ける。 マチは治療を真つ当する旨を言い、諦める事を告げると、何やらレッは腕を組んで考え出した。 それも気にはなるが、先ほどの逃走について尋ねると、レッは固まってしまい、シャルナークが携帯を弄りだす。

「…さ、自分の口で言うんだ。」ピ ピ ピッ

「やめてやめてやめて今までスパルタに血吐かさ続けて、マチ姉さんもとことん追い込んで、限界を超えさせて強くならせるタイプだから、また地獄を見ることに何でもありません。」

「レッ、それはガイコツに心臓マサージするくらい手遅れね。」

レッの言葉にフェイタンはツツコミを入れて、レッは震えながら、恐る恐るマチを見

る。

「マ、マチ姉さん？」

「……………ねえレツ」

「な、何？」ガクガク

マチはレツに振り向く。その微笑みとは別に、目は笑っておらず、生まれたての子鹿の様に震えるレツに彼女は笑ってこう告げた。

「お仕置きだよ。」

「」 ギギギ… テクテク

この場でこそ何も無いが、だからこそより何をされるのか不安なまま、レツは抵抗すら諦め、操られながらも諦観の表情を浮かべて、歩きだした。

十十十

レツが受けた罰はこのような内容であった。

「焼肉は美味しいね」

「そうだなー」

「特に、人の金で食べるのがまたいいね。」

レッツの部屋にてマチ・シャルナーク・フエイタンは、焼肉を食べていた。勿論、常人では有り得ない程の量に、質も兼ねて高級な肉を買い込んであり、持ち運びも金を出したのも、操られたレッツである。レッツはジイーと三人が食べている焼肉を見つめていた。なお今のレッツは、てるてる坊主のように、グルグル巻きにマチの糸で吊るされているので、手を伸ばせない。

「……………食べたいよな?」

「! ……べ、別に食べたいと…思つて……………なんか…」

「そうか、なら全部食べてしまふよ。」

「あア—?!」

シャルナークが焼肉をレッツの目の前にチラつかせる。

「この馬鹿な末っ子の前で食べよう、それが何よりの罰になる。」

「分かったよ……………ん? ……この団扇で匂いを嗅がせたら、もと食べたくなるね。」

「いいね、そしてなるべくレッツの近くで食べよう。」

「この鬼畜うウウウウ!!」

三人の月達はそう言いながら、ムシャムシャとレッツのすぐ近くで焼肉を食る、レッツを包むかの様に美味そうな肉の匂いが漂う…そしてレッツの言葉に關しては、はつきり言つ

て、外道上等な真似をする集団だからこそ今更である。

「こゝ、この…… 僕はこんな拷問には屈しないよ！」

比較的、温い罰に思えるが実際その通りで、マチは二極論で大別はできないが、それでもアメとムチなら、ムチ側という自覚があるためそこまで怒ってはおらず、（それにしてはこの嫌がらせはある意味エグイが）これは、気まぐれなノリによるものが大きかったりする。 何のお咎めもなしというのも、なんとなくダメに思ったのもある。

このまま何も喋らず耐え抜くのは厳しいので、考えていたコトを話し始める。

「マチ姉さん、明日ヒソカが戦うんだよね？」

「？ そう言っただろ。」

「それで考えていたんだけどさ、明日の試合の間に、兄さん達が忍び込んで、機械類仕掛けてくれないかなって。 姉さんの治療を、カモフラージュに使ってさ。」

「……たしかにワタシはピキングもできるが……」

「…ヒソカについては、いつか裏切るだろうとは皆、思ってるだろうけどね。」

「アタシも、アイツの能力はそこそこ知ってるけど、全部ではないだろうしね。」

「そうなんだ。 でも、僕が殺すよ。 その調査に協力してくれないかなって。」

「…アタシは今一度の確認だけだから、大した手間じゃないだろうし、いいよ。」

「ワタシも早く、ヒソカ死んで交代望むよ。」

「でも、ヒソカがそこまで油断してるとは思えないよ。」

「それを承知で、望み薄の上で先生にも頼んでるよ。」

シャルナークとフェイタンは機械類である、盗聴器や監視カメラを設置することにも長けており、鍵などのハードルを容易く蹴つ飛ばせるメンツであるのも大きい。マチは呆れた顔を浮かべながらも了承し、フェイタンも賛同する。

この場のメンツが、操作系と変化系であるがゆえの性格と、それだけヒソカが何故かクロロに、ワガママを許されていたのも大きかった。

「……まあ、ヒソカが死ぬ確率を上げるのも、レツが能力を知っておくのも、いいけどさ

ここでシャルナークは（＝操作系≡理屈屋・マイペースなので）シリアスな密談の空気を壊す。

「……そのてるてる坊主状態で、良くその話ができるよね。」

「……言わないで、僕も無理があるってのは、気づいているんだからさ……／＼」

さらに気まぐれな変化系の二人が追撃を加える。

「ホント、そうなんだけどね、解除はしないよ。自力で破りな。」

「むうくく……」プラーン プラーン

「やめるね、ただマヌケな姿にしか見えないよ。」グクツ

「笑いを噛み殺すなあ……」

こんな一幕があつて、三人はこの場から退散し、就寝についた。ちなみについての嫌がらせとばかりに、撮影をしており、部屋から出る捨て台詞に、「じゃあ、この写真を配布しておくよ。」と言ひ、その時のレッツの顔と姿は最高に滑稽だったとシャルナークは後に語る。

十十

そして4月11日。

「じゃ、機械類の手配してくるよ。」

「ワタシは侵入の段取りね。」

「はい。もろもろのお金と、あとチケット。」

「アタシも見ていこうかね。」

こんな会話と共に、それぞれバラけ行動を開始する……といつても、ちよつと歯応えがあるゲームレベルだが。この時点でレッツのノルマ金は、ギリギリ四億を割っている。

二人は仕事後、会場に途中参加の予定であるが、三人も一緒に観戦することになり、高

い（ヒソカの強さが、最低限分かろうとする目的からすれば15万は破格の安さである。）チケットを購入する事にした。200階クラスの選手だったので、優先的に購入させてもらうことが出来た。

~~~~~

会場は超満員で熱気に包まれていた。

「ヒソカの試合がここまで盛り上がるとはね。」

「ヒソカに勝つヒントが見つかるかな？」

「正直、望み薄だと思うけどね。そこそこマシなのしか居ないハズだし。」

「……それでもヒソカに挑む自信を持てる人ならあるは……」

\*\*\*

『さあー、いよいよです！ 今、フロアマスターに最も近い2人!! ヒソカ選手対カストロ選手！ 因縁の大決戦!!』

ヒソカとカストロが登場して、リングに上がる。

ヒソカはいつも通りの飄々とした笑みを浮かべており、カストロはマントを羽織ったままヒソカを鋭く見つめている。そのままカストロがヒソカに「準備運動にすぎない」などの会話をする。

\*\*\*

「そういえば、アイツの能力については言ってなかったね。」

「えっと、オーラをバネ？紐？ゴム？石灰？糊？か何かに変化させる力だね。」

「…本質にはたどり着いてないみたいだけど、そ。アイツの能力は、【伸縮自在の愛／バンジーガム】と【薄っぺらな嘘／ドッキリテクスチャー】っていう能力で、【伸縮自在の愛／バンジーガム】は、ゴムの性質が正解。それとガムの性質を持つものに変える。

至る所に貼ることが出来て、よく伸びて、素早く縮む能力。【薄っぺらな嘘／ドッキリテクスチャー】は、紙のように薄っぺらいものにイメージを加えて、オーラで見た目や質感を再現する能力。こっちは触れば分かってしまうし、ヒソカの肌を保護するものって解釈してるけどね。」

「……良く出来てるね。ウボオーか、フラン兄さんなら荒野とかで一方的に殺れそうだけど、僕の能力だ……」

あらためて、マチの説明と共にレツは自分のパターンを考える。それとは別に試合が始まる。

\*\*\*

「ポイント&KO制!! 時間無制限!! 始め!!!」

早速、カストロがヒソカに飛び出して右手刀を構え、横振りに振るい、ヒソカは頭を

屈めて躲す。

シャツ「!!」ズギヤ

しかし、何故か振り抜かれたはずの右手が、ヒソカの右頬に直撃する。

「クリーンヒットオ!!」

ヒソカは横に吹き飛ばされるも倒れることなく、膝立ちになって耐える。その顔から笑みは消えており、今起こった現象について探るような視線を送っている。

『まずはカストロ選手の先制攻撃が炸裂ー!!』

カストロは無理に追撃せずに、ヒソカを睨み、挑発を行なう。

「本気で来い、ヒソカ」

\*\*\*

「……………(僕は…………)」ギリイツ

「へえ…………」

レツは自分が傷一つ負わずとも出来なかつた仇相手に、いともあっさり和一撃を入れたのが気に食わず、歯を食いしばる。(ヒソカの手加減のレベルが違うなんてのは、そう明確には分からないだろう。) マチもカストロがヒソカに攻撃を当てたことに感心する。

「今の、戦い方は…」

「この試合中にせめてアイツの能力は見抜きな。」

最初から使っている「凝」にも、ますます力とオーラの量が増えつつ、観察を続ける。

\*\*\*

カストロがヒソカを挑発するも、ヒソカはゆらりと立ち上がる。

スウー…「本気を出すかどうかは僕が決める♣」

「……そうか。では、早めに決断することだ」ダッ

カストロが飛び出して、左手を鉤爪状にしてオーラを纏って横振りをする。

ヒソカは再び頭を屈めて躲したが、また時間が戻ったかのように左手がヒソカの目の前に戻り、ヒソカの左頬の皮膚を引き千切る。ヒソカはギリギリで顔を背けながら倒れるように後ろに跳んで、ダメージを減らす。カストロはジャンプして上からヒソ

カに両手を叩きつけるように迫る。ヒソカは手で横に跳んで躲し、カストロの追撃も躲していき、ヒソカの顔に目掛けて左ハイキックを繰り出す。それをヒソカが腕を上げてガードしようとするも、今度はカストロの姿が消えたかと思うと、ヒソカの真後ろに現れて蹴りを叩き込んでヒソカをリングに倒す。

「クリーンヒット!! &、ダウン!!」

『カストロ選手の一方的な攻撃が吸い込まれるように当たるー!! 一気にポイントは4

ー0! しかし……今のは……気のせいでしょうか!』

\*\*\*

周囲は今日にした不思議な光景にざわついている。

レツはカストロの能力を見抜く事が出来た。

「……あの人の能力は、自分自身を増やす…力、だよな。」

「正解。あのマントも一役買って、間近でやられると分かりにくくなってる。」

二人はカストロが攻撃の瞬間に残像のように増えて、素早く背後に回っている姿をしつかりと捉えていた。

「……………（あの人は僕が殺したいと願いつつ付けて、実際には傷一つ付けられなかったヒソカを……）」

\*\*\*

「なんにせよ、もう待たない。次で腕をいただくぞ。まだ、もつたいぶるならそれも

よからう。」ググ…

しばらくカストロとヒソカの会話が続き、カストロが裂帛の気合と共にオーラが膨れ上がり、両手を鉤爪状にして、段々とオーラが集まっていく。

「出たぞ! 【虎咬拳】!」

「カストロの方が先に本気になったぜ!!」

「行くぞ!!」カッ

ヒソカはまだ余裕綽々で立っている。カストロは顔を顰めて駆け出し、ヒソカに猛スピードで迫る。すると、ヒソカが左腕を突き出す。

「あげるよ♥」

「! ふん! 余裕か罨のつもりか!? どつちにしろ腕はもらった!!」

ヒソカの左腕にカストロが両手を挟み込むように振るう。しかし、当たる直前にカストロが消え、ヒソカの背後に現れる。

「こつちのな」ボンッ

カストロは両手で噛み千切る様に振るい、ヒソカの右腕を肘手前から千切り飛ばす。ヒソカの右手が宙に舞い、観客がどよめく。

\*\*\*

レツは拳を握りしめて爪が食い込み、血を流し出している。

「(……………なんでだろ……………何でこんなに……………悔しいんだろ……………!!) うっ……………うっ……………」ポロ……ポロ……

ヒソカが腕を伸ばしていたとはいえ、真摯に挑んでいて、怪我を負わせたカストロに非はない。

レツは自分自身への情けなさで怒りで腸が煮えくり返っているのである。

そこに作業が終わった、二人が合流してくる。ちなみにフェイタンは、あのドクロ

のバンドナが特徴的なのであって、軽く服を着替えていれば、ここに居るようなエンターテイナー気分が強い、所謂エンジョイ勢の者達には、会場に来て誰も気に止めないので来ることができてる。

「ん? ヒソカの腕を飛ばす位の鍛えられた能力者なんだ?」

「……? にしては、アイツ大したことなさそうよ。」

「ワザと腕伸ばして捧げたんだよ。まったく、なにしてんだか……」

シャルナークとフェイタンは疑問点を出し、マチはヒソカの行動に呆れつつも説明する。そして、三人はレッツが三つの意味で嘆きの感情を抱いているのは、理解はしている。

ヒソカとレッツがこの場に居て、一回も挑まなかったというのは考え難い。彼らとて感情の一切が無い、機械的な人非人ではない。されど、常に力が物を言う世界で生きている彼らには、そこまで問題ではなく、慰める必要はないと考える。思考の淵にあつたかは定かではないが、下手な慰めは逆効果になる以上は有り難かつただろう。運が悪いといった偶然ではなく、強者に負けた実力の無さが悪いのだ。強ければ何も問題はなく、負けた方が悪い。そういう世界を生きているがゆえに。

\*\*\*

「私は念によつて【分身／ダブル】を作りだすことに成功した。もちろん【分身／ダブル】はただの幻影ではなく、消えるまではそこに実在するもう一人の私。それは【分身／ダ

ブル」の蹴りを受けて実感しただろう。お前は2人の私を相手にしなければならない。これが念によって完成した真の虎咬拳。名付けて「虎咬真拳」!!」

『おーっとかスト口選手、そのままのネーミングだー!!』

「次は左腕を頂く。まだ下らぬ余裕を見せていたいか？」

「うーん、そうだなあ◆」

ヒソカはゴン達を、青い果実、と称するように、彼は《食人鬼／カニバリズム》と呼ばれる人種である。そして自分の腕の肉を噛み締めるヒソカが抱いているのは、やる気でもなければ、まして喜びでもない。

「……ちよつとやる気、出てきたかな？」

彼はいま、失望したのだ。

「じゃあ、今度は僕の番♥ 予知能力をお見せしようか♣」

右腕を脇に挟んでスカーフを取り出すと、右腕を覆い隠す。次にヒソカはスカーフを上を放り投げた。

\*\*\*

ゴシゴシ（【凝】!!）

涙を服の袖で拭き、心機一転と再びオーラを目に集めるレッツ。四人の眼には勢いよく天井に飛んで張り付く右腕が映る。そして、13枚のトランプが舞い、観客達の目



には右腕がトランプに変わったように見えただろう。それにシャルナークが質問する。

「ん！ レツ、今ヒソカから、何本のオーラが出てる？」

「……まず、トランプに十三本。 スカーフに一本。 真上の右腕に一本……だよ。随分と伸びるし、枝分けも出来るんだね。」

「正解。 それも含めて、厄介なんだ。」

「……でも、ヒソカの【隠】にも気づいてないみたいよ。」

レツが回答すると、マチが補足をし、フェイタンも呆れる。天井の右腕とスカーフに纏わりついたオーラはヒソカの右腕と繋がっており、地面に散らばったトランプからもオーラが伸びていて、ヒソカの左手に握られているのが分かる。

\*\*\*

左手を右腕の傷口に突っ込むという、突然の奇行に、四人も流石に顔を顰める。傷口から手を抜いたヒソカの左手指には血濡れのトランプが挟まれていた。その一連の奇行にトランプを手で弾き落としたカストロは、再び突撃せんと構える。

「下衆め……。二度とふざけた真似が出来ぬように、左腕もそぎ落としてくれる!!」

右側のカストロが叫ぶと、左側のカストロが走り出す。

すると、ヒソカがまた左腕を捧げるように突き出す。その瞬間、ヒソカの切り落と

された右腕の傷からオーラが伸びて、後方に控えたままのカストロの顎に付着する。

「さつきから言ってるだろ？ あげるよ♥」

「っ！ ならば、望みどおりにしてやる!!」

前に出たカストロは虎咬拳で、ヒソカの左腕を右腕同様引き千切ろうとする。その数秒前に、天井に張り付いていた右腕とスカーフが、目にも止まらぬ猛スピードで、ヒソカの右腕に繋がり傷口を隠すように覆う。

ドガアン「っ!?! な、なに!?!」

右腕で、カウンターを喰らったカストロが驚き、その姿が靄のように消える。

「やはり【分身／ダブル】の方で攻撃してきたか◆ まア、カウンターをくれてやるんだけどね……こつちで♥」

ヒソカは繋げたように見せかけた右腕を見せつける。カストロは激しい動揺に汗を滲ませて、無意識に一步後ずさる。

「くくく◆ これも手品です◆ さて、どんな仕掛けでしょう?」

ヒソカが笑いながら右腕を掲げる。カストロはそれを見て、僅かに冷静を取り戻す。流石にこれほど異常なことが起これば、何かの念能力であろうことは想像つくだろう。

だから、これは最終通告。

左腕の献上を結果として行わなかったのは、自分が最強だという自信はあるが、だからといってヒソカは幻影旅団を甘く見てなどいない。戦闘中に目撃できたその方向から、少なくとも三人は居る旅団員との両腕という部位欠損の上、一对多数のリンチではさすがに不利であることくらい冷静に判断している。

これはヒソカが仕事の呼び出しに行かず、旅団員がレツにどれだけ味方をするのか絶対的に情報が足りず、分からなかったのが大きい。その理由もそうだが、それ以上にこの上ないチャンスになるので、このような、不味い果実、なぞに、戦闘欲と性欲がつながっており、少しでも美味しくしたいという、自分の自慰行為のせいで、その期待を自ら捨てなくてはならない、もしくは不完全燃焼の状態でレツを壊さなきゃならないなど、ヒソカには許容できず、バカバカしいことこの上ないというのも大きい。

その最期の確認にもカストロは目に「凝」を使わなかった。

「君の「分身／ダブル」を作る力は素晴らしい◆ だが、もうネタは分かった♣ そこからどんな攻撃が来るかも想像がつく♠ それに対処する方法もね♥」

ヒソカはゆっくりとカストロに歩み寄る。

「くつくつく、どうした? こわいのかな」

後ずさったカストロに向かって、ヒソカは冷めた声で言った。カストロはヒソカのトリックを、まったくもって見破れていない。だが逆にヒソカは、カストロの能力を

既に完全に見切ってしまったている。二人のその差異は、既に滑稽なほど。タネのばれてしまった手品はつまらないだけでなく、見ていてなんだか虚しいものだ。

「非常に残念だ◆ キミは才能にあふれた使い手になる……そう思ったからこそ生かしておいたのに」

そして観客でさえそうなのだから、奇術を扱う者から見れば、それは既に腹立たしくさえ思えるものだろう。それはいま舞台上に立っている希代の奇術師もまた、例外ではない。ヒソカは表情を険しいものにして、言った。

「予知しよう、キミは踊り狂って死ぬ◆」

ヒソカが今、抱くのは、失望と、怒りだ。それは、期待をかけていたせつかくの“青い果実”が、間違った育て方をしたせいで、中身がスカスカのつまらないものになってしまっていた、その虚しさからくるもの。

「そんなことも、知らなかったのか……◆」

振り向いたヒソカの目が、ぎらりと輝いている。しかしそれは“凝”のせいだけではない。その目には、情けなく地に落ちて腐ってしまった果実に対する蔑みが、深く宿っていた。

「くっ……！　だ、黙れええ!!」

カストロは完全に冷静さを失って「分身／ダブル」を発動して飛び掛かる。ヒソカ

は本物のカスタロに目を向ける。

「なっ!?!」

カスタロは驚いて、後ろに下がって距離を取る。

\*\*\*

「これで終わりだね。」

「まったく……あんなヤツに腕捧げて治療しないとならないなんてね。」

「もう行くよ。」

「……………（仕掛けが割れるとつまらない人形劇だな…）」

シャルナークの発言を皮切りに、二人も追従し、レッツも無言で立ち上がり観客席を後にした。

リングでは「分身／ダブル」の弱点、『戦いの最中についた汚れは再現出来ない』ことをカスタロに告げるヒソカの姿があった。

ヒソカはカスタロの顎に付けていた「伸縮自在の愛／バンジーガム」を発動して、右腕をロケットパンチ&アツパーカットの要領で、カスタロの顎を殴って脳を揺らす。

ふらついたカスタロを確認したヒソカは、今度は体中に付けていた「伸縮自在の愛／バンジーガム」を発動して13枚のトランプがカスタロに向かって飛ぶ。

カスタロは脳震盪で「分身／ダブル」どころかまともに動けない。そしてオーラで

強化されたトランプがカストロの全身に刺さり、全身から血を流す。ヒソカの予知通り、人形のように踊り狂いながら、カストロはゆっくりと後ろに倒れて行く。

観客達はその光景を顔を青くして見つめ、ヒソカはこの後の口直しを楽しみにしてリングから立ち去った。

十十

そしてヒソカの部屋。

「前から思ってたんだけど、今日の試合見ててハッキリしたよ。あんたバカでしょ。」

「そうかもね♥」

部屋に入って、*“仮止め”*状態だった右腕を外したヒソカを椅子に座らせるなり、マチは言った。

「わざわざこんなムチャな戦いかたしてさ。あれって何？ パフォーマンスのつもりなの？」

「ギア？」

「ま、あたしはもうかるからいいんだけど」

「おや♥ ちゃんとシテくれるんだね♥」

「はア？」

ヒソカは一つ確認を、わざわざ言い方に癖をつけて尋ねると、マチは懐疑的な声を上げる。続けて、ヒソカはその理由を述べる。

「レツに会うたびに殺気をビシビシと叩きつけたり、実際に斬りかかってくるからさ♥」  
 「アタシは、一人前になって、アンタには万全な上で倒されての交代を望むからね。それじゃ止血からね。」ヒユン

「おいおい♥ もう少し優しくしてよ♥」

「いいから、オーラ消して。それで腕持つて。いくよ、【念糸縫合】」

マチは、素晴らしい手際でヒソカの両腕を念糸で縫い繋ぐ。ヒソカが具合を確かめるように指先を動かした。

「いつ見てもほれほれするねエ♥」

見事に元通りくつついた腕に、ヒソカは感嘆の声を上げる。

「間近でキミの【念糸縫合】を見たいがために、ボクはわざとケガをするのかも♥」

「いーから右手5千万、払いな。ほれ、とつと。」

「ちゃんと、キミの口座に振り込んでおくよ♥」

「ところどころ、ちぎれてるけど、あとは自分で処置してね。」

「サービス悪いねえ♥」

「アンタの【伸縮自在の愛／バンジーガム】と【薄っぺらな嘘／ドツキリテクスチャー】

使えばなんとかなるでしょ。」

最近の治療のサービスだったら、レツの力と合わせて、リハビリ無しで完治させてるが、ヒソカが患者の場合はレツに恨まれてる以上、絶対に見れないコンボである。

「…ああ、隠しておいた方がいいかな♥ その方が自力で元に戻したっぽいもんね♥」

そのままヒソカは傷口の偽装を行い、マチの能力の発言に、ヒソカは気まぐれだろうと、判断し同じく気まぐれ以上の意味を持たないが、ヒソカは自分の能力の『核』である、昔の菓子の名前といったのを話す。

「君達には全部、レツにも見えてたんだらう?」

「まあ、そうだけど。…仕上がりはまだただけど。」

「そうか♥」ゾクゾク

いずれは来るその未来に思いを馳せつつ、カストロとの戦いの回想をした後、マチはメッセージを伝える。

「肝心の用事、伝令メッセージの変更よ。 8月31日正午までに、「ひまな奴」改め、「全団員必ず」ヨークシンシティに集合!! …あと、コードネームも決まって、アンタは《卯月》だよ。」

「……団長もくるのかい?」

動きを止めながら、マチのほうを見ないまま、ヒソカが言った。



「おそろくね。今までで一番大きな仕事になるんじゃない? 今度黙ってすっぽかしたら団長自ら制裁にのりだすかもよ。(…結局、能力の成り立ちのみだったね。ダメ元だったし、仕方ないか。)」

「それは怖い♥」

ため息をつきつつ、マチは肩の荷物を担ぎなおした。

「ああ、ところでどうだい? 今夜♥一緒に食事でも……」バタン

ヒソカがくるりと振り向いた時には、既にマチは部屋におらず、静寂だけが部屋に横たわった。

「……残念♥」

## No. 25 / キユウソク? ト? ジユウソク

「…どうだった? マチ姉さん。」

ハア「…とりあえず、部屋に案内しな。」

ヒソカの治療後、マチはレッツに早速、尋ねられていた。 …どこかマチは気分転換をなるべく早くしたいのもあったのかも知れないが。

++++

「今、判明している以上の情報は無し…というか、いきなり聞くようじゃ、シャル達が設置した意味はなんだい?」

「う…:…い、いや、もしかしたら持続時間とか効果範囲とか分かるかも知れないじゃん?」

レッツの具現化系は神経質という悪癖が出てしまった。 マチは小さく溜め息を吐きながら、気になった事を尋ねる。

「…気になったんだけど、何か声、大きくない?」

「え? …:…そうかな?」

「レッツ、耳見せて。」 ジツ…

「マチは唐突な発言を始める。そのまま、レッツの耳をつまみながら耳の中を見ている。」

「ちよつとレッツ、このまま動かないで。」

「そう言うのと手の甲から針を抜き出し、レッツの耳の中へ入れてみた。」

「マチ姉さん? 何をしてるのー?」

「レッツの疑問も気にせずマチは耳の中にある大きな塊を針でつつく。」

「……レッツ……耳の中どうなってるのよ。」

「マチが驚くのも無理はない。レッツの耳の中は耳垢と呼べる比率は少ないが、数ある出血など(主に特訓。フェイタンはともかく、シャルナークの「浸」の比率が大きい)が繰り返され堆積されてゆき、固まり黒い塊として耳の中でふさいでいる状態であった。」

「……いつから耳掃除してないんだか……物凄い事になってるよ。」

「いつからって……ここ四ヶ月は忙しかったから……」

「フウ……まったく……」ポスン

「ひとつ小さく溜め息をつくとき、マチはベットに腰掛けて太腿の上を叩く。」

「ポンポン」「ほら、さっさと膝の上に横向きで頭を乗せな。」

「う、うん……」ポスン

それにレツは頷き、頭をマチの太腿の上に乗せた。

「先ずは耳たぶからだね……」

ススツ ススツ

(気持ちいいけど……耳の奥が余計に気になって来たよ……)

パリパリパリ

(焦らしてる訳じゃ……ないんだろうけど……)

スイーツ、スイーツ

パリパリ

パリパリパリツ

(……意識すると……余計に痒く……)

スススツ

パリパリ

ペリペリ

「ねえ……さん……早く、中を……」

「慌てない……ちゃんと、取ってやるから……」

パリピリ

ペリペリペリツ

ススッ

スススッ

「……これで耳たぶは終わり。 中へ入れるよ。」

正しくは《耳介》と呼ばれる箇所が終わり、さっそく中に取り掛かったマチは苦戦する事になる。

「アンタの耳の中どうなっているのやら…… 耳垢が沢山あるし、しかもそこに血が付いて固まってなかなか取れないよ。」カリカリカリカリ

「あ………最近血反吐を、吐かされ放題の結果というか……」

耳の中ではこびりついた耳垢をとるため耳かきが細かく動いている。 基本的に回復というものは、体の傷を塞ぐ事が出来ても、流れ出た血を巻き戻したりなどは出来ない。 もし、そのような事ができたらホラーチックな現象になること間違いなしである。 無論、体表に付着した血ならシャワーなりタオルなりで拭えるが、このような体の中となると、そももいかないのだ。

「ん………耳垢が真っ黒になってるから、よく見えないね……仕方ない。」

そう言うと、マチは「念糸縫合」を使う際の、神経の一本まで繋ぎ合わせるまでの視力を誇る力を使い、瞬きで細やかに記憶しながら、続けていった。

「うん………よく見えるようになったね。」

耳の中が十分に見える状態で、マチは耳搔きを始めてみると、レツの耳垢は血で固まり耳にへばりついた状態で一気に剥がし取る事が難しくなっていた。

スーッ

コリッ

カリカリッ、コリッ

「はうっ……」プルッ

「ちよつと……あまり動くんじゃないよ……」

「ゴ、ゴメン……」

「アンタの耳垢がこびり付いている上に、硬くなっているから難しい。我慢しな。」

取れなくなった耳垢を、苦戦しながらも少しずつ剥がすように細かく耳搔きを動かしている、太腿の上でなおも動くレツが気になったマチは注意する。なおもくすぐりたいのを我慢しつつ続けていると、マチはアイデアが一つ浮かんだ。マチは一時的に、レツの頭を太腿からそつとどかして、備え付けのポットと、タオルを持ってきて、再び戻る。

「ちよつと、熱いかも知れないよ。」ポタッ ツツー…

そう言つてマチは、自前の針を逆手に持ち、もう片方の人差し指のみを濡らせて、その針に伝わらせるように、耳垢に染み込ませてゆく。

「ふえ?!?」ビクンビクン

レツは痙攣するかのように驚く。

「耳垢を柔らかくしているんだから我慢しな。」

マチは続けてそう言つて、お湯が染みこんで少し軟らかくなつた耳垢を耳搔きで取り始めた。

カリカリカリカリ……サクツ

ペリペリペリペリ

軟らかくなつた耳垢をマチは崩し、そして剥がしていくのであつた。レツは、耳の中で起きる、痛み、痒さ、崩れ落ちそして剥がされてくる爽快感と気持ちよさの感覚に身も心も癒されて、身を委ねていた。

コシユツコシユツ

ゴツゴツ

ズズツ

ザツ、ザリツ

ズズズツ

(あア……何だか、気持ち良いな……)

ズズツ、ズズツ

ズツ、ズツ

ススーッ

(……ティツシユの上にたくさん……ちよつと申し訳ないな……)

ズズツ、ズーッ

バリツ、ビツ

ススーッ

(こうして息をつくことが出来るのは、いつぶりかな……)

ザリザリザリツ

バツ、ビツ

スススーッ

「さ、次に大物を取り出すから、決して動かないこと。」

「はい……」

スーッ

カツッ

(あつ、触れた……)

カカツ、カカツ

グリツ、ググツ



グーツ、カリッ

(取れそうで取れてくれない……)

カリカリッ、カリカリカリッ

クリックリッ、カリッカリッ

ズッ

(んっ……!)

クリクリクリッ

カリユッ、クリユッ

クリーッ

カリカリーッ

コリッコリッ

「あと、もう少しだね……」

ペリンッ

「ふうっ……取れたよ。耳から出すまで少し待ちな。」

「うん……耳の中でも感じたよ……」

ススッ、スススッ

パリッ

「まったく……左耳だけでこんなに溜めて……」

「……………」

呆れたような声色でマチは語り、レッツも唾を飲む、

次にマチはゆつくりじつくり丁寧にベビーオイルを染みこませた綿棒でアフターケアに入る。

「次はこれだよ。」コシヨオ

「はう……………ッ!」ゾクンッ

シイッ

スリスリスリスリ……

キュツキュツ……

「静かにしな。」

(うう……どーしよこれ……) モゾモゾ

「こら、動くんじゃないよ。」

「ふえ」

スリスリスリスリスリ

「あつ 待つ ふあつ あつ……う ひああ〜っ」

スーッ……

ブルルツ……「はー、はー はーっ」

「次に、鼓膜に近い所をやるから、絶対に動くんじゃないよ。」

普通は、耳鏡と呼ばれるアイテムが必要だが、マチの視力に、差し込んである針を多少動かすことで得られる反射によって細やかに安全に配慮して、除去出来るようになる。

マチの【念糸縫合】は、神経すらも繋げる。神経の太さは、マイクロメートルの世界であり、ならばそれよりは太い、針の反射で細かく見れない道理はないのだ。

「はあい……」

ゴゾツ……ガザツ……

ズズズズ……

ゴゾツ、ゴゾツ……ググググ……

(凄い音だな……初めて聞いたかも……)

ガゾツ、ゴゾツ、ゴツ……ググツ、ググググ……

グココ、ゴコツ、ゴコツ……

(かなり深い所まで入って来てるね……)

グググググ……バリッ

スーッ……

ガズツ、ゴズツ、ゴゴゴゴ……

ガツツ、ゴツツ、グツ、グツ、グツ……

グイグイ、グリグリグリ

ゴグツ……グゴゴゴゴ……

「取れそう……?」

「ちよつと時間はかかるけど、この程度なら簡単だよ。」

ガリツ、バリツ、ググツググツ

ガガツ、ガガツ、グググググ……

ガサガサガサ……ガザザザザ……

(痒い所を、正確に搔いてくれてる感じがするよ……)

ゴゾツ、ゴゾツ、ガサガサガサ……

ガリツ、バリツ、グググ……

(……繰り返し搔いている間に、もう剥がれそうになって……)

ゴグツ、ガリツ、バリツ、ガリツ……

……ペリリッ

(う、浮いた……剥がれて、捲れ上がってる……)

スーッ……

ツツツ、ツツツ……パサパサ……

スーッ……

(ああ……この、解放感……)

「後は残った細かいのを掻き出して……」

ペリ……パリパリパリ……

ズズズ、ザリザリザリ……

「最後にもう一回、耳垂れしないように保護してつと……」

スーッ……

「さ、こっちは終わったよ。反対側に向きな。」

「ふあい……」コロリ

そう言つてレツは頭だけを起こし、顔を反対側に寝転んだ。

掛かる。

「まったく……こういう所を綺麗にしないかい。」

ガサツ ガサガサガサ

パリパリパリツ

ペリツ ペリペリペリ

「……そんなに汚れてるんだね……」

再び《耳介》から取り

ペリッ ペリッ ペリッ

カリッ カリッ カリッ

パリッ パリパリパリ

「仇にこだわるのとは別に、自分の事にも気を付けないかい。」

「……そうだね……」

ペリペリ

パリパリパリッ

スーッ

「さあ、こつちの耳たぶの掃除はお終い。 耳の穴に入つて行くよ。」

「……お願い……」

「その前に、また染みるよ。」ポタッ ツツ……

再びマチは、その針に伝わらせるように、耳垢に染み込ませてゆく。

「うう~~~~!!」ビクン

先ほどの慣れで、レッツは驚きこそないが、反応は止められなかった。

——スウ……

フウ「……こつちも綺麗にしてやるから……」

……カツッ……パリ

パリッ……パリパリ

「ふあつ……」

カツカツ……パリッ

スーツ……

パリパリペリッ……

スーツ

(心なしか、逆側よりも耳垢を取るのが多い気がする……余程固まっちゃったんだね。)

ザリザリ、パリッ、パリッ、メリッ……!

バリッ、バリッ、ペリペリペリ……

(それにしても……この、耳垢が剥がされて……)

メリッ、メリッ、パリパリパリ……

ググーッ……メリリッ、パリパリ……

パリパリ……サリサリ……

シュツシュツ、シュツ……

カリカリカリ……コリッ

(この掻き出される音……良いなあ……)

ベリ……バリバリバリ、ビリッ……

ミリミリミリ、メリメリ、パリッ……

(耳垢が剥がれた跡が……ジンジンする……気持ち良い……)

カリ……カリカリカリ……パリッ

ペリッ、ゴゴッ、ググッ、パリッ

スーッ……

カリカリカリ……パリッ

ペリペリペリ、サリサリ、ツツッ

(あ……そこ……気持ち良い……) ブルッ

「……まったく……」

カリカリカリ……ツツッ

パリパリパリッ……ツツッ

ペリペリ、カリカリ……ツツッ

カリカリ、コリコリコリ……ツツッ

スリッ、スリッ……

パリパリ、ススーッ

(耳垢が取れて、耳の穴が広がって行くのが見えてくるみたい……)

カリカリ……パリパリパリッ



ピリツ、ペリツ、カリツカリツカリツ

ツツツ

スーツ……

パリパリパリツ、ペリツ、メリツ

ゴソゴソゴソ……コリコリコリ……

ググツ……メリツ

パリパリ……ミリツ

(段々……奥に進んで行っている……その度に、耳の奥の方が……)

グシツ……クシクシ……

ゴシゴシゴシ……

(かと思えば、また少し戻って……また……)

グツグツ、グツ

ゴシゴシゴシ、グググツ

(じんわりと残った痒みが……引いていく……)

コリコリコリ……カリカリ……カリカリカリ……

ゴソゴソ……コシユツ、シユツシユツ、シユツ……

ググ……パリツパリツ、パリツ……

ゴシユゴシユ、シユツ……

ガサガサガサ……パリッ

ペリペリ……パリパリパリッ

(それにしても……あア、本当に気持ち良い……)

メリメリッ……パリパリパリッ

シユツシユツ……コシユツコシユツ……

パリッパリッ、コリコリコリ

カツカツツ、カツツ……

コソコソ……コリッコリッ、コリコリコリ……

コシユツコシユツ、グシグシグシ

(……耳かき、気持ち良過ぎて……頭が動かない……)

カリカリカリ……カリカリ……

コリコリ……ググツ、グーツ……パリッ……

ツツーッ……

(……まア、良いや……)

ペリペリ、パリッ、パリッ、ペリッ……

コリコリコリ……

スーッ……

カリカリカリ……

カリッ、コココ……

「ん……? これは……」

「……どうしたの……?」

「いや、これかね……」

……ガリユッ

(……何だろ……?)

ツッ……ガリユッ!

ガリユッ、ガリユッ! ゴリユッ!

(今までで、聞いたことの無い音かも……)

ツツ……

ガリユ、グリユグリユ、ゴリユッ!

グ、グググッ、ガリユッ!

(これまでの耳の中で、悪さしているような感覚とは少し違う……何なんだろう……)

グリユリユ、ガリユッ……

ゴリユゴリユ……ググググ……

「もうすぐ、取れるからね……」

グリユツ、ガグググ……

ズルルツ……！

（ぬ、抜けた……！ ……解放感が凄い……！）

フウ「……取れたよ。これだね。」

「……これは、髪の毛だね。」

「こんなことがあるんだね、耳の中に髪の毛なんてさ。」

レツの「舞い踊る僕の人形劇／ステージオンマインドール」の白い変身は、ロングサイドテール。それが右側に掛かっている形となり、なおかつこの能力こそ、シャルナークの「浸」の特訓中に使っている姿なのである。おそらく特訓にて、度重なる出

血と固まりを繰り返し、巻き込んでしまったのだろう。

「すごいスッキリしたよ……」

「まだ残っているから、もう少し続けるよ。」

「お願いするよ……」

ゴゾツ、ズズズ……

ゴソゴソツ、ガサツ……

スーッ……

ズズズ……ズズズズ……

バリツ、バリツ……

(耳の中で響く、激しい音……)

ガガツ、ガツ……ガツツ……

ゴツゴツ、ゴツツ、ゴツツ、ガツツ……

ググツ、ゴゴツ、ゴゴゴゴ……

スウーツ……

(でも姉さんの手つきは、優しさを感じる……)

スーツ……

ザリザリザリ……グシグシ……ゴツツ

ガツツ……ガツツ……ガツ、ガツ、ガリツ……

ゴツゴツゴツ……

(何か、鈍い音がする……この感覚は……)

ゴツゴツ、ガツガツ……

ググツ、ググツ、グーツ……ガリツ……

「まったく……こつちにもかなりのが……壁に貼り付いてるよ……」

「……取れそう?」

「やるだけやってみるよ。」

ガリツ……ガリガリ……ガリガリガリ……

グリツグリツ、ゴゴゴゴゴ……

ゴグツ、ググツ、グゴゴゴゴ……

（周りから掻いているみたいだね……）

ガリガリ、ゴリゴリゴリ、ガリガリ……

ガツガツ、ググツ……

ベリツ

（……快感しかないよ……）

ガガツ、ゴゴゴツ

グイツ……グイツ……

（ああ、もう、剥がれる……）

ガツ……ガリツ……

ゴツ

ズズーッ

ポトツ

「ふう……取り出してみたたら大きさも結構あったんだね」

「……み、耳の穴が、広がったみたいだよ……」

「後は、細かいのを掬い上げて……」

スーッ

ガザッ、ズゾッ

グツグツ

ググッ、ググッ

バリッ

スッ……

「……やっぱり右耳にもいっぱい溜めて……」

「……ほとんどやってなかったから……」

ハア「……一旦、アフターケアするよ。」

こちら側の方が特に赤みを帯びた外耳道を拭き、レツはやはり痒みには勝てなかったようである。

スーッ……

スリ……スリスリスリ……

キュツキュツ……キュツキュツ……

「あッ ひゃう」

「こつちにも……奥に溜まつてるし……」

スリスリ……キュツキュツ……

シュツ、シュツ、シュツ……

「あうツ はうう……ツ」

「……その声、どうにかならないかい？」

「ム、ムリイ……だ、よつ……！」

「……ハア……、しようがないね。」

「ら、らつてエ……ツ」

スリスリスリスリ……

キュツキュツ……

「あツ…… はう……」

スリツ……スリスリスリ

スリスリスリ、キュツキュツ

キュツキュツ、スリスリスリ

「ひやうツ あアツ あうツ あ……あ……ツ」

スウーツ……

「……さ、こつちも鼓膜に近い所をやるから、動かないように。」



「はい……」

コツ、ココツ

ココツココツ

(奥の方……だね。)

ココツ、ゴツ、ゴゴツ

ゴココツ

(硬くて……大きいのが分かる……)

ゴリゴリ、ガツ、ガツ

ガガツ、グツ、ゴツゴツ

ガツ、ガゴツ、グツグツ

「ふうう〜ツ……まったく……」

ゴゴツ ググツ、ググググ……

ズツ、ゴゴゴツ

グツグツ ゴココツゴココツ

ココツツ ググツ

ビツ

ガゾツ、ゴゾツ、ゴツ……

グココ、ゴコツ、ゴコツ……

(…やっぱり大変みたい……)

ググツ　ゴツゴツ

ガガツ　ゴコツゴコツ

コツコツ　ググツ

ビツ

ガゾツ、ゴゾツ、ゴツ……

グココ、ゴコツ、ゴコツ……

(…なんか、いいもんだな……。)

グググググ……バリツ

スーッ……

グイグイ、グリグリグリ

ガツツ、ゴツツ、グツ、グツ、グツ……

(…ずっと……ずっと、息が詰まっていた気がするな。)

ガリツ、バリツ、ググッググッ

ガガツ、ガガツ、グググググ……

ガサガサガサ……ガザザザザ……

(こんな風にされるのって……)

グツ、ググツ

ミリミリッ、メリッ

メリメリ、バリッ

ズルウツ!!

「……ツツツツ……!!」

「……ふう……」

レッツは開放感に肩を揺らし、休息に落ち着き、感情の起伏も薄く、目が虚ろになっていた。

マチは、レッツの耳の中で髪の毛が傷つけていたらしく、鼓膜付近の保護をより丁寧に言うことにした。

スリユツ スシユシユツ

シユツ コシユツ、シユツ、シユツ

「ふあっ」

「まったく、蕩けた顔しちゃって……」

スリッ、スリユツ

スリスリスリ

スツ、スリユツスリユツ

スリツスリツ

グツグツ

サシユツ、サシユツ

スリイツスリイツ

ジュリジュリジュリ

(……な、んだろ……)

ズズツズズツ

スリイツスリイツスリイツスリイ

スリスリスリ

ゴシユゴシユ

「もうすぐで……終わるよ。」

ゾリゾリ

スリイツスリイツスリイツ

ゴジュツゴジュツ

ジュリジュリジュリ

シヨツ……コシヨツ……

コシツ、コシコシ……

コシユツ……

ゴゾツ、ズツズツ

ジュツジュツ、ザツ

コシヨリ、コシヨリ

(これで……終わり。)

スリスリスリ、キュツキュツ

キュツキュツ、スリスリスリ

スウーッ……

「……ん？」

そこでマチは気づいた。

「……………」 スウスウ

「……まったく……」

レツは既に無防備な顔を浮かべて寝落ちしており、マチは動くに動けない状況になっていた。

「しようがないね……」

マチは自分の膝の上で、静かに眠るレツをどかさず、ベッドに腰掛けている状態のまま

ま、柔らかい微笑みを浮かべ、マチも目を瞑って眠りについた。

十十十

4月12日。

パチリ「んう… …ふわあ〜…」

「やつと、起きたかい？」

レッツが目覚めると、マチがすぐに声を掛ける。

「あ、…だいぶ疲れてたのが良くなったよ。」

「それにしても気い抜きすぎだけどね。」

「…少しは見逃してほしいな。」

「…しようがないね…。」

しばらく会話していると、ドアのノック音がする。

コンコン「レッツ、起きてるー？」

「あ、先生。ちよつと待ってて。」

「ちよつとという割には時間、結構もらうけどね。」

「マチも居るんだね。…じゃ、小一時間どつか潰してくるよ。」

シャルナークの呼びかけに応じて、レッツが応じ、マチが修正をする。

ちやんと、シャワーなり支度なりを済ませることにした。

…ちなみにゴンとキルアは来なかつた。というのもカストロについては聞きたいだろうが、それは現時点で禁止されてる『念の修行』にどう話のプロセスを介しても抵触するからである。

精神の充足を十分に行い、レツは再び特訓に乗り出す

---